

タガメ

Lethocerus deyrolli (Vuillefroy)

カメムシ目コオイムシ科

石川県カテゴリー

絶滅

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

全国的に激減し、北陸3県でも近年の確認例はほとんどなく、県内では絶滅したと判断される。

形態

体長48～65mmで日本最大の水生昆虫。体型は扁平で体色は灰褐色～褐色。1 齢幼虫は黄色と褐色の縞模様、2 齢以降は全身が淡緑色。口吻は短大で第2 節は短い。前脚は先端が1 本の爪となった捕獲脚、中・後脚は扁平な遊泳脚である。腹端には伸縮可能な短い呼吸管をもつ。

国内分布

北海道、本州、隠岐島、淡路島、四国、九州、対馬、琉球列島に分布する。

県内分布

1951年の小松市丸ノ内の採集個体が現存しているのみである。かほく市や輪島市では1970年代までは生息していたようで、かつては個体数は少ないものの、県内に広く分布していたと考えられる。

生態

カエル、水生昆虫などを捕食する。4 月頃から活動し、メスが5～6 月頃に水面上の抽水植物の茎や杭に産みつけた卵塊を、オスが保護する。幼虫は約1 ヶ月半で老熟し、8 月頃に羽化する。成虫は数kmを飛翔し、灯火に飛来する。10月には上陸し、水際や林内の枯れ草や石の下、泥の中で越冬する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、抽水植物などの水草が多く、やや水深のある、池沼、湿地、ため池、水田、休耕田などのさまざまな止水域、緩やかな流れの河川や水路の水際部にも生息する。

生存の危機

池沼・河川の改修、圃場整備、休耕田の植生遷移などによる生息環境の消失や、水質の悪化による餌生物の減少、街灯の増加、近年では採集圧も脅威である。本種は農薬への感受性が高いため、北陸3 県では1950～60年代の農薬使用によって大打撃を受けたと考えられる。(A)

特記事項

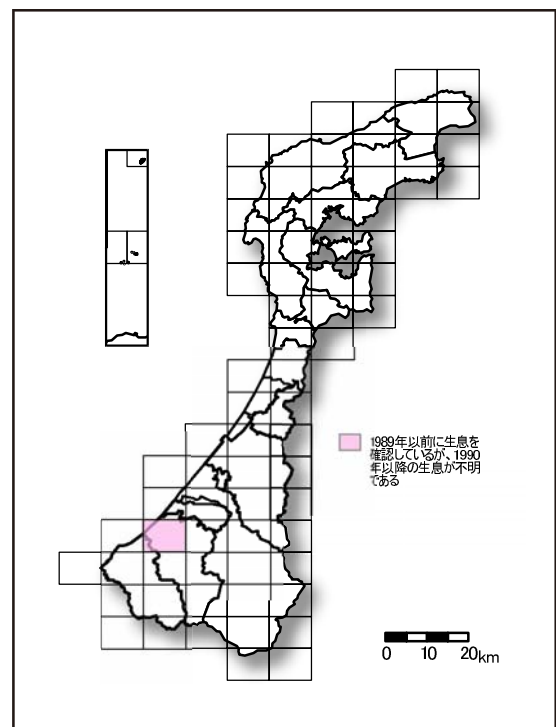
近年、金沢や能登で発見例があるが、飼育個体の放逐の可能性が高い。

参考文献

市川憲平 1993-1994. 雄が子守する虫たち タガメの生態 (1)-(3). 海洋と生物, 15 (5) : 353-356. 15 (6) : 421-426. 16 (1) : 55-61.
向井康夫 2007. 稲作水系におけるタガメの生活場所利用. 昆虫と自然, 42 (12) : 13-16.



標本提供者:小松市立博物館



県内の分布

ミヤマシジミ

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー

絶滅

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

Lycaeides argyrognomon praeterinsularis (Verity)

選定理由

1961年当時は手取川河川敷や堤防法面に多数生息していたが、1973年の記録を最後に最近では全く観察されず、絶滅したものと考えられる。

形態

開張30mm内外の小型種。オスの翅表は紫の強い青色、裏面は灰白色で後翅外縁に橙色の帯があり、その外側の黒斑の中には光沢のある青色がある。メスの翅表は黒褐色で後翅外縁に橙色斑があり、裏面は地色がオスより茶色味が強い。

国内分布

本州のみに分布し、分布の中心は関東、中部地方にある。生息地の多くは大きな河川の水系に沿って知られ、本県の手取川下流部がミヤマシジミの分布の西限になっていた。

県内分布

1961年（昭和36年）には、旧辰口町の手取川河川敷、堤防法面で多数観察されているが、継続した調査がなされておらず、1973年に手取川河原で2頭のオスが採集されて以来、最近の記録はない。

生態

主として食樹となるコマツナギ群落の見られる河川敷や堤防などに生息している。年に数回発生し、富山県では5月下旬から10月下旬にかけて3回発生することが知られている。成虫は好んで花に集まり、生息地であるコマツナギ群落から離れることはほとんどない。卵で越冬し、越冬卵はコマツナギの根元近くの落葉、枯枝、小石などに産みつけられる。

生息地の条件

コマツナギ群落が見られる河原や堤防が、広い範囲で残されていることが重要と思われる。

特記事項

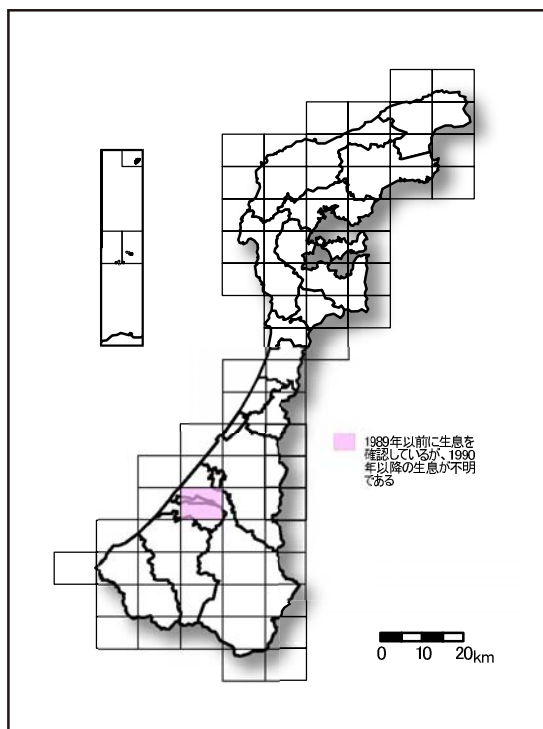
現存の石川県産標本はメス1個体のみで、現在、国立科学博物館に所蔵されている。

参考文献

富沢 章 1975. 石川県のミヤマシジミについて、とっくりばち、(30-31) : 5.
福田晴夫ほか 1984. ミヤマシジミ、原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ) : 316-319. 保育社. 大阪



標本提供者：富沢章



県内の分布

ホソミイトトンボ

Aciagrion migratum (Selys)

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由 日本海側での分布北限に近く、県内で2頭確認されたのみで、最近10年間は発見されていない。

形態 夏型は腹長24～25mm、後翅長15～17mm、越冬型は腹長28～31mm、後翅長18～22mmの細長いイトトンボ。越冬型は淡褐色で、成虫で冬を越して春に鮮やかな青色に変化する。

国内分布 西南日本に多く、日本海側では福井県の所々に生息し、富山県では発見されておらず、新潟県で1例の報告がある。

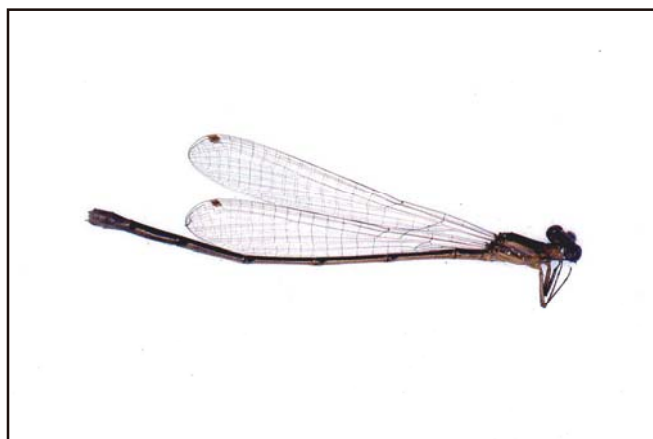
県内分布 金沢市小立野地区での1966年の1オスの採集例と1987年の1メスの確認例があるだけで、発生地は不明。

生態 夏型は7～9月に活動し、越冬型は8月中旬から出現して秋まで草原などで摂食期を過ごす。成虫は越冬すると成熟し、体色も変って生殖活動に移る。産卵は、池沼の植物茎に単独または連結態で行なわれ、成虫は6月末には姿を消す。夏型と越冬型の生ずる原因はまだ不明。幼虫は平地～丘陵の抽水植物の多い池沼で育つ。

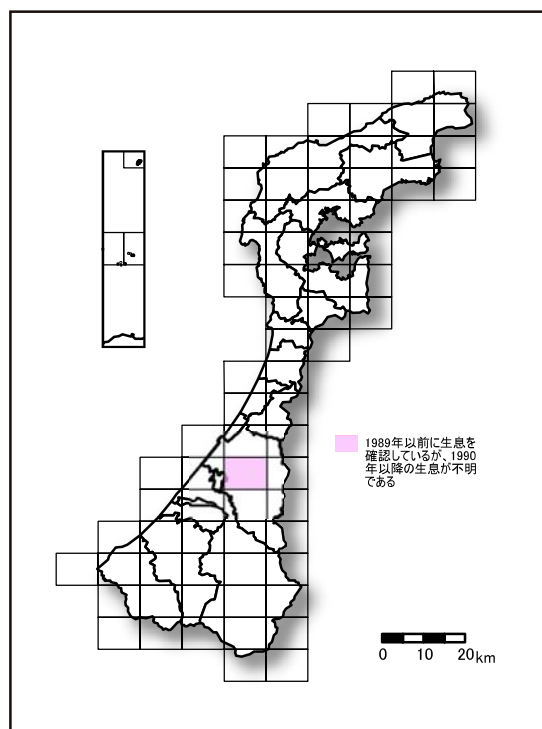
生息地の条件 平地や丘陵のヨシなど抽水植物の多い池や沼。農業や廃水の影響がなく、堤防がコンクリートや防水シートでおおわれず、あまり深くはなくて、夏でも干上らないこと。付近に摂食や越冬に利用できる林野のあることも重要である。

生存の危機 本県では特に個体数が少ないので、平地の池沼の埋立てや汚染、付近の開発などが今後の定着に影響すると思われる。ブラックバスやブルーギルの移入も、生存をおびやかす。(A、B)

参考文献 武藤 明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫: 49-57. 石川県自然保護課.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

ルリイトトンボ

Enallagma boreale cirulatum Selys

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

なし

選定理由

分布西南限に近く、県内では2箇所で確認されたに過ぎず、そのうち、1箇所は近年の発生が見られない。ブルーギルやブラックバス等の移入や、開発の影響が危惧されている。

形態

腹長25～30mm、後翅長20～25mm。オスは美しいり色で、黒条があり、メスの地色は青緑で背面は黒条が発達する。

国内分布

本州中部以北から北海道に分布し、岐阜県白鳥町と高根村が西南限。福井県の上小池や刈込池にも生息するが、富山県では未発見。

県内分布

能美市鍋谷の蟹淵と、小松市桂町のため池から知られているに過ぎない。桂町の池は、標高度が極めて低い点でも注目されたが、最近ではまったく見られなくなった。

生態

本州の山地では5月末から成虫が出現し、8月下旬まで活動する。小松市桂町では、4月下旬にはすでに成熟虫も見られ、蟹淵では、8月上旬にも観察されている。未熟期には池沼の周囲の林内に分散しているが、成熟虫は水域にもどって水面を低く飛び、オスどうしで干渉し合ったりメスを追尾したりする。産卵は、水草の茎に単独または連結態で行なう。

生息地の条件

山間に開けた湖沼で、水温が低く、適当に水草が生えていること。周囲に雑木林があり、農業の空中散布などの影響が及ばず、池沼には強力な捕食者がいないこと。

生存の危機

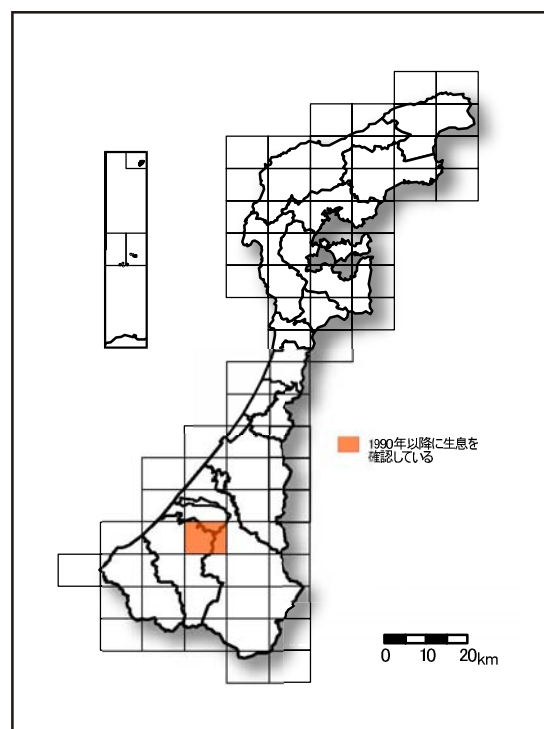
能美市の蟹淵では、ブルーギルによる捕食のためか個体数が一時減少したが、最近では回復傾向にある。小松市桂町の池への進出は最近のことと思われ、今後も発生するか否かは不明である。ここも、外来魚が放流されている。周囲の山林が伐採されたり、スギの植林が進むと直接ないし間接の影響を受ける。桂町の池は下方がすでに伐開されている。気候温暖化や水質悪化の影響も否定できない。
(A, C, D)

参考文献

武藤 明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. Tombo, 41: 33-36.
武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75): 24-28.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

コバネアオイトトンボ

Lestes japonicus Selys

トンボ目アオイトトンボ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

アオイトトンボやオオアオイトトンボと異なり、もともと全国的に希少種であったが、ため池の乾燥や林野の開発など生息環境の劣化により、近年、急速に減少している。

形態

腹長26～33mm、後翅長18～22mm、黄白色の地に金緑の部分がある。オオアオイトトンボより小型で、オスは成熟してもアオイトトンボのような白粉をふかない。

国内分布

東北から九州におよぶが、まれ。

県内分布

能登の2地域に生息するが、加賀からは未発見。志賀町（上野、酒見、久喜）と珠洲市（赤刈、正院、三崎付近）。

生態

丘陵地の林間の、浅く抽水植物の多いため池や沼に生息し、7月下旬から羽化して11月中旬まで池沼の周辺で活動する。アオイトトンボやオオアオイトトンボよりはるかに弱勢で、前2種オスとの異種間連結も見られた。

生息地の条件

平地～丘陵の林間の、抽水植物が多く浅い池沼。珠洲では、かなり小さい沼沢でも見られる地点がある。

生存の危機

志賀町では主産地のため池の一つが最近干上り、本種がまったく見られない。アメリカザリガニの侵入した池もある。珠洲でもブラックバスの移入、山道の建設や開発に伴い減少した地点がある。池沼の周囲の林野の荒廃も、悪影響を及ぼす。（A、B、C）

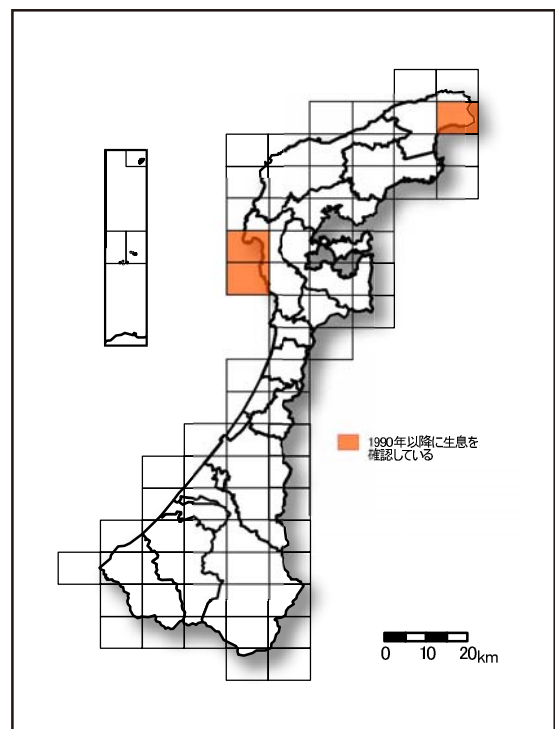
参考文献

武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目、とっくりばち、(74) : 7-19.

武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見、とっくりばち、(75) : 24-28.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ホンサナエ

Gomphus postocularis Selys

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

なし

選定理由

1950年代でも極めてまれであったが、この40年間に県内では確認例がない。

形態

腹長33～36mm、後翅長29～32mmで、黄色の地に黒紋のあるずんぐりしたサナエ。オスは腹端がふくらみ、尾部上付器は強くまがっている。

国内分布

北海道から本州、四国、九州にまで分布する日本特産種。福井県では最近もかなり生息するが、富山県からは近年記録されていない。

県内分布

1950年代に金沢の低山帯の水域でごく僅かに見られたが、以降はまったく確認できない。金沢の内川地区の溪畔で、1957年6月9日に採れた1♀の標本が、実在する唯一のものである。

生態

平地～丘陵の中流域の砂泥底に育ち、成虫は5～6月に出現する。未熟期には付近の樹林に移動し、成熟すると流れの近くに来て水辺の土などに静止したり、水面低く飛んだりするが、定住性は乏しい。メスは、腹端に大きい卵塊を形成してから、打水産卵する。

生息地の条件

自然状態のよく保たれた河川の中流域。流量が安定して保たれていて、底は砂泥～砂礫質。農薬や廃水による汚染がなく、岸辺に岩石や砂泥もあること。付近に樹林があり、摂食や休止の場所が確保できることも必要。

生存の危機

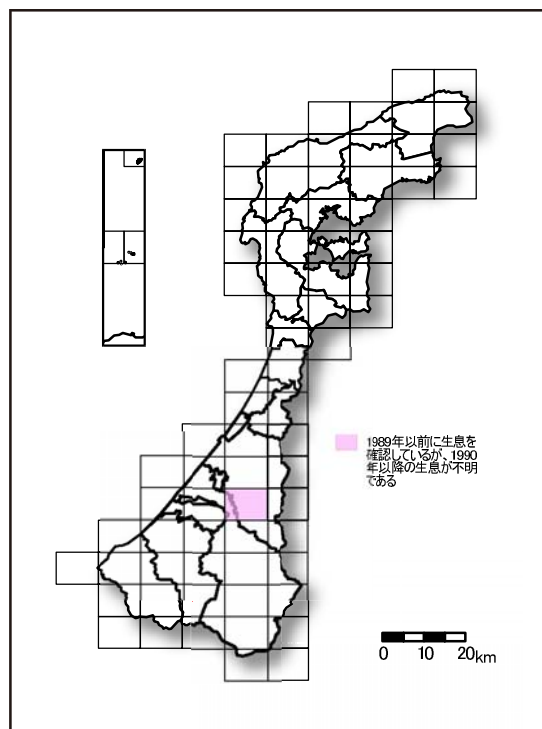
河川の中流域は、上流に比べ人工的な汚染を受けやすい。堰堤の造設で、上手は淀み下手は流量が減る傾向がある。流れの直線化や堤防のコンクリート化工事、水辺の除草や火入れ、摂食期を過ごす林野の開発や害虫防除、道路建設と車の増加なども負の要因。過去の農薬や洗剤などの影響が、遅れて顕現したとも考えられる。(A)

参考文献

武藤 明 1998. 昆虫の生態をめぐって. とっくりばち, (65) : 8-10.
武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75) : 24-28.



標本提供者：武藤明



県内の分布

オナガサナエ

Onychogomphus viridicosta Oguma

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

かつて金沢市で1頭採れただけで、この40年間に県内では確実な記録や採集例がなかったが、加賀市の2地域で再確認された。

形態

腹長39～46mm、後翅長32～37mmで、黄緑の地に黒条がある。オスの腹端近くがふくらみ、尾部付器は長大で曲がっている。

国内分布

日本特産種で、本州の東北地方から九州南部まで分布する。北陸では富山県でも近年記録されていないが、福井県にはまれでない。

県内分布

金沢市石引で、1957年6月1日に未熟なオスが採れたのが、県内で唯一の確実な記録であった。2003年に加賀市の日谷川と曾宇川から羽化し、その後成虫も2頭確認されたが、定着しているか否か不明である。

生態

幼虫は、平地～丘陵の河川の中流域の砂礫底で育つ。成虫は6～7月に羽化し、林間で摂食期を過ごした後に水辺へ現われ、8～9月にかけて活動する。オスは水面に出ている岩石に静止したり、流れの上を飛びまわったりするが、かなり敏捷である。

生息地の条件

河川の中流から少し上流にかけて、砂礫～砂泥質のやや流速のある部分に生息する。汚染がなければかなり狭い川や、用水でも見られる。メスは移動性が高く、幼虫が狭い用水などで育つこともある。

生存の危機

農業や廃水の流入による汚染と、ダム建設、川床ざらえ、堤防のコンクリート化、ヨシなどの除去を含めた河川の改修や、周辺の開発が絶滅をもたらす要因。未熟期には分散移動して摂食するため、餌を介した二次的影響も及び得る。生息域が人間の生活圏に近く、いったん滅びかけると回復が難しい。
(A)

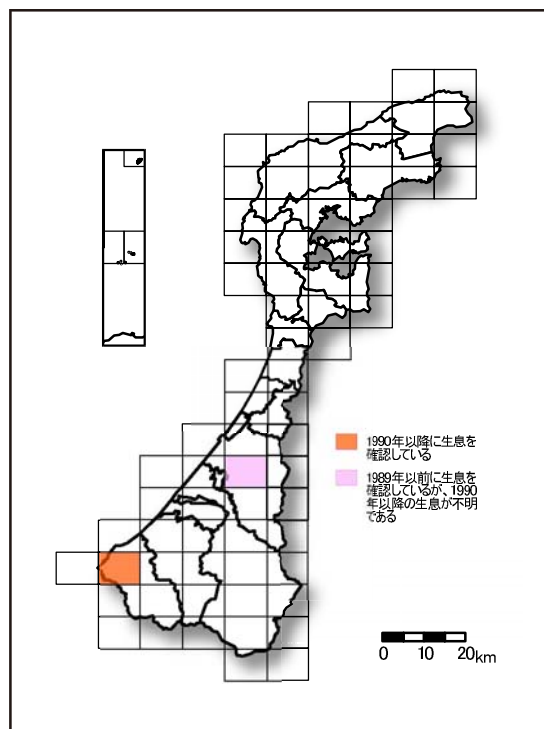
参考文献

武藤 明 1998. 昆虫の生態をめぐって. とっくりばち, (65) : 8-10.

武藤 明 2004. 石川県のトンボに関する知見. とっくりばち, (72) : 1-4.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

ヒメサナエ

Sinogomphus flavolimbatus Oguma

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

成虫は過去に小松市大杉上町の大杉谷川で2頭採集されたのみである。近年、南加賀の3河川からのみ見つかっているが、局地的で個体数が少ない。

形態

腹長31～34mm、後翅長24～28mmの小型でやや細いサナエ。胸側に1本の太い黒条がありオスの尾部上付器は角状で白い。

国内分布

日本特産種で、本州、四国、九州に分布するが、産地は比較的少ない。北陸では福井県の南川の本流や支流にかなり生息する。

県内分布

幼虫調査により小松市大杉上町の大杉谷川、丸山町の大日川、加賀市山中温泉九谷町の大聖寺川で生息が確認されているが、大日川や大聖寺川では少ない。

生態

幼虫は、低山の溪流の比較的上流部にある砂礫質の水底で育ち、岸辺の石などの上で羽化する。幼虫が流下移動すると言われるが、本県ではいずれもダム湖より上流から得られている。未熟期には林間で摂食するが、成熟虫は7月から8月に溪畔で活動する。飛翔力は強くない。

生息地の条件

汚染のない砂礫底の中流域で、水面に出た石や岸辺の岩石、ヨシなどが存在すること、近くには摂食空間としての疎林があることが重要である。生息河川は比較的大きく、水量が適当に維持され、かつ停滞しないことも条件となる。

生存の危機

幼虫は生息環境の選択性が強く、源流域下流からダム湖までの、比較的狭い範囲だけから幼虫が確認されているので、ダム工事、道路建設、川床ならし等で礫や抽水植物が除去されることなどで生息環境が損なわれると影響が大きい。(A)

参考文献

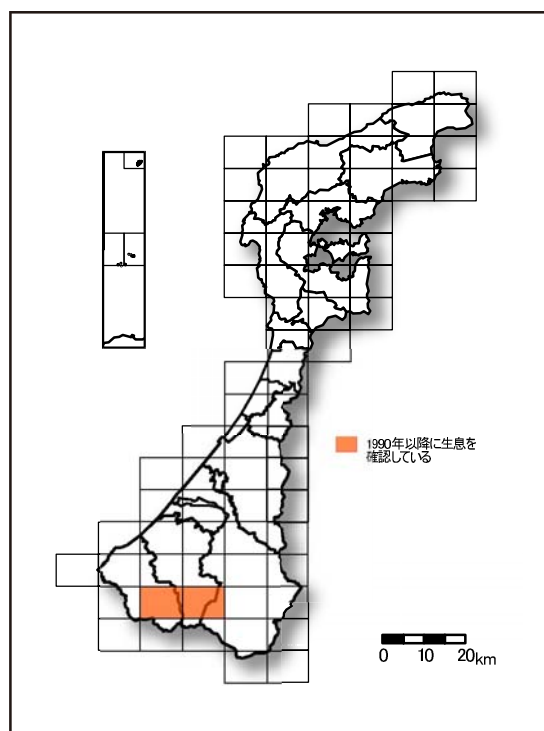
中山佐一郎 1999. 小松のトンボ. 88pp. (自刊).

武藤 明 1999. 石川・福井のトンボ資料 (1999). *Tombō*, 42: 64.

浅地哲也 2004. ヒメサナエの幼虫の記録. とっくりばち, (71): 11.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

オグマサナエ

Trigomphus ogumai Asahina

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリ

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

加賀市三木と奥谷でしか発見されておらず、三木が日本海側の分布北限。個体数も少なく、ため池の改修や捕食性魚類の影響が危惧される。

形態

腹長33～35mm、後翅長26～29mmで、黄色の地に黒条があり、コサナエによく似るがやや大きい。オスの尾部上付器には背面に棘があり、メスの生殖弁は二又に深く裂けている。

国内分布

日本特産種で、本州中部以南から九州にかけて分布するが、普遍的ではない。北陸では福井～石川の県境の一部のため池に産するが、他地域からは未知である。

県内分布

加賀市三木の一つのため池で、成熟したオス2頭が1998年に記録され、1999年には同じ池で計8頭の羽化殻が見つかり発生が確認された。その後この池は改修で生息しなくなったが、付近の2つのため池でも発見されている。

生態

平地～丘陵の池沼、水田、用水溝などに幼虫は生息し、泥にもぐり長い腹端を突き出している。成虫は4月に羽化し、池の周辺の陽当りのよい土堤や草地で飛んだり静止している。成虫の生態はコサナエとあまり変わらないが、発生時期がやや早い。

生息地の条件

農業や廃水の流入がなく、堤防はコンクリートや防水シートでおおわれていないこと。ブラックバスやブルーギルなどの捕食性魚類が繁殖していないこと。浮葉植物が適当に生え、開水面があり、周囲に草原や樹林もあることが要件。

生存の危機

ため池の埋め立て、水抜き後の放置、廃棄物の投入、外来魚の移入、林野の開発などが脅威となる。加賀市三木付近では、本種の生息する池の自然度は高いが、これをコンクリート化や防水シート張りになると生存が危ぶまれる。周囲の道路建設で車の通行量が増えて間接的影響が及ぶこともある。
(A, C)

特記事項

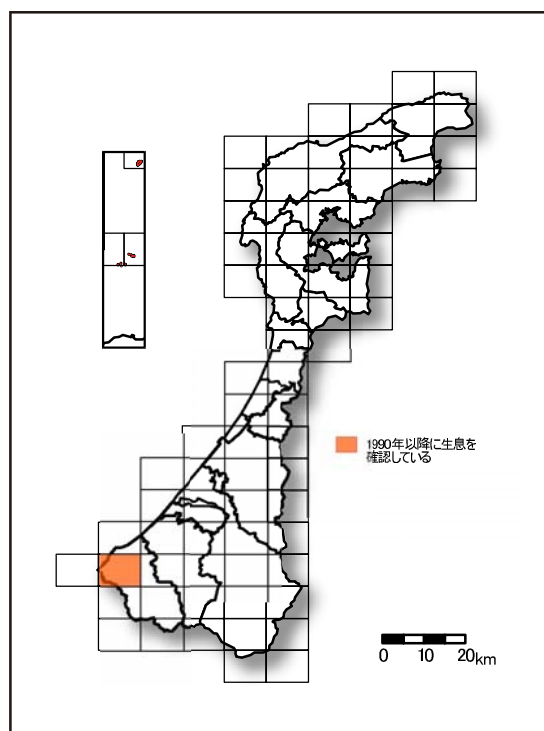
県産の個体は、前肩条の黄色部が黒化し消失する特徴がある。

参考文献

武藤 明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. *Tombō*, 41: 33-36.
武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75): 24-28.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

カトリヤンマ

Gynacantha japonica Bartenev

トンボ目ヤンマ科

石川県カテゴリ 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリ なし

選定理由

以前は普通種であったが、10年以上にわたって、県内ではまったく確認されていなかった。能登半島の志賀町で2002年に確認され、2006～2007年にも観察されたが、極めて希少である。

形態

腹長46～53mm、後翅長42～50mm。複眼が大きく、腹部のくびれが目立つ黄緑色で細長いヤンマで、オスの腹部には大きい耳状突起があり、メスの尾毛は極めて細長い。

国内分布

北海道南部から沖縄まで、広く分布。

県内分布

最近、志賀町の2地域で少数の成虫が確認されている。かつては南加賀から能登まで広く生息し、小松市（大杉谷、安宅、安宅新、松任町）や、金沢市の低山帯から丘陵部、羽咋市気多大社、中能登町石動山、七尾市小丸山公園などから記録されている。特に金沢市崎浦地区では、きわめて多かった。

生態

幼虫は平地～丘陵の水田、小川、樹陰の多い池などに育つ。成虫は6～7月に羽化し、11月頃まで活動する。夕刻と早朝の薄明時に主に飛翔して摂食し、日中はうす暗い林内の枝に下垂していることが多い。産卵は、水辺の軟泥中に単独で行う。

生息地の条件

樹林にかこまれた汚染のない池や小川、水田など里山的な環境の豊かな地域。行動範囲が広いので水圏～陸地を含めて広域の自然状態がよく保たれていること。

生存の危機

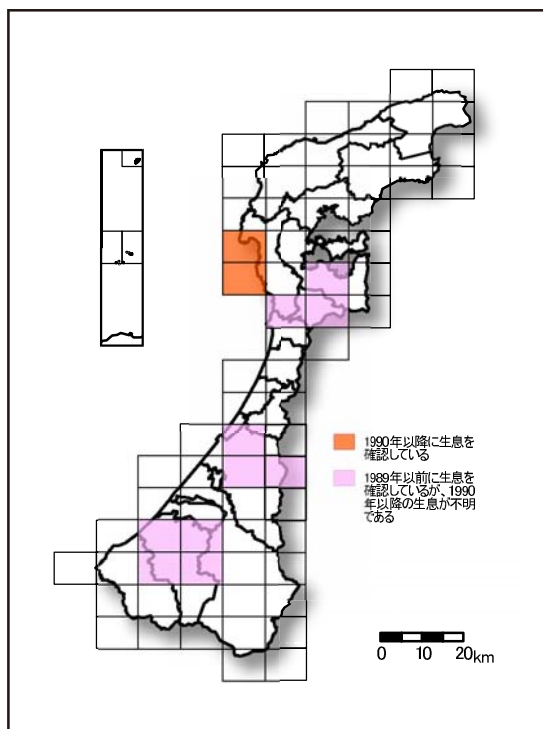
農業、廃水などによる水系の汚染、池沼の埋め立て、堤防のコンクリート化や防水シート張り、農業の空中散布、林野の開発、餌となる小昆虫の汚染や減少による二次的影響や、捕食性魚類の移入など。
(A, B)

参考文献

武藤 明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫 : 49-57. 石川県自然保護課.
武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75) : 24-28.



標本提供者：武藤明



県内の分布

ハネビロエゾトンボ

Somatochlora clavata Oguma

トンボ目エゾトンボ科

石川県カテゴリ

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

元来は珍種であるにもかかわらず1950～60年代に金沢付近で多産したが、1991年に2頭採集されたのを最後に、県内でまったく確認できなかった。最近、小松市と志賀町で再発見されている。

形態

腹長37～47mm、後翅長39～45mmの金緑色で、頑丈な感じの中型種。第1～2腹節がふくらみ、胸側に2黄条があり、メスの生殖弁は下方に突出する。

国内分布

日本特産種で、北海道から南九州にまで分布するが、産地は極めて限定される。福井県では1997年に初めて発見され、富山県でも同年に採集されている。

県内分布

現在、小松市と志賀町で確認されている。かつては金沢市の丘陵地帯の用水や水田の溝に多産したが、現在は確認されていない。また、旧松任市や野々市町での採集例もある。

生態

幼虫は丘陵や平地の流れの緩い小川や用水の砂泥底に育ち、成虫は7月中旬から羽化する。未熟期は林野に分散し、やや高空を旋回しつつ摂食飛行を行なう。8月上～中旬から生殖水域に現れ、オスは用水や水田上で滞空型の縄ばりを占め、空中によく停飛する。メスは、浅い淀みに単独で水面または泥を腹端で打つようにして、生殖弁から卵を産下する。

生息地の条件

適当な水量が保たれ、汚染のない緩やかな小川や用水路が存在すること。側壁がコンクリートでなく、泥または砂泥底で、岸边には植生があり、付近に摂食や休息用の疎林が存在することも要件。

生存の危機

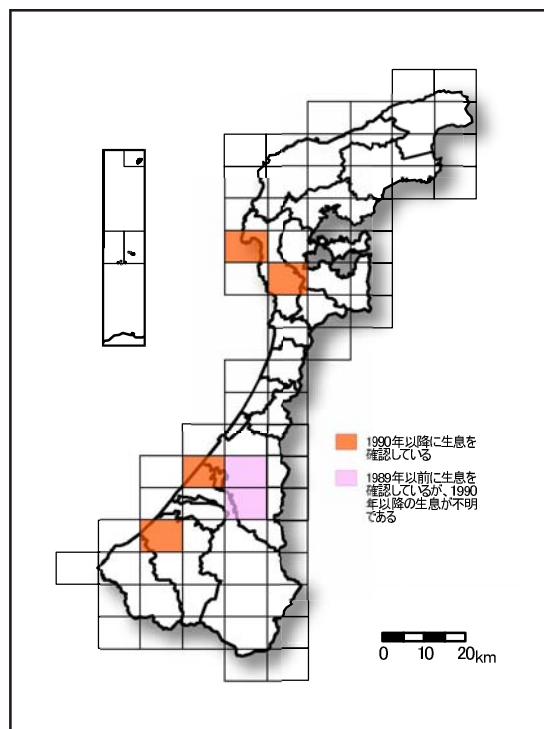
里山から平地の水田地帯は、農薬や廃水の流入、廃棄物の投入、用水の暗渠化やコンクリート化の影響が大きい。摂食期には分散するため、広域にわたる環境保護が必要。乾田化で、用水が干上がることも影響する。金沢市の長坂用水はコンクリート化、人家も増え汚染が進み、野田山丘陵の害虫駆除とあいまって本種とキロサナエの絶滅をもたらした。志賀町の個体数は少なく、絶滅の危険性が高い。(A)

参考文献

武藤 明 1960. ハネビロエゾトンボの生態. Tombo, 3 : 8-15.
武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.



標本提供者：武藤明



県内の分布

カワラバッタ

Eusphingonotus japonicus (Saussure)

バッタ目バッタ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

全国的に産地が減少している。石川県では手取川下流部で確認されているが、近年の堤防内の土木工事の影響で個体数が激減している。

形態

体長は35mm前後である。体色は灰青色で河原の石と紛らわしい。後翅中央部に褐色の半円帯があり、その内側が鮮やかな青色をしているのが特徴である。

国内分布

日本特産種で、本州、四国、九州に分布している。

県内分布

手取川の天狗橋より下流域に点在して生息している。

生態

河川の増水によって生じた草本類の少ない砂礫地に適応した種で、着陸時には石の上を好んで降りる習性がある。成虫は7月から10月まで見られる。

生息地の条件

大雨時には水が流れて水没するような、草の生えていない広い砂礫地の河原において特異的に生息する。したがって河床が安定し、河原に草本類が多くなると、本種は生息できなくなる。

生存の危機

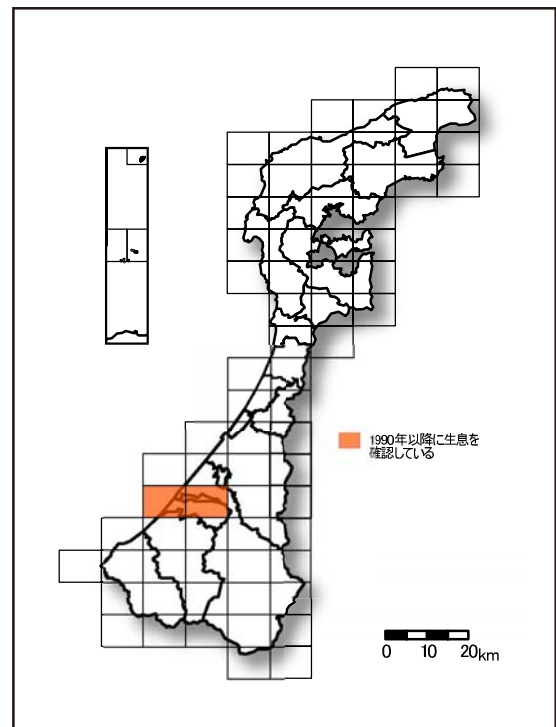
堤防内の土木工事によって河床の安定化が進み、河川敷への植物の進入が容易になってきている。そのため砂礫河川敷に強く適応した本種は好適な生息場所を失い、全国的に生息地が減少している。石川県でもかつては手取川下流部に広く生息していたが、減少傾向にあり、特に2007年からの大規模な河川土木工事により、現在の生息地はごく一部に限られ、危機的状況にある。河川敷内の土木工事は河原の自然環境に配慮し、最少限にとどめるべきである。(A B)

参考文献

富沢 章 2004. 手取川流域におけるカワラバッタの分布. とっくりばち, (72) : 7-8.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

エサキアメンボ

Limnporus esakii (Miyamoto)

カメムシ目アメンボ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

国内の生息地は局所的であり、全国的に急速に減少している。県内での生息地は1箇所にはすぎない。

形態

小型でスマートな種で、体長はオス7.9~8.5mm、メス9.1~10.5mm。体は暗赤褐色~褐色で、体側には銀白色の毛の縦帯がある。触角は褐色で、第4節が最長、黒色であることで他種と区別できる。

国内分布

北海道、本州、四国、九州および対馬に局所的に分布する。

県内分布

河北潟周辺できわめて局所的に生息する。現在の生息地は河北潟干拓地内の水路1箇所である。

生態

ヨシの間や岸边近くのやや暗い所に生息し、行動範囲は狭く、水面上の昆虫などを捕食する。河北潟の水路では、夕方~夜間に開放水面で確認された。抽水植物の茎に産卵し、幼虫は11月でも確認された。400~500m程の飛翔による移動が推定されている。繁殖場所の岸边の堆積物中で越冬する。

生息地の条件

平野部の潟湖、池沼、水路の周縁部で、ヨシ、マコモなどの抽水植物群落内の植物の間や岸边近くに生息する。水位低下によって卵の乾燥による死亡が起きやすいため、水位の安定した場所に生息する。

生存の危機

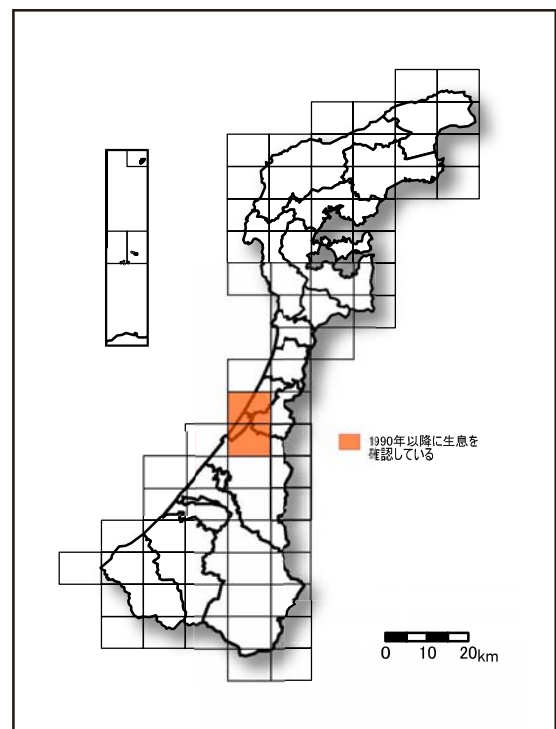
池沼や水路の抽水植物群落の護岸工事による消失、各種排水や農業の流入、ゴミによる水質汚染、外来種の侵入が脅威である。かつての生息地であった津幡町の水路は2001年に環境改変され、絶滅した。現在の生息地では、アメリカザリガニの侵入、水質汚染への対策が必要である。(A)

参考文献

立川周二 1985. エサキアメンボは絶滅するか—その分布と生息地から—, *Rostraria*, (37) : 521-525.
村路雅彦・加藤正雄 1990. エサキアメンボ *Limnporus esakii* の生活史に関する知見. *中国昆虫* (4) : 1-5.
中尾史郎・江種伸之 2007. 紀の川流域におけるエサキアメンボ *Limnporus esakii* のメタ個体群構造. *環境情報科学論文集*, (21) : 99-104.
高橋 久 2008. 河北潟干拓地の排水路で確認されたエサキアメンボ. *河北潟総合研究*, 11 : 13-14.



写真提供者: 西原昇吾



県内の分布

ホッケミズムシ

カメムシ目ミズムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

Hesperocorixa distantii hokkensis (Matsumura)

選定理由

局所的に分布するうえ、生息環境が開発や都市化によって消失し、減少傾向が著しい。県内でも生息が確認された場所は数箇所、個体数が少ない。

形態

体長9.5～10.8mmの大型のミズムシ類。体型は細長く扁平な短円筒形で、翅端は狭く丸まる。体は淡青黄色で背面には多数の黒色横条斑を装う。前肢は短く捕獲脚となる。中肢は細長く末端に細長い2本の爪を備える。後肢は脛節、跗節が扁平で長い毛を密生した遊泳脚となる。

国内分布

本州（山形県以南）、淡路島、四国、九州に局所的に分布する。

県内分布

羽咋市、旧能登島町、輪島市、旧柳田村、珠洲市。

生態

3月頃に水草の茎に産卵、発生し、6月頃に新成虫が出現する。成虫はやや深さのある池などに移動し、灯火に飛来することもある。他の小動物を捕らえて体液を吸収するとともに、珪藻などの植物を摂食するとされる。成虫は、水辺の枯れ草、落ち葉、石の下で越冬する。

生息地の条件

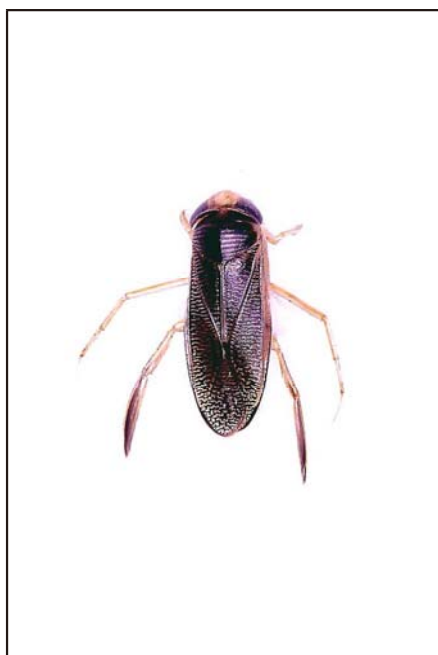
平野部～丘陵部のヒシやジュンサイなどの植生の豊富な池沼、湿地、緩やかな流れの水路。

生存の危機

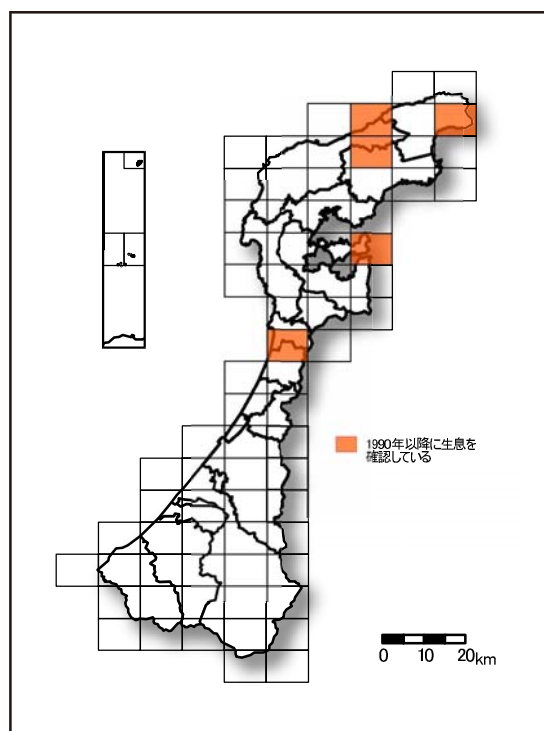
ため池、湿地などの開発や埋め立てによる消失、水質汚染、ため池の管理放棄、外来種の侵入が脅威となっている。羽咋市の生息地は埋め立てにより面積が減少した。珠洲市では、オオクチバスによる本種の捕食が確認されており、また、生息地の上流部の大規模な道路建設の影響が懸念される。ため池群の維持、河川周辺の遊水地の再生とともに、周辺の里山環境の維持が保全上重要である。
(A, B, C)

参考文献

Dodson VE. 1975. Life Histories of Three Species of Corixidae (Hemiptera: Heteroptera) from Western Colorado. American Midland Naturalist, 94 (2):257-266.
林 正美・宮本正一 2005. 半翅目. 川合楨次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫. 東海大学出版会.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ヒメマルミズムシ

カメムシ目マルミズムシ科

Paraplea indistinguenda (Matsumura)

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

全国的に生息に適した環境が失われつつある。県内での分布はきわめて局所的である。

形態

体長は1.5～1.7mm。頭部は幅広く、前胸背板は大きい。体色は背面が淡黄白色、淡褐色～黄褐色で腹面が黒色、脚は黄色。頭頂から顔面にかけて中央は顕著に線状に縦隆起がある。体表面には顕著に目立つ点刻がある。触角は3節。後脚脛節は円筒状で、跗節には2本の長い爪がある。

国内分布

本州、四国（徳島）、九州。

県内分布

輪島市曾々木における1965年の記録があるが、現在も生息しているかどうか確認されていない。近年、珠洲市内のため池1箇所で、再発見された。

生態

島根県のため池では、幼虫は5月下旬～6月中旬に、成虫は5月下旬、7～8月、11月に確認された。背を下にして泳ぎ、ボウフラなどの微小な水生昆虫を捕まえて体液を吸う。水際の植生間とときに群生する。灯火にも飛来する。

生息地の条件

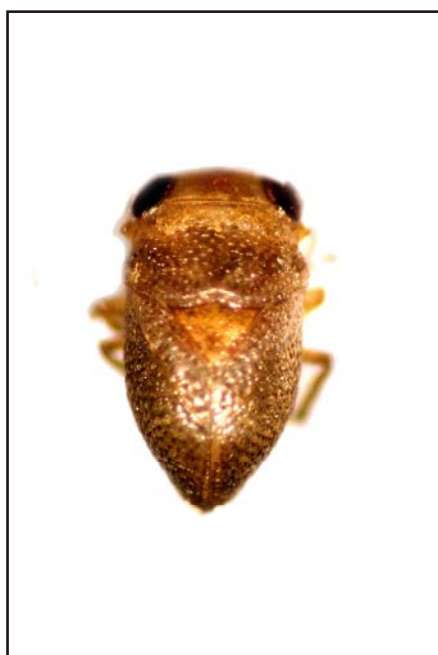
平野部～丘陵部の抽水植物および緑藻類が繁茂する、小規模で開放水面が狭い池沼、湿地。

生存の危機

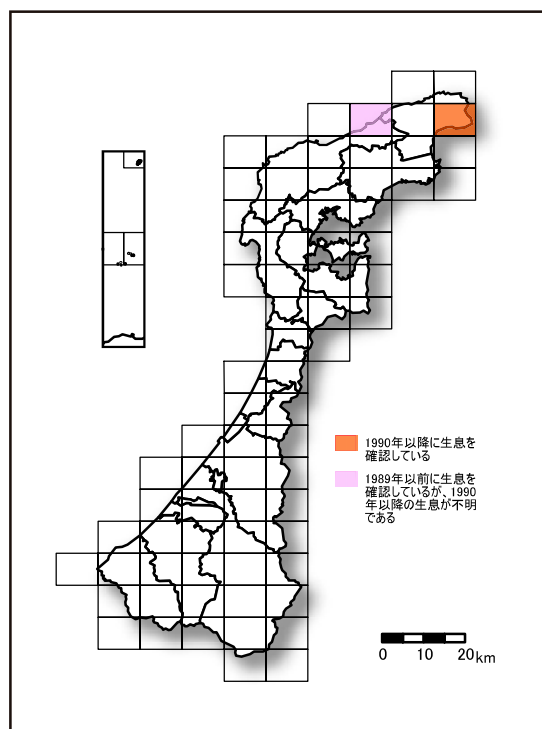
生息する小さな池の埋め立て、各種排水や農業による水質汚染が脅威となっている。現在の生息地を保全することが最重要であるが、生息地から数kmの水域でアメリカザリガニが増加傾向にあり、駆除の徹底、今後の分布拡大の防止が重要である。（A、B）

参考文献

日浦 勇 1968. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究 1. 大阪市立自然科学博物館所蔵標本の検討. 大阪市立自然科学博物館研究報告, (20) : 65-81.
西城 洋 2001. 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動. 日本生態学会誌, 51 (1) : 1-11.
富沢 章 2008. 石川県でヒメマルミズムシを記録. とっくりばち, (75) : 59.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

カワラゴミムシ

Omophron aequalis Morawitz

コウチュウ目カワラゴミムシ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

県内分布が局地的で、採集記録も少ない。数年前まで安定した生息地があったが、現在は確認されていない。

形態

体長は5.5～6.5mm。テントウムシのような丸い体形でやや扁平、脚は長い。大顎と複眼は大きく、触角は細くて体長の半分弱である。体色は、白黄色の地に緑色の光沢をおびた黒い斑紋を持つ。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

白山市（旧白峰村）、羽咋市滝町、中能登町能登部で記録があるが、羽咋市と中能登町では、現在も生息しているかどうか不明である。

生態

砂浜や河原の砂地に生息し、本県では成虫は6～8月頃に見られる。夜行性で、昼間は砂地に浅く潜り、夜間は砂地の上を活発に走り回る。灯火にも飛来する。

生息地の条件

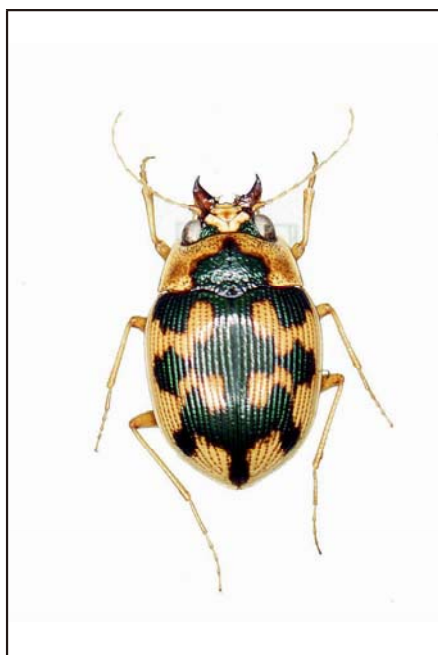
本県では、小河川がそそぎ込む砂浜の周辺および大河川の河川敷にある安定した砂地帯に生息している。

生存の危機

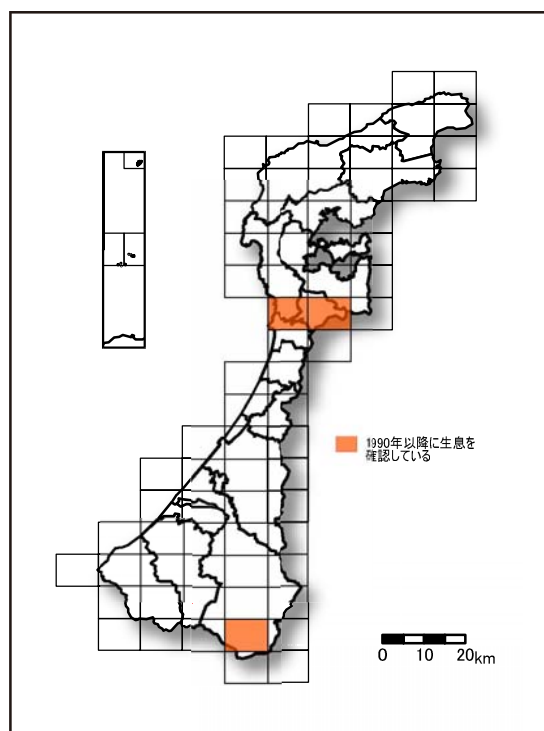
生息地が局所的なこともあって生息基盤は脆弱である。本種の生息地は、砂浜の整備や開発、河川の砂地帯の減少等で消滅しつつあり、現在、生息が確認されているのは1箇所のみである。（A）

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目カワラゴミムシ科. 石川県の昆虫：103. 石川県自然保護課.



標本提供者：井村正行



県内の分布

イカリモンハンミョウ

Cicindela anchoralis Chevrolat

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

本州における生息地は石川県のみで隔離分布している。現在の生息地は狭く、約2kmの海浜に限られ、車の乗り入れや密漁が絶えないため、絶滅の危機に瀕している。

形態

流線型の体と細長い足を持ち、体長12～15mmの大きさである。体背面は茶褐色で、上翅には白いイカリ状の斑紋を持っている。

国内分布

石川県、大分県、宮崎県および鹿児島県の本土と種子島に分布する。

県内分布

かつては金沢市から志賀町まで広く分布していたが、現在は羽咋市と志賀町の海岸の一部にのみ生息する。

生態

幼虫は、海浜植物帯より汀線側の砂地に垂直に穴を掘り、生活している。成虫になるまで2～3年かかるものと思われる。成虫は6月下旬より湿り気のある砂地に出現し、8月上旬までに交尾、産卵しているが、少数の個体は8月末ないし9月上旬まで見られる。

生息地の条件

海浜植物帯から汀線までの間が長くゆるやかな傾斜を持つ砂浜であり、砂の粒子がかなり細かいことが重要である。また、背後に海浜植物帯や松林などの植生が存在することも重要である。

生存の危機

海からの砂の供給が少なくなり、海浜が狭小化している。砂浜への車の乗り入れや海水浴客の増大により個体数が減少している。防波堤などの人工物の造築および海浜植物帯や背後の松林の消失は生息環境の破壊につながる。これらの人為的影響や環境変化を最小限にとどめるような保護対策を強力に施すべきである。さらに今後の生息個体数の推移によっては、系統維持のための累代飼育が必要になる可能性がある。(A)

特記事項

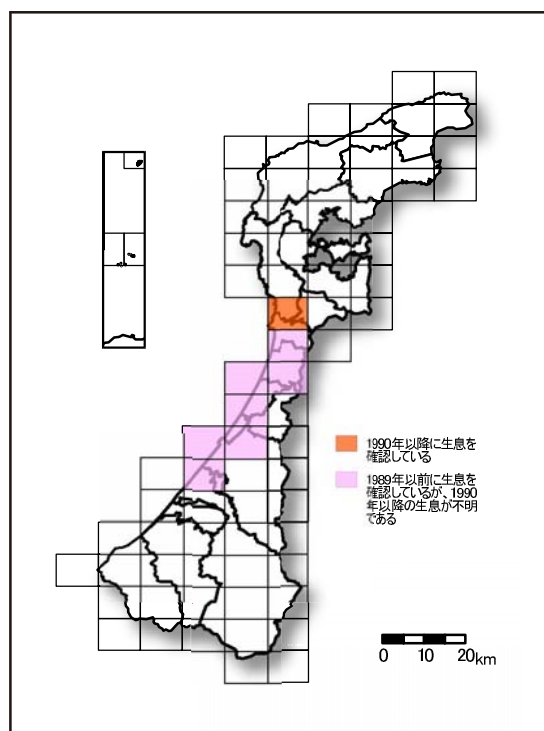
石川県指定天然記念物、石川県指定希少野生動植物種(2005年)に指定されている。内灘町の天然記念物にも指定されているが、現在は生息していない。

参考文献

大塚外次 1936. イカリモンハンメウに就いて. 昆虫界, 4 (33) : 787-789.
中根猛彦 1973. 日本の甲虫(2). 昆虫と自然, 8 (10) : 7.
富沢 章 2001. イカリモンハンミョウの加温飼育. とっくりばち, (67) : 10-11.
徳本 洋 2003. 石川県におけるハンミョウ類の古い記録. とっくりばち, (70) : 15-16.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ホソハンミョウ

Cicindela gracilis Pallas

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

分布が全国的に局地的で、県内における生息地は1箇所だけであり、個体数も少ない。開発や昆虫マニアによる採集圧により、絶滅の可能性が高い。

形態

体長は11mm程度で、体表には金属光沢を持ち、複眼は突出している。脚は細長い。

国内分布

本州、四国、九州に分布する。

県内分布

金沢市内の1箇所に生息しているのみであり、しかも個体数は少ない。

生態

成虫は7～8月に見られ、林縁の草地や芝生の上を敏速に走り回っている。他のハンミョウ類と同様、幼虫期には地中に穴を掘って生活しているものと思われるが、詳細な生態は不明である。

生息地の条件

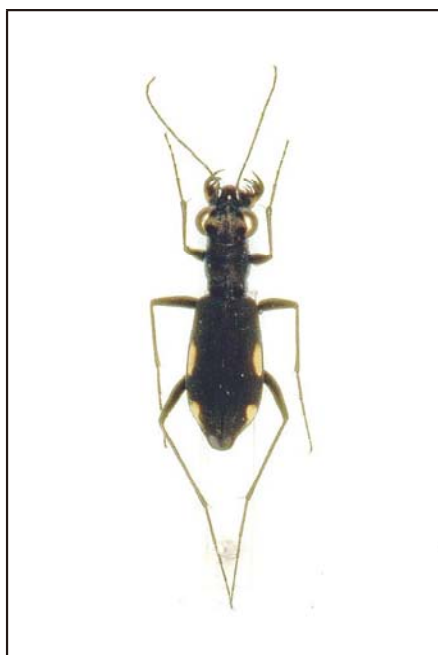
林縁に位置し、裸地が多く、草がまばらに生えた草地に生息する。

生存の危機

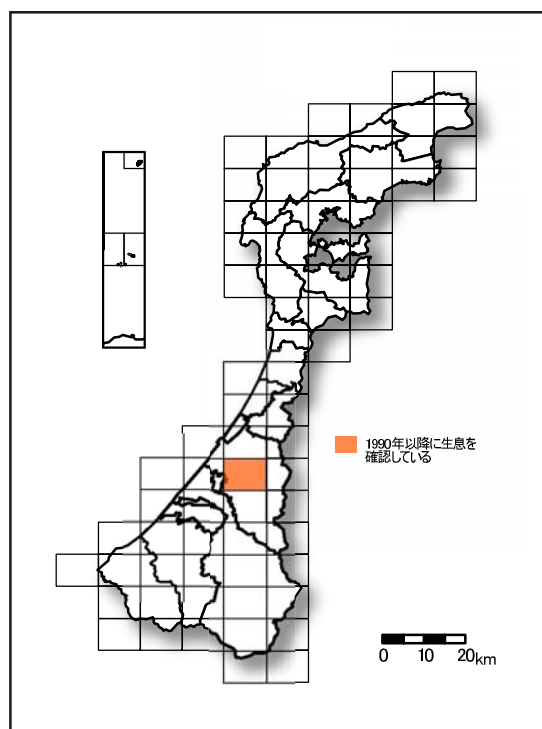
植生の遷移により草のまばらな草地がなくなると生息に適さなくなることから、植生の貧弱な草地を維持することが重要である。(A)

参考文献

中根猛彦 1973. 日本の甲虫(2). 昆虫と自然, 8(10): 5-7.



標本提供者: 井村正行



県内の分布

カワラハンミョウ

Cicindela laetescrpta Motschulsky

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

かつては河川や海岸の砂地に比較的広く分布していたが、現在は激減し、生息地が限定されるうえ、採集圧がかかっている。

形態

体長14～17mmで比較的大型のハンミョウである。上翅に白い斑紋があるが、個体変異が大きい。

国内分布

北海道から九州まで分布するが、局地的でどの地域でも個体数は減少傾向にある。

県内分布

かつては加賀地方、能登地方の海浜や手取川中流域に比較的広く分布していたが、現在の生息地は、加賀市、かほく市、宝達志水町に限られる。

生態

成虫は8月から出現し、9月まで見られる。海浜植物帯から砂浜への移行帯に見られることが多い。幼虫、成虫ともに肉食性で、成虫は俊敏に活動し小動物を捕食する。幼虫期は砂地に穴を掘って生活している。

生息地の条件

河原の場合は、広い砂地のある所が生息地となっていた。海岸の場合は、河口市および海浜植物帯の近くに安定した砂地のあることが重要である。

生存の危機

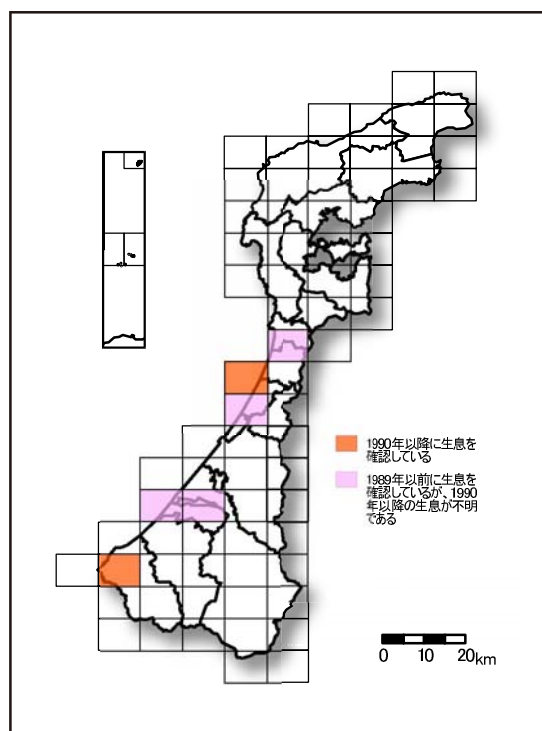
河原における生息地は、砂地の減少により消滅した。海岸の生息地も、海浜道の建設、護岸工事、宅地化などの人為活動により激減している。また、採集圧も大きな脅威となっている。(A)

参考文献

中根猛彦 1973. 日本の甲虫(2). 昆虫と自然, 8(10): 7.
 芦田 久 1998. カワラハンミョウの分布と変異. 月刊むし, (333): 5-9.
 徳本 洋 2001. 石川県内におけるカワラハンミョウの分布に関する記録. とつくりばち, (67): 2-4.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ハラビロハンミョウ

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

Cicindela sumatrensis niponensis Bates

選定理由

全国的に分布が限られる種で、個体数が著しく減少している。県内においても生息場所が海岸に注ぎ込む細流の河口部付近の砂浜に限られるため、生息地の消滅により個体数が激減している。

形態

体長13mm程度である。体背面は黒っぽく鈍い金属光沢があり、白い斑紋を持っている。

国内分布

本州では新潟県以西に分布し、九州、種子島にも分布するが、産地は点在しているにすぎない。

県内分布

かつては加賀地方から能登地方の外浦海岸に分布していたが、現在は、加賀市および内灘町から志賀町、珠洲市の海浜の一部だけに限定される。

生態

成虫が見られるのは、海岸に注ぎこむ細流の河口部の砂浜に多く、汀線沿いにも少ないながら見られる。また、幼虫は河口部の砂浜に多い。成虫は秋に羽化して越冬するようで、春に交尾、産卵する。

生息地の条件

海岸に注ぎこむ細流の河口部の砂浜の周囲が本種の生息中心域である。背後に海浜植物や松林などの植生があることや細流の水が汚染されていないことも重要である。

生存の危機

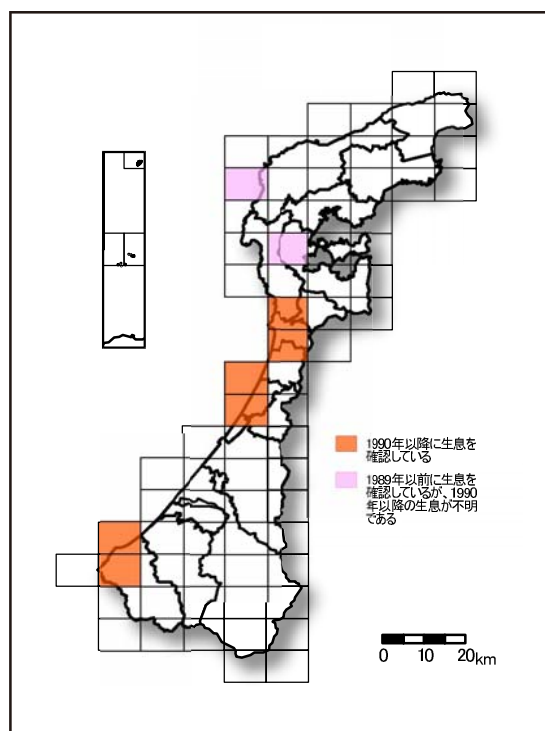
海浜に流れる細流の汚染や破壊、護岸工事、砂浜への車の乗り入れ、植生の破壊などの人為活動は、本種の生息地を消滅させることにつながる。特に四輪駆動車の乗り入れによる生息地破壊が目立つ。また、採集圧も大きな脅威となっている。(A)

参考文献

中根猛彦 1973. 日本の甲虫(2). 昆虫と自然, 8(10): 7.
徳本 洋 2003. 石川県能登半島におけるハラビロハンミョウ成虫の春期出現状況. とっくりばち, (70): 1-7.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ヒゲナガホラヒラタゴミムシ

Jujiroa imunada Uéno

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

なし

選定理由

本県が日本海側唯一の*Jujiroa*属の分布地であり、さらに県内でも極めて局所的な分布をしている。生息地の一部が開発計画により影響を受けるため、保護対策の実施が求められている。

形態

体長10～12mm。体色は淡い赤褐色で、体型は扁平である。複眼は小さく退化しているが、触角と脚は長く、地下浅層での生活に適した形態をしている。また、後翅も退化し、飛ぶことができない。

国内分布

これまで正式な記録があるのは石川県だけである。

県内分布

金沢市の犀川中流域両岸の凝灰岩で構成される地下浅層だけに生息すると思われていたが、最近になり医王山にも生息することが報告された。

生態

凝灰岩で構成される地下浅層に生息し、石切場跡の洞窟や山地帯の石の堆積した不安定な特殊環境に見られる。成虫は、厳冬期の1、2月を除き周年見ることができる。新成虫は8月頃から12月頃まで見られ、羽化は長期間続くものと思われる。成虫はカマドウマ類や小バエの死体など様々な微小動物の死体を食餌としていると考えられている。成虫の寿命は比較的長く、少なくとも7～8ヶ月程度は生きようである。成虫で越冬すると思われるが、産卵や幼虫についての詳細はわかっていない。

生息地の条件

風化した凝灰岩で構成された地下浅層に生息するため、このような地下環境がある程度の規模で残されていることが重要である。

生存の危機

開発計画により生息地の一部が影響を受ける予定になっている。影響を受ける生息地の個体群に対する保護対策を実施することが必要である。(A D)

特記事項

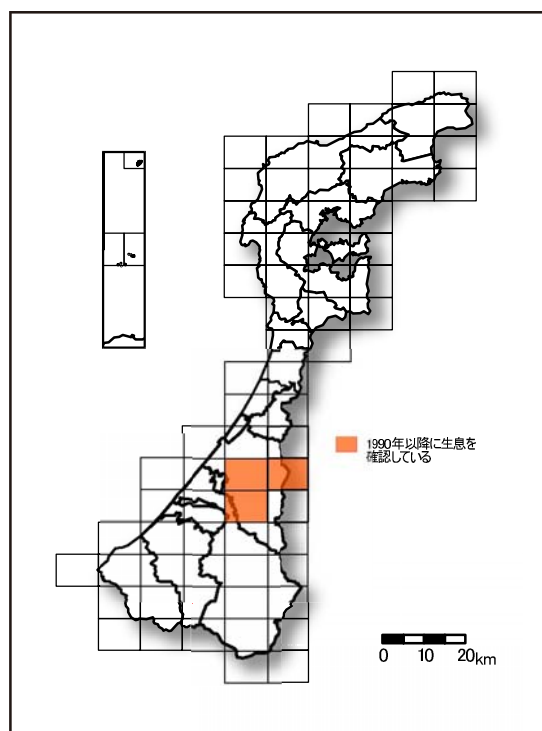
本県産の個体がタイプ標本になっている。

参考文献

Uéno, S. 1993. Discovery of highly modified species of *Jujiroa* (Coleoptera, Carabidae) on the Japan Sea side of central Honshu, Japan. *Elytra*, (21): 329-335.
井村正行 2007. 医王山におけるウエダオオズナガゴミムシ(*Pterostichus uedaorum*)の生態に関する報告. とっくりばち, (75): 20-22.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

マルケシゲンゴロウ

Hydrovatus subtilis Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

全国的に局所的な分布を示し、生息環境は限られ、個体数も少ない。県内の生息地も局所的で2箇所のみである。

形態

体長2.4~2.7mmで小型。体型は幅広い卵形をしており、背面、腹面ともに、黄赤褐色である。背面を微細な点刻と網目状の印刻が覆う。同属のコマルケシゲンゴロウは体長がより小さく、やや体形が細く、背面の光沢がより強く、点刻と網目状印刻の形状が異なる。

国内分布

福島県以南の本州、四国、九州、南西諸島に分布するが、生息地は局所的で個体数も少ない。

県内分布

加賀市片野鴨池の記録が唯一であったが、2007年に加賀市南部の植生の豊富な放棄水田で発見された。

生態

成虫は6~9月に確認されている。灯火に飛来する。

生息地の条件

抽水植物などの水生植物の豊富な、池沼、湿地、放棄水田に生息する。池沼では岸辺付近の浅く、植生の豊富な場所に生息する。

生存の危機

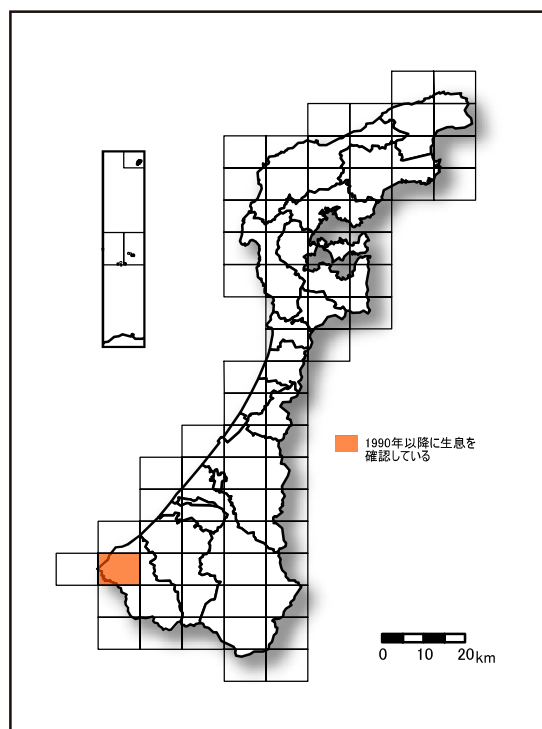
生息湿地の開発改修による消失や植生遷移、外来種の侵入が脅威となっている。片野鴨池では1996年8月にライトトラップで多数が採集されたが、その後の生息状況は不明である。加賀市南部の生息地にはウシガエルが侵入しているため、早期の駆除およびモニタリングの継続が必要である。(A, B)

参考文献

大桃定洋・佐藤光一 1991. マルケシゲンゴロウを栃木県で採集. 月刊むし, (250): 8.
北野 忠・北山 昭 2000. 新潟県でマルケシゲンゴロウを採集. 月刊むし, (308): 5-6.
林 成多 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 77-113.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ナガケシゲンゴロウ

Hydroporus uenoi Nakane

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

なし

選定理由

国内では隔離分布を示し、本県が西限にあたる。県内では1箇所ではしか生息が確認されておらず、個体数の減少が認められる。

形態

体長3.5mm。体型は長楕円形でやや扁平である。光沢は鈍い。背面は濃褐色、体下面は黒色。口枝は黄褐色。

国内分布

現在、本種の分布が確認されているのは青森県、山形県、長野県、石川県である。

県内分布

金沢市丘陵部のスゲ類に覆われた浅い自然湿地のみに生息する。

生態

成虫は初夏～秋に確認されている。

生息地の条件

丘陵部のスゲ類などの水生植物で覆われた貧栄養の浅い池沼、湿地のごく浅い部分の、水生植物や堆積物の間に生息している。

生存の危機

池沼、湿地の開発による消失、植生遷移、水質汚染、アメリカザリガニの侵入が危惧される。1990年代にはゲンゴロウ類の採集者が湿地内へ頻繁に踏み込んだために環境が悪化し、個体数が減少した。現在の生息地を保全地域として指定することによる法的な保全がのぞまれる。(A, B)

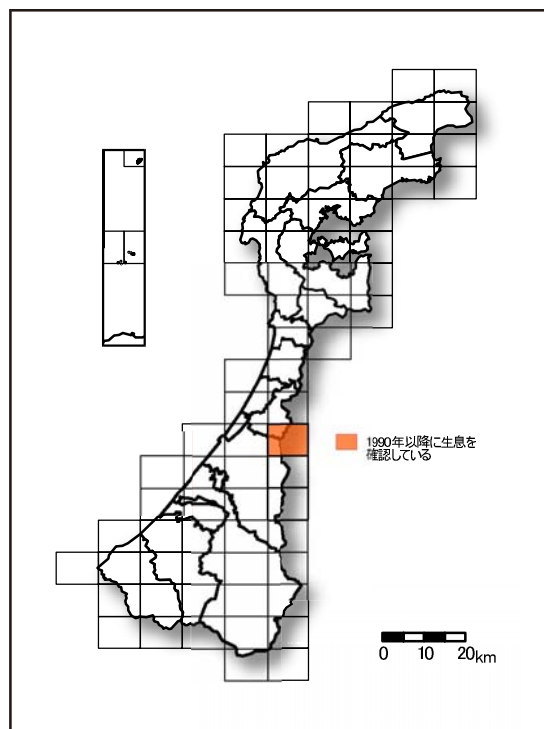
参考文献

長谷川洋 1989. ナガケシゲンゴロウの採集記録. 月刊むし, (221) : 39.

森 正人・北山昭 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.



標本提供者: 西原昇吾



県内の分布

ゲンゴロウ

Cybister japonicus Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由

かつては普通種であったが、全国的に減少傾向が著しい。北日本では比較的残存しているが、南日本の太平洋側では各県の生息地数は数箇所である。県内でも2000年以降の個体数の減少が著しい。

形態

本土では最大のゲンゴロウ類で、体長34～42mm。体型は卵形でやや扁平。背面は緑色～黒褐色で、前胸背板と上翅の側縁は黄褐色。体下面は黄～黄褐色で、腹部中央、各腹節前・後縁は黒色。脚は黄褐色～赤褐色。オスの前跗節の基部3節は吸盤状で後脚は遊泳脚である。幼虫は約70mmのいも虫状。

国内分布

北海道、本州、四国、九州に広く分布する。

県内分布

金沢市および能登北部の丘陵部に分布する。

生態

成虫は4月頃から活動を開始し、5、6月頃に水草の茎に産卵する。幼虫は6～8月に出現し水生昆虫やオタマジャクシを捕食する。3齢幼虫は岸辺の土中で蛹化する。新成虫は8～9月に出現する。成虫は灯火にも飛来し、約2kmは移動する。11月頃から水中で越冬する。成虫も肉食で、寿命は約3年。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、ヒルムシロやオモダカなどの水生植物が豊富な、比較的水深のある池沼やため池、水田、放棄水田、水田脇の水たまり、緩やかな流れの水路などに生息する。

生存の危機

池沼の開発による消失、ため池の管理放棄や護岸工事、農業使用、圃場整備による乾田化、放棄水田の植生遷移、外来種の侵入やコイの導入、採集圧が大きな脅威となっている。金沢市や珠洲市では、アメリカザリガニやオオクチバスの駆除が最重要である。生息に適した池の創出が開始されている。(A, B, C)

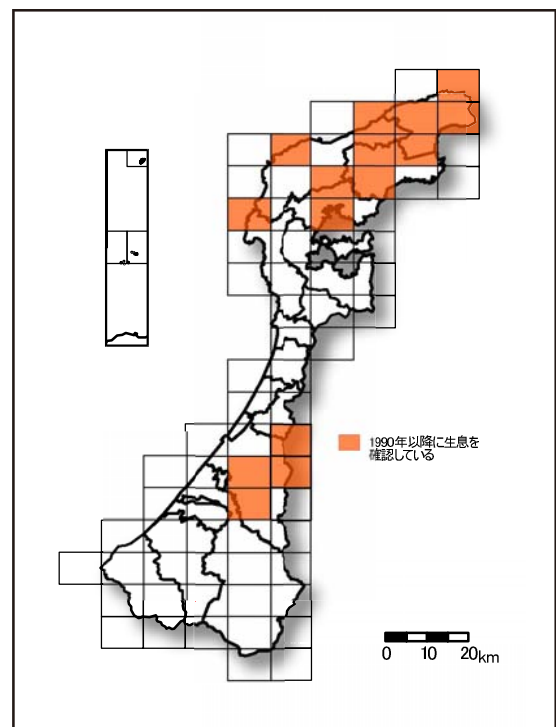
参考文献

市川憲平 2004. 放棄田ピオトープによる里の自然再生とタガメやその他の水生動物の定着. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 137-150.

永幡嘉之 2007. ひとつのため池をとりまく問題 ―ゲンゴロウ類の生息地を維持するには―. 遺伝, 61(3): 48-53.



写真提供者: 小幡英典



県内の分布

マルコガタノゲンゴロウ

Cybister lewisianus Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

池沼の開発、ため池の管理放棄、ほ場整備によって生息地が激減したうえに、外来種の侵入や採集圧によって、西日本の個体群を中心に絶滅の危機に瀕している。県内でも近年、生息環境が急速に悪化している。

形態

体長21～26mm。体型は卵形で丸みが強い。背面は暗緑色～褐色で光沢がある。腹面は全体に黄～赤褐色で側方および各腹節後縁は黒褐色。前胸背板・上翅側縁は黄色。幼虫は約50mmのいも虫状。

国内分布

本州および九州の十数県。各県における生息地数はそれぞれ数箇所以下。

県内分布

能登北部の平野部～丘陵部。

生態

成虫は5月頃から活動を開始し、水草の茎に産卵する。幼虫は5～8月に出現し、水生昆虫などを捕食する。老熟幼虫は岸辺の土中で蛹化する。新成虫は8月頃から出現し、10月頃より水中で越冬する。成虫も肉食である。

生息地の条件

ジュンサイ、ヒシなどの水生植物が豊富で、水質が良く、岸辺が緩やかな比較的大きなため池。

生存の危機

池沼の開発による消失、ため池の管理放棄、ため池改修事業に伴うコンクリートやゴムシートによる護岸化、生活排水や農業等による水質汚染、オオクチバスやアメリカザリガニなどの外来種の侵入やコイの導入、過剰な採集圧が大きな脅威となっている。外来種の駆除、ため池の水管理の継続、遠浅の池の創出などによるため池群としての保全、地域住民による監視が重要であり、実施されつつある。(A, B, C)

特記事項

石川県指定希少野生動植物種（2006年）に指定されている。

参考文献

山口英夫・荒木克昌 2001. マルコガタノゲンゴロウ石川県で記録（第1報）,（第2報）. 翔, (151) : 1, (152) : 1-2.

西原昇吾・荻部治紀・富沢 章 2007. 農村における水生昆虫の保全. 自然再生のための生物多様性モニタリング 鷺谷いづみ・鬼頭秀一（編）. 東京大学出版会. 東京.



写真提供者：富沢章

分布図はありません。

県内の分布

シャープゲンゴロウモドキ

Dytiscus sharpi Wehncke

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

1962年の本県の記録を最後に絶滅したと考えられていたが、1984年に千葉県で再発見された。近年、全国的に生息地、個体数とも激減しており、生息地が全国で最も多い本県でも、ここ10年で半減した。

形態

体長28～33mm。体型は長卵型で厚みは少ない。背面は緑～黒褐色で、頭楕、触角、前胸背板、上翅側縁は黄褐色。体下面は暗赤褐色で一部は黒色。幼虫は最大55mmのいも虫状。

国内分布

千葉県、新潟県、佐渡島、富山県、石川県、福井県、滋賀県、島根県。

県内分布

金沢市～奥能登の平野部～丘陵地に分布する。

生態

成虫は10月頃より交尾を開始し、4月頃にセリやガマなどの茎に数十個の卵を産む。幼虫は4～5月に出現し、ミズムシや両生類幼生を捕食する。3齢幼虫は5～6月に岸辺の土中で蛹化する。新成虫は6～7月に出現し、夏～秋に移動・分散し、水中で越冬する。成虫は約600mは飛翔する。夜間に活動し、昼は水草の根元や泥に潜る。夏の高温時にも泥に潜る。寿命は1～3年。

生息地の条件

湧水や沢水が流入する泥深い湿地、ため池、放棄水田、水田脇の水たまりに生息する。水質が良好であることが重要。

生存の危機

池沼の開発、圃場整備、放棄水田の植生遷移、外来動物の侵入、過剰な採集圧によって危機に瀕している。過去に能登空港建設とそれに伴う周辺の圃場整備、LPGガス基地建設によって、多くの生息地が消滅した。谷津田の放棄水田の湛水化などによる水辺ネットワークの維持が重要であり、一部で開始されている。(A, B, C)

特記事項

氷河期の遺存種として生物地理学的に重要である。石川県指定希少野生動植物種(2005年)に指定されている。金沢市では生息地の地元集落と環境保全協定を結んでいる。

参考文献

西原昇吾・苅部治紀・鷺谷いづみ 2006. 水田に生息するゲンゴロウ類の現状と保全. 保全生態学研究, 11(2): 143-157.



写真提供者: 富沢章

分布図はありません。

県内の分布

マルガタゲンゴロウ

Graphoderus adamsii (Clark)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

近年、全国的に減少傾向にある。県内では、生息地が一地域に限定され個体数も少ない。

形態

体長13～15 mm。体型は卵形で光沢を有する。胸部背面と上翅は黄褐色で、頭頂、後頭部、前胸背の前縁、小楯板は黒色。上翅は基部と会合部が細く黒色で、密な網目紋様も黒色。体下面、脚は赤褐色。頭部に黒色のV字紋がある。オスの前附節の基部3節は吸盤状。幼虫は約25mmのいも虫状。

国内分布

北端部を除く北海道と、本州、四国、九州に分布する。

県内分布

能登北部。

生態

幼虫は5～8月に出現する。水生小昆虫などを捕食し、老熟すると、岸辺に上陸して土中で蛹化する。新成虫は7～8月に出現する。成虫は4～10月に活動し、灯火にも飛来する。成虫も肉食で、寿命は約3年である。

生息地の条件

平野部～丘陵部の水生植物の豊富な、岸辺の緩やかな池沼、ため池、湿地、放棄水田などの止水域。生息地は、周辺に里山環境のある水質良好な水域に限られる。

生存の危機

池沼、湿地の開発などによる消失、ため池の管理放棄やコンクリートによる護岸化、農薬の使用などによる水質汚染、ほ場整備による乾田化、放棄水田の植生遷移、アメリカザリガニ、オオクチバスなどの外来種の侵入、採集圧が大きな脅威である。生息地付近に侵入した外来種の早期発見と駆除、分布拡大の防止が最重要である。ため池の維持管理の継続とともに、周辺の放棄水田などの湛水化による水辺ネットワークの維持が重要である。(A, B, C)

参考文献

佐藤正孝 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書Ⅰ. 甲虫ニュース, (65) : 1-4.
山口英夫・荒木克昌 2001. マルコガタノゲンゴロウ石川県で記録(第2報). 翔, (152) : 1-2



写真提供者: 富沢章

分布図はありません。

県内の分布

シマゲンゴロウ

Hydaticus bowringi Clark

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

かつては水田における普通種であるが、都市部ではほとんど見られなくなった。県内の記録は3例のみであり、2000年以降の確認例はない。

形態

体長12.5～14mm。体型は卵型でよく膨隆し光沢を有する。頭部、前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁近くに淡黄色の縦条があり、後方で合一する。上翅内方の基部直後に淡黄色の2つの円紋がある。体下面は黄～赤褐色である。幼虫は最大約25mmのいも虫状。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。富山県では50年以上確認されておらず、福井県では若狭地方で2001年の発見例がある。

県内分布

平野部である小松市中心部における1951年6月の記録がある。1990年代に輪島市丘陵部の水田脇の浅い水たまり、穴水町平野部の灯火にて1個体ずつが確認されたが、いずれも発生地は不明である。

生態

5～7月頃に水草の茎や葉の表面などに産卵する。幼虫は3齢になり老熟すると、岸辺に上陸して土中で蛹化する。成虫は日中でも活発に動き回り、夏季には灯火に飛来する。10月～4月頃は林床などに上陸して越冬すると考えられている。幼虫、成虫ともに肉食である。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、浅く水生植物の豊富な池沼、湿地、水田、放棄水田に生息する。周辺には、多様な環境を含み、多くの生物が生息する良好な里山環境が必要である。

生存の危機

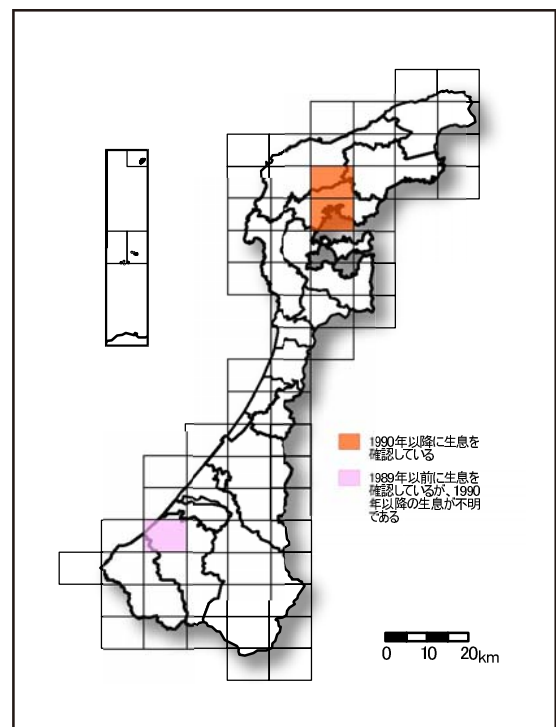
採集された地域の池沼、湿地の開発などによる消失、ほ場整備、アメリカザリガニの侵入、周辺の里山環境の変化が脅威である。発生の発見がのぞまれる。(A、B)

参考文献

山口英夫 1996. 石川県でシマゲンゴロウ発見. 翔, (122): 1.
和田茂樹 2001. 福井県におけるナガサキアゲハとシマゲンゴロウの記録. 福井市自然史博物館研究報告, (48): 75-76.



標本提供者: 小松市立博物館



県内の分布

チュウブホソガムシ

Hydrochus chubu Balfour-Browne et M. Satô

コウチュウ目ホソガムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

全国的に分布が局所的であり、生息環境である低地の有機物の多い湿地が激減している。県内では3箇所を確認されていたが、うち1箇所はアメリカザリガニの侵入により絶滅した。

形態

体長2.4~2.5mm。体型は細長く、体表面に青緑金属光沢を持つ。複眼は大きく、側方に突出する。触角の先端は毛に被われ球桿を形成する。前胸背板の凹陷は顕著。同属のヤマトホソガムシに酷似するが、下唇基節の中央が丸くくぼむ点と、上翅第3、5、7、9間室が隆状となる点で識別できる。

国内分布

日本固有種。秋田、石川、香川、島根、山口、熊本の各県に局所的に分布する。かつては三重県や大阪府にも生息していた。

県内分布

小松市の生息地は2006年と2008年に各1箇所ずつ発見された。加賀市の生息地は1996年に発見されたが、アメリカザリガニの侵入により絶滅した。

生態

成虫は4月下旬~10月下旬に確認され、8~9月に個体数が増加した例がある。成虫はリターなどの有機物を摂食すると思われる。

生息地の条件

平野部~丘陵部にある広葉樹林に囲まれた池で、落ち葉の堆積するシルト底質の水生植物の豊富な、水深の浅い部分に局所的に生息する。加賀市は海岸付近の丘陵部の浅い池、小松市は丘陵部のため池であり、いずれも、小型の水生昆虫が多数生息している多様性の高い水辺環境である。

生存の危機

ため池の管理放棄、外来種の侵入が脅威となっている。加賀市の生息地は、周囲の水域から隔離された人為的影響のない所であったが、アメリカザリガニの繁殖によって植生が消失し、絶滅した。小松市のため池のうち1箇所は、30年ほど管理放棄され、2007年には水が抜けたが、水漏れ部を補修し水位を上昇させる保全作業により、現在も生息が確認されている。今後も、周辺環境と池の保全管理が求められる。(A, B, C)

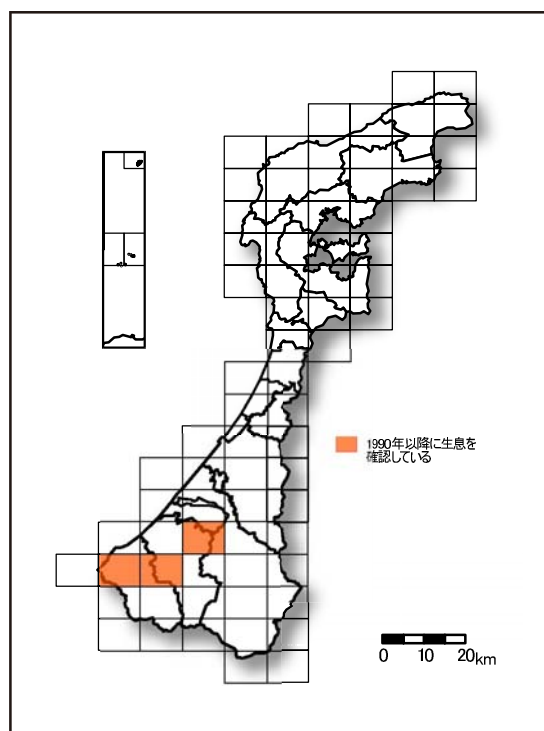
参考文献

佐藤正孝 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40): 1-3.

佐藤正孝・吉富博之 2005. 日本産水棲昆虫の分類学的覚え書きⅣ. 甲虫ニュース, (151): 1-6.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

コガムシ

Hydrochara affinis (Sharp)

コウチュウ目ガムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

なし

選定理由

かつては県内各地に生息していたと思われるが、近年確認されている生息地は離島の1箇所のみであり、本土部ではまったく確認されていない。

形態

体長16~18mm。体型は紡錘型。体は全体に黒色であるが、脚は赤褐色。脚は遊泳にはあまり適していない。幼虫はいも虫状で顎は左右非対称。同属のエゾコガムシは、脚が黒色であることから区別される。

国内分布

北海道、本州、四国、九州に分布する。

県内分布

輪島市舳倉島では2004年に確認されている。1964年の白山市（旧鶴来町）の記録があるが、環境破壊により現在は生息していない。

生態

6月頃に水草の間に白いまゆ状のゆりかごをつくり、その中に産卵する。幼虫は肉食性で他の水生昆虫や巻貝などを捕食するが、成虫は主に草食性である。幼虫は3齢になり老熟すると岸边に上陸し土中で蛹化する。灯火に飛来する。

生息地の条件

一般的には、平野部～丘陵部の有機物の豊富な浅い池沼、湿地、水田に生息するといわれているが、輪島市の生息地は、離島の植物の少ない小さな池である。

生存の危機

離島の小さな池にのみ生息するため、生息基盤が脆弱であり、湿地の攪乱、水質汚染が脅威である。富山県では、1990年代に射水市の海岸沿いの池で生息が確認されたことから、本県の本土部においても再発見が期待される。（A B）

特記事項

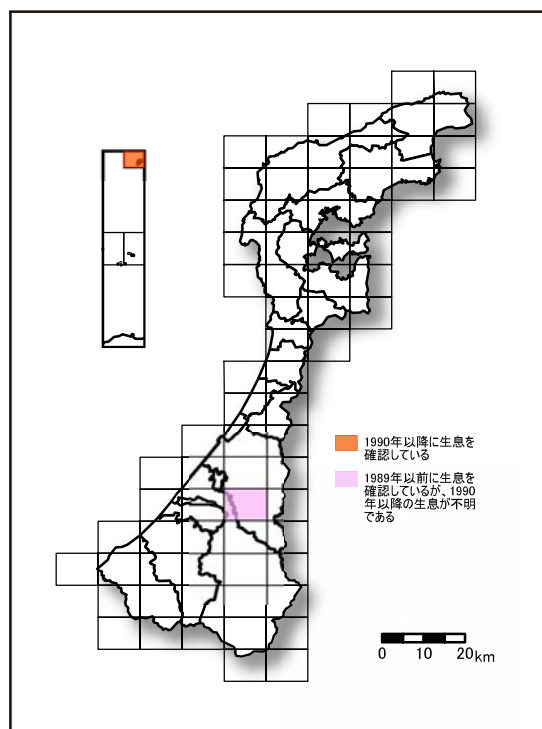
舳倉島の生息する池は特別保護地区に指定されている。

参考文献

細井 操 1947. コガムシの生活史. 採集と飼育, 9 : 201-204.
林 成多 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 77-113.



標本提供者: 高羽正治



県内の分布

オオクワガタ

Dorcus hopei binodulosus Waterhouse

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

現在の「放虫問題」の無かった、35年前に採集された標本の存在により、石川県にも本種が分布していたことが確認されたが、その他には確実に石川県産と思われる個体の採集記録がない。

形態

オスは頭部や胸部が幅広く、大アゴは強力で、大型の個体では中央より前方に斜め前向きな大きな内歯を持ち、先端部分には後方に向く小さな内歯を持つ。体長は最大で約80mmに達する。メスは全体的に光沢が強く、胸部は丸みが強い。

国内分布

北海道（南部）、本州、佐渡島、四国、九州、対馬に分布するが個体数はとても少ない。

県内分布

現在、本種の生息地は見つかっていない。しかし、35年前に金沢市で採集された標本が現存し、県内に分布していたことを示す唯一の資料となっている。

生態

成虫は6月から9月にかけて出現する。日中は樹洞に入ってほとんど姿を見せず、もっぱら夜に活動する。走光性があり、灯火に飛来することもある。卵から成虫になるまでに約2年かかる。成虫の寿命は長く、3年ほど生きることもある。

生息地の条件

樹液が出て、樹洞があるようなクヌギなどの大木が存在する、自然の豊かな森林であること。

生存の危機

本種はクワガタムシ類の中でも人気が高く、いわゆる乱獲（採集圧）が本種にとって最大の脅威である。さらに、もともと分布していない地域への放虫行為も大きな問題であり、近年では、放虫個体と思われる採集事例が県内でも数多く聞かれるようになった。その他、生息環境である森林の伐採や開発など、本種の生存を脅かす事柄は枚挙にいとまがないのが現状である。（A）

特記事項

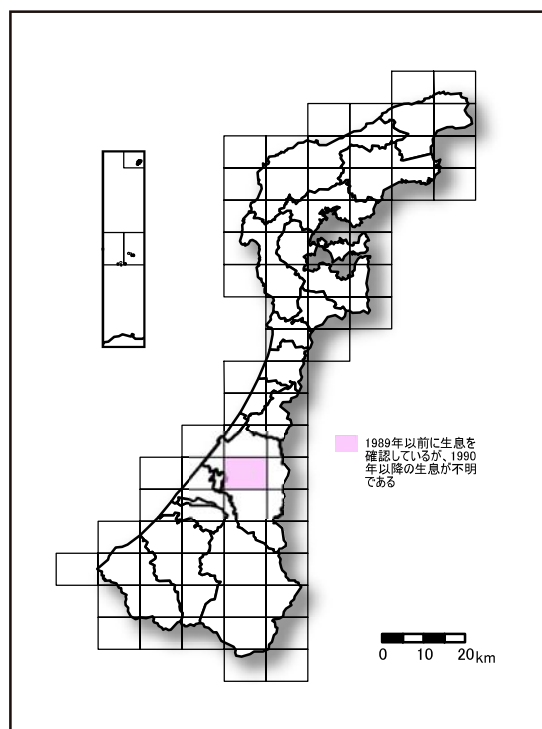
石川県唯一の文献記録として、山本（2000）による金沢市森本での採集記録があるが、森本周辺では悪質な放虫行為が頻繁に行われていたことから、この記録は石川県産の個体であるとは断言できない。

参考文献

山本雅一 2000. 石川県におけるオオクワガタの採集記録. 月刊むし, (350) : 119.



標本提供者: 森幸彦



県内の分布

ベーツヒラタカミキリ

Eurypoda batesi Gahan

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

本種は南方系の種で、日本海側の北限に近く、個体数が少ない。また、生息地は照葉樹林に点在しているに過ぎず、隔離分布している。

形態

体長は26～34mm。体は赤褐色の扁平なカミキリで、全体に強い光沢がある。オスの大顎は大きく、発達している。触角は太く、オスでは長さが上翅の1/2を超える。脚は太く短い。

国内分布

本州（関東以西）、福井県雄島、隠岐、淡路島、四国、高知県沖ノ島、九州、伊豆諸島、対馬、五島、屋久島、口永良部島、中之島、奄美大島、徳之島、沖縄本島。

県内分布

加賀市、小松市、羽咋市、七尾市、珠洲市。

生態

成虫は7～8月頃に出現し、スダジイの古木周辺で見られる。昼間は枯死部に潜入しているが、夜間に活動する。

生息地の条件

平地において、スダジイ等の大木が残る照葉樹林が残されていることが重要である。このような場所は、本県では社叢林や史跡にしか残されていないため、それらの保全が重要である。

生存の危機

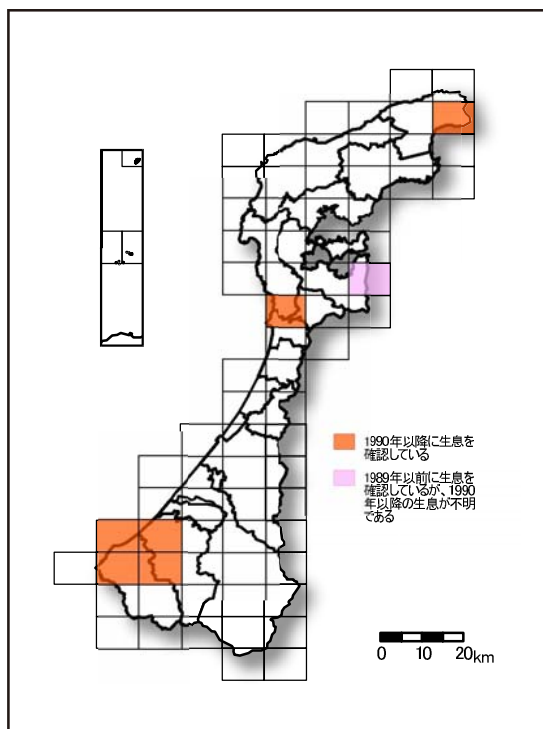
県内の生息地は、社叢林など10箇所程度に点在しているに過ぎず、隔離分布している。また、生息地が狭いうえ、各生息地の個体群の交流が望めず、絶滅の恐れがきわめて高い。開発行為は言うにおよばず、社叢林内の枯死木の除去、林床の整備、伐採は、確実に絶滅につながる。（A）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

キイロミヤマカミキリ

Margites fulvidus (Pascoe)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー なし

選定理由

南方系の甲虫で、日本海側の北限と思われ、東限にも近い。石川県を挟む福井県（冠島）と富山県にも記録があるが、県内で得られた個体数はきわめて少ない。

形態

体長は13～18mmで、ガッチリした体形である。触角は太く、オスでは体長の1.5倍ある。体色は赤褐色で、前胸は黒く、上翅は黄色の微毛で被われ、黄褐色に見える。

国内分布

本州（関東以西）、冠島、淡路島、四国、竹島、高知県沖ノ島、九州、対馬、平戸島、馬渡島、天草、黒島、種子島、屋久島、口之永良部島、中之島、奄美大島、徳之島、沖縄本島。

県内分布

加賀市加佐岬、金沢市金沢城址、珠洲市蛸島。

生態

成虫は平野部のスダジイの残る林に生息し、5～7月頃に現れる。県内では、灯火への飛来個体、スダジイに静止していた個体、スダジイの花で得られた個体が記録されている。幼虫はスダジイの衰弱部を食すという。

生息地の条件

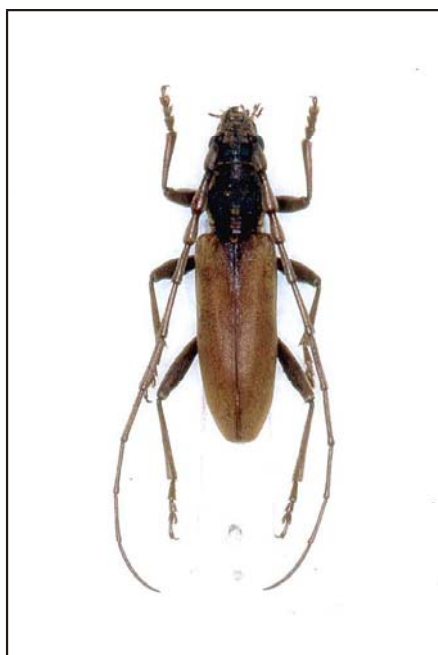
平野部に残存しているスダジイ等の照葉樹のある暖帯林に生息するため、それらの照葉樹林が現存することが重要である。

生存の危機

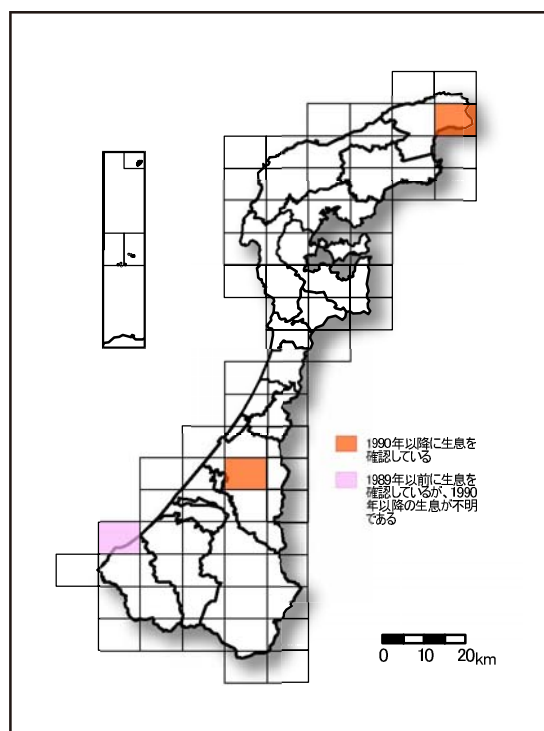
平野部に点在しているスダジイ等の照葉樹林に生息するため、生息環境は狭いうえ、生息地は大きく分断され、絶滅の危機がきわめて高い。また、生息域が平地のため、開発等で消滅する危険性が大きい。本種の生息地のひとつである金沢城址では、公園化により樹木伐採されたため、絶滅した可能性が高い。（A）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課。
川瀬英夫 2002. 珠洲市で採集した甲虫3種の記録. とっくりばち, (69)：24.



標本提供者：川瀬英夫



県内の分布

コトラカミキリ

Plagionotus pulcher (Blessig)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

全国的に産地が減少している種で、県内では1950年代の古い記録があるのみである。

形態

体長は12～16mm。中型のトラカミキリで、がっしりした体形をしている。体の地色は黒色で、頭部に2本、前胸背板に2本、上翅に5本の黄帯を持つ。脚と触角は黄褐色。触角は太く、オスで体長をわずかに超える。スズメバチ類に擬態していると思われる。

国内分布

北海道、本州（長野県、福島県）。

県内分布

白山市（旧白峰村）。

生態

成虫は5～8月に見られ、ミズナラなどブナ科の新しい伐採木や倒木に飛来する。幼虫はそれらの枯死部を食する。

生息地の条件

ブナ科植物の多い広い面積の森林の存在が必要である。

生存の危機

大きな環境変化のない山地帯においても近年の記録はまったくなく、減少の要因は不明である。（A）

特記事項

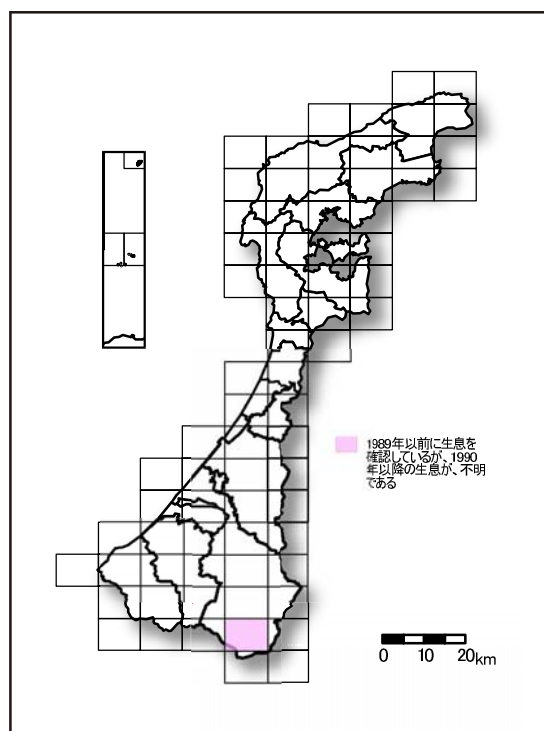
県内には、本種に良く似たクリストフコトラカミキリが分布しているので同定に注意を要する。

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



標本提供者：井村正行



県内の分布

トガシオオナギナタハバチ

Megaxyela togashii Shinohara

ハチ目ナギナタハバチ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

情報不足

選定理由

個体数が非常に少ない珍しい種で、しかも環太平洋分布をする注目すべき種である。

形態

触角第3節が長く、第4節以下は数珠状となる。

国内分布

石川県、兵庫県、岡山県、広島県に分布する。

県内分布

白山市瀬波での記録が唯一である。

生態

谷川沿いのサワグルミ林で採集されていて、幼虫はサワグルミの葉を食べる。詳しい生態については不明である。

生息地の条件

沢沿いに広がるサワグルミ林に生息する。同属のオオナギナタハバチはオニグルミを食べることが知られているが、本種がオニグルミを食べるかどうかは不明である。

生存の危機

沢沿いのサワグルミ林が土木工事や土砂崩れ等で破壊されると、生存が危ぶまれる。(A)

特記事項

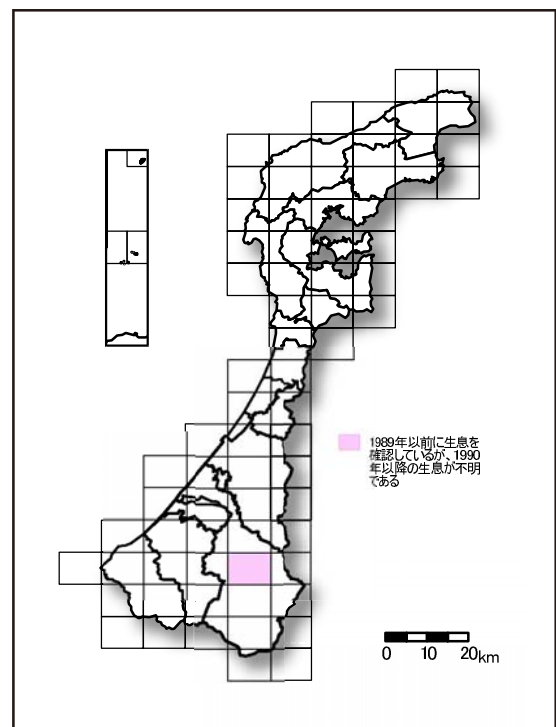
現在のところ、4個体が採集されているにすぎない。

参考文献

Shinohara, A. 1992. Sawfly genus *Megaxyela* (Hymenoptera, Xyelidae) in East Asia. Jpn. J. Ent., 60 (4):783-796.



標本提供者: 富樫 一 次



県内の分布

シロズヒラタハバチ

Pamphilius leucocephalus Takeuchi

ハチ目ヒラタハバチ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

情報不足

選定理由 分布が局限される、きわめて珍しい種である。

形態 体は腹背が扁平で、頭部は乳白色を呈する。

国内分布 北海道、宮城県、山梨県、石川県、福岡県に分布する。

県内分布 珠洲市若山町洲巻が唯一の産地である。

生態 現在のところ、生活史も食草も判明していない。採集された場所はコナラの疎林内に生育しているササの一種の葉上である。

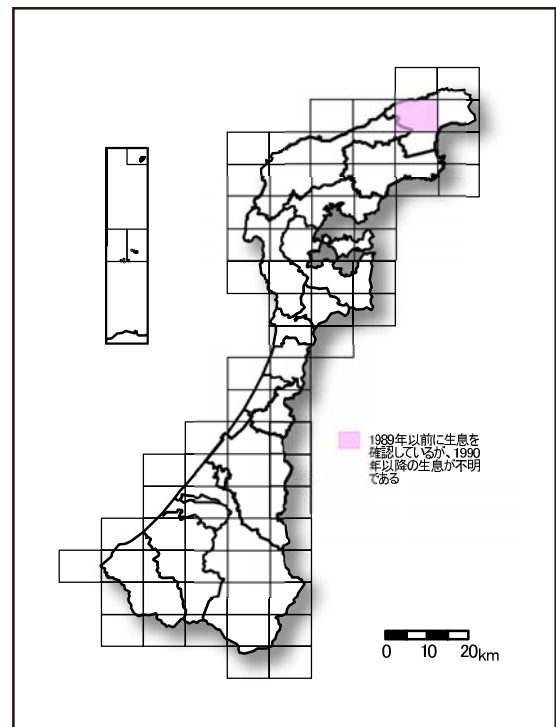
生息地の条件 里山のコナラ林に生息しているものと推察される。

生存の危機 県内唯一の産地である、珠洲市の宝立山麓の開発が進めば、絶滅の可能性が大きい。(A)

参考文献 Takeuchi, K. 1938. A systematic study on the suborder Symphyta (Hymenoptera) of the Japanese Empire (1). Tenthredo, 2:173-229.



標本提供者: 富樫一次



県内の分布

イソメマトイ

Hydrotaea glabricula (Fallen)

ハエ目 イエバエ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類

選定理由 石川県では1960年ごろまでは多く見られたが、それ以後は急激に減少し、現在は生息箇所を認めることができない。

形態 体長3mmほどのごく小型のハエである。体色はわずかに光沢をもった黒色。ヒメクロイエバエ属に似るが、オスの前腿節先端腹面の切れ込みにある歯状突起により区別される。

国内分布 石川県と三宅島でのみで知られているが、現在の生息が確認されていない。

県内分布 白山市美川、金沢市（金石、安原、大野）、内灘町、かほく市高松で過去に多数採集されているが、現在はまったく見られない。

生態 国外では、本種は人につきまとい、ほとんどがメスとされている。堀克重・倉橋弘両氏によって石川県から初めて記録され、6月から7月にかけて多かったという。また、伏流水の湧水付近や民家の洗濯場の周囲に普通と記されているので、その付近が発生地と思われるが、詳細は不明である。

生息地の条件 海岸近くの湧水地点付近を生息地とするようである。

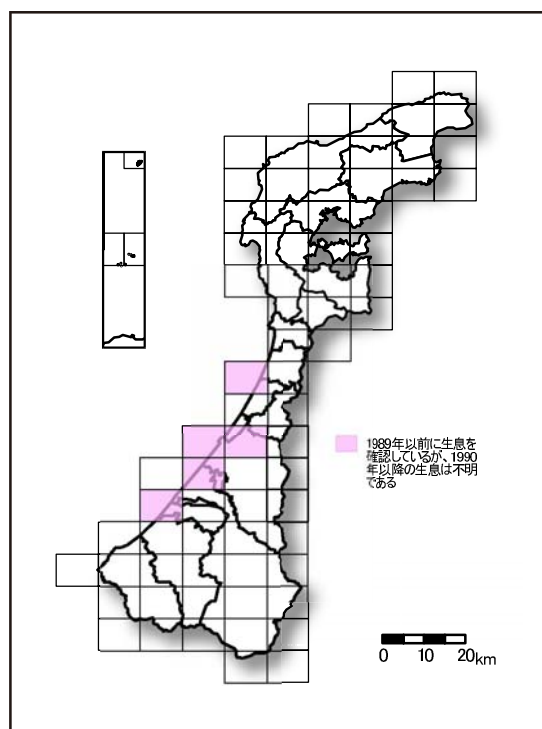
生存の危機 地下水揚水量の増加によって地下水位が低下しており、かつて存在した海岸近くの湧水箇所はほとんど消失している。さらに生息地付近での宅地化、農耕地化、水利・治水工事なども加わって、生息好適地がほとんどなくなったようである。本種の調査は十分ではないので、探索を続ける必要がある。

(A)

参考文献 堀 克重 1955. 石川県の昆虫. 石川県郷土史学会編. 郷土の自然 : 77-89.
堀 克重 1962. 能登半島の昆虫. 中部日本自然科学調査団報告能登半島の自然 : 26-27.
堀 克重・倉橋 弘 1966. 日本未記録のイエバエ科3種. 昆虫, 34 (1) : 68-75.
Shinonaga, S. and Kano, R. 1971. Fauna Japonica Muscidae (Insecta, Diptera) Vol. 1. Keigaku Publishing Co., Ltd., Tokyo. 244pp., 28pls.



写真提供者: 国立感染症研究所



県内の分布

カエルキンバエ

Lucilia (Bufolucilia) chini Fan

ハエ目キンバエ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

情報不足

選定理由

本種は1950～1960年代に県内で多く見られたが、現在は確認記録がない。

形態

体長5～7mmで、金緑色の小型キンバエ。腹背第3節に1対の直立剛毛があり、翅の前縁脈基部片は黒色で、亜前縁脈下部片に黒色毛をもたない。

国内分布

1960年代までは、栃木県、茨城県、千葉県、東京都、神奈川県、石川県、福井県、愛知県、京都府で文献記録や残存標本がある。その後は全国的に生息確認がされなかったが、2000年代になってから青森県で生息地が発見されている。

県内分布

1952年ごろは、河北潟周辺から金沢市大野町付近の農道にたくさん生息していたと記録され、能美市（旧寺井町）でも採集されている。しかし、その後は見出されなくなった。

生態

成虫発生時期は5～10月で、年2回発生といわれる。欧州などの本種の近似種は、その幼虫がカエルの目や鼻に寄生することが知られているが、本種はカエルに寄生するかどうか不明である。

生息地の条件

これまでの採集記録から見ると、本種は池、潟、水田付近に多いように思われる。

生存の危機

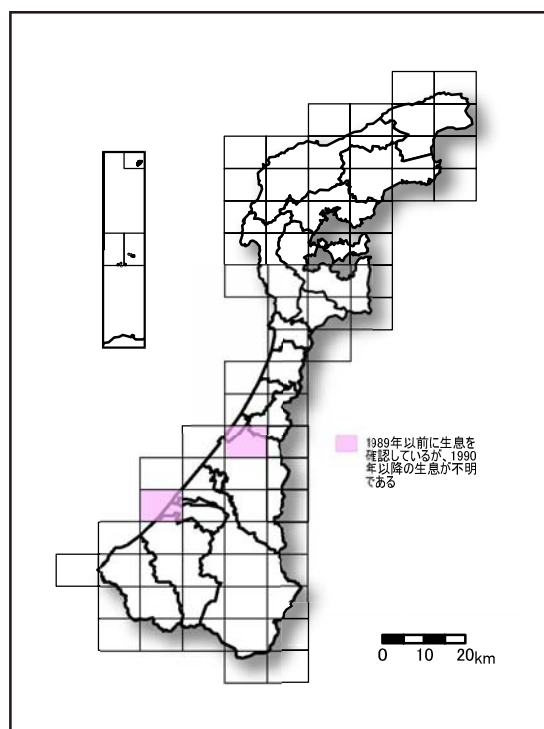
かつて水田で多産したカエルが、ほ場整備や農薬の影響で激減した時期と同じ頃に、本種も姿を消したように考えられる。低地の水田から本種が消滅したが、丘陵地・低山間地などの池・湿地・水田付近などや能登半島で本種が残存していないか探索を続ける必要がある。（A）

参考文献

- 堀 克重 1955. 日本産蠅族の重要群の形態学的研究Ⅴ. 日本産黒蠅科の数種について. 日本生物地理学会会報, 16～19: 230-234.
Kurahashi, H. 1966. Studies on the calypterate muscoid flies from Japan. V. Revision of the tribe Lucilini (Diptera, Calliphoridae). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 11 (2): 105-124.
徳本 洋 2000. カエルキンバエを探そうー研究史と種の特性解説 はなあぶ. (10): 35-41.



写真提供者: 国立感染症研究所



県内の分布

ゼニゴギンガクニクバエ

Metopia stackeibergi Rohdendorf

ハエ目ニクバエ科

石川県カテゴリ

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリ

なし

選定理由

アジア大陸系の珍しい種で、全国的にごくわずかの記録があるだけである。県内では、近年の記録がない。

形態

体長5～7mm。体全体は明るい灰色で黒褐色の斑紋がある。腹部は短軟毛に覆われる。目立つのは頭部で、複眼は大きい。雌雄共に眼幅よりも大きく離れ、頭部が円錐形に前方に突出しており、その側面が銀白色（特にオスで顕著）である。

国内分布

石川県、愛知県、鳥取県から記録されている。国外では旧北区、中国、モンゴルで記録されている。

県内分布

1960年代に金沢市金石での記録があるだけで、以後、確認記録がない。

生態

本種が属するヤドリニクバエ亜科の種は一般に幼虫がハチ類の巣に労働寄生しているので、本種もその可能性が大きい。

生息地の条件

砂浜にのみ生息するものと思われる。

生存の危機

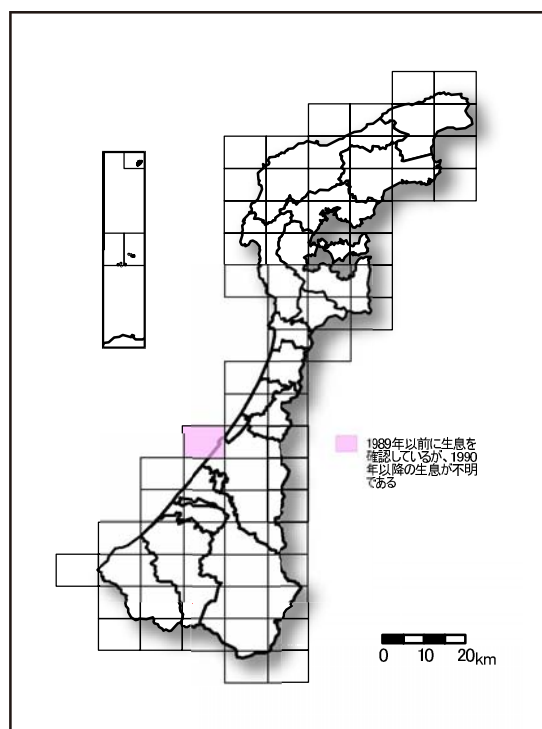
近年の調査ではまったく発見されていない。石川県では大部分の砂浜海岸で自然環境悪化が著しいので、その影響を受けているものと思われる。（A）

参考文献

Kurahashi, H. 1970. Studies on the calypterate muscoid flies from Japan. VII. Revision of the subfamily Miltograminae (Diptera, Sarcophagidae). Kontyu, 38 (2):93-116.



写真提供者：国立感染症研究所



県内の分布

ゴヘイニクバエ

Sarcophila japonica Rohdendorf

ハエ目ニクバエ科

石川県カテゴリ 絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリ 絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 日本における近年の生息確認はきわめて少なく、絶滅の恐れが高い。

形態 体長5～6mmの小型ニクバエで、他種のニクバエに比べてかなり小さい。他のニクバエに見られる胸部の3本線模様はなく、あっても、極細の線が2～4本見える程度である。オスの第6背板が第1生殖背板と癒着しているのが特徴。雌雄ともに額の幅は複眼の幅より広く、額顔縁剛毛をもつ。

国内分布 1965年ごろまでは石川県と鳥取県の砂丘に普通に見られたが、その後、まったく記録されなかった。2000年代になって石川、鳥取、新潟の各県で発見され、日本海側の沿岸部に分布している。国外ではロシア極東部、韓国に分布する。

県内分布 1960年代において金沢市金石海岸で記録があるだけであったが、2005年に白山市倉部海岸で生息が確認された。

生態 成虫は1960年代の調査では、6月から8月にかけて海浜植物上でハマベニクバエと共に多数採集されたと記録されている。2000年代の各県の記録でも成虫は海浜植物群落内で確認されている。

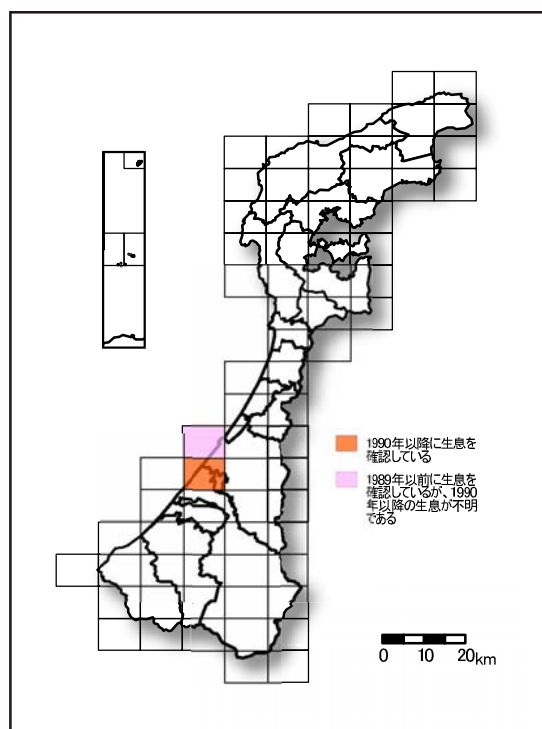
生息地の条件 成虫は海浜植物群落の発達している所に生息する。

生存の危機 海浜砂丘地の大部分は波浪浸食による海岸線の陸側への後退がきわめて著しく、また、陸側からの工事や植林の海側への進出、さらに、護岸工事により海浜植物帯の消滅が顕著である。そのため本種の生息域は各地で激減しつつある。(A)

参考文献 堀 克重・倉橋 弘 1962. 日本未記録のニクバエ2種. 昆虫, 30(2): 174.
Kurahashi, H. 1975. Studies on the calypterate muscoid flies from Japan. XI. Subfamily Agrinae (Diptera, Sarcophagidae). Kontyu, 43(2): 202-213.
古田 治 2005. 石川県におけるゴヘイニクバエの記録. はなあぶ, (20): 89.



写真提供者: 国立感染症研究所



県内の分布

クロシジミ

Niphanda fusca (Bremer et Grey)

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

幼虫期にアリと共生するため、分布は局地的で生息環境は限定され、全国的に減少している。県内では、1978年の観察以降は発見されていない。

形態

開張40mm程度の小型種。オスの翅表は光沢のある青紫色で黒色の縁取りがあり、メスの翅表は黒褐色。裏面の地色は、雌雄ともに白色の強いものから褐色がかかった灰白色のものまで見られる。

国内分布

北海道、沖縄を除くほぼ全県に局地的に分布するが、全国的に減少している。

県内分布

生息地は局限され、金沢市犀川ダム周辺と金沢市菊水・堂周辺から記録されているにすぎない。犀川ダム周辺では1957年から1978年にかけて、菊水・堂周辺では1970年に記録され、その後は度重なる調査においても発見されていない。

生態

年1回の発生で7月上旬から8月上旬に見られる。出現期の後半に産卵が見られ、約1週間で孵化、2齢中期までは樹上でアブラムシやキジラミと共生、後にクロオオアリの巢中に入ってアリとともに生活し、翌年6～7月ごろに蛹化するというが、本県での生活史は知られていない。午前中は活動がにぶく、下草に静止しているものが多いが、特にオスは昼過ぎから夕方にかけて活発に飛翔する。

生息地の条件

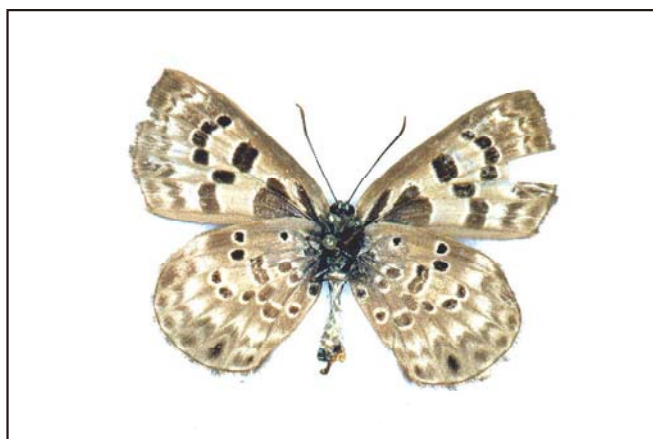
県外では、クヌギ、コナラ、ミズナラなどの疎林、アキグミの生えた草地、ススキを主にした草地、ヌルデ、ウツギなど低木の多い堤防などが、生息地として知られている。いずれも遷移の途中にあり、人手が加わった不安定な環境であるが、アブラムシ、キジラミが多いこと、クロオオアリが生息していることが共通している。

生存の危機

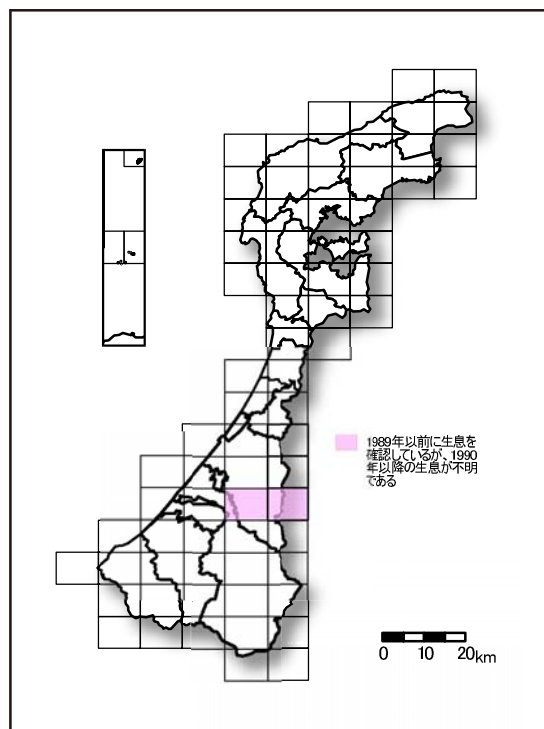
本種は、雑木林が伐られて2～3年経った場所によく観察されている。これは、伐られた木が萌芽し、アブラムシやキジラミが発生し易くなっていること、アリの住み良い環境となっていることが考えられる。雑木林に人手が入らず更新されないことが、本種の減少に影響していると思われ、これは犀川ダム周辺や堂・菊水周辺にも言えることである。(A, B)

参考文献

福田晴夫ほか 1984. クロシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ): 216-221. 保育社. 大阪.
吉村久貴 1998. 実在した菊水のクロシジミ標本. 翔, (135): 1-2.



標本提供者: 吉村久貴



県内の分布

アオモンギンセダカモクメ

Cucullia argentea Hufnagel

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー

なし

選定理由

国内分布は局地的で個体数がきわめて少ない。本種の生息する河原の自然植生の草地は破壊が著しく、生存が危ぶまれる。

形態

開張は35mm内外。前後翅は銀白色で、前翅には緑色の網目模様の斑紋が表れる。

国内分布

秋田県、新潟県、富山県、石川県、福井県、佐賀県の日本海側と兵庫県、岡山県、香川県、愛媛県の瀬戸内沿岸域から得られているが、局地的であり、いずれの産地も個体数はきわめて少ない。

県内分布

川北町でのみ得られている（参考文献では美川町となっているが誤りである）。採集地点は手取川河口から1.2km上流の河川敷の草地であり、1998年9月に1頭が採集されたに過ぎない。

生態

植生の貧弱な河原の草地に生息する。幼虫の食草はカワラヨモギで、幼虫は花穂を食している。成虫は8月下旬から9月にかけて発生していると思われる。

生息地の条件

カワラケツメイ、カワラヨモギ、カワラハハコなどの生育する河原の自然植生が残されていることが重要である。

生存の危機

生息地である手取川下流の右岸河川敷周辺は、護岸工事、公園化などで、河原本来の植生がほとんど失われている。本種の採集地点も2004年に土木工事が行われて生息地が破壊されたため、絶滅した可能性が高い。（A）

特記事項

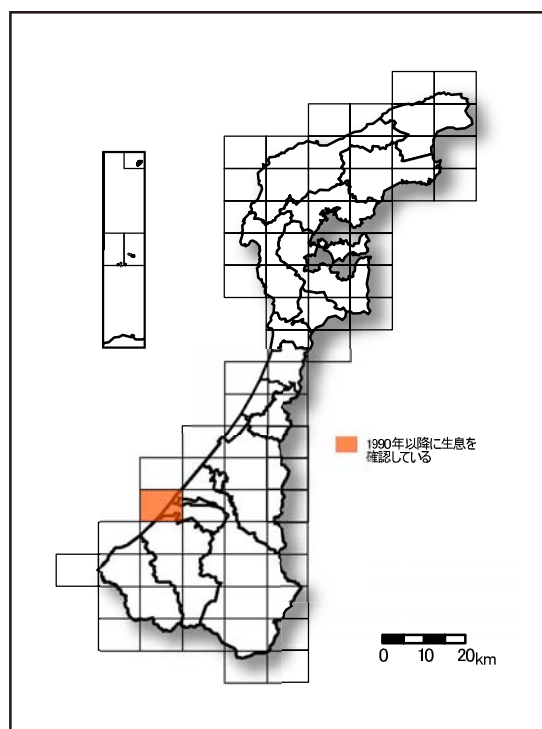
国内分布が偏在しているうえ、海浜や河川敷の自然植生が保たれている平地草原という特殊環境に生息する点で重要である。

参考文献

富沢 章 1998. 石川県でアオモンギンセダカモクメを採集. 蛾類通信, (202) : 32.



標本提供者：富沢章



県内の分布

キイロサナエ

Asiagomphus pryeri (Selys)

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリ

なし

選定理由

加賀地方では絶滅したと思われる。近年、津幡町や口能登の数箇所から見つかったが、個体数は少なく、開発の危機にさらされている。

形態

腹長42～49mm、後翅長37～43mmで、ヤマサナエによく似た大型種である。

国内分布

日本特産種で、本州、四国、九州に分布するが、ヤマサナエほど普遍的ではなく、関東北部や東北ではほとんど見られない。富山県では小杉町に生息し、福井県からは近年いくつかの生息地が見つかっている。

県内分布

近年になり、津幡町、かほく市（宇ノ気町）、志賀町で生息が確認されている。

生態

幼虫は平地や丘陵地の砂泥底のゆるい流れ（小川や用水）に育ち、ヤマサナエより下流に生息するケースが多い。成虫は5月下旬から8月に出現する。未熟期は林野など広範囲に分散するが、成熟すると発生地である小川付近で活動する。ヤマサナエに習性は似るが、出現期がやや遅い。

生息地の条件

丘陵や山麓の汚染のない砂泥底の緩流（小川や用水、河川の中流など）が発生地である。その周辺に樹林や草地があることも重要。

生存の危機

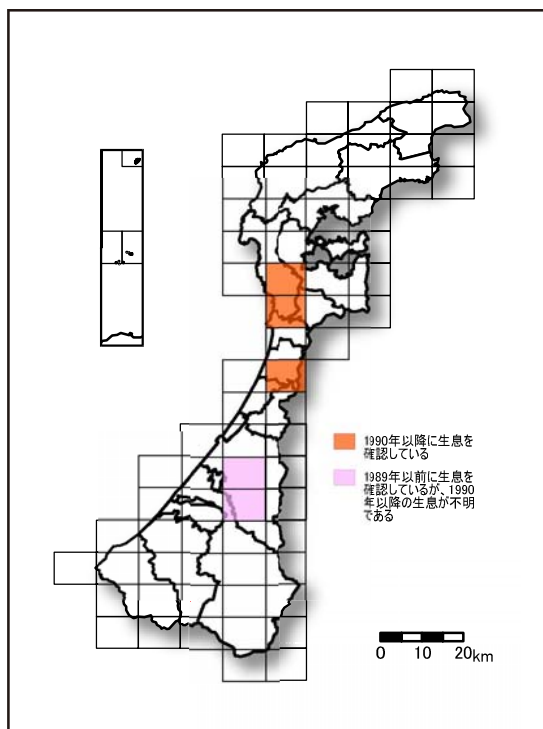
幼虫がヤマサナエよりも下流に生息するため、人間の生活圏と重なることが多く、人為的影響を大きく受けることになる。小川や用水は、一時は農業で、近年は廃水や廃棄物の投入、コンクリート化により本種の生息が困難となった。水路の直線化や川床ならし、水抜きの影響も大きい。周囲の宅地化や雑木林の伐採も間接的なマイナス要因となる。未熟期を過ごす林野も開発や道路建設と車輛の通行増加で生息環境として適さなくなっている。（A）

参考文献

武藤 明 1988. 昆虫の生態をめぐって. とっくりばち, (65) : 8-10.
浅地哲也 2001. 中能登でキイロサナエを採集. とっくりばち, (71) : 25.



標本提供者：武藤明



県内の分布

アオサナエ

Nihonogomphus viridis (Oguma)

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

小松市の3河川のみから知られ、個体数も少ない。

形態

腹長37～43mm、後翅長29～38mmで、鮮やかな緑色の中型サナエ。肩に太い黒条があり、オスは第7～9節が著しくひろがって、長大な黄色の尾部上付器がある。

国内分布

日本特産種で、東北から南九州まで分布するが、産地は限定され、富山県でも希少種である。

県内分布

小松市の西俣川、大杉谷川、那谷川の中流域に生息するが、多くない。

生態

丘陵地の砂礫底の河川の中流に育ち、成虫は5～7月に出現する。未熟期には林野に分散して摂食する。成熟オスは水面に出た石や岸辺の岩の上などに静止してメスを待ち、時々流れの上を飛翔するが、行動は極めて敏速である。メスを発見すると急追し、空中で捕えて環状となり、樹枝にとまる。産卵は卵塊を作ってから行なう。

生息地の条件

流れのゆるい砂礫底の中流域で、あまり深くなく水量がかなりあること。流れの中や岸辺に、静止するための水面に出た岩石があり、幼虫が羽化するための植物や岩石が散在することも必要。農業や廃水が流入せず、付近に樹林もあること。

生存の危機

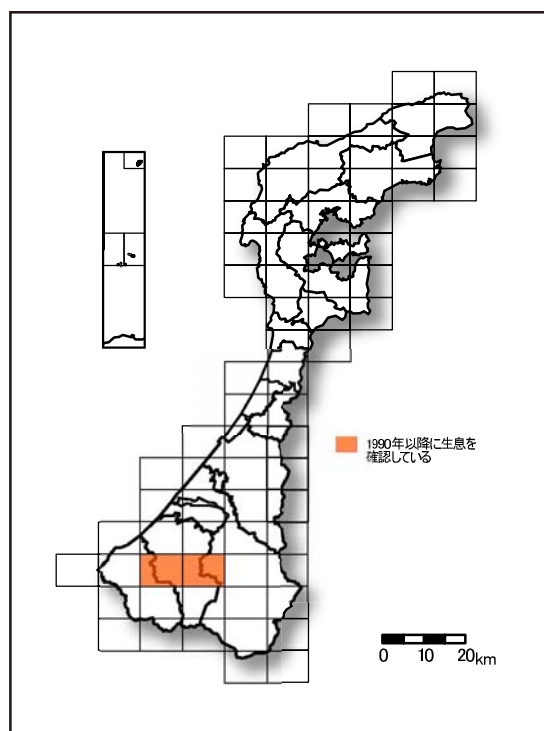
キイロサナエ、オナガサナエ、ホンサナエ同様、河川のゆるい中流域に生息するトンボとして、農業や廃水、廃棄物の投入などによる影響を受けやすい。流れを直線化したり、岩石を除去し川床をならしたり、抽水植物を取り去るなども負の要因。ダムや堰で上手は水が淀み、下手は水量が減る場合もあり、コンクリート堤防が連続することなども減少につながる。付近の樹林の伐採も、摂食空間や休止場所をうばうことになる。(A)

参考文献

武藤 明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫: 49-57. 石川県自然保護課.
武藤 明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. Tombo, 41: 33-36.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

マダラヤンマ

Aeschna mixta Latreille

トンボ目ヤンマ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

本県が南限に近く、生息地が限られ、個体数も少なく、開発などの影響を受けやすい。

形態

腹長42～47mm、後翅長40～45mm。オオルリボシヤンマを小型化したような種類。胸は黄緑、腹部は青い地に黒い条紋がある。

国内分布

北方種で、本州中部以北に分布し、福井県でも時に見られるが、富山県での確認例が多い。

県内分布

小松市（安宅新、四丁町、今江）、金沢市北部公園、羽咋市（大川町、寺家）などの報告があり、特に羽咋の太田崖や志賀町の一部では、ほぼ例年みられたが、最近はきわめてまれとなった。

生態

平地～丘陵のヨシ、マコモ、ヒメガマなどの多い池沼に幼虫が育ち、成虫は主として9～10月を中心に活動する。未熟虫は疎林に分散して摂食し、成熟すると池沼に飛来してオスは初期にはやや高く旋回するが、やがて抽水植物のまばらになった部分で占有飛翔を行ない空中によく停飛する。周囲にだけヨシなどが生えている沼では、周回型の飛翔も見られ、よくトンボ科の種のような静止態をとる。

生息地の条件

北陸では主に海岸近くの丘陵や平地の池沼で、農業、廃水などの影響がなく、ヨシ、ヒメガマ、マコモなどの抽水植物が多い環境が要件。ブラックバスやブルーギルの移入もなく、付近に疎林があり、堤防がコンクリートや防水シート張りでないこと、あまり深くないことも重要。

生存の危機

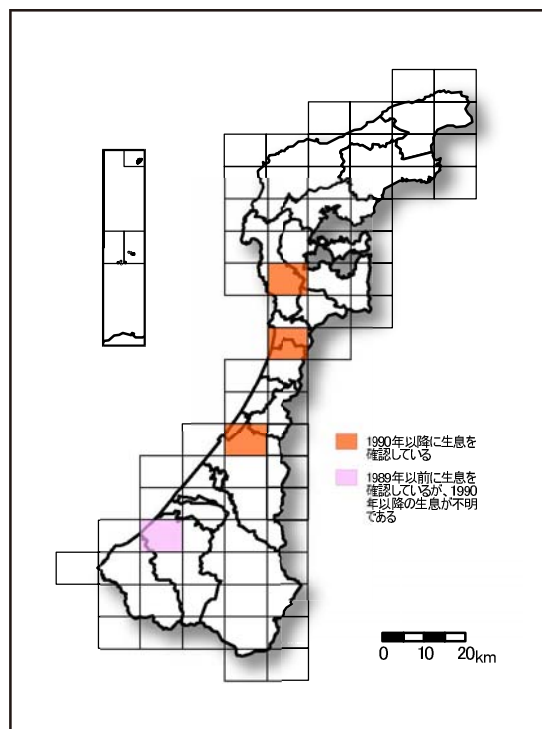
沿岸平野の池沼は、廃棄物投入や埋め立ての対象にされやすい。農業の空中散布、ブラックバスなど捕食性魚類の移入による直接的影響の他に、疎林の伐採なども減少をもたらす。ため池の改修による自然度の減少、逆に放置したために植物が進入し乾燥化する場合や、時にはサギなどの繁殖により汚染が進んだり、ハスがはびこり開水面が消失することもある。最初に発見された羽咋市寺家の沼は、公園化され放置されて乾燥し、小松市安宅新や四丁町の池も埋め立てや水抜きで、本種が現われなくなっている。（A、B）

参考文献

武藤 明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課.



標本提供者：武藤明



県内の分布

マダラナニワトンボ

Sympetrum maculatum Oguma

トンボ目 トンボ科

石川県カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリ

絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

かつては羽咋や小松の近郊などに分布していたが、近年は生息地が志賀町や七尾市に限られ、全国的にも絶滅が危惧されている。

形態

腹長21～24mm、後翅長25～28mmの赤くないアカトンボ。黄色の地に黒斑があり、成熟すると黄色部は灰色がかってくる。

国内分布

日本特産種で、本州に分布するが、最近は見られなくなった地域が多い。富山県や福井県では、確実な記録がない。

県内分布

近年の確実な記録は、志賀町富来、七尾市の中島や能登島地区に限られる。過去に七尾市和倉での採集例があり、羽咋の寺家の松林の沼にかなり生息していた。その後、小松市の数箇所でも発見された。

生態

平地～丘陵の松林にかこまれた明るく浅い池沼に幼虫が育ち、成虫は9～10月を中心に活動する。成熟オスは水辺の松の枝先などに静止して、縄ばりを占有する。産卵は主に雌雄が連結した状態で、水際の泥や草の上を飛びながら行ない、打空型である。意外に移動性がある。

生息地の条件

沿岸部や丘陵の中の池で、明るく開けて浅く、堤防がコンクリートや防水シート張りでないこと。農薬や廃水の影響がなく、強力な捕食者もないことも要件。水量が安定し、夏に干上がらないこと。

生存の危機

池沼の埋め立て、改修、農薬の散布、付近の開発などが悪影響を与えている。池沼に植物が進入し、開水面が失われたり乾燥化する場合もある。廃棄物の投入や、アメリカザリガニの進入、ブラックバスなどの移入も問題である。もともと個体数が少ないので、小さな要因でも生存をおびやかされる。本種の多かった寺家の沼は、松林が伐採された後に放置されており、付近の開発が進み、現在は生息していない。安宅新の池も埋め立てられた。志賀町では主産地のため池のひとつが干上っている。
(A, B)

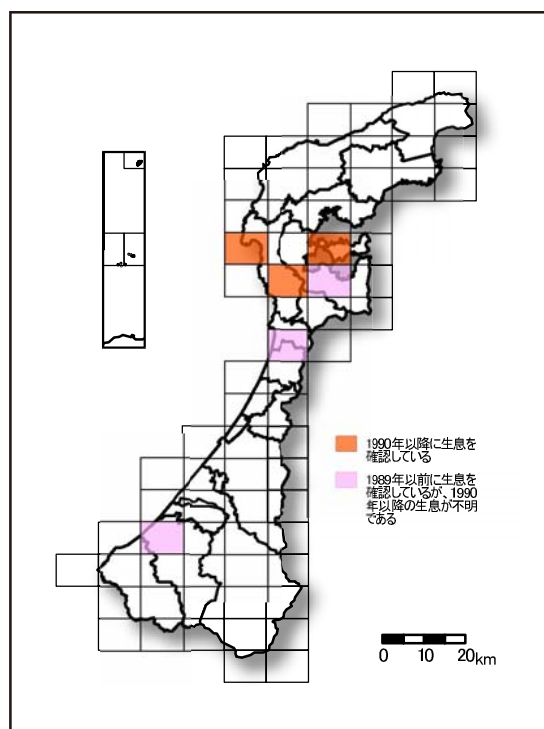
参考文献

武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.

武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75) : 24-28.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

オオゴキブリ

Panesthia angustipennis (Shiraki)

ゴキブリ目オオゴキブリ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

原植生の照葉樹林における代表的な昆虫で、県内の生息地は限られ、隔離分布している。

形態

成虫の体長は40mm内外である。体は漆黒色で翅は腹部全体を覆う。腹部は扁平で幅広く、前肢腿節には棘状の突起を有する。

国内分布

本州、四国、九州、屋久島に分布するが、北方における分布は局地的である。

県内分布

県内で生息が確認されたのは、加賀市から珠洲市まで13箇所、そのうち9箇所は加賀地方南部に集中している。生息地は標高5mから80mの範囲にあって、平野部の原植生であるヤブコウジースダジイ群集が残存している社叢林や城跡が主であるが、二次林から発見された所もある。

生態

発生木は照葉樹林内にある朽ち木で、太い倒木、切り株のほか、立枯れ木の高さ1～2mの部位から見つかった所もある。発生木の樹種はスダジイが最も多く、他にアカマツやモミからも見出される。幼、成虫は四季を通じて朽ち木の中で集団生活しており、移動性は小さいものと思われる。

生息地の条件

生息地が照葉樹林であっても二次林であっても、林内に幼虫の発生木となる大きな倒木や立枯れ木があることが重要である。発生木は表面が柔らかく、中が堅めのもので薄暗い湿った場所に多い。したがって、林内が明るく、枯木のない管理の行き届いた社叢林では生息できない。

生存の危機

生息地のうち9箇所は1ha以下で狭いうえ、発生木が1～5本と少なく生息基盤が脆弱なため、生存に好適な枯れ木がなくなれば、絶滅の可能性がある。生息地における倒木や立枯れ木の除去などの林内の整備は発生地の破壊につながる。生息地の環境整備は上記のことに留意し、最少限にとどめるべきである。(A)

特記事項

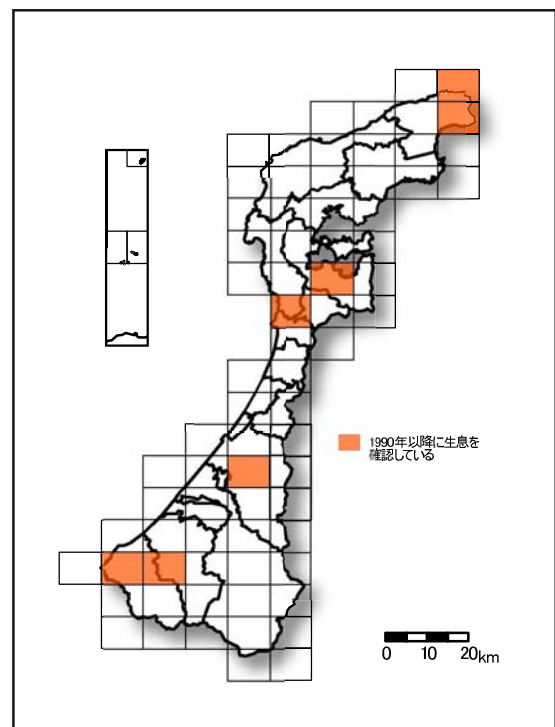
照葉樹林の遺存種として重要である。

参考文献

富沢 章 1999. 石川県におけるオオゴキブリの新産地と生息状況. 月刊むし, (346) : 22-23.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ヒナカマキリ

Amantis nawai Shiraki

カマキリ目カマキリ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

暖地性のカマキリであり、石川県は北方の分布地で生息地が限定される。おもに照葉樹林に生息するが、個体数は少ない。

形態

開張15mm前後の小型のカマキリである。体は褐色で、ハネの無いのが特徴である。

国内分布

新潟県以西の本州、四国、九州、南西諸島に分布する。

県内分布

加賀市、七尾市、志賀町、穴水町、輪島市、珠洲市の約11箇所から記録がある。

生態

自然度の高い照葉樹林に生息するが、二次林からも記録がある。成虫は年1回発生し、8月から10月に見られ、地表徘徊性で、林床の落葉上や落葉の間を活発に行動する。地表の小動物を捕食する。

生息地の条件

落葉層に恵まれた自然度の高い照葉樹林や低地林の存在が必要である。林床はやや暗めで、湿度が保たれていることも重要である。

生存の危機

本種本来の生息地である自然の高い照葉樹林は孤立していること、ハネが無く、移動性に乏しい昆虫であることなどが減少要因となっている。現在の生息地である社叢林等の照葉樹林は、伐採や落葉の除去等の環境整備は避けるべきである。(A)

参考文献

富沢 章 2003. 石川県南部における照葉樹林の希少昆虫. 小松市立博物館研究紀要, (39) : 54-61.

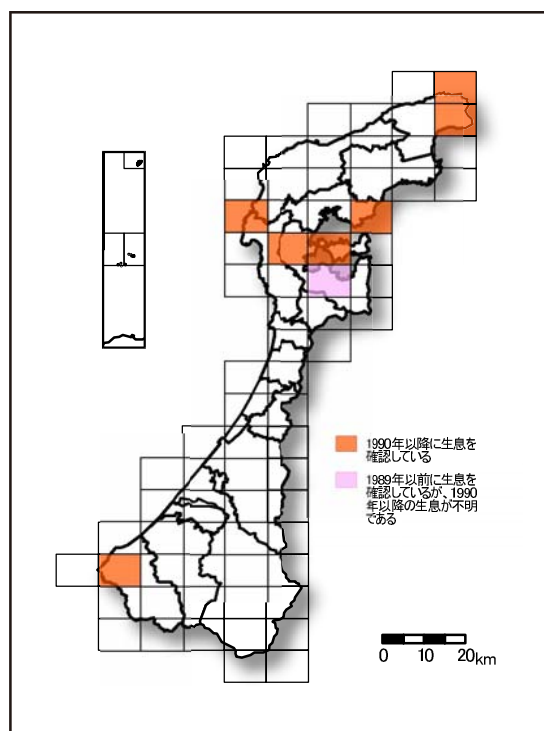
松井正人 2004. 石川県でカマキリ類を採集. 翔, (171) : 6.

富沢 章 2005. ヒナカマキリの採集記録. とっくりばち, (73) : 25.

石原一彦 2006. 志賀町でヒナカマキリを採集. とっくりばち, (74) : 75.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

エゾエンマコオロギ

Teleogryllus infernalis (Saussre)

バッタ目コオロギ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

日本海側では生息地が海浜に限られるようで、本県においては過去に数例の記録があるに過ぎず、近年の記録はまったくない。

形態

体長25mm前後。姿や大きさ、色彩は、近似種のエンマコオロギによく似ているが、鳴き声がまったく異なり、単調にリーリーと鳴く。

国内分布

北海道と本州に分布し、南限は和歌山県といわれている。北海道では多いが、本州における分布は局地的である。

県内分布

加賀市、小松市、内灘町、輪島市の海浜における古い記録がある。

生態

海浜植物帯およびその内陸部の草地に生息する。卵越冬で、成虫は秋に発生する。

生息地の条件

草のまばらな海浜が生息地となっている。

生存の危機

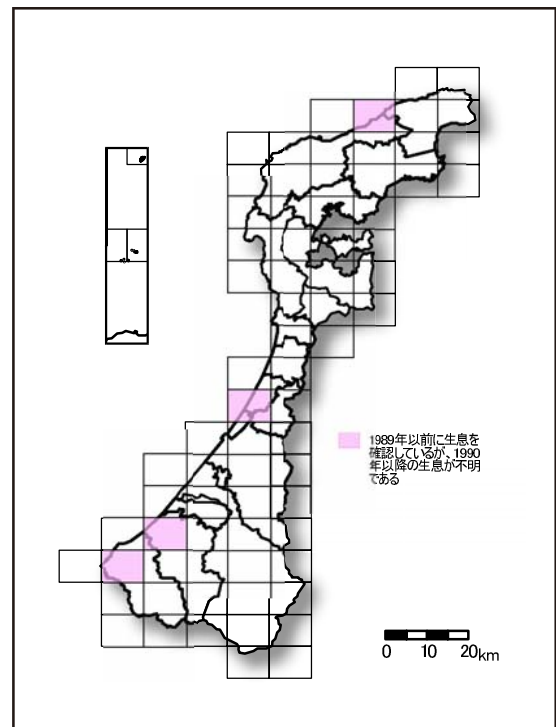
海岸付近の開発や護岸工事は本種の脅威となっているものと思われる。また、近似種のエンマコオロギが海浜にも生息していることから、競合によって本種が減少している可能性もある。(A)

参考文献

徳本 洋 1998. バッタ目. 石川県の昆虫 : 62-67. 石川県自然保護課.



写真提供者: 吉岡明良



県内の分布

コオイムシ

Appasus japonicus (Vuillefroy)

カメムシ目コオイムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

全国的に普通種であったが、激減した地域が多い。県内では2地域で生息が確認されているのみであり、その生息地も開発や生息環境の悪化が危惧される。

形態

成虫は体長17～20mm。体型は扁平な楕円形で、淡褐色～黄褐色。前脚附節は捕獲脚で鎌状に発達し、中脚、後脚は遊泳脚で長い剛毛が生える。腹端の伸縮できる短い呼吸管を水面に出し呼吸する。同属のオオコオイムシとの正確な同定にはオス交尾器の検討が必要である。

国内分布

北海道、本州、隠岐島、四国、九州に分布する。

県内分布

かつての分布状況は不明であるが、七尾市、旧能登島町、珠洲市において局所的に分布する。

生態

成虫5～6月頃にメスがオスの背面に卵塊を産みつけ、オスは孵化するまで約1ヶ月間、卵塊を保護する。産卵は数回行われる。ヤゴなどの水生昆虫や、オタマジャクシ、カエル幼体、小魚、巻貝などを捕らえ体液を吸う。水辺の枯れ草や石の下などで越冬する。

生息地の条件

平野部の水草が豊富な、比較的水深がある、池沼、放棄水田などの開放的な水域に生息する。

生存の危機

池沼の開発、水質汚染、放棄水田の植生遷移、アメリカザリガニなどの外来種の侵入が脅威である。とくに1950年代の農業使用は本種を激減させたと考えられる。ため池の維持、管理の継続や放棄水田の湛水化が保全上重要である。七尾市ではLPGガス基地建設によって生息地の大部分が破壊され、個体数は激減したため、放棄水田の湛水化、新たな水域の創出が必要である。(A, B, C)

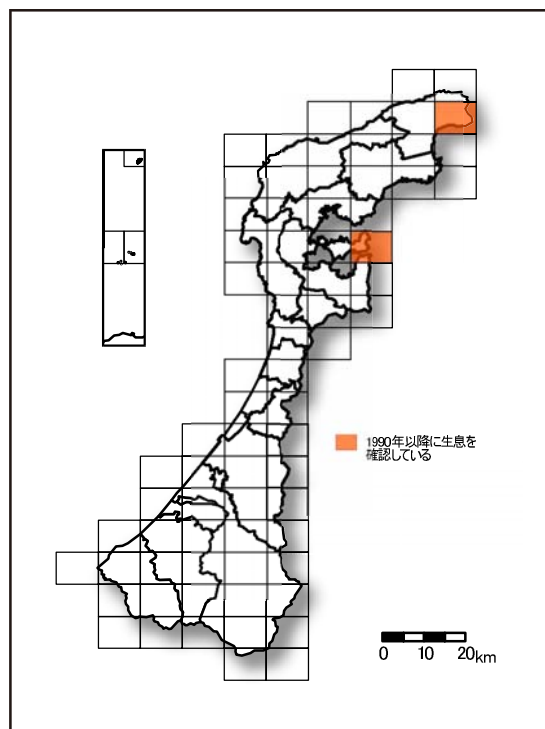
参考文献

Okada, H. and Nakasuji, F. 1993. Comparative-studies on the seasonal occurrence, nymphal development and food menu in 2 giant water bugs, *diplonychus-japonicus* VUILLEFROY and *diplonychus-major* ESAKI (Hemiptera, Belostomatidae). Researches on population ecology, 35(1):15-22.

市川憲平 1996. コオイムシ類の繁殖生態(特集 子供の世話をする昆虫). 昆虫と自然, 31(11): 8-11.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

オオヒョウタンゴミムシ

Scarites sulcatus Olivier

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリ

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリ

準絶滅危惧

選定理由

開発や海岸浸食等で生息地である砂浜海岸が消滅しつつあり、生息環境、個体数ともに減少している。

形態

体長は37～42mmの大型種。体は円筒状で瓢箪型であり、頭部は巨頭化して大顎は大きく発達する。後翅は退化して飛べない。

国内分布

本州、四国、九州に分布する。海浜性であるが、一部地域では大河川の河原に生息するという。

県内分布

加賀市から志賀町までの砂浜海岸に生息地が点在している。

生態

成虫は6月から11月上旬まで見られ、8月下旬頃に新成虫が現れる。成、幼虫ともに肉食性である。夜行性で、昼間は深く砂の中に潜っている。

生息地の条件

海浜植物を伴う安定した広い砂浜海岸および海岸後背地。

生存の危機

沿岸部の土地開発、海水浴場のブルドーザーによる整備、道路建設等などで砂浜の生息環境が極端に悪化している。また、砂浜に側溝が設置されることにより、本種が落下し、死亡個体が多く確認されている。飛べないことも減少要因のひとつとなっている。海浜環境の悪化は、本種のような食物連鎖の頂点にある大型の捕食性昆虫にとって、特に影響が大きいと思われる。(A)

特記事項

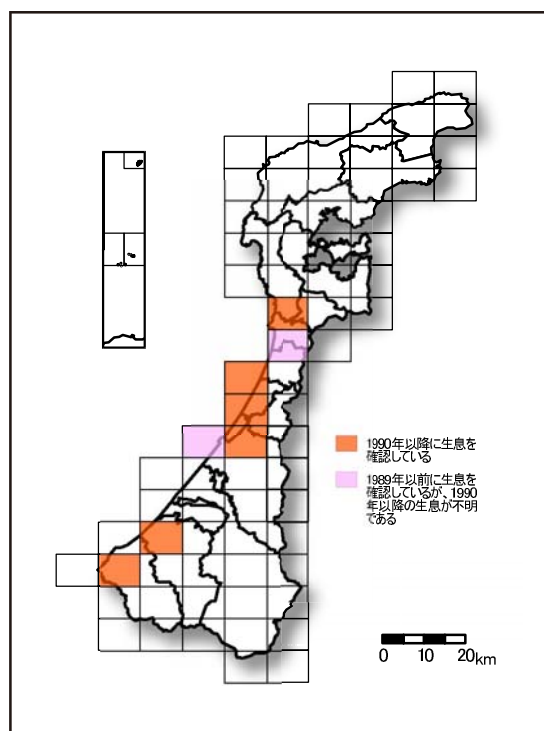
生息地では本種独特の足跡が砂地に残され、生息の指標となる。奥能登の広い砂浜海岸でも生息可能性があるため調査する必要がある。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目オサムシ科. 石川県の昆虫：103-120. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ウエダオオズナガゴミムシ コウチュウ目オサムシ科

Pterostichus uedaorum Morita et Hirasawa

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー なし

選定理由

確認されている生息域は狭く、個体数も少ない希少種である。生息環境が特殊で、後翅が退化し、オオズナガゴミムシ系の進化の観点から、貴重な種といえる。

形態

体長は大顎を含め16～19mm。体は地下生活に適応した扁平な体形で、複眼は小さく後翅が退化している。頭部は巨頭化して大顎は大きく発達し、体色は赤褐色を帯びた黒色で艶があり、上翅は黒色が弱くより赤褐色になる。触角は体長よりもやや短い。

国内分布

石川県、富山県。岐阜県および福井県の白山山系にも生息するものと思われる。

県内分布

白山市（白山山系から医王山にかけての山地帯および亜高山帯）および金沢市。

生態

小石が堆積した地下浅層に生息する。成虫は、冬期を除き周年見られる。新成虫は9～11月の長期間にわたって見られる。

生息地の条件

山地帯から亜高山帯の小石の堆積した不安定な斜面という、特殊な環境に生息する。

生存の危機

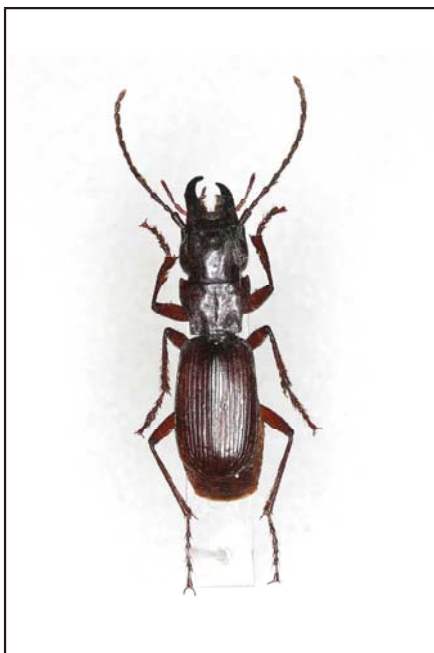
局地的に分布する種であるが、生息地が県立公園および国立公園内にあるため、現在のところ、種の維持には問題はない。しかし、生息環境が斜面の風化石の堆積層という不安定な場所なので、防災工事で生息地がコンクリート等で固められ、破壊される危険性がある。(A)

特記事項

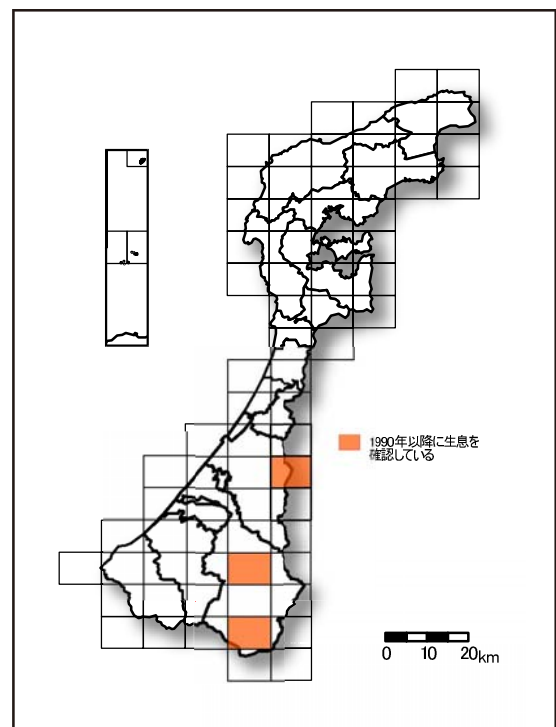
1996年に記載された種で、金沢市医王山と白山市別当出合の採集個体がタイプ標本となっている。

参考文献

Morita, S. & Hirasawa, H. 1996. Macrocephalic Pterostichines (Coleoptera: Carabidae) from Central Honshu, Japan. *Elytra*, 24 (1): 21-30.
高羽正治 1998. コウチュウ目オサムシ科. 石川県の昆虫: 103-120. 石川県自然保護課.



標本提供者: 井村正行



県内の分布

ヒメケシゲンゴロウ

Hyphydrus laevis Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的に生息地は局所的で個体数も少ない。県内では能登北部で確認されているにすぎない。

形態

体長4.3～5.0mm、体型は短卵形。背面は暗黄赤褐色で、光沢はやや強い。一般に暗色部が強く、かなり黒っぽく見える。触角、口枝、肢は黄赤褐色。同属のケシゲンゴロウ *H. japonicus* に比べ、かなり黒っぽく、点刻が粗い。幼虫はやや扁平な、いも虫状。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

能登北部に局所的に分布する。

生態

成虫は5～11月に確認されている。幼虫は比較的水深のある場所にも生息する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の池沼、放棄水田などの止水域。

生存の危機

池沼、湿地の開発による消失、ため池の管理放棄、水質汚染、放棄水田の植生遷移、外来魚が大きな脅威となっている。県内の生息地では、ため池2箇所におオクチバスが侵入したために、駆除が行われた。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化などの保全策が必要である。(A, B, C)

参考文献

森 正人・北山 昭 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.
川野敬介・中野浩史・林 成多・山内健生 2006. 出雲市平田地域のため池生物調査(2) 止水性水生昆虫類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, (9): 13-37.



標本提供者: 西原昇吾

分布図はありません。

県内の分布

テラニシセスジゲンゴロウ

Copelatus teranishii Kamiya

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

国内の分布は局所的、隔離的である。県内では、1箇所でしか採集されていない。

形態

体長4.8～5.5mm、体型は逆長卵形で扁平。背面は暗褐色～黒褐色で、後頭、前胸背両側、上翅の基部横帯および両側、口枝、肢は黄褐色。上翅には6条の縦溝、1条の亜縁溝があり、間室は細かい点刻を装い光沢がある。体下面は黄褐色～赤褐色で後基節はやや暗色。

国内分布

秋田県、山形県、福島県、石川県、福井県、愛知県、岐阜県、三重県、大阪府、兵庫県、広島県、福岡県、大分県、対馬。

県内分布

加賀市海岸付近で2006年8月にライトトラップによって3個体が採集されたのみである。発生場所は特定されていない。

生態

灯火に飛来すること以外は不明である。

生息地の条件

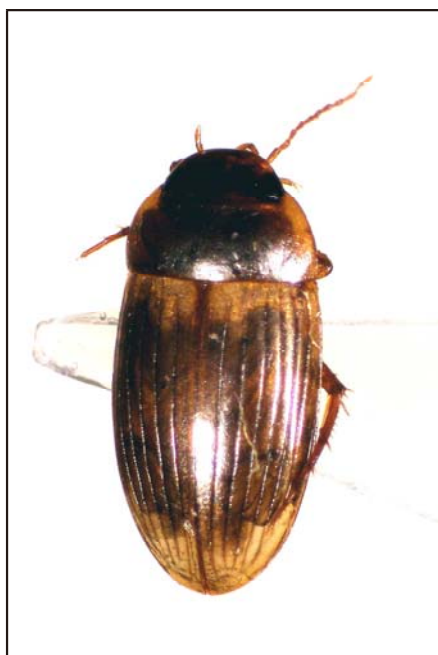
疎林に囲まれている日陰の小さな、水深の浅い水たまりや、水底に落葉が堆積している一時的な水たまり、河川敷の小溝などに生息するといわれている。秋田では、沼のヨシの腐植物の周辺で確認されている。

生存の危機

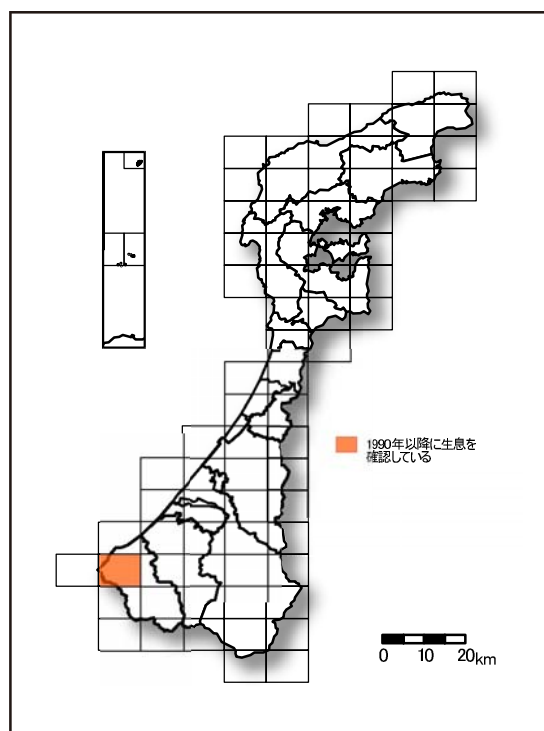
現在の生息地が局限されていること、発見地周辺の止水域は限られていることから、生息場所を明らかにすることが第一である。(A, B)

参考文献

大桃定洋 1989. テラニシセスジゲンゴロウを福島県で採集. 月刊むし, (226) : 5.
 櫻井俊一 1992. 鳥海山麓のセスジゲンゴロウ3種の記録. 月刊むし, (262) : 20-21.
 秋山美文・坂本 充 2000. 広島県の水生食肉甲虫類(コウチュウ目, オサムシ上科). 比和科学博物館研究報告, 39 (別冊) : 5-33.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

コミズスマシ

Gyrinus curtus Motschulsky

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

普通種とされるが、水辺環境の改変や外来種の侵入などにより、全国各地で生息地が減少している。県内の生息地は2箇所のみであり、1997年を最後に確認されていない。

形態

体長4.7～5.6mm。黒色で鋼様の光沢があり、肢は黄褐色である。体型は楕円形で長さは幅の約1.8倍。背面はよく膨隆し、体下面は平坦。上翅はやや隆起し、中央部で最も幅広く、11条の点刻を有する。オス交尾器中央片は先端に向かい細まり、末端は弧状を呈する。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

加賀市（加佐岬、片野鴨池）。

生態

成虫は水面を巡回し、水面に落ちた小昆虫を捕食するとされる。幼虫も肉食とされる。県内では3月、5月に確認されている。

生息地の条件

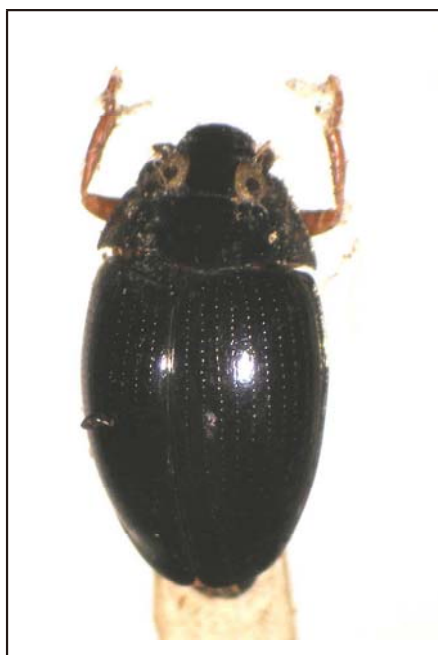
平野部～丘陵部の水生植物の豊富な池沼や流れの緩やかな小河川。

生存の危機

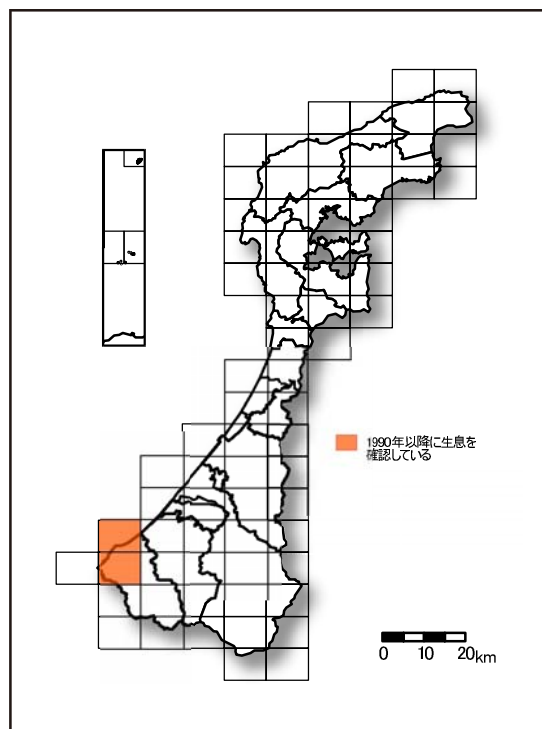
生息地は平野部の水辺であり、池沼の開発による消失、水質汚染（特に油など界面活性剤の流入）による環境破壊を受けやすい。水面上で同様に生活するアメンボ類に比べ、ミズスマシ類の減少傾向は著しい。県内の生息地周辺における分布調査を早急に行う必要がある。片野鴨池では、アメリカザリガニ、オオクチバスが侵入しているため、外来種の駆除および、侵入できない区域の設置などの保全策が必要である。（A、B）

参考文献

横山桐郎 1929. ミズスマシ *Gyrinus curtus* MOTSCHULSKY の卵と幼虫. 昆虫, 3 (2) : 83-84.
佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説 (1)-(3). 甲虫ニュース, (37) : 1-5, (38) : 1-2, (39) : 1-4.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (81-82), みずすまし科. 昆虫と自然, 22 (12) : 36-40, 22 (13) : 27-29.



標本提供者：入場登



県内の分布

ヒメミズスマシ

Gyrinus gestroi Régimbart

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー なし

選定理由

普通種とされるが、水辺環境の改変や外来種の侵入などにより、全国各地で生息地が減少している。県内では2箇所に生息するが、1998年の記録が最後である。

形態

体長4.6～5.2mm。体型は短楕円形で長さは幅の約1.9倍、背面はよく膨隆し、体下面は平坦。上翅の点刻列は11条で普通で、側方でも溝条にならない。オス交尾器中央片末端は広く丸まる。

国内分布

日本固有種。本州、四国、九州。

県内分布

加賀市片野鴨池、志賀町宿女。

生態

成虫は植物の間を巡回し水面に落ちた昆虫を捕食するが、開放水面にはあまり出てこないようである。幼虫も肉食とされる。灯火にも飛来する。県内では、4、5、10月に記録されている。

生息地の条件

水生植物の豊富な池沼や流れの緩やかな小河川。

生存の危機

池沼の開発による消失、コンクリートなどによる護岸化、水質汚染（特に油など界面活性剤の流入）、外来種の侵入が脅威となっている。水面上で同様に生活するアメンボ類に比べ、ミズスマシ類の減少傾向は著しい。県内の近年の調査ではまったく確認されていないため、生息地周辺における分布調査を早急に行う必要がある。片野鴨池では、アメリカザリガニ、オオクチバスが侵入しているため、それらの駆除および侵入できない区域を設けるなどの保全策が必要である。（A、B）

参考文献

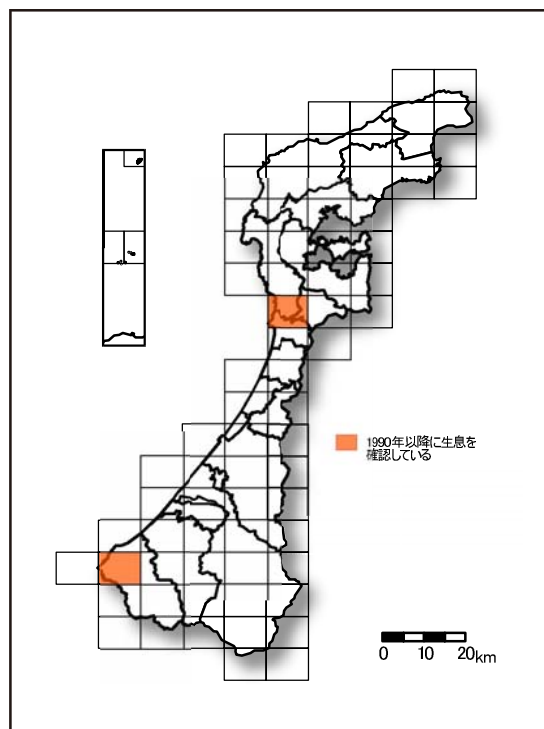
佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説 (1)～(3). 甲虫ニュース, (37) : 1～5, (38) : 1～2, (39) : 1～4.

中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (81～82), みずすまし科. 昆虫と自然, 22(12) : 36～40, 22(13) : 27～29.

北野 忠・石田和男 2000. 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23) : 9～14.



標本提供者: 西原昇吾



県内の分布

ヤマトホソガムシ

Hydrochus japonicus Sharp

コウチュウ目ホソガムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

かつては全国的に普通であったが、近年、個体数が少なくなったようである。県内でも、長期間にわたって確認されていない。

形態

体長2.6～3.1mm。体型は長細く、両側はほぼ平行で、体色は黒色。上翅は暗褐色となるが、緑～藍色の金属光沢を有する。付属物は黄褐色。前胸背には5～6個の凹陷があり、上翅は粗大点刻列を具える。第3、7、9間室が明瞭に隆起し、第5間室が隆条となる。体下面は光沢を欠き絨毛状となる。

国内分布

本州、四国、九州、琉球列島。

県内分布

金沢市の1944年の記録、金沢市栗崎における1959年の記録のみである。栗崎では海岸の藻の下から生体が得られたが、その後10年ほどの継続調査では確認されなかった。

生態

成虫は灯火に飛来するとされる。県内では6月に確認されている。

生息地の条件

一般的には、平野部の水生植物の豊富な自然の池沼、湿地などの止水域である。

生存の危機

池沼、湿地の埋め立てなどの様々な開発による消失、水質汚染。採集地周辺の再調査および平野部の自然環境の豊かな池沼における生息調査を行うことが先決である。(A)

参考文献

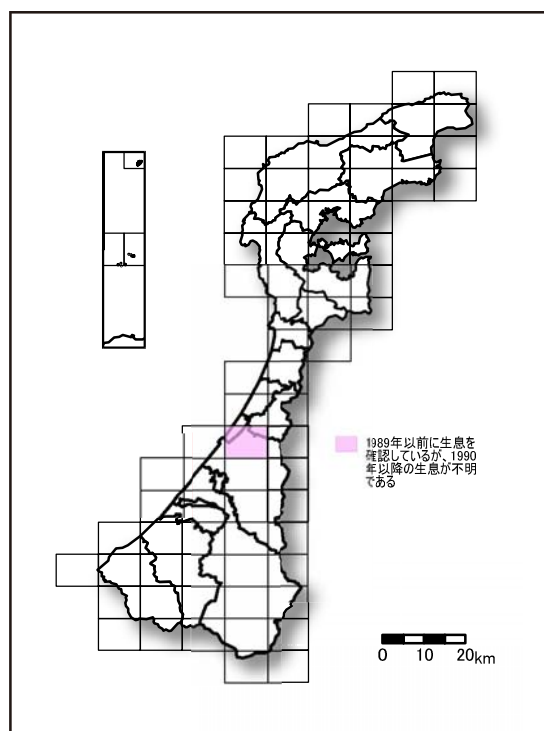
佐藤正孝 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40) : 1-3.

佐藤正孝・吉富博之 2005. 日本産水棲昆虫の分類学的覚え書きIV. 甲虫ニュース, (151) : 1-6.

林 成多 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 77-113.



標本提供者: 高羽正治



県内の分布

ネブトクワガタ

Aegus laevicollis subnitidus Waterhouse

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

暖地性の種で、開発されやすい平地から低山地に生息し、産地が局所的である。また、生息地における個体数がきわめて少ない。

形態

体長は大顎を含め14～28mmの中小型のクワガタムシ。体色は黒色で上翅には9本の縦条がある。オスの大顎は細く、内歯が2本あり、基部近くの第1歯は大きい。第2歯は中央付近にあるが、小型の個体では消失する。メスの大顎は小さい。

国内分布

本州、四国、九州、対馬、種子島、屋久島。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、金沢市、津幡町。

生態

平地から低山地に生息し、成虫は7月から8月に現れる。ブナ科やマツ類の樹液に集まり、樹木の低い位置から出ている樹液を好むようである。成虫は灯火にも飛来する。幼虫は、マツ類の朽ち木が赤枯れ菌に侵され、シロアリに分解された泥状化した腐朽部を食する。

生息地の条件

里山で、自然環境の良好な雑木林が保たれていることが重要である。

生存の危機

生息域が平地ないし低山地であるため、伐採や開発による生息環境の消滅が危惧される。小松市の生息地の一つは、大規模な伐採によって消滅した。(A)

特記事項

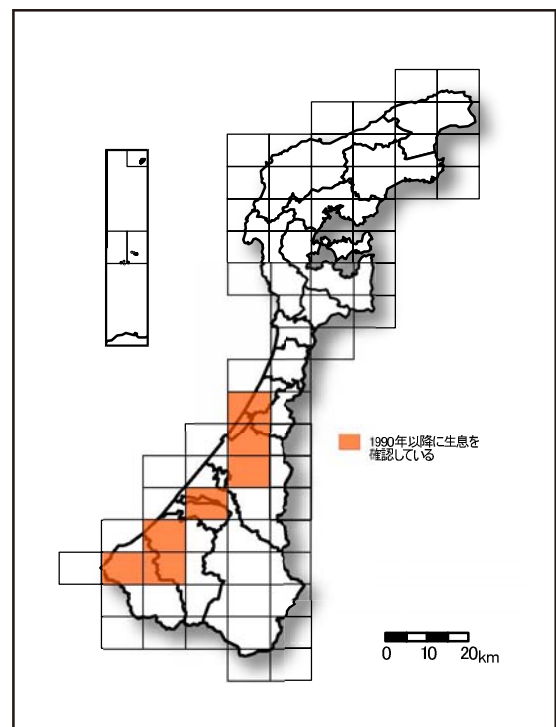
本種は、南方の離島に多くの亜種があり10亜種に分かれる。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目クワガタムシ科. 石川県の昆虫 : 146. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ヒメオオクワガタ

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

Nipponodorucus montivagus montivagus (Lewis)

選定理由

生息域が1,000m以上のブナ帯に限られる。また、近年の個体数の減少は著しく、採集圧が要因と思われる。

形態

体長は大顎を含め30～55mmの大型のクワガタムシ。体色は黒色で弱い光沢を持つ。オスの大顎は太く、大きな内歯が中央前に内斜め前方を向いている。メスの大顎は小さい。

国内分布

北海道、本州、四国、伊豆大島。

県内分布

白山市（旧白峰村、旧尾口村）の白山山系山地帯。

生態

標高1,000m以上のブナ帯に生息し、成虫は6月下旬から9月に現れ、ヤナギの樹液に集まる。また、灯火にも飛来する。幼虫は太いブナの朽木を食する。成虫は晩夏に羽化した後、そのまま蛹室にとどまり越冬する。幼虫期は2年以上かかる。

生息地の条件

ブナの原生林が残されていること。

生存の危機

生息地は白山国立公園内のため、自然環境は保たれている。しかし、最近のクワガタムシブームで、業者によると思われる採集圧が顕著であり、有名な産地では個体数が激減している。（A）

特記事項

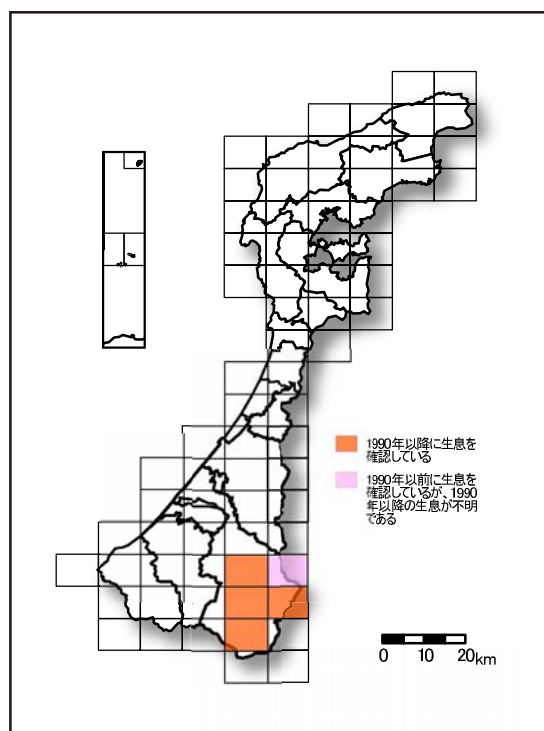
九州には別亜種のキュウシュウヒメオオクワガタが分布する。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目クワガタムシ科. 石川県の昆虫：146. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

アカマダラハナムグリ

Anthracophora rusicola Burmeister

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

情報不足

選定理由

本種は猛禽類、特にハチクマの巣内を発生場所とすることが確認されているが、ハチクマ自体が石川県では準絶滅危惧種に指定されていて減少傾向にあり、その巣に依存している本種もハチクマと同様に減少が懸念される。

形態

体長約20mm。和名の由来となる赤褐色と黒色のまだら模様を持つことが大きな特徴である。

国内分布

北海道南部、本州、四国、九州、屋久島に分布する。

県内分布

県内では、小松市と金沢市からの記録がある。1990年以降記録がなかったが、富沢（2007）により県内から17年ぶりに記録された。

生態

本種はこれまで、樹液に訪れた個体がまれに採集される程度であった。ところが最近になり、本種はクマタカやハチクマなどの猛禽類の巣、特にハチクマの営巣中の巣を好んで発生場所としていることが明らかになった。春に本種のメスが日本に渡来してきたばかりのハチクマの巣に産卵、孵化した幼虫は巣内のペリットなどをエサにして成長し、夏頃には新成虫となって出現する。成虫越冬をするようであるが越冬場所などはわかっていない。

生息地の条件

ハチクマやクマタカが営巣、繁殖のできる、健全な自然の残された里山環境であること。

生存の危機

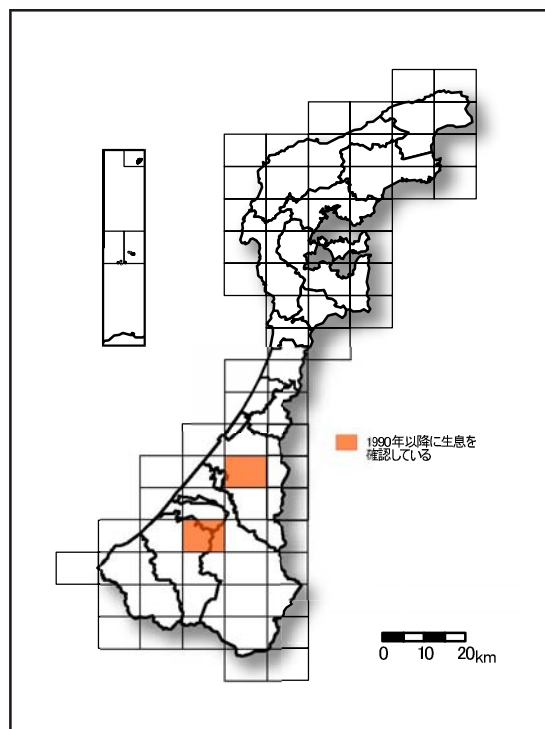
宅地開発やさまざまな公共事業による里山環境の破壊や、薪炭林として利用していた里山林の荒廃は、ハチクマなどの猛禽類が生息できなくなるばかりではなく、その巣を発生場所として依存している本種の生存さえをも危うくする。（A）

参考文献

楨原 寛・阿部 学・新里達也・早川浩之・飯島一浩 2004. ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース, (148) : 21-23.
富沢 章 2007. 小松市におけるアカマダラハナムグリの記録. とっくりばち, (75) : 61. 石川むしの会.



標本提供者：牛島釈広



県内の分布

クロマダラタマムシ

Nipponobuprestis querceti (E.Saunders)

コウチュウ目タマムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的にも稀な種である。本県は日本海側の北限に近く、産地が局地的で、個体数もきわめて少ない。

形態

体長は17～28mmで、タマムシとしては大型種。アオマダラタマムシに似ているが、より丸い体形であり、上翅の縦隆脈がやや弱い。体色は黒緑色で、黄、橙、紫などの金属光沢の斑模様を有している。メスの腹端は丸く、オスは三角形にえぐられる。

国内分布

本州（関東以西）、四国、九州。

県内分布

加賀市、かほく市。

生態

成虫は6～8月頃に現れ、エノキの葉を後食し、また、その衰弱部に集まる。幼虫はエノキの枯死部や衰弱部を食し、成虫になるまでは2年以上を要する。晩夏に羽化した後、そのまま蛹室で越冬する。

生息地の条件

平地や丘陵地において、食樹となる大木のエノキの林が存在することが重要である。

生存の危機

知られている生息地は2箇所のみで、しかもごく限られた場所のため、個体群を維持することは困難な状況にある。また、伐採や開発等による生息地の消滅が危惧される。平野部から里山に残存するエノキの大木の保全と本種の生息調査が必要である。（A）

特記事項

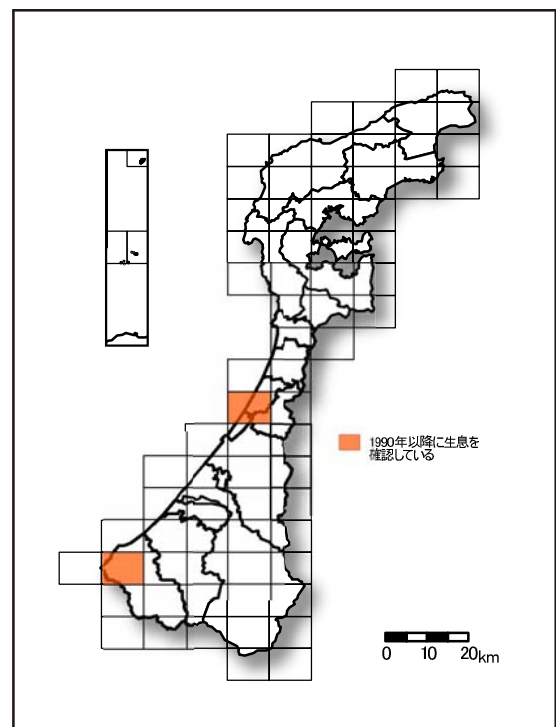
本種の幼虫はエノキの枯死部の衰弱部分を好むようで、完全な枯死部を食するヤマトタマムシとの棲み分けも観察されている。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目タマムシ科. 石川県の昆虫：155-157. 石川県自然保護課.
浅地哲也 2003. 大型タマムシ3種の記録. 翔, (172)：1.



写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

カラマツカミキリ

Tetropium castaneum (Linnaeus)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

県内の記録は1例のみであり、国内分布の西限である。

形態

体長は8～13mm。トドマツカミキリに良く似るが、触角と脚は細く、上翅基部に白毛を密生する。体色は黒色。触角の長さは上翅中央に達する。

国内分布

本州（中部地方）。

県内分布

白山市（旧白峰村）。

生態

成虫は7～8月頃に出現し、ブナ帯上部のカラマツの衰弱木に集まる。幼虫はその衰弱部を食する。本県の採集個体は、採集場所の標高が低いいためか、通常の発生時期より早い6月12日に記録された。採集個体は、新しいカラマツの伐採木上にいたものである。

生息地の条件

カラマツの自然林があることが重要である。

生存の危機

生態や分布が不明な点が多い。本県ではカラマツ自然林の分布が確認されていないうえ、確認個体が1例のみなので、今後はカラマツ林の探索と本種の生息調査が急務である。（A）

特記事項

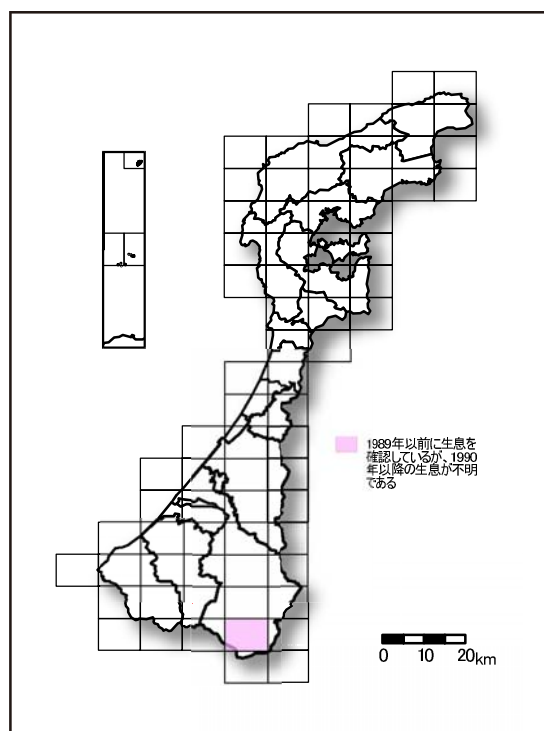
本種はトドマツカミキリと良く似ているので同定には注意を要する。

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



標本提供者：入場登



県内の分布

ヒゲブトハナカミキリ

Pachypidonia bodemeyeri (Pic)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

得られた個体数が少ないこと、および幼虫の発生場所が自然環境の良い森林に存在する数少ない大木の樹洞であるという特殊性があるため、生息地が限られる。

形態

体長は13~16mm。中型のハナカミキリで、体形は太く短い。体色は頭部および前胸背が赤褐色、上翅は黒く、赤味を帯びる個体もある。触角は太く、その長さはオスで上翅の2/3に近く程度である。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

白山市。

生態

ブナ帯に生息する。本種は、繁殖期のごく短い時期を除き、大木の樹洞内で過ごす。成虫は7月中旬~8月中旬にトチやブナの樹洞内で見られ、幼虫は樹洞内部の腐朽部を食する。他県ではミズメやドロノキも食樹として記録されている。

生息地の条件

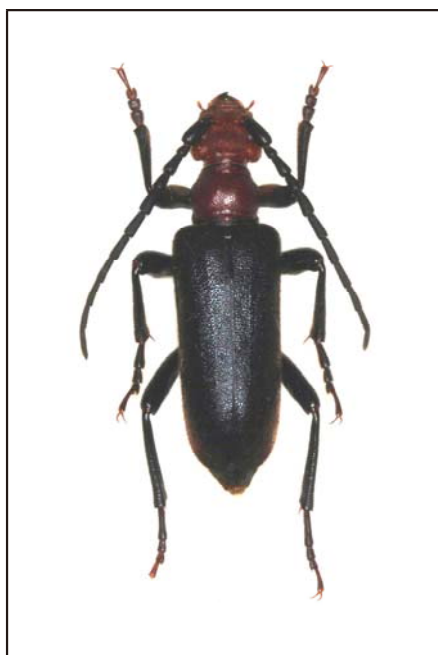
ブナ原生林内にブナやトチなどの古木の樹洞があることが生息条件であり、人手の入らない大木の残る豊かな森林が重要といえる。

生存の危機

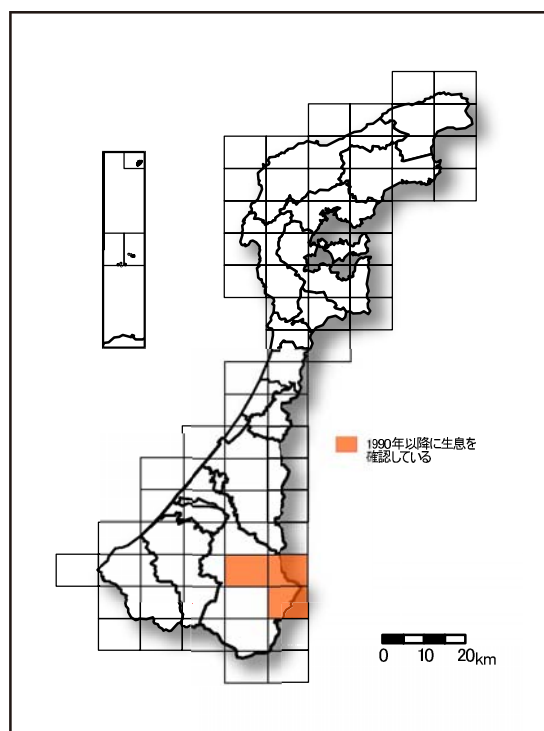
全国的にも、樹洞を有する大木の残る豊かな森林環境が減少しており、ブナ原生林の保全が重要である。先人の知恵で、谷間の村を雪崩から防ぐため、斜面の樹木を切らずに残された原生林が、本種の生息場所になっている地域がある。このことは、人と自然との共生の一例であり、樹木を切り、崖をコンクリートで固め、鉄柵で雪崩を防ごうとばかり考えないでほしいものである。(A)

参考文献

江崎功二郎・八神徳彦 2005. 石川県内で採集例が少ないカミキリムシおよびコメツキムシの記録。とっくりばち, (73): 20.



標本提供者: 井村正行



県内の分布

ベーツヤサカミキリ

Leptoxenus ibidliiformis Bates

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

南方系の種で、本県が国内分布の北限である。生息地は加賀南部に限られ、開発等により生息地が狭小化している。

形態

体長は11～15mm。体は細く、脚が長い。体色は淡黄褐色～赤褐色で、上翅に濃淡の斜帯がある。触角は細く、長さはオスで体長の1.5倍弱である。

国内分布

本州（中部以西）、四国、九州、対馬。

県内分布

加賀市（福井県境～橋立地区の沿岸部）。

生態

本県では、沿岸部のタブノキの大木が残された照葉樹林に生息する。成虫は4月下旬～6月頃に出現し、タブノキの新しい枯れ枝やスダジイ、クリの花に飛来する。幼虫はタブノキの新しい枯れ枝を食する。秋に羽化し、そのまま枝内の蛹室にとどまり、越冬する。

生息地の条件

タブノキの大木の残る林があることが重要である。

生存の危機

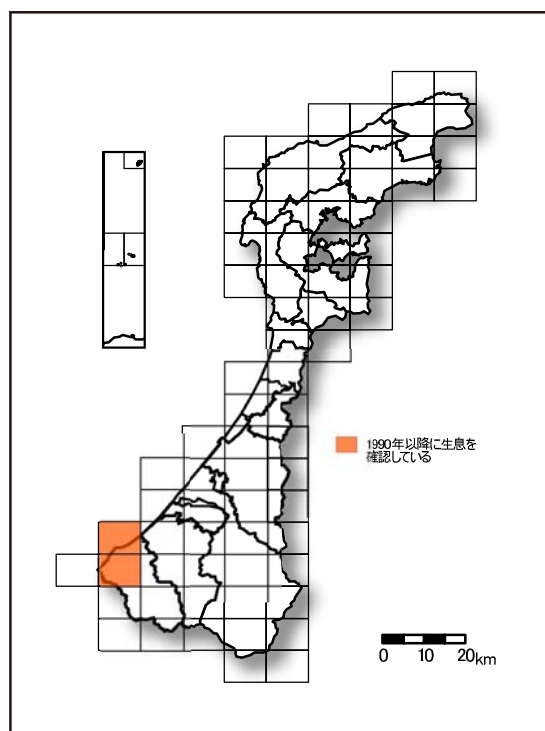
加賀市沿岸部のタブノキ、スダジイなどの大木が残された照葉樹林は、伐採や土地開発等により確実に減少しているため、これらの照葉樹の保全が重要である。（A）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ヨツボシカミキリ

Stenygrium quadrinotatum Bates

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内における最近の記録がきわめて少なくなった。この傾向は、全国的なようである。

形態

体長は8～14mm。体色は暗赤色で、上翅にはやや大きめの黄白色の円紋を2対有する。脚の各腿節は肥大する。オスの触角の長さは体長を越える。

国内分布

北海道（南部）、本州、飛鳥、佐渡島、隠岐島、淡路島、四国、九州、対馬、壱岐島、屋久島、伊豆新島、奄美大島、徳之島。

県内分布

小松市原沢林道、金沢市（寺町、諸江、若松、菱池、医王山）、穴水町大町。

生態

平地～低山帯で見られ、成虫は6～8月頃に出現し、クリの花や灯火に飛来する。幼虫はブナ科の枯れ枝を食するという。

生息地の条件

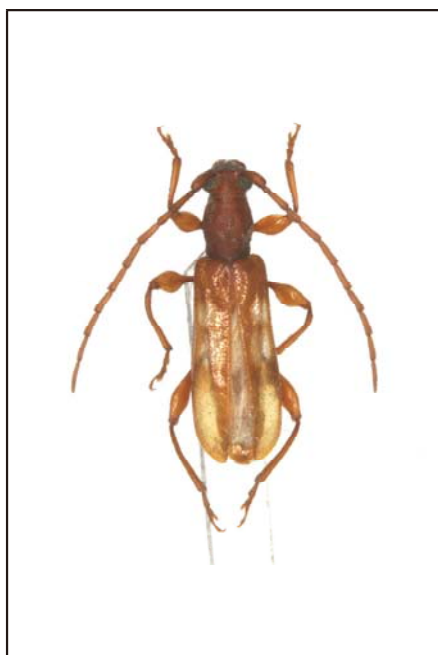
平地～低山帯において、ブナ科を含む雑木林が存在すること。

生存の危機

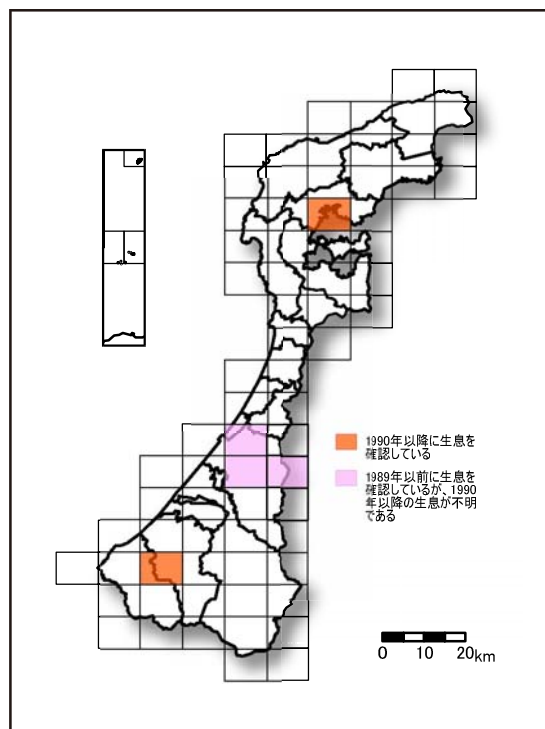
開発等の人為的影響を受けやすい所が生息地であるため、減少しやすい。しかし、全国的に普通種であった本種が激減したのは、他に要因があるのかもしれない。（A）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課。



標本提供者：入場登



県内の分布

クロツヤヒゲナガコバネカミキリ コウチュウ目カミキリムシ科

Glaphyra hattorii (Ohbayashi)

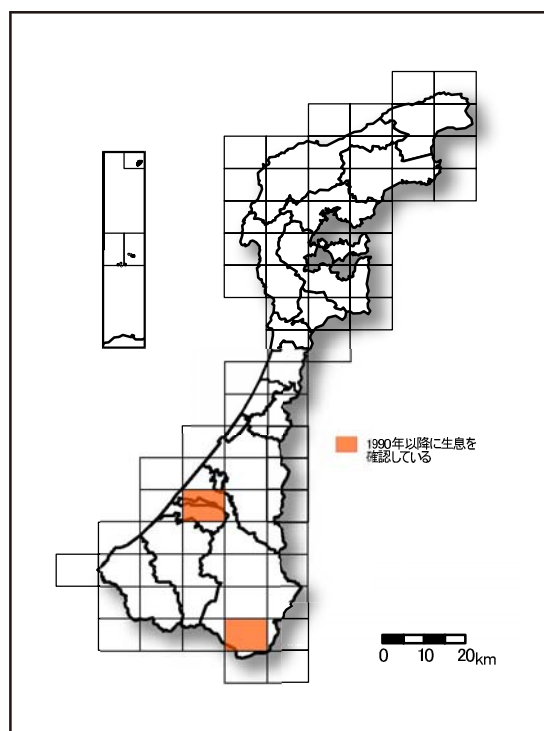
石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー なし

- 選定理由** 本県での生息地は、手取川流域に限られ、しかも点在しているにすぎない。また、本県が国内分布の西限にあたると思われる。
- 形態** 体長は5.5～7mmで、カミキリムシでは小型である。体色は黒色で艶があり、上翅は短く退化し、体形は細長い。オスの触角は体長を少し超える程度である。
- 国内分布** 本州、佐渡島。
- 県内分布** 白山市、能美市、川北町（以上、手取川下流部）、白山市（旧白峰村：手取川上流部）。手取川上流部での個体数は少ない。
- 生態** 年1化で、幼虫は手取川河川敷に生えているアキグミの枯れ枝を食し、枯れ枝の中で蛹越冬する。標高の低い場所では4月～5月上旬に、標高の高い場所では5月中旬～6月上旬に出現する。手取川河川域から離れた地域での記録は確認されていない。
- 生息地の条件** 大きな河川の河川敷で、アキグミの群生地があることが重要である。
- 生存の危機** アキグミの生育する不安定な河川敷に適応した本種であるが、近年、下流部の河川敷の開発や公園化の進行、河川敷内の大規模な土木工事により、生息域であるアキグミ群落が縮小し、生息環境が著しく悪化している。（A）
- 参考文献** 井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

オニホソコバナカミキリ

Necydalis gigantea gigantea Kano

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

県内における、採集例は2例と極めて少ない。また、全国的にみても産地が少なく、近年、特に個体数の減少が著しい。

形態

体長は30~40mm。上翅は退化し短く、体形は細長く、体色は黒く、触角と腹部の基部、脚（後脚の一部を除く）は黄褐色である。前胸背の縁に金色の微毛を有し、半透明の下翅は露出する。触角の長さは、オスで腹部中央付近までで短めである。止まっている時や飛んでいる姿は、大型のヒメバチと似ていて、それに擬態していると思われる。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

白山市。

生態

成虫は7~8月に現れ、訪花することも知られている。一般に、幼虫はクワの古木の枯死部を食べることが知られている。本県ではトチノキの樹洞で産卵している個体と、樹洞から飛びたった個体の2頭が採集されている。

生息地の条件

本種はクワ、ケヤキ、トチなどの大きな古木の枯死部を利用することから、大木の残る豊かな森林の存在が重要である。

生存の危機

今後、伐採や林道建設により、樹洞のある大木が残る森林が破壊される可能性が高く、生息地の森林保全が必要である。

特記事項

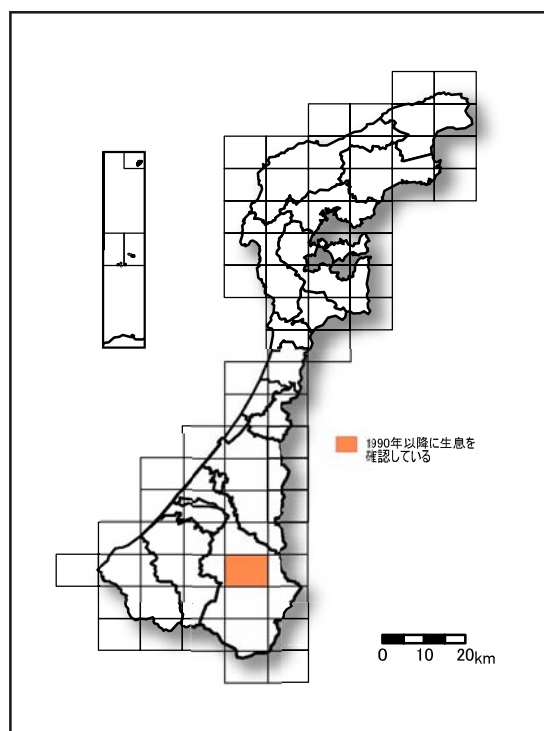
屋久島には、本種の別亜種が分布する。（A）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課。
井村正行 2001. 石川県におけるオニホソコバナカミキリの採集報告. とっくりばち, (68) : 26.



標本提供者：井村正行



県内の分布

トホシカミキリ

Saperda alberti Plavistchikov

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー なし

選定理由 本州では稀な種で、本県が西限になると思われる。本県では1例の記録があるのみである。

形態 体長は13～20mm。体形はやや細く平行で、前胸背板に4個、上翅に5対の黒紋を持つ。上翅側縁は黒く、体全体が黄褐色の微毛におおわれる。触角は、オスで体長を少し超える。

国内分布 北海道、本州、四国、九州。

県内分布 白山市白山。

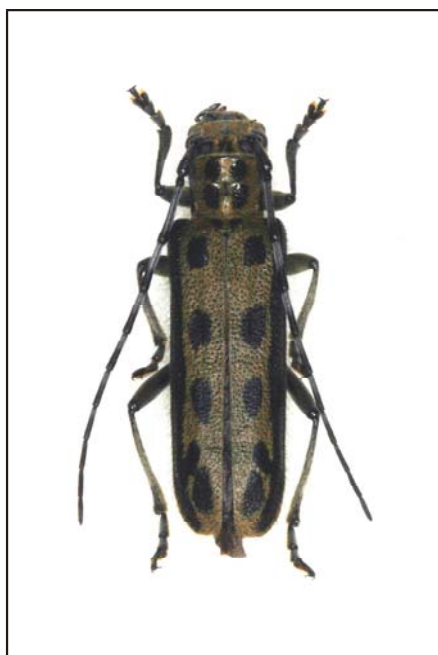
生態 成虫は、6～7月にブナ帯のヤナギ類の新しい伐採木や倒木に集まる。幼虫はその樹皮下部分を食する。

生息地の条件 幼虫は比較的太い材を食するため、ブナ帯でヤナギ類の大木の林があることが重要である。

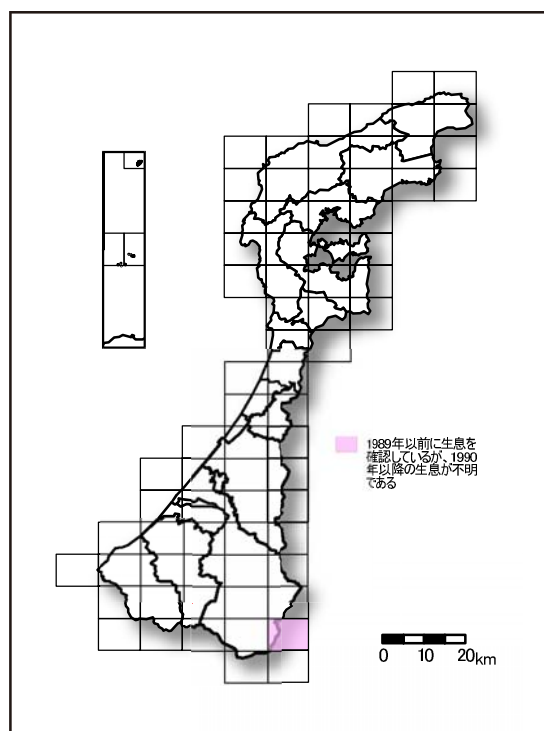
生存の危機 生息地が白山国立公園内にあることから、環境破壊による危険はないと思われる。(A)

特記事項 本県唯一の記録は1969年7月22日である。今後、白山山系における調査が必要である。

参考文献 井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課。



標本提供者：野中勝



県内の分布

オオルリハムシ

Chrysolina virgata (Motschulsky)

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

不安定な水辺環境に生息し、本県の生息地は能登地域に限られ、産地は局地的である。

形態

体長は9～14mm。ハムシ科では大型で、楕円形のずんぐりした体形である。体色は赤褐色の金属光沢がないし、橙色の弱い金属光沢で、外縁は帯状に緑の金属光沢を有する。

国内分布

本州。

県内分布

七尾市（旧中島町）以北の能登地域。

生態

成虫は5月から10月まで見られ、ため池の岸辺や廃田などの湿地環境に生育するシロネ類の葉を食する。幼虫もシロネ類を食する。

生息地の条件

シロネ類の群落が生育する湿地環境。

生存の危機

生息環境が湿地や池の岸辺、廃田と不安定なため、開発等の環境改変で容易に消滅してしまう。現在の能登空港周辺にあった生息地は、空港建設に伴う周辺の埋め立てや工事、ほ場整備のためにすべて消滅した。（A、B）

特記事項

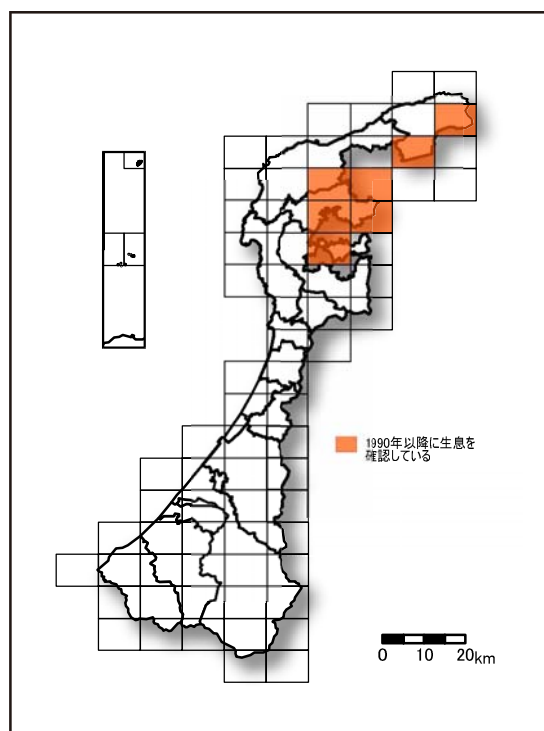
シロネ類は県内全域で見られるが、奥能登地域以外の生息地は見つかっていない。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目ハムシ科. 石川県の昆虫：217-232. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

タカチホヒラタマバチ

Ibalia jakowlewi Yasumatsu

ハチ目ヒラタマバチ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

現在のところ、生息地が局限されている。

形態

腹部が縦に扁平であり、一見して他のタマバチ類と区別できる。

国内分布

石川県、京都府、福岡県において確認記録がある。

県内分布

輪島市猿山岬が唯一の生息地である。

生態

エノキの枯れ枝から採集された。ヒラアシキバチに寄生するものと思われるが、詳しい生態については不明である。

生息地の条件

猿山岬でしか確認されておらず、不明である。

生存の危機

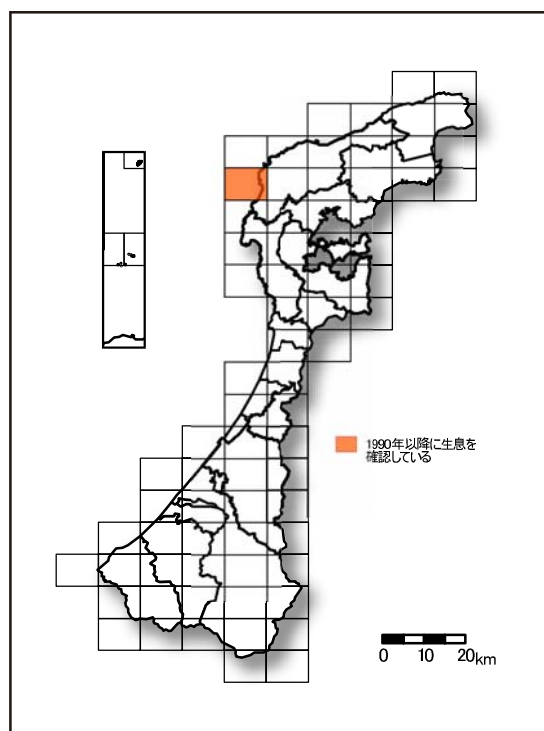
現在のところ、生存を危うくするような条件はないと思われる。(A)

参考文献

Yasumatsu, K. 1937. Ibalinae of Nippon (Hym., Cynipidae). Ins. Mats., 12:13-18, p 1. 1.
富樫一 1999. タカチホヒラタマバチ及びモンキアシトコバチの新産地. 福井虫報, (25):23.



標本提供者: 富樫一



県内の分布

ハイイロクモバチ

Pompilus cinereus (Fabricius)

ハチ目クモバチ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

海岸砂丘地に生息するが、生息地は限定される。護岸工事や海岸後背地の開発により、生息環境が悪化している。

形態

体長はオス4～7.5mm、メス5～14mmである。体は黒色をしており、体には灰白色の微毛が密生する。アオスジクモバチに似るが、各肢脛節の距が乳白色であること、メスの前肢付節には櫛歯状の刺列が発達していることなどから区別できる。別名、ナミコナフキベッコウ。

国内分布

本州、沖縄、八重山諸島。

県内分布

加賀市塩屋海岸、小松市安宅、能美市小舞子、白山市倉部、羽咋市一宮海岸、志賀町大島海岸で記録があるが、一部の海浜では、護岸工事により近年、見られなくなった。

生態

比較的自然に恵まれた海浜植物帯に生息している。徘徊性のクモを狩り、砂中に穴を掘り産卵する。営巣は海浜植物群落内およびその周辺と思われる。

生息地の条件

本種のエサとなるクモやクモのエサとなる小昆虫類が生息できる海浜植物群落の多い砂丘地の存在が重要である。

生存の危機

海岸浸食により砂丘地が狭くなったり、護岸工事により海浜植物群落周辺の自然環境が消滅すると本種は生存できなくなる。現に、小松市や能美市、羽咋市においては、護岸工事により海浜植物帯が破壊され、本種が確認できなくなった所がある。護岸工事の際には、海浜植物帯を破壊しないようにする配慮が必要である。(A)

参考文献

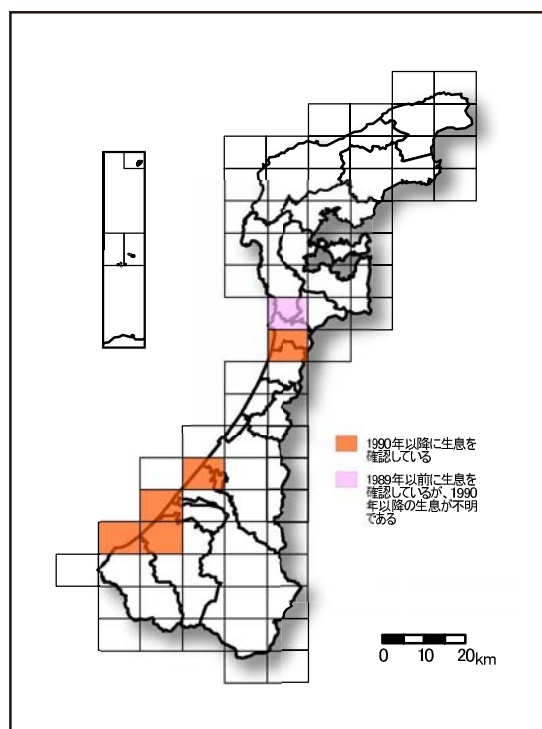
富樫一 1994. 石川県産ベッコウバチ類について 福井虫報, (15) : 73-76.

富樫一 1997. 石川県の海浜昆虫相(第1報) 福井虫報, (20) : 35-40.

平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 : 570. 北隆館. 東京.



写真提供者：富沢章



県内の分布

アサマシジミ

Lycaeides subsolanus yarigadakeanus (Matsumura)

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

分布は局地的で生息地は局限され、全国的に減少している。

形態

開張30mm程度の小型種。オスの翅表は灰青色、裏面は灰白色で前後翅外縁には橙色帯がある。メスの翅表は黒褐色で前後翅外縁に橙色斑があり、裏面の地色はオスより茶色味が強い。

国内分布

北海道と本州の関東、中部地方の山地のみに分布し、長野県には生息地が多い。石川県は分布の西限になっている。

県内分布

尾添川水系の、蛇谷、中の川、丸石谷に生息地が多く、白山スーパー林道三方岩岳駐車場から北方へ伸びる稜線上には、見越山に至るまで点々と記録がある。

生態

ナンテンハギやイワオウギを食草とし、河原や畑跡、岩棚、ガレ場などに生息している。年1回の発生で、6月中頃から飛びはじめ、高地や残雪の多い溪谷の河原では、8月中頃でも見られる。発生は残雪の影響を大きく受け、同一産地であっても毎年同じ時期に発生するとは限らない。

生息地の条件

主な生息地は、ナンテンハギやイワオウギが生える河川に沿った河原や岩棚、ガレ場で、時にイワオウギが生える尾根部のガレ場でも見られる。

生存の危機

溪谷域の河原は狭く小さいが、道路や公園、駐車場などに真っ先に開発される場所である。残された河原も治山工事によって安定した結果、遷移が進み食草が見られなくなった地域が増えている。人間活動がおよばない奥山においては、生息環境は保たれている。

特記事項

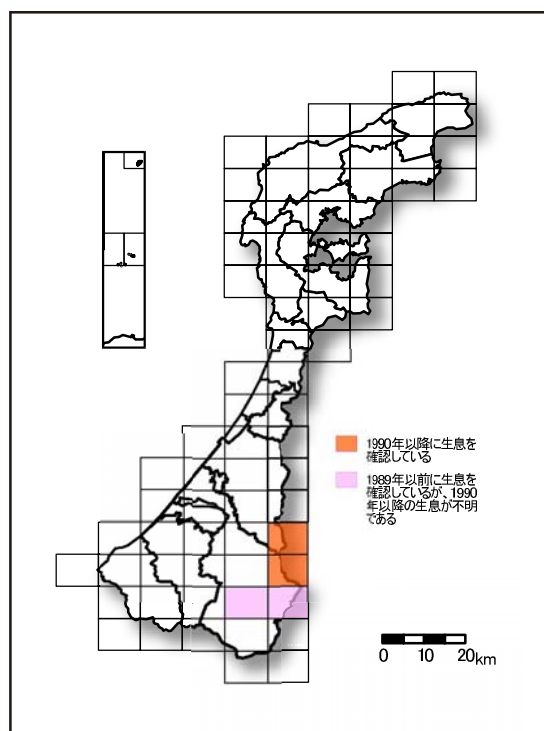
いずれの生息地も隔離され個体群も小さいので、ヤリガタケシジミ、トガクシジミ、シロウマシジミなど、それぞれの生息地を冠した名称が存在するほど地理的変異に富んでいる。(A)

参考文献

福田晴夫ほか 1984. アサマシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ): 323-327. 保育社. 大阪.
松井正人 1998. 蝶類. 石川県の昆虫: 342-365. 石川県自然保護課.



写真提供者: 松井正人



県内の分布

ゴマシジミ

Maculinea teleius hakusanensis Fujioka

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

露岩地に生えるカライトソウを食草とし、幼虫期にアリと共生するため、生息環境は限定され生息地は局限される。

形態

開張30～40mmの小型種。オスの翅表は黒褐色に薄く藤色を帯び、裏面は淡い褐色に黒色斑が散らばる。メスはオスに似るが藤色を欠く。

国内分布

北海道、本州、九州に分布し、本州では、青森県と岩手県北部、関東・中部地方、中国地方の3地域に分布する。

県内分布

白山周辺の大長山・赤兎山周辺、砂御前山周辺、白山北方稜線の妙法山から奈良岳・見越山周辺、丸石谷など、概ね標高1,000m以上の露岩地に生息する。現在のところ山道沿いや沢沿いしか調査されておらず、分布の実態は良くわかっていない。

生態

年1回7月下旬から8月中旬に発生する。若齢幼虫は、カライトソウの花穂を食べて育ち、後にクシケアリ類によって巢中に運ばれる。アリは幼虫の出す液をなめ、幼虫はアリの幼虫を食べて成長する。蛹化、羽化ともにアリの巢中で行われ、翅が伸びきらないうちに巢からはい出し、翅を伸ばす。

生息地の条件

標高は概ね1,000m以上で、カライトソウが生える露岩地を生息場所とするが、幼虫期にアリと共生するため、特殊な生息環境を必要とする。

生存の危機

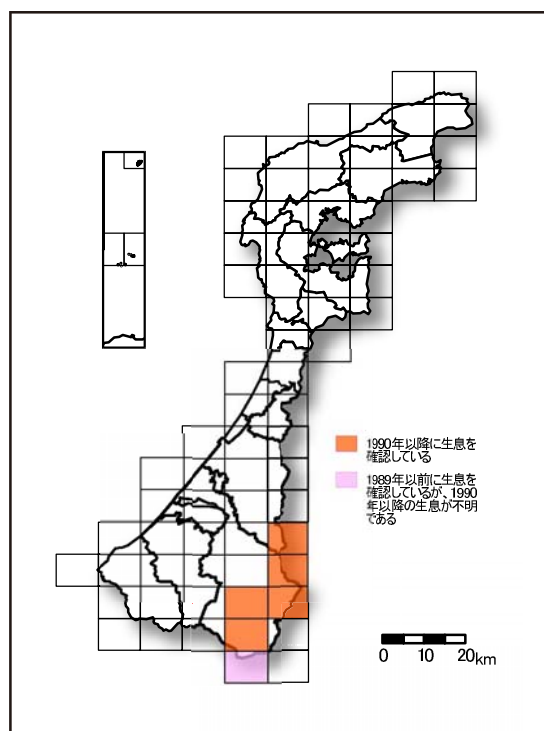
生息地は、標高1,000m以上の露岩地であり、人間活動があまり活発に行われていない地域である。また、判明している生息地も山道沿いや沢沿いなどわずかであり、調査が進めば新たな生息地が発見される可能性は高い。生息地は小さくとも広い範囲に散らばっており、大きな破壊が進むおそれはないと思われるが、狭い生息地は山岳道路の開設などで、簡単に消滅してしまう。(A)

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ゴマシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ): 262-266. 保育社. 大阪.



写真提供者: 松井正人



県内の分布

ヒメシジミ

Plebejus argus micrargus (Butler)

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

全国的に減少し、県内で観察される場所は生息基盤が不安定なうえ範囲が狭い。

形態

開張30mm程度の小型種。オスの翅表は青色で後翅外縁には黒斑が並ぶ。メスの翅表は黒褐色で後翅外縁に橙色の斑紋があり、この斑紋は前翅外縁に出ることもある。オスの裏面は灰白色、メスの裏面は淡い褐色で、ともに前後翅外縁に橙色の帯がある。

国内分布

北海道、本州、九州に分布し、関東地方北部山地から中部地方にかけては分布が広く、北アルプスから上信越高原国立公園一帯にかけては生息密度が高い。

県内分布

白山周辺の尾添川流域と柳谷流域の溪流に沿った河原から稀に記録されているが、同じ場所で連年にわたって記録されたことはない。山岳渓流域を生息地とするため、調査は不十分で、分布の実態は良くわかっていない。

生態

年1回の発生で、6月下旬から7月下旬かけて、日当たりの良い溪流に沿った河原で観察されている。飛翔は緩やかで、草むらの低いところを飛び交い、オスは好んで湿地で吸水する。幼虫の食性は広くキク科、マメ科、バラ科、ヤナギ科など数十種の植物が全国で知られているが、本県では、マメ科のハギの仲間1種が知られているだけである。

生息地の条件

主な食草はアザミ類、ヨモギ類、イタドリ類、イワオウギなどであり、これらが生育する河原が残されていることが重要である。

生存の危機

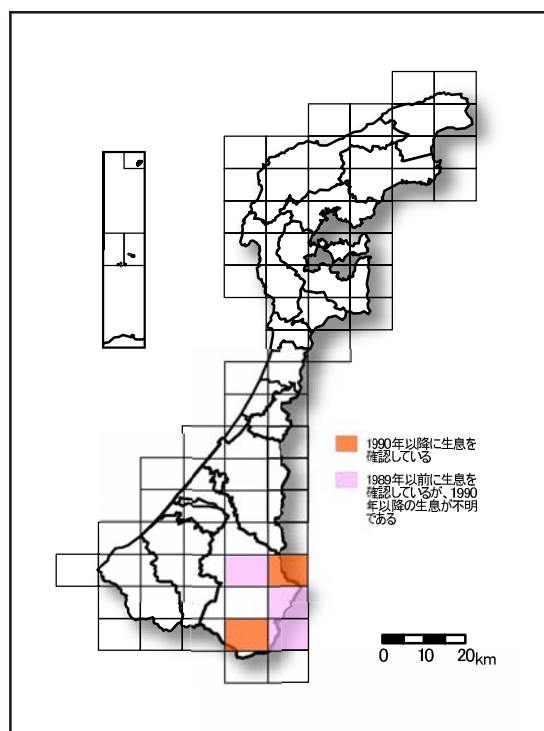
溪流に沿った河原は狭く小さいが、道路や公園、駐車場などに真っ先に開発される場所である。また、河原は不安定で小規模な出水で消失したり、逆に遷移が進んでススキ原になってしまうこともある。
(A)

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ヒメシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ): 320-323. 保育社. 大阪.
松井正人 1998. 蝶類. 石川県の昆虫: 342-365. 石川県自然保護課.



写真提供者: 松井正人



県内の分布

ハマゴウノメイガ

Herpetogramma albipennis Inoue

チョウ目ツトガ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

土木工事等によって海浜植物帯が破壊され、本種の食草であるハマゴウが消滅し、生息地が激減している。特に、小松市において生息地の減少が著しい。

形態

開張18mm前後の小型のガである。翅の色は白色で、前後翅ともに数本の褐色の横線が走っている。

国内分布

これまでに石川県、福井県、和歌山県、伊豆大島、佐賀県、熊本県から得られている。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、白山市、金沢市の海岸部に生息しているが、内灘町以北には生息していない。

生態

成虫は7月下旬から8月に出現し、ハマゴウ群落から離れることはない。幼虫はハマゴウの雄しべ、雌しべ、花弁を食べ、7月中旬から9月上旬まで見られる。老熟幼虫は、地下部のハマゴウの匍匐茎に付着させたマユの中で越冬する。

生息地の条件

砂浜海岸において、食草であるハマゴウ群落がある程度まとまって存在していることが重要である。護岸工事がされても、まとまったハマゴウ群落が帯状に残っていれば、本種の生息は可能である。

生存の危機

砂浜海岸は護岸工事や土地造成の影響を受け、ハマゴウ群落のある海浜植物帯が消滅あるいは狭小化している所が多く、本種は確実に減少している。特に小松市において減少が著しく、安宅から安宅新の生息地は、過去数年の護岸工事ではほぼ消滅した。海浜植物を保全しつつ土木工事を実施することが重要である。また、砂浜への車の乗り入れも本種の生息を脅かしている。(A)

特記事項

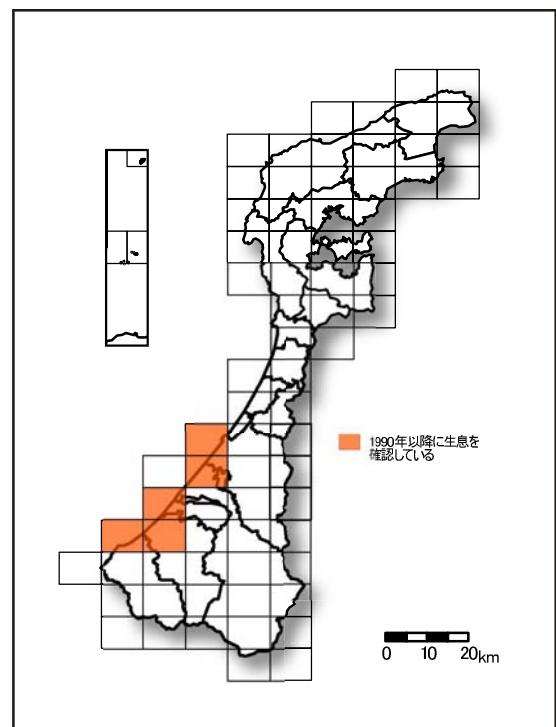
石川県産がholotypeに指定されている。

参考文献

Inoue, H. 2000. A new species of the genus *Herpetogramma* Lederer (Pyraustinae Crambidae) from Japan. Trans. lepid. Japan 51(4): 316-318.
富沢 章 2000. 石川県におけるハマゴウノメイガの分布と生態. 蛾類通信, (211): 208-212.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ハマヤガ

Agrotis ripae albovenosa Tschetverikow

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的な希少種で、生息地が自然環境に恵まれた砂浜海岸に限定される。本県の生息地は加賀海岸のみである。

形態

開張32mmの中型のガである。前翅は様に淡褐色であるが、後翅はさらに淡色である。

国内分布

これまでに新潟県の数箇所および秋田県、石川県で各1箇所が知られているに過ぎない。

県内分布

2006年に加賀市塩屋海岸において初めて発見された。

生態

成虫は8月下旬から9月に出現する。幼虫の食草はカワラヨモギで晩秋までには老熟し、老熟幼虫のまま砂の中で越冬する。老熟幼虫は翌年の7月に蛹化する。

生息地の条件

海浜性のガで、既知産地はすべて砂浜海岸や海岸後背地、河口付近である。海浜植生が豊富で、カワラヨモギ群落が発達していることが重要である。

生存の危機

砂浜海岸の植生破壊は本種を絶滅させることとなる。既知産地の塩屋海岸は良好な自然環境が保たれているが、他の砂浜海岸では護岸工事等による海浜植生の破壊が進んでいる。護岸工事を実施する場合、海浜植生に配慮すべきである。(A)

特記事項

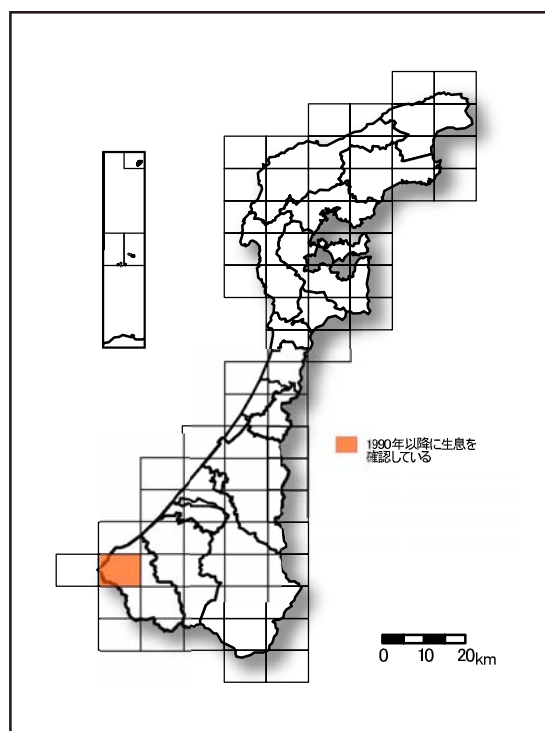
小松市や能登半島南部における本種の調査が必要である。

参考文献

田中政行ほか 1992. 秋田県未記録のヤガ, 誘蛾燈, (130) : 99-101.
富沢 章 2008. 加賀市塩屋海岸の蛾類, 誘蛾燈, (192) : 57-67.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

カギモンキリガ

Orthosia nigromaculata (Hone)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー

なし

選定理由

国内における生息地が限定され、個体数が少ない。

形態

開張30mm前後の中型のガである。前翅は淡褐色で後翅は黒褐色。前翅表面に特徴的なC字状の黒い紋がある。

国内分布

本州、四国、九州のほか、屋久島に分布する。

県内分布

1997年4月に小松市上荒屋で1頭が得られているに過ぎない。

生態

常緑樹林にすむ暖地性の蛾で、幼虫の食草はツルグミやナツグミである。蛹越冬で、成虫は4月から5月の春期にのみ現れる。

生息地の条件

食草であるツルグミの生育していることが重要であるが、本県での生育地は多くはない。

生存の危機

採集地近くでは、宅地化等の開発が進みつつあり、生息地の破壊が懸念される。(A, B)

特記事項

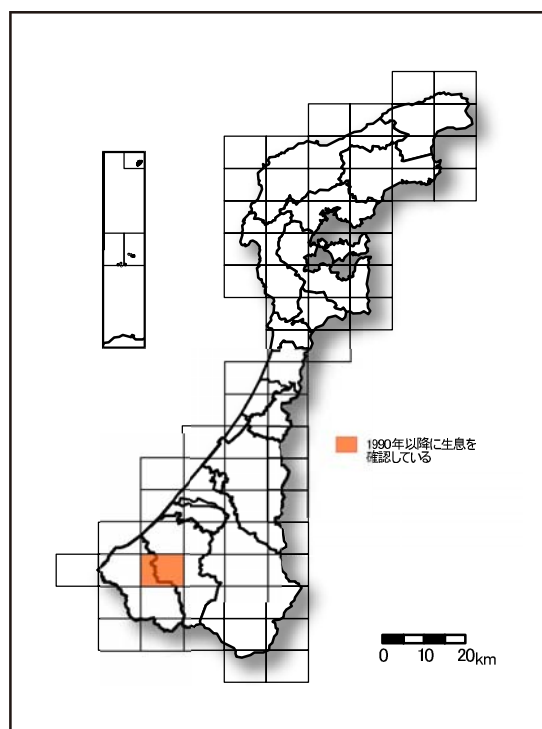
採集地周辺の分布調査が急務である。

参考文献

富沢 章 1998. 蛾類. 石川県の昆虫 : 366-486. 石川県自然保護課.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

モートンイトトンボ

Mortonagrion selenion (Ris)

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリ 準絶滅危惧

国カテゴリ 準絶滅危惧

選定理由

以前は県内の平地や丘陵の浅い池沼、水田などに生息していたが、近年は激減し、まれにしか見られない。

形態

腹長17～24mm、後翅長11～16mmの小さいイトトンボ。成熟オスは体の前半が黄緑の地に黒紋、後半は橙赤色である。未熟なメスは橙色で、成熟すると緑化する。

国内分布

北海道南端～九州南部。

県内分布

小松市那谷、金沢市（夕日寺、榎尾）、七尾市能登島町須曾など。

生態

浅い湿原の水たまりに育ち、初夏に丈の低い抽水植物の間などで活動しているが、目立たない。

生息地の条件

丈の低い抽水植物の豊かな浅い水たまりや沼地。近年は一部の湿地化した休耕田で発見される。

生存の危機

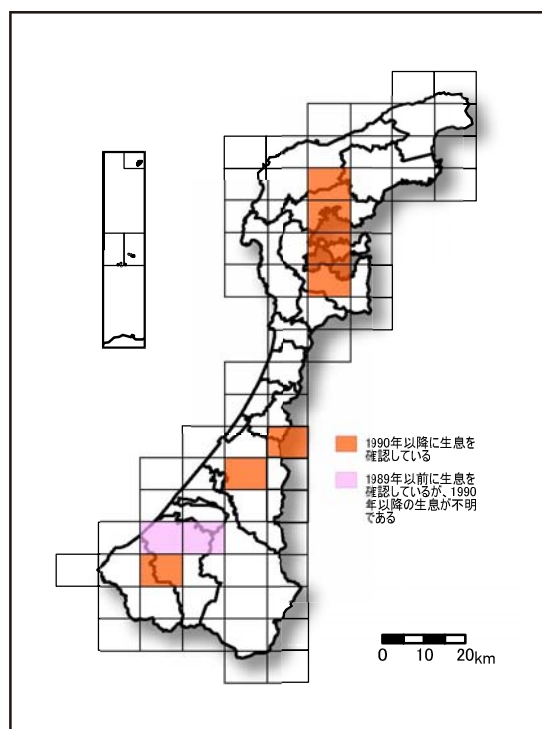
平野の水田地帯では乾田化や農薬の使用で絶滅し、丘陵間の休耕田は放棄されて乾燥し、草原となって生息地が消失する傾向にある。（A, B, C）

参考文献

武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.



写真提供者：西原昇吾



県内の分布

オツネトンボ

Sympecma paedisca paedisca (Eversmann)

トンボ目アオイトトンボ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

生息地、個体数とも非常に少なく、開発や水質汚染の影響も受けやすい。

形態

腹長26～31mm、後翅長20～24mmのイトトンボ。越冬後は、複眼が青色に変化する。体は淡褐色で、青銅色の斑紋がある。

国内分布

北海道から九州北部まで分布するが、中部以北に多い。福井県では確実な記録がなく、富山県でも極めてまれである。

県内分布

小松市安宅新、白山市後高山、穴水町乙ヶ崎、能登町小木の記録があり、1998年には羽咋市大川町の沼で3頭を確認した。近年は能登半島の多くの地点で発見されている。

生態

平地～丘陵の抽水植物の茂る池沼に生息し、8～9月に羽化する。未熟虫は林野に分散して摂食し、日当たりのよい疎林などで成虫のまま越冬する。春になると成熟し、池沼に現われて生殖活動を行なう。卵は、連結または単独で植物組織内に産みつけられる。

生息地の条件

平地や丘陵、沿岸平野のヨシやマコモの多い池沼で、強力な捕食者がおらず、汚染がなく、付近に樹林があること。

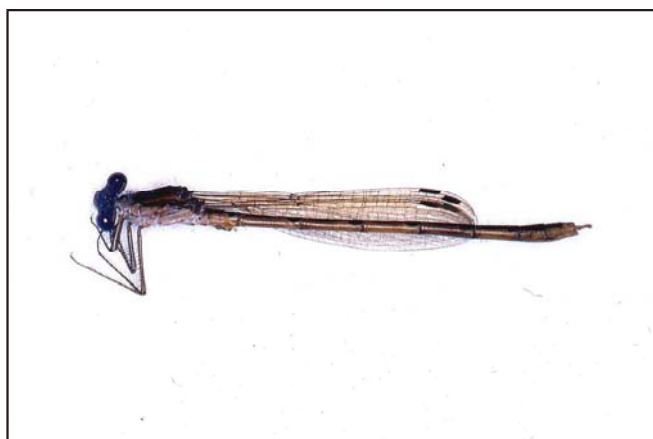
生存の危機

もともと県内ではまれで、生息する池沼が沿岸平野にあるため、埋め立てられることが多い。ブラックバスやブルーギルの移入、廃棄物投入のおそれもある。池沼に植物が進出し乾燥したり、サギなどの繁殖により汚染がもたらされる場合もあり得る。樹林の伐採や、道路建設なども間接的に悪影響を及ぼす。(A, B)

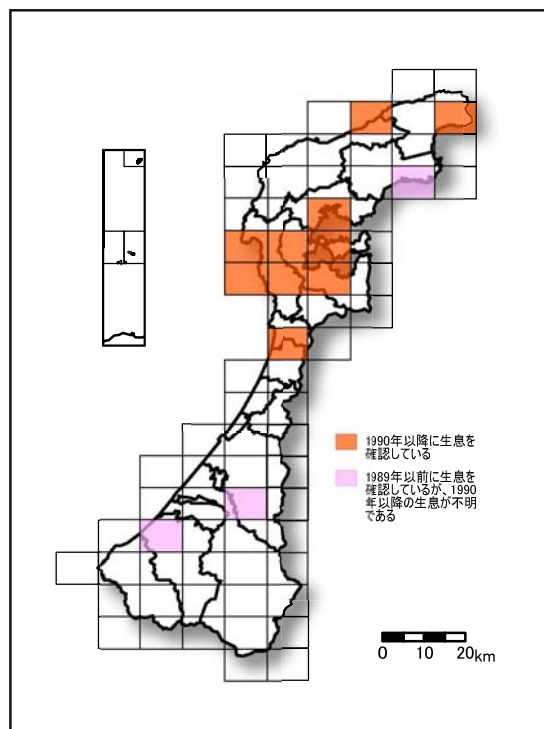
参考文献

武藤 明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料, Tombo, 41: 33-36.

武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74): 7-19.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

ヒラサナエ

Davidius moiwanus taruii Asahina et Inoue

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 産地が限定され、個体数も多くないうえに、開発や伐採による影響が危惧される。

形態 腹長22～32mm、後翅長21～28mmの小型のサナエ。黄色の地に黒条があり、モイワサナエやヒロシマサナエに類似するが、オスは尾部上付器、メスは後頭孔縁の形で区別される。

国内分布 富山県高岡市郊外から小矢部市の低山帯、福井県、滋賀県、京都府、兵庫県、岡山県にわたり産地が点在するが、多くない。

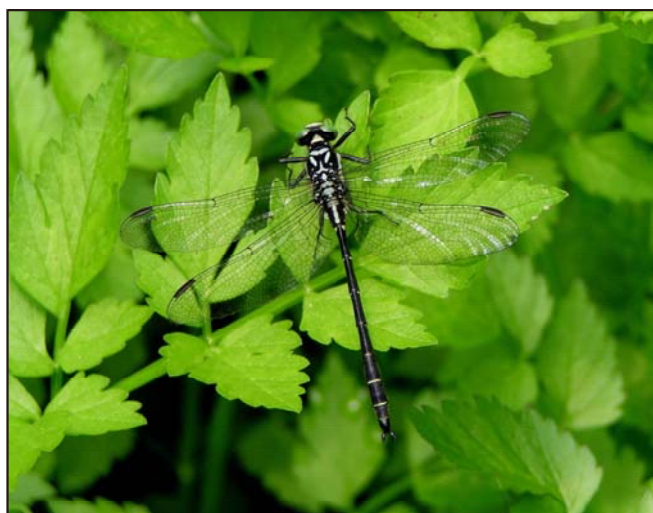
県内分布 南加賀では記録がないが、金沢市（薬師、宮野、小池）に生息する。能登半島では志賀町（田原、尊保）、中能登町末坂、輪島市三井、穴水町細野、能登町（柏木、中斉）、珠洲市上戸など、各地から知られている。

生態 低山～丘陵の山間の陽地の小流や、湿原の細流の泥底に幼虫が育つ。4月下旬から5月初めに岸辺の草の葉や茎にとり付いて羽化し、成虫は5～6月に活動する。日の当たる流れの傍の植物に静止したり、少し飛んで移動したりしている。卵は空中で産下され、水際の泥土やコケに落ちることが多い。

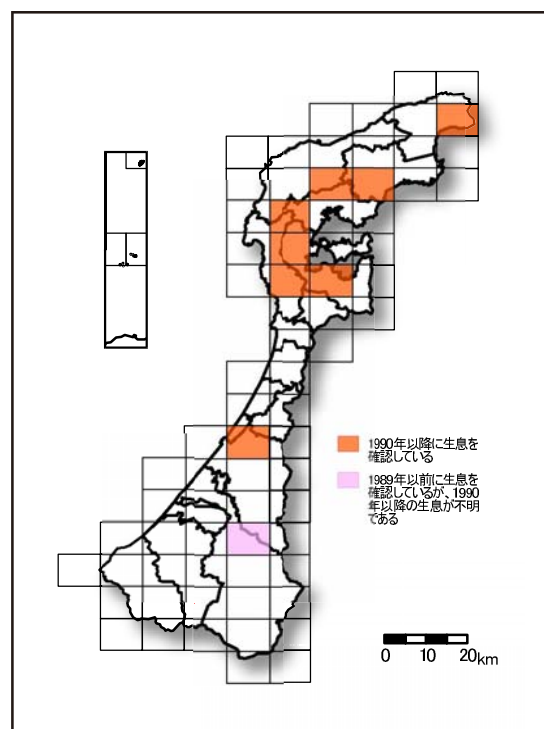
生息地の条件 幼虫が育つためには、低山帯の、開けた陽地のゆるく流れる泥～砂泥底の小川や、湿原の細流が必要で、廃田の用水溝に見られる場合もある。周囲には、成虫の摂食や休止のための樹林や草原があることも要件。

生存の危機 森林の伐採や道路の建設のため、直接的ないし間接的に小流や溝が消失したり、出水時の泥で埋まったり、乾燥化するなどの危険性が高い。白山市口直海の既知産地は、ダム建設により水没し、能登でも開発の影響が危惧される。植林されたスギなどが成長して細流が暗くなると、生息に不適となる。
(A)

参考文献 江口元章 1991. 能登半島のヒラサナエ. *Tombo*, 34 : 33-35.
武藤 明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. *とっくりばち*, (75) : 24-28.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ネアカヨシヤンマ

Aeschnophlebia anisoptera (Selys)

トンボ目ヤンマ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由

もともと個体数も産地も多くなかったが、近年はほとんど見られない。生息地は里山にあり、開発や汚染の影響を受けやすい。

形態

腹長48～56mm、後翅長46～54mm。黄褐色の地に黒条があり、他のヤンマと異なって腹部がくびれず太い棒状である（アオヤンマも形が似るが、鮮やかな緑色）。

国内分布

中部以南から九州南部まで分布するが、産地は限られる。福井県の中池見や、富山県の乱橋池などにも生息する。

県内分布

小松市（遊泉寺、蓮代寺）、津幡町（北中条、清水）、かほく市宇ノ気、中能登町芹川、七尾市（福浦、田鶴浜）、穴水町乙ヶ崎の記録があり、近年は加賀市片野、金沢市（夕日寺、俵原、榎尾）、志賀町久喜、珠洲市三崎などでも確認されている。

生態

平地～丘陵のヨシやヒメガマなど抽水植物の多い池沼や湿原に育ち、6月頃に羽化する。未熟期には樹林の傍の水田の上空などを高く巡回飛翔しつつ摂食し、成熟すると夕方や早朝の薄明時に活動することが多い。メスは樹陰のある水際の泥などに、腹端をさし込むようにして産卵する。

生息地の条件

平地や里山にあって、ヨシ、ヒメガマ、マコモなどが生え、樹陰を伴うため池や休耕田。産卵のための泥土があり、下垂休止するための林、摂食空間としての林野も要件。

生存の危機

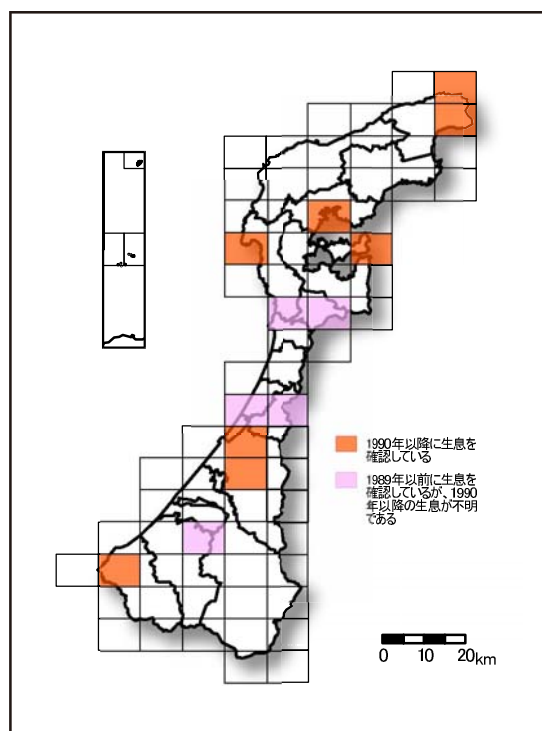
平地や里山の池沼は埋め立て、堤防のコンクリート化や防水シート張り（それに伴う水抜き工事）やブラックバス・ブルーギルの移入、廃棄物の投入、樹林の伐採、道路建設など直接的～間接的な影響が及び得る。小松市蓮代寺などの湿原も、埋め立てられた。（A、B）

参考文献

武藤 明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課。
武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74)：7-19.



標本提供者：武藤明



県内の分布

カラカネトンボ

Cordulia aenea amurensis Selys

トンボ目エゾトンボ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

金沢市の医王山と日尾池周辺および白山市白峰地区から知られるのみで、個体数も多くなく、湿原の乾燥化による減少の恐れがある。

形態

腹長29～33mm、後翅長30～34mmの金緑色の中型種。オスの尾部上付器は円筒状で、下付器背面に突起がある。後翅の肘脈室に1本の横脈があるのが特徴。

国内分布

中部以北の山地～亜高山帯に生息し、東北や北海道では低地にも見られる。福井県大野市上小池～刈込池が西限。岐阜県白鳥町村間が池が南限。

県内分布

白山市白峰の明谷川源頭付近の高層湿原と、金沢市の医王山の3つの池と、日尾池および日尾平の湿原の小池が既知産地である。

生態

幼虫は山地の池沼や湿原に育ち、成虫は6月に活動する。未熟期には移動分散するが、成熟すると沼に現われ、オスは岸に沿って時々停飛しつつ占有飛翔を行う。メスは、岸近い水面上を低く飛びつつ、単独で打水産卵する。日尾湿原では、沼が小さいので、複数のオスが入り乱れて飛びかっていた。

生息地の条件

山地の樹林に囲まれた沼や湿原の池で、抽水植物や浮葉植物が適当に生え、開水面があり、夏季にも干上らないこと。強力な捕食者がいないこと。

生存の危機

池沼を直接埋立てなくても、山道の建設や山林の伐採により乾燥化を起こす危険性がある。特に医王山では、堆積物で開水面が縮小し、干上りかける時もあり、個体群の小さいこともあって、継続して発生し得るか懸念される。日尾平湿原も、近年の高温化や寡雨のためか、乾燥化傾向にある。
(B, D)

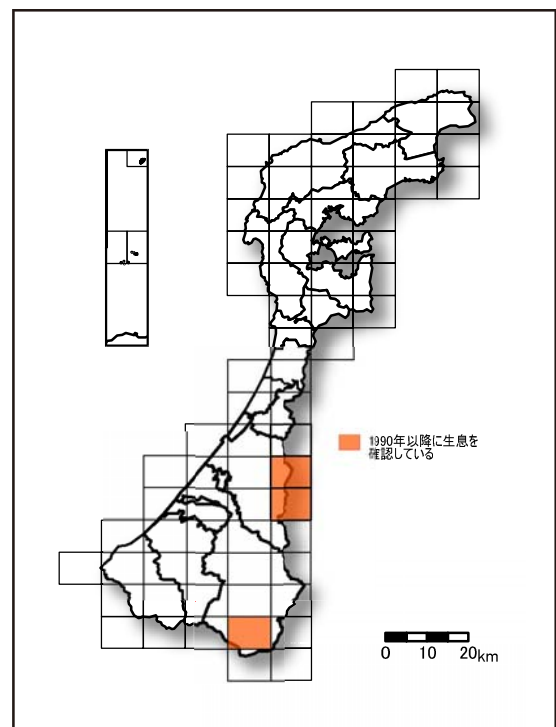
参考文献

武藤 明 1998. 石川・福井のトンボ4種について. 昆虫と自然, 33 (7) : 38.

武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.



標本提供者: 武藤明



県内の分布

カオジロトンボ

Leucorrinia dubia orientalis Ris

トンボ目 トンボ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

白山連峰に生息し、分布西限にあたるが、産地が限られ、個体数も多くない。

形態

腹長20～25mm、後翅長25～30mm、顔面が白く、体は黒い。成熟オスの胸部には、暗赤色の紋がある。

国内分布

北方系の種で、北海道から本州中部地方の高層湿原に生息する。

県内分布

白山市尾口地区の小桜平付近、清浄ヶ原、加越国境の赤兎山や明谷川源頭付近（西限）。

生態

幼虫は寒冷地の池塘（ガキの田）に育ち、6月から羽化して、7月上～中旬（加越国境）から8月上～中旬（清浄ヶ原）に活動する。池塘の周辺の樹木の葉や地面に静止したり、水面上に飛来したりしている。

生息地の条件

植生の豊かな高層湿原の池塘。

生存の危機

登山道の建設や、温暖化によって池塘が消失する恐れがある。（D）

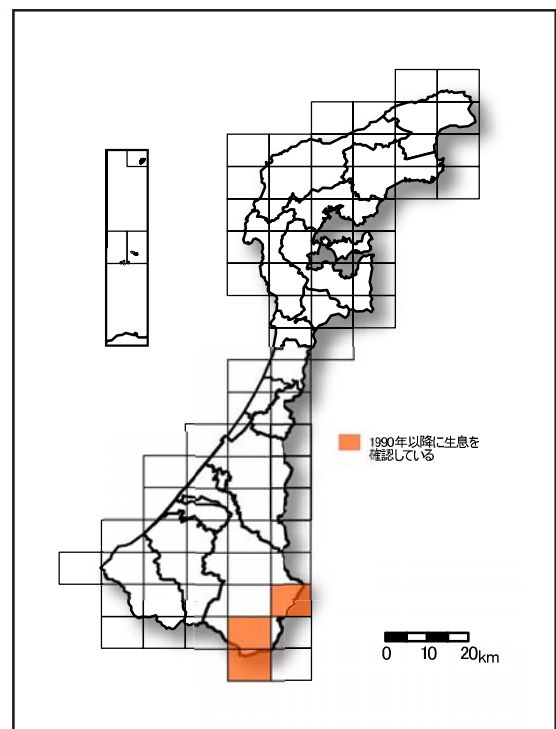
参考文献

武藤 明 2002. 2001年～2002年4月分の昆虫資料. とっくりばち, (69) : 8-11.

武藤 明 2004. 石川県のトンボに関する知見. とっくりばち, (72) : 1-4.



写真提供者：白井伸和



県内の分布

キトンボ

Sympetrum croceolum Selys

トンボ目 トンボ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

県内の平地～低山帯のため池などに生息し、金沢付近でも珍しくなかったが、近年は産地、個体数とも著しく減少している。

形態

腹長21～29mm、後翅長25～32mm。体も翅の大部分も橙黄色で頑丈な体形をしたトンボ。

国内分布

北海道、本州、四国、九州に分布するが少ない。

県内分布

加賀市、白山市相川、志賀町（久喜、田原）、輪島市門前、能登町、珠洲市。

生態

平地～丘陵の林間の池沼に育ち、7月に羽化して、成熟虫は10～11月に活動する。オスは抽水植物にとまったり、水面を飛びまわったりしているが、夕方が近づくと池から離れ、日当りの樹木に静止する。

生息地の条件

林間や山際の植生の豊かな池沼。

生存の危機

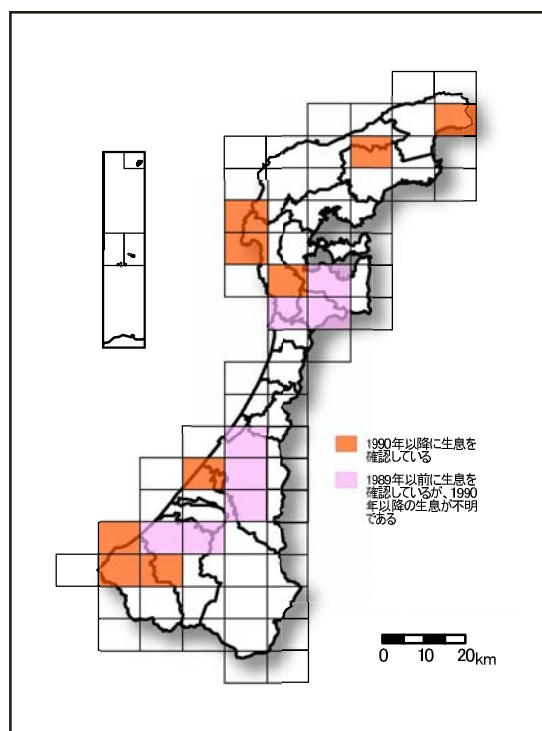
安定した古いため池がコンクリートや防水シート張りに変ったり、水抜き後に放置されたり、道路建設などで消滅する。摂食空間である林野の汚染なども影響を及ぼす。（A、B）

参考文献

武藤 明 1999. 石川県のトンボ相の変遷：1957年との比較。とっくりばち，(66)：2-7。
武藤 明 2006. 石川県の蜻蛉目。とっくりばち，(74)：7-19。



写真提供者：富沢章



県内の分布

ミネトワダカワゲラ

Scopura montana Maruyama

カワゲラ目トワダカワゲラ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

低水温域に生息する昆虫であるため、その分布が限定されるようである。

形態

成虫の体長は13～35mm。体は暗褐色で、無翅の昆虫であり、水生生活をするので腹部末端に環状鰓をもつ。

国内分布

北海道、東北、関東、甲信越、北陸に分布する。

県内分布

加賀市、小松市、能美市（旧辰口町）、白山市（旧鶴来町、旧白峰村）、金沢市、宝達志水町から記録がある。

生態

水温10℃前後の冷水域の清流に生息する、氷河期の遺存昆虫ともいわれている。

生息地の条件

清流でかつ、冷水温域が生息の条件である。

生存の危機

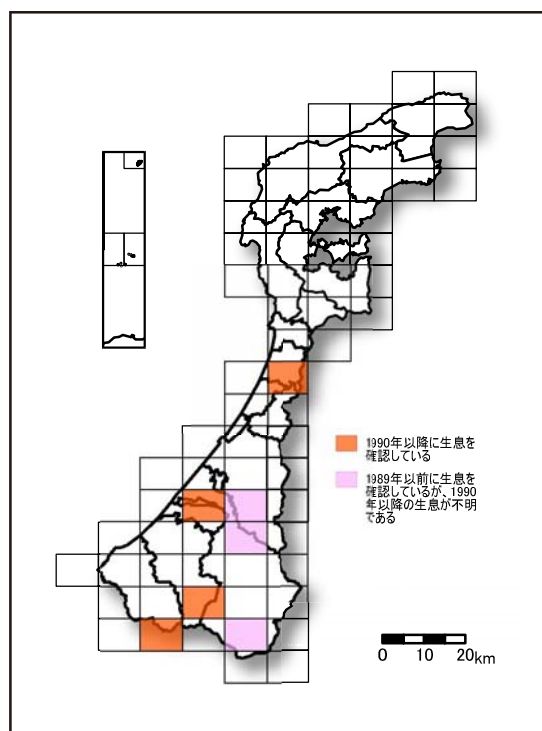
道路整備や洪水による溪流への土砂の流入がなされると、生存が危ぶまれる。（A）

参考文献

富樫一次 1960. 加賀白山のカワゲラ類. 生物研究（福井），4：3.



写真提供者：金山晃



県内の分布

ウスバカマキリ

Mantis religiosa (Linnaeus)

カマキリ目カマキリ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

本種の生息する海岸草地や河川敷は、土木工事の影響を受けやすく、生息地が狭小化している。

形態

体長は50～70mmでメスのほうが大きい。体色は淡緑色であるが、淡褐色の個体も見られる。前脚の基部の内側に、黒色の楕円形の斑紋があるのが特徴である。

国内分布

北海道南部から南西諸島まで広く分布するが、生息地は点在していて、個体数は少ない。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、珠洲市の海岸草地および手取川河川敷に生息している。過去には白山市の記録がある。

生態

成虫は年に1回発生する。幼虫は6月から見られ、成虫は8月から11月にかけて出現する。幼成虫とも草地の地表に近い所に生息し、小型の昆虫類を捕食する。卵のうはやや長めの枕型で、石や木片などに産付される。成虫は夜間、灯火によく飛来する。

生息地の条件

生息地は海浜植物帯や海岸近くの草地、大きな河川敷の草地に限られるようである。本種は、丈の短い草本類がやや疎に生えている明るくて開けた環境を好む。

生存の危機

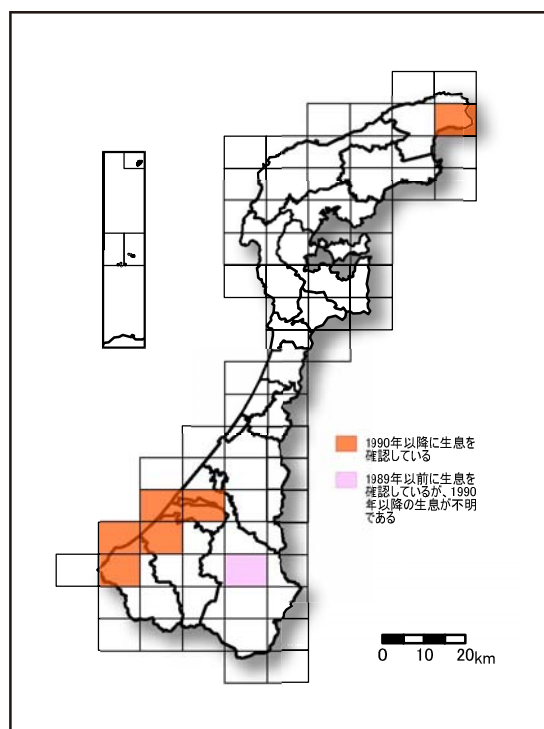
海岸部では、護岸工事や植林、土地造成の影響を受け、海岸草地が狭小化して生息地が悪化、消滅している所が多い。手取川河川敷では、土木工事による生息地の破壊が進んでいる。(A, B)

参考文献

富沢 章 2007. 石川県におけるウスバカマキリとヒロバネカンタンの記録. とっくりばち, (75) : 40-41.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ハマスズ

Dianemobius csikii (Bolivar)

バッタ目コオロギ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

全国的な希少種で、石川県においても生息地、個体数ともに少ない。自然環境に恵まれた海浜の指標種として重要であるが、土木工事により生息地が減少している。

形態

体長が7mm前後の小型のコオロギである。体色は、淡褐色ないし灰色で褐色の斑紋があり、砂浜の砂によく似ていて見つけにくい。脚には黒褐色の斑がある。

国内分布

本州、四国、九州から奄美諸島まで分布しているが、生息地は局地的である。

県内分布

加賀市、小松市、内灘町、志賀町の海浜において局地的に分布している。白山市では過去に旧白峰村の手取川流域で記録されている。

生態

成虫は年に2回発生し、6月から10月に見られるといわれるが、本県では8月から10月にしか確認されていない。海浜植物の多い砂浜に生息し、日中でも砂浜上で活動している。夜間、ピーピーと、比較的大きな声で鳴く。

生息地の条件

海浜植物が多い自然に恵まれた砂浜海岸に生息する。

生存の危機

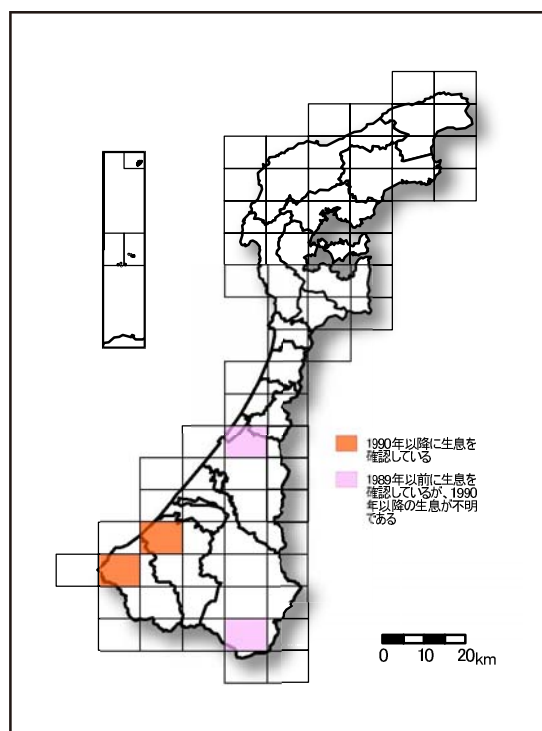
砂浜海岸は、護岸工事や土地造成の影響を受け、海浜植物帯が消滅あるいは狭小化している所が多く、本種は激減している。また、海浜への車の乗り入れや海岸浸食も本種の生息を脅かしている。さらに、防波堤下の個体は天候の荒れた日に波にさらわれる可能性が高い。海岸部においては、海浜植物帯に配慮した護岸工事を実施する必要がある。かつて本種は、手取川河川敷においても生息していたようであるが、河原の砂地帯が少なくなったことや土木工事の影響を受け、現在は確認されておらず、絶滅した可能性が高い。(A)

参考文献

市川顕彦ほか 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp. 日本直翅学会編. 北海道大学出版会. 札幌.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ヤマトマダラバッタ

Epacromius japonicus (Shiraki)

バッタ目バッタ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

自然環境に恵まれた海浜の指標種として重要であるが、土木工事によって生息地が激減している。石川県においても生息地、個体数ともに少なくなりつつある。

形態

体長は30mm前後である。体色は淡褐色で、褐色の斑点を散布しているが、まれに緑色型も現れる。後翅の基部は淡い青色をしているのが特徴である。

国内分布

北海道、本州、四国、九州の海岸地帯に分布する。

県内分布

加賀市、小松市、内灘町、宝達志水町、珠洲市などの海岸部に分布していて、生息地によっては個体数が多い所もある。

生態

砂浜海岸に限って生息する。卵越冬で、成虫は8月から10月にわたって見られる。地上性で、日中、砂上を活発に飛びまわっているが、体色が砂地とまぎわらしく、見つけにくい。

生息地の条件

海浜植物のある広い砂浜海岸が存在することが重要である。

生存の危機

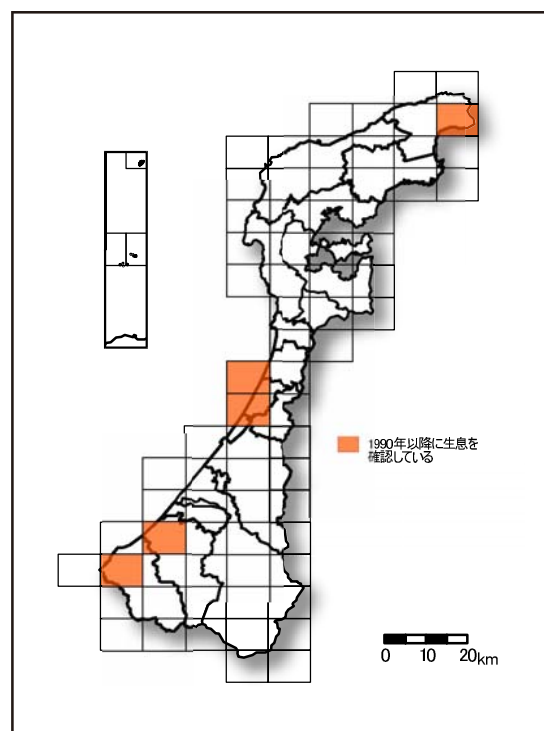
砂浜海岸は、護岸工事や土地造成の影響を受け、海浜植物帯が消滅あるいは狭小化している所が多く、本種は減少している。また、砂浜への車の乗り入れや海岸浸食も本種の生息を脅かしている。海浜植物帯の保全に配慮した護岸工事を実施すべきである。(A)

参考文献

徳本 洋 1998. バッタ目. 石川県の昆虫: 62-67. 石川県自然保護課.
市川顕彦ほか 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp. 日本直翅学会編. 北海道大学出版会. 札幌.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ハウチワウンカ

Trypetimorpha japonica Ishihara

カメムシ目グンバイウンカ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由

全国的に分布が局所的なうえ、生息地の湿生草原は減少している。県内でも分布は局所的で、志賀町の3箇所で確認されているのみである。

形態

体長（翅端まで）3～4mm。体は灰白色で不規則な暗褐色斑がある。前翅は灰白色不透明で中央部は黒色、周辺部に向かって放射状に黒帯を発する。短翅型と長翅型の2型が知られ、通常は短翅型であるが、稀に長翅型も出現する。

国内分布

本州（栃木県以西）、九州に分布する。

県内分布

志賀町。

生態

成虫は8～9月に出現し、湿生草原の中に生育するチガヤで発見される。

生息地の条件

志賀町では、丘陵部の尾根筋に広がるアカマツ・コナラ林の間にある裸地と森林の境界の赤土部分のイネ科草本で発見された。県内の生息環境は従来のチガヤの生育する湿生草原と異なる可能性があるため、詳細な調査による生息地の確認がのぞまれる。

生存の危機

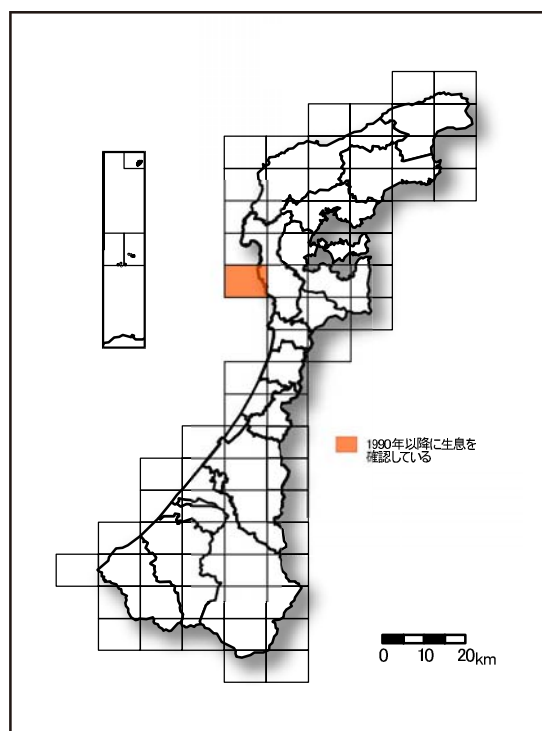
生息場所である平野部の湿生草原は限られており、かつ、開発や植生遷移によって減少している。現在の生息地の保全が必要である。（A）

参考文献

江口元章 2008. 石川県で確認されたハウチワウンカ. 翔, (190) : 7.



標本提供者：江口元章



県内の分布

ハネナシアメンボ

Gerris (Gerris) nepalensis Distant

カメムシ目アメンボ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

都市部などで減少傾向にある。県内の生息地は約10箇所であり、生息環境の悪化の危険がある。

形態

体長6.5～10.0mm。体型は比較的幅広く、菱形である。腹部は短く、体長の1/2以下。体色は灰黒色～黒色。前脚の腿節内縁が褐色。触角は全体黒色。後胸基部、各腹節側部、各腹節側板の境界付近および体下面は灰青色の微毛で覆われる。無翅型が多いが長翅型も出現する。

国内分布

北海道、本州、隠岐島、四国、九州。

県内分布

加賀市、金沢市、かほく市、七尾市、珠洲市。分布は局所的であるが、生息地での個体数は多い。

生態

5～6月頃に水草に産卵し、幼虫は1ヶ月程で成長し、新成虫は8月頃に出現する。多化性ともいわれる。成虫は水辺の枯れ草、石、落ち葉の下で越冬する。通常は葉上で生活し水面を遊泳することもあるが、広い水面には出ない。ヒシにつくジュンサイハムシ幼虫や水面に落下した小昆虫を捕食する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、ヒシ、ジュンサイなどの浮葉植物の多い池沼などの開放水面の多い止水域。

生存の危機

池沼の開発や埋め立て、各種排水や農業による水質汚染、コンクリートなどによる護岸化、管理放棄などによる浮葉植物の消失。加賀市片野鴨池では、オオクチバス、アメリカザリガニが侵入しているため、外来種の駆除、侵入できない区域の設置などの保全策が必要である。(A, B, C)

参考文献

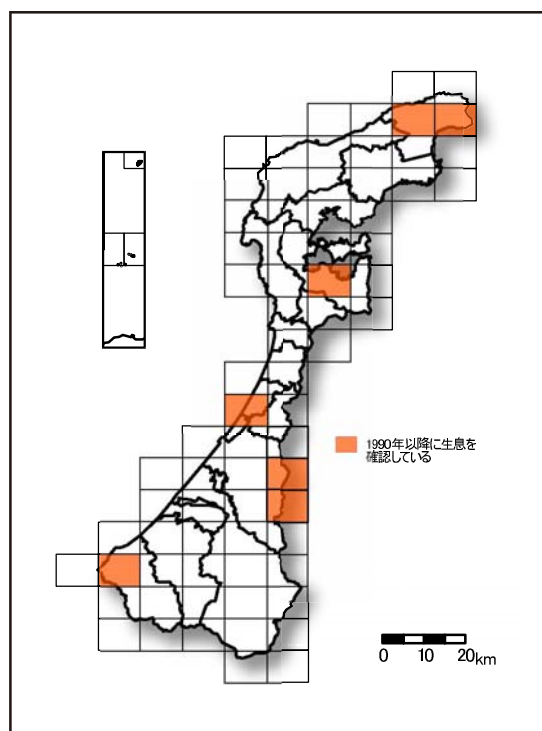
佐伯仁規・原田哲夫 2002. ハネナシアメンボの餌資源としてのジュンサイハムシ. 昆虫ニューシリーズ, 5(1): 9-15.

山尾あゆみ・中尾史郎・中島敦司・養父志乃夫・山田宏之 2002. アメンボ類の生息環境保全を目的とした淡水湿地の環境整備指針. ランドスケープ研究, 65(5): 527-532.

池田綱介・中筋房夫 2003. ヒシ群落のある溜池におけるジュンサイハムシとその他の昆虫の季節変動. 昆虫ニューシリーズ, 6(1): 9-18.



写真提供者: 西原昇吾



県内の分布

ヒメミズカマキリ

Ranatra unicolor Scott

カメムシ目タイコウチ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

平野部を中心に全国的に生息地が減少傾向にある。県内でも局所的に分布し、最近の確実な生息地は約10箇所であり、生息環境の悪化している場所も少なくない。

形態

体長（呼吸管を除く）は24～32mm。体色は淡褐色～淡黄褐色で、前脚腿節の突起は歯状で中央付近にある。呼吸管は体長の2/3程度であり、前翅より明らかに短い。

国内分布

北海道、本州、淡路島、四国、九州、琉球列島。

県内分布

加賀市、小松市、かほく市、羽咋市、志賀町、中能登町、珠洲市の約10箇所で確認されている。

生態

産卵期は6～7月。卵はヒシやジュンサイなどの浮葉植物の組織内に産み付けられる。8月頃に新成虫が出現する。幼虫、成虫ともに水生昆虫などの体液を吸収する。水中では浮葉植物や抽水植物の間で静止していることが多い。水中で越冬する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、植生の豊富で比較的深い潟湖、池沼、ため池。

生存の危機

池沼の開発、埋め立てによる消失、ため池のコンクリートなどによる護岸化、管理放棄、生活排水や農薬の流入、ゴミの投棄による水質汚染、外来種の侵入が脅威となっている。河北潟では、オオクチバス、ブルーギルが侵入し、加賀市片野鴨池では、オオクチバス、アメリカザリガニの侵入後に本種の減少傾向が著しい。羽咋市三日月池は一部が埋め立てられたため、開発の防止が必要である。

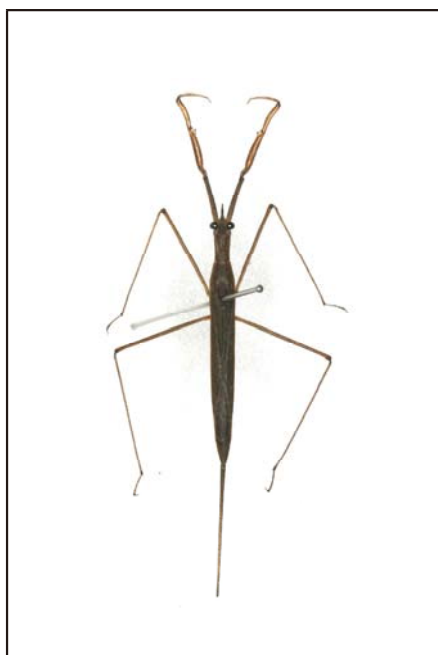
(A, B, C)

参考文献

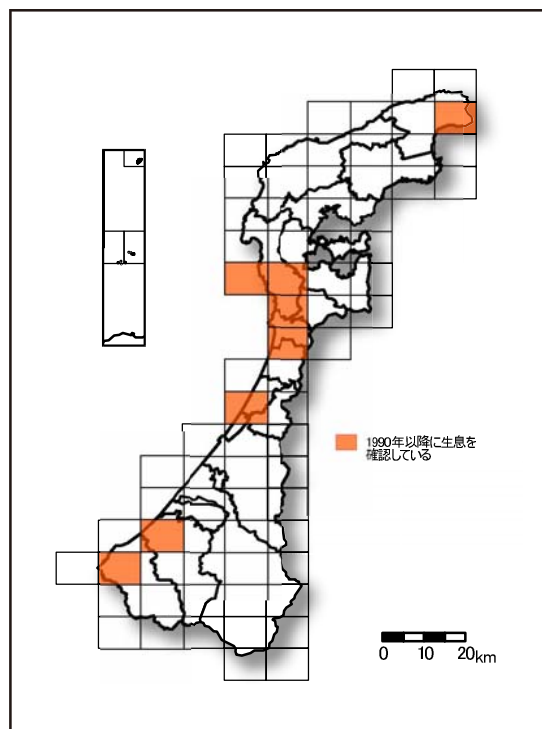
Ban Y 1981. Some observation on the life cycle of the water scorpion, *Ranatra unicolor* Scott (Hemiptera: Nepidae) in Yamanoshita Bay, Lake Biwa. Verh Internat Verein Limnol, 21:21-1625.

富沢 章 2006. 中能登町（旧鳥屋町）春木で得られた昆虫類. とつくりばち, (74) : 61-64.

平嶋義宏ほか 2008. 新訂原色昆虫大図鑑 第三巻. 北隆館. 東京.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ミヤケミズムシ

Xenocorixa vittipennis (Horváth)

カメムシ目ミズムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的に減少傾向にある。県内でも、生息地が4箇所と限られており、2箇所では生息環境が悪化している。

形態

体長7.2~9.1mmと比較的大型である。体型は短円筒形で丸みがあり幅広く後方が細まる。背面は淡黄色で強い光沢があり、前翅の多少とも不規則な多数の黒色線条は他の大形ミズムシ類に比べて明瞭である。前胸背板着色部は比較的短く、側縁は角ばり、6~8本の太い黒色横帯がある。肢は前肢が短い捕獲脚、中肢は細長い把握脚、後肢は扁平な遊泳脚となる。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、羽咋市、志賀町、中能登町。

生態

小昆虫を捕食する。成虫は春から秋にかけて個体数が多く、高密度に群生する。灯火にも飛来する。

生息地の条件

平野部~丘陵部の水生植物が豊富な池沼などの止水域に生息する。餌生物が豊富に生息することが必要である。

生存の危機

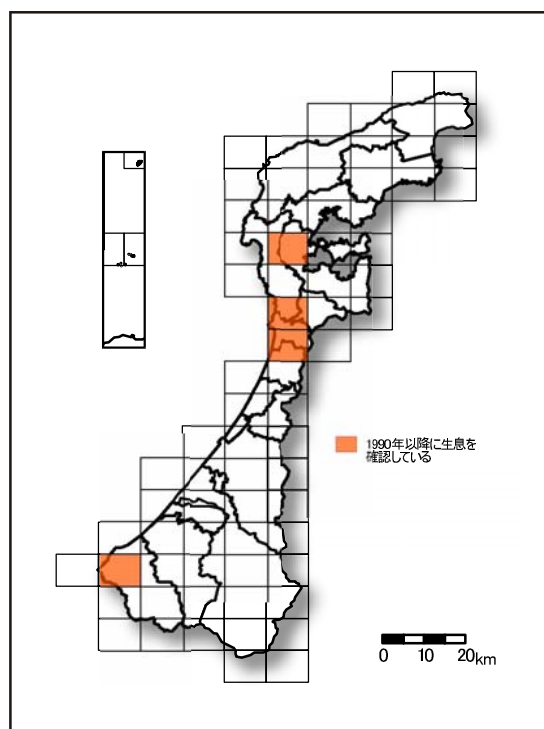
池沼の開発による生息環境の消失、各種排水や農業による水質汚染、外来種の侵入が脅威である。加賀市片野鴨池では、1990年代には多産していたが、オオクチバス、アメリカザリガニの侵入後に本種の個体数が著しく減少した。外来種の駆除および、侵入できない区域を設けるなどの保全策が必要である。羽咋市の三日月池は平野部の抽水植物の多い河跡湖であり、一部が埋め立てられたため、これ以上の開発の防止が必要である。(A, B, C)

参考文献

林 正美・宮本正一 2005. 半翅目. 川合禎次・谷田一三(編). 日本産水生昆虫—科・属・種への検索. 東海大学出版会. 秦野.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ミゾナシミズムシ

Cymatia apparens (Distant)

カメムシ目ミズムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

生息密度が低いうえに、近年、個体数がさらに減少している傾向にあり、全国的に生息地が失われつつある。県内でも局所的に分布し、生息地は1990年代に確認された2箇所のみであり、いずれも開発による影響を受けており、2000年代の確認例はない。

形態

体長5.0～5.9mm。体型はやや細長い。体色は淡褐色～淡黄褐色。頭部腹面（顔）は非常に短く、口吻（下唇）に横条を欠く。前脚跗節は扁平にならず、きわめて細長く指状で先端には顕著な爪が見られる。

国内分布

北海道、本州、四国（徳島）、九州。

県内分布

羽咋市、七尾市。

生態

ボウフラなどの水生昆虫を捕食する。6月頃に新成虫が出現する。

生息地の条件

平野部の植生の豊富な池沼、湿地、放棄水田に生息する。

生存の危機

羽咋市の三日月池は平野部の抽水植物の多い河跡湖であり、一部が埋め立てられた。七尾市の放棄水田はLPGガス基地建設に伴う埋め立てによって、面積が減少した。羽咋市では生息地の保全、七尾市では生息地における耕起、湛水化などの保全対策が必要である。（A、B、C）

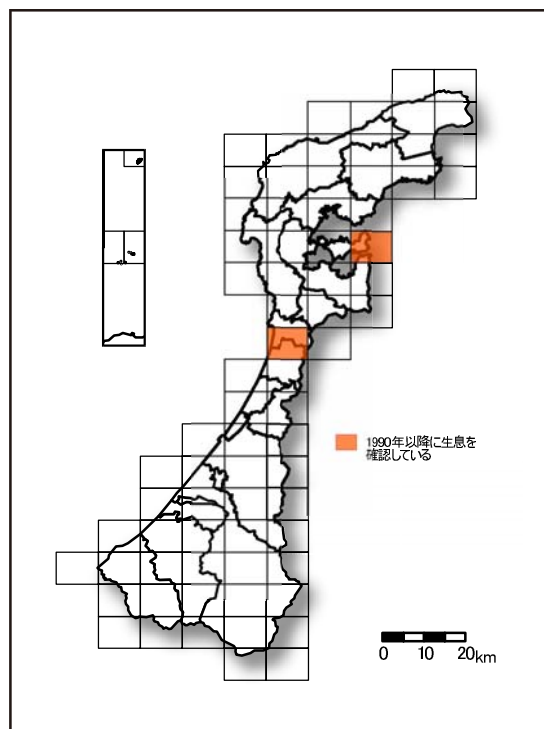
参考文献

林 正美・宮本正一 2005. 半翅目. 川合禎次・谷田一三（編）. 日本産水生昆虫—科・属・種への検索. 東海大学出版会. 秦野.

平嶋義宏ほか 2008. 新訂原色昆虫大図鑑 第三巻. 北隆館. 東京.



標本提供者：江口元章



県内の分布

マツムラクサカゲロウ アミメカゲロウ目クサカゲロウ科

Semachrysa matsumurae (Okamoto)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 加賀市が国内分布の北限であり、隔離された生息地でもある。

形態 翅の開張は約20mmで、体は濃緑色をしている。

国内分布 石川県、大阪府、兵庫県、四国、長崎県、鹿児島県、沖縄県に分布する。

県内分布 加賀市「鹿島の森」が唯一の産地である。

生態 生活史などについては不明である。

生息地の条件 照葉樹林内に生息するが、個体数は多くない。

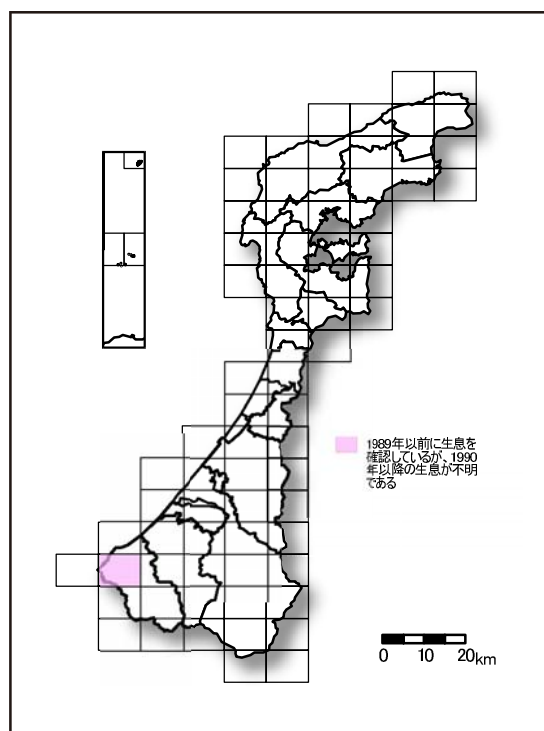
生存の危機 照葉樹林の伐採が脅威であるが、生息地は国の天然記念物に指定されているため、生存が脅かされることはないと思われる。(A)

特記事項 国の天然記念物である「鹿島の森」に生息する。

参考文献 Tsukaguchi, S. 1995. Chrysopidae of Japan (Insecta, Neuroptera). Osaka, pp. 221.



標本提供者：富樫一次



県内の分布

オオウスバカゲロウ

Heoclisis japonica (Hagen)

アミメカゲロウ目ウスバカゲロウ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

平野部においては、近年の記録がなく激減したものと思われる。また、海岸砂地においても土地造成や農耕地化によって、生息地が減少している。

形態

体長45mm、開張10cm前後の大型種である。翅は白色がかっているが透明で、褐色の斑紋が点在する。頭部や胸部、脚は長毛で被われている。

国内分布

北海道から九州に分布する。

県内分布

現在の確実な生息地は、加賀市、小松市、金沢市の海岸部のみである。過去に金沢市の内陸部や白山市（旧鶴来町）で記録があるが、現在生息している可能性は低い。

生態

幼虫は砂地に潜み、コガネムシやガの幼虫などの大型種を捕食する。成虫は7月から9月に出現し、ガを捕食することが知られている。成虫は灯火に飛来する。

生息地の条件

幼虫の生活できる砂地の存在が重要である。海岸部や湖岸、河川敷などの雑草がまばらに生える砂地帯が本種の生息地になるものと思われる。また、成、幼虫ともに大型昆虫を食する肉食性なので、エサとなる大型種の生息できる自然環境が存在することも重要である。

生存の危機

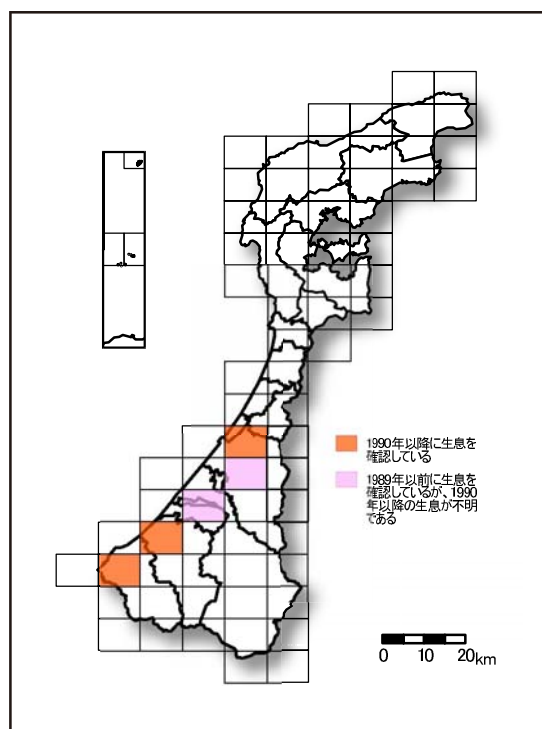
平野部においては、宅地化、農耕地化、河川敷における砂地帯の消失などによって、本種の生息地は激減したものと思われる。海岸部においても、護岸工事や土地造成の影響を受け、砂地帯が狭小化して生息地が悪化、消滅している所が多い。海浜植物帯に配慮した土木工事を実施すべきである。（A）

参考文献

富樫一次 1998. アミメカゲロウ目. 石川県の昆虫：100-101. 石川県自然保護課.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ナガヒラタムシ

Tenomerga mucida (Chevrolat)

コウチュウ目ナガヒラタムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

局地的分布を示し、開発されやすい里山に生息する。近年の発見例は少ない。

形態

体長は9～17mmで長い鋸歯状の触角を持っている。体形は細長く、両側はほぼ平行である。体色は赤褐色で、上翅はやや黒い小顆粒でおおわれている。

国内分布

北海道から南西諸島まで広く分布する。

県内分布

能美市、白山市、金沢市、珠洲市から得られている。

生態

幼虫は腐朽菌に侵された立ち枯れや倒木に生息し、成虫は7～8月頃、伐採木や立ち枯れ木で見られる。また、成虫は灯火によく飛来する。

生息地の条件

平地から山地の枯木や倒木が多い所に生息している。

生存の危機

里山の開発が進み、生息環境は悪化している。(A)

特記事項

コウチュウ目の原始型を残している種として重要である。

参考文献

Miyatake, M (1985) Notes on the genus *Tenomerga* of Japan (Coleopt.:Cupedidae) Trans. Shikoku Ent. Soc. 17(1/2) : 1-4.

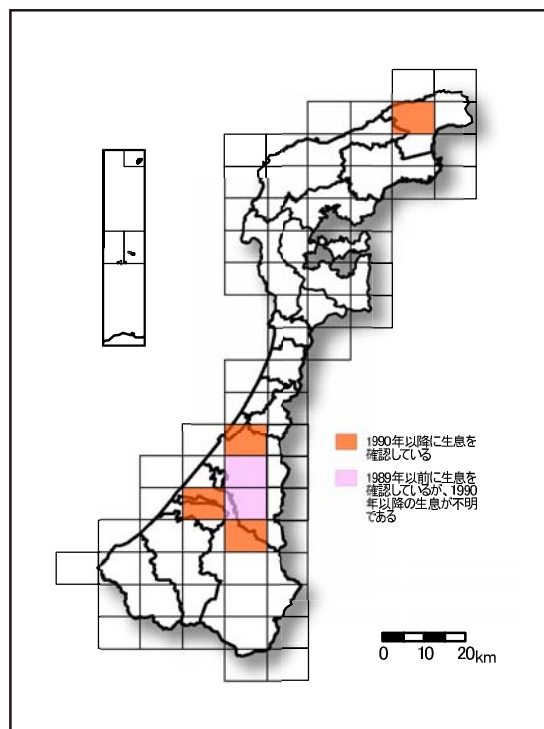
高羽正治. 1998. コウチュウ目. 石川県の昆虫 : 102-251. 石川県自然保護課.

高羽正治. 1999. 「石川県の昆虫」の追加・訂正(Ⅰ). アカハネムシ, (27) : 5-6.

富沢 章・吉道俊一・浅地哲也. 2006. 能美市昆虫調査報告書 一辰口地区の昆虫一, 42pp. 能美立博物館.



標本提供者: 高羽正治



県内の分布

セアカオサムシ

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

Hemicarabus tuberculosus (Dejean et Boisduval)

選定理由

全国的な分布は、局地的で個体数も少ない。本県では、2箇所から少数個体が採集されているのみである。

形態

体長は19~22mmで、オサムシ亜科では小型種。体色は前胸背板と上翅の一部を除き黒色、前胸背板は赤銅色の金属光沢をおびる。上翅と上翅側縁も弱い赤銅色の金属光沢をおびる。後翅は退化して飛べない。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

金沢市倉ヶ岳と金沢市坪野の2箇所から知られる。

生態

成虫は一年中見られ、成虫越冬するが、本県では6月頃に採集されている。肉食性で、歩行性の種である。

生息地の条件

湿地や池の周辺を好む傾向があるといわれているが、詳細は不明である。

生存の危機

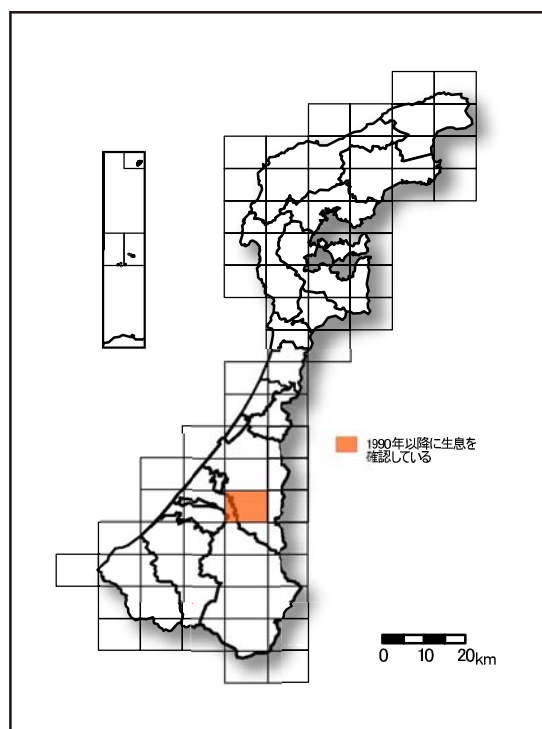
開発されやすい金沢市の低山地に生息するため、公園化や宅地化等による生息地破壊が危惧される。
(A)

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目オサムシ科. 石川県の昆虫 : 103-120. 石川県自然保護課.



標本提供者: 石川県ふれあい昆虫館



県内の分布

ハクサンクロナガオサムシ コウチュウ目オサムシ科

Leptocarabus arboreus hakusanus (Nakane)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 コクロナガオサムシの白山亜種で、白山の亜高山、高山帯にのみ分布する。

形態 体長は19～24mmである。体色は黒く、体形は細長い。

国内分布 本県と福井県の白山山系の高地にのみ分布する。

県内分布 白山山系の釈迦林道上部、お花松原、南竜馬場、室堂など標高1,700m以上の高地に分布する。

生態 成虫の出現期は7月から9月までである。他のオサムシと同様、昼間は石の下などにいて、夜間に採餌行動をとるようである。

生息地の条件 亜高山帯、高山帯で草度が少なく、岩石がごろがっているような所に多く生息する。

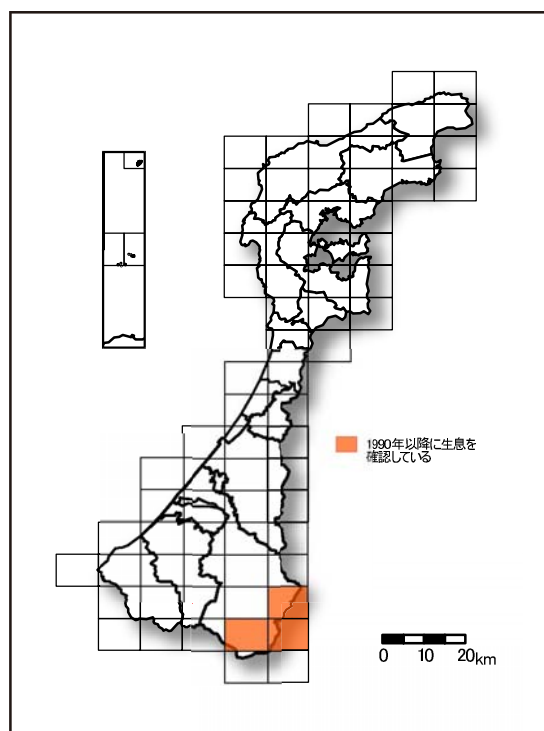
生存の危機 登山道整備等の工事や登山者の増加による露岩地への踏み込みは生息環境の悪化につながる。(A)

特記事項 生息地は白山国立公園の特別保護地区内である。

参考文献 Nakane, T. 1961. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XV. *Fragmenta Coleopt.*, (1): 1-5.
中根猛彦 1962. 日本昆虫分類図説 第2集 第3部: 59.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

タカバクロヒラタゴミムシ

Platynus takabai (Habu)

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

日本における産地は2県に限られ、得られた個体数が少ない。

形態

体長15mm程度で、黒色で平たい体形をしている。頭部と前胸背板に光沢があり、頭頂に赤い斑紋を有する。

国内分布

石川県と島根県からのみ発見されているが、記録の大部分は石川県である。

県内分布

現在のところ金沢市と津幡町の低山地だけに分布していて、金沢市では生息地が多い。

生態

成虫は湿地、休耕田、池の縁に生息していて、草の上や低木上で活動する。特に、秋にミゾソバの葉上で複数の個体が見られた。岩や土の割れ目、朽ち木で成虫越冬する。

生息地の条件

不明。

生存の危機

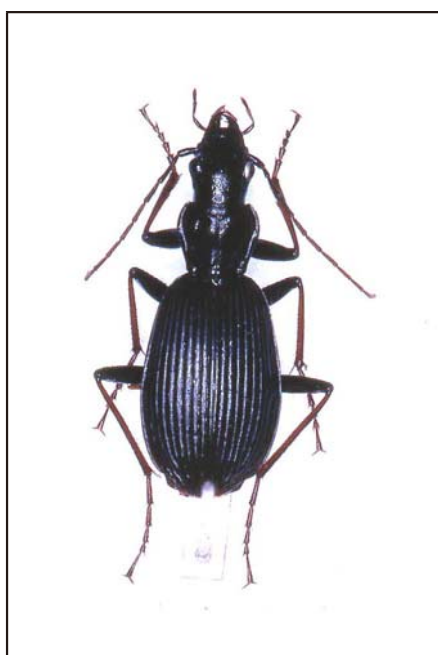
不明。(A)

参考文献

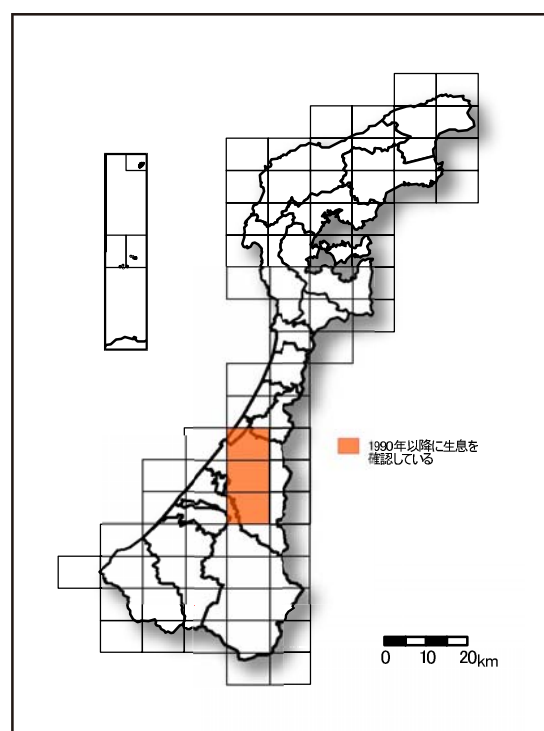
金沢市卯辰山で得られた1♂に基づき、記載された種である。

参考文献

Habu, A. 1962. Two new *Agonum* species from Japan (Coleoptera, Carabidae). Kontyu, 30 (3): 169-174.



標本提供者: 高羽正治



県内の分布

クビボソコガシラミズムシ コウチュウ目コガシラミズムシ科

Haliphus (Haliplinus) japonicus Sharp

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 県内では数箇所を確認されているのみであり、生息環境の悪化が懸念される。

形態 体長2.7～3.3mm。体型は卵形。楕円形。体色は淡黄褐色。前胸背板の基部両側の縦条は中央付近まで伸びる。前胸腹板突起先端は中央で角張る。上翅の基部は側方へあまり拡がらない。頭頂の点刻は密。

国内分布 北海道、本州、四国、九州。

県内分布 川北町、能美市、白山市（旧美川町）、金沢市、輪島市、珠洲市。

生態 新成虫は秋に発生し、成虫で越冬する。手取川下流部の細流では、春期から秋期に成虫が見られ、秋期には多数の個体を確認されている。

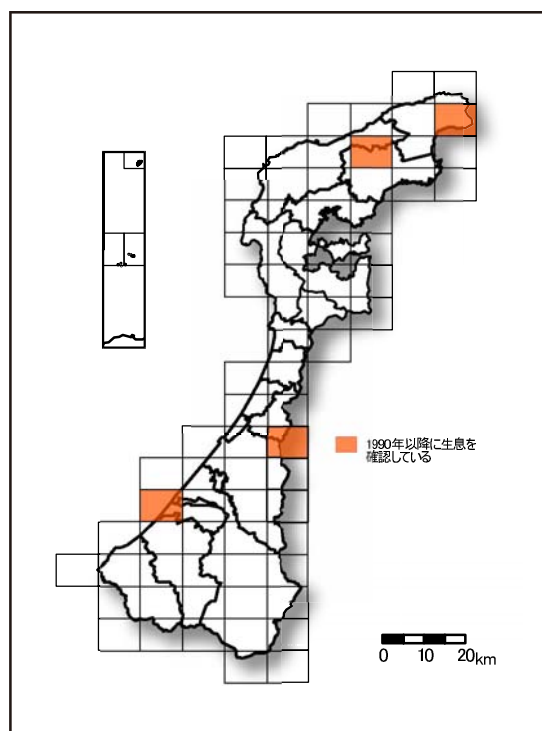
生息地の条件 水草や藻類の多く繁茂する水辺に生息する。川北町、能美市、白山市では、手取川河川敷の細流の藻類の多い岸辺で、金沢市では廃田で、珠洲市ではため池で確認された。

生存の危機 池沼の埋め立て、水質汚染、放棄水田の植生遷移、手取川河川敷の大規模な土木工事が大きな脅威となっている。（A、B）

参考文献 佐藤正孝 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書 I. 甲虫ニュース, (65) : 1-4.
中根猛彦 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2) : 61-67.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (80), こがしらみずむし科. 昆虫と自然, 22 (11) : 26-30.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヒメコガシラミズムシ

Haliphus (Liaphlus) ovalis Sharp

コウチュウ目コガシラミズムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

池沼や湿地、水田などの生息環境が、農業使用による水質汚染などのために全国的に悪化している。県内の分布も局所的であり、生息環境の悪化が懸念される。

形態

体長4.0～4.3mm。体型は長楕円形で体色は黄褐色。上翅会合線に沿った黒色部は細く、合着した中央の紋は円形であり大きくならず、基部の横紋を欠く。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、金沢市、志賀町、珠洲市に局所的に生息する。

生態

8～10月に成虫が確認されている。

生息地の条件

平野部～丘陵部の水生植物が豊富な池沼、湿地や放棄水田に生息する。

生存の危機

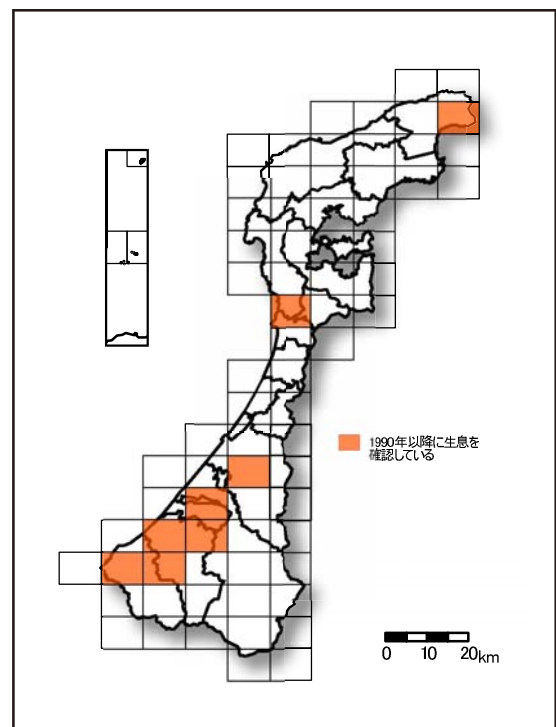
池沼、湿地の開発や管理放棄、圃場整備、水質汚染、放棄水田の植生遷移、外来種の侵入が脅威となっている。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化が保全上重要である。加賀市片野鴨池では、オオクチバス、アメリカザリガニが侵入しているため、外来種の駆除および侵入できない区域を設けるなどの保全策が必要である。(A, B, C)

参考文献

佐藤正孝 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書 I. 甲虫ニュース, (65) : 1-4.
中根猛彦 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2) : 61-67.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (80), コガシラミズムシ科. 昆虫と自然, 22(11) : 26-30.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ルイスツブゲンゴロウ

Laccophilus lewisius Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的に減少傾向にある。県内でも生息地が比較的局所的であり、9箇所で確認されている。生息地の環境変化による減少のおそれが高い。

形態

体長3.9～4.7mm。体型は逆卵形で幅広い。背面は淡黄褐色～黄褐色。腹面は黄褐色。上翅には6～7条の暗褐色～黒色の輪郭をもつ縦条が並列するが、不規則に断続、合着する。上翅は微細な網状印刻に密に覆われやや強い光沢がある。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、金沢市、津幡町、宝達志水町、中能登町、志賀町、輪島市、珠洲市。

生態

成虫は4～10月に確認されている。ツブゲンゴロウと同所的に生息する場合に、生息環境が悪化すると、本種が先に確認されなくなるようである。

生息地の条件

平野部～丘陵部において浮葉植物などの豊かな植生がある、池沼、湿地、放棄水田などの止水域に生息する。

生存の危機

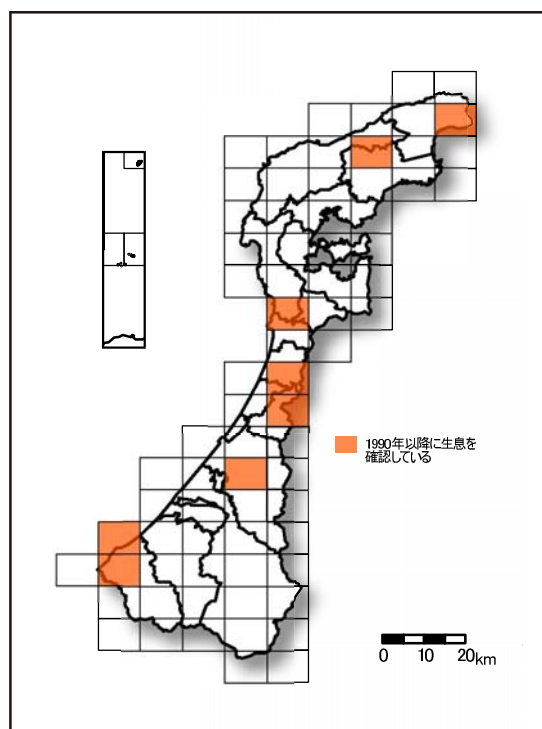
池沼、湿地の開発、ため池の管理放棄。各種排水や農薬による水質汚染。放棄水田の植生遷移。アメリカザリガニ、オオクチバスなどの外来種の侵入、コイの導入が脅威となっている。加賀市の生息地では、アメリカザリガニの侵入により、他の多くの水生生物とともに本種も絶滅した。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化が保全上重要である。外来種の侵入防止および、早期の駆除も重要である。(A, B, C)

参考文献

森 正人・北山 昭 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.
富沢 章 2006. 中能登町(旧鳥屋町)春木で得られた昆虫類. とっくりばち, (74) : 61-64.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

クロゲンゴロウ

Cybister brevis Aubé

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

北日本では比較的残存しているが、南日本の太平洋側では、各県の生息地数は数箇所程度と減少している。県内でも、加賀地方、奥能登では個体数は少なくないが、生息地は限られている。

形態

体長20～25mm。体型は卵型。背面は一様に緑色～褐色を帯びた黒色で、光沢がある。体下面は黒～暗赤褐色である。腹部第3～4節の両端に黄褐色の小紋を具える。上翅には3点刻列があり、翅端付近に小黄褐色紋を有する。オスの前附節の基部3節は吸盤状となる。幼虫は体長約45mmのいも虫状。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、金沢市、七尾市、能登町、珠洲市。

生態

成虫は水草の茎に5～7月頃に産卵する。幼虫は池沼の浅い部分などで5～8月に出現し、他の水生昆虫などを捕食する。老熟すると岸辺に上陸し土中で蛹化する。新成虫は8～9月に出現し、水域内で10月頃に越冬し、3年ほど生存する。成虫も肉食である。700mlほどは飛翔し、ため池や水田を移動して生活する。

生息地の条件

平野部～丘陵地の水生植物の豊富な浅い池沼、湿地、水田、放棄水田、水田脇の水たまり、緩やかな流れの水路に生息する。小規模で浅い水域にも生息する。

生存の危機

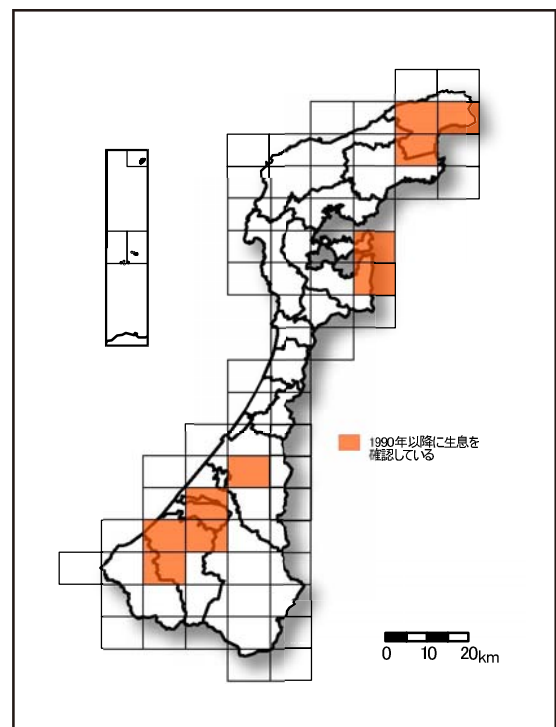
池沼の開発による消失、ため池の管理放棄、コンクリートによる護岸、ほ場整備による乾田化、水質汚染、外来種の侵入、採集圧が脅威となっている。生息地であった小松市金平のため池が埋め立てられた例があり、今後は関係者への生息地の公開による保全が必要と思われる。放棄水田の湛水化や水田脇の水たまりの創出、ため池の維持管理の継続などによる水辺ネットワークの維持が保全上重要である。(A, B, C)

参考文献

西城 洋 2001. 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動. 日本生態学会誌, 51 (1) : 1-11.



写真提供者：小幡英典



県内の分布

ミズスマシ

Gyrinus japonicus Sharp

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

かつては全国的に普通にみられたが減少傾向が著しい。県内でも2000年代の確認例は減少している。

形態

体長6.0～7.5mm。体型は紡錘形で背面はやや膨隆し体下面は平坦。上翅は11条の点刻列を有する。背面に銚色の光沢がある。前脚は捕獲脚、中・後脚は扁平な遊泳脚でいずれも黄褐色。眼は上下に2分される。幼虫は約18.5mmで細長く、やや扁平。体色は白色で頭・胸部は黄～黄褐色である。

国内分布

日本固有種。北海道、本州、四国、九州、対馬、種子島に分布する。

県内分布

加賀市、小松市、白山市（旧鶴来町）、能美市、金沢市、津幡町、かほく市、宝達志水町、羽咋市、中能登町、七尾市、輪島市、穴水町、珠洲市。

生態

成虫は止水域の開放水面を巡回しながら泳ぎ、水面に落ちた昆虫を捕食し、驚くと水中へ潜る。5～6月頃に水草の葉の表面に産卵し、1週間ほどで孵化した幼虫は水中や水面の小昆虫を捕食する。4～5週で老熟すると岸边に上陸し、高さ10cm以内の部分にある植物などに泥と分泌物で蛹室をつくって蛹化する。数日後に羽化した成虫は飛翔して移動、分散する。成虫は岸边の泥中で越冬する。

生息地の条件

平地～山地の、水生植物の豊富な池沼、放棄水田や流れの緩やかな水路。

生存の危機

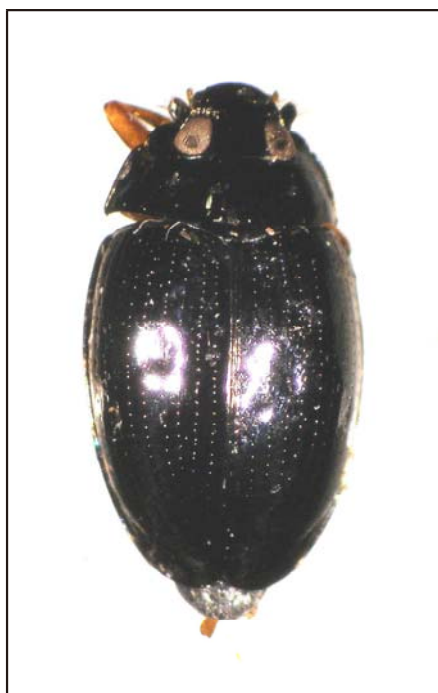
ため池のコンクリートなどによる護岸化、管理放棄、植生遷移、水質汚染（特に油など界面活性剤の流入）、外来種の侵入などが脅威である。水質悪化の防止、土の岸边の維持、ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化による水辺のネットワークの維持が保全上重要である。（A、B）

参考文献

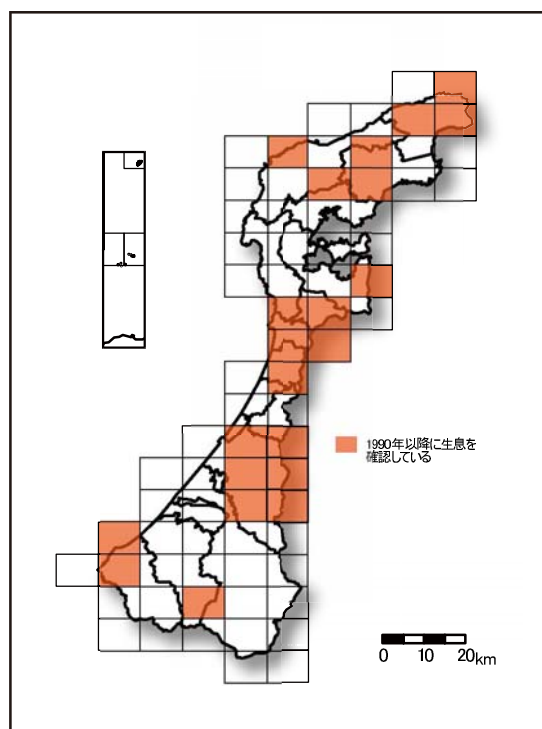
恒遠マキ 1936. ミズスマシ科2種の生活史. 昆蟲, (10) : 302-312.

佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説 1-3. 甲虫ニュース, (37) : 1-5, (38) : 1-2, (39) : 1-4.

富沢 章 2006. 中能登町（旧鳥屋町）春木で得られた昆虫類. とっくりばち, (74) : 61-64.



標本提供者：西原昇吾



県内の分布

ガムシ

Hydrophilus acuminatus Motschulsky

コウチュウ目ガムシ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由

かつては普通種であったが、全国的に減少傾向にある。県内でも、1990年代までは丘陵部では珍しくなく、能登では局所的に多くの個体が見られたが、2000年以降の減少傾向が著しい。

形態

体長33~40mmで日本最大のガムシ類。体型は紡錘形で、体は黒色、背面は膨隆し、やや銅色の光沢を帯びる。触角や髭は黄褐色。腹面はやや赤みを帯び、毛がない。脚は細く、中・後脚は各跗節の内側に黄褐色の長毛が密生する遊泳脚である。幼虫はいも虫状で約70mm。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、南西諸島。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、金沢市、津幡町、かほく市、志賀町、中能登町、七尾市、輪島市、穴水町、能登町、珠洲市。

生態

6月頃に卵嚢を水草に付着させる。幼虫はモノアラガイなどを捕食し、老熟すると岸辺に上陸し土中で蛹化する。成虫は藻や水草、植物質の腐植物などを摂食する。成虫は飛翔し、繁殖期にはため池から水田や水路へ移動し、灯火にも飛来する。3~11月まで確認され、水中で越冬する。

生息地の条件

平野部から丘陵部の水生植物の豊富な池沼、水田、放棄水田、水田脇の水たまり、掘り上げなどに生息する。

生存の危機

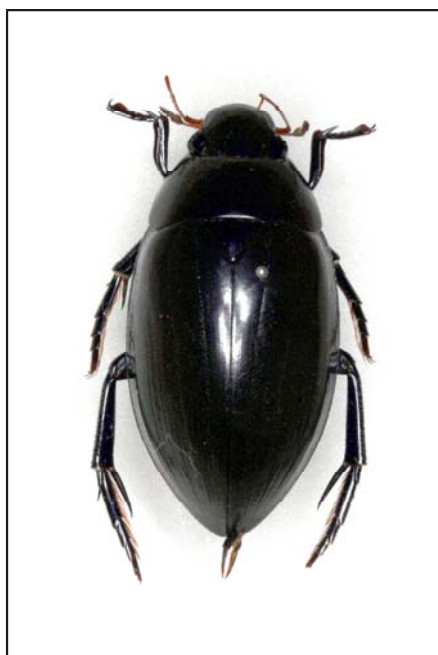
池沼の開発による消失、ため池の管理放棄、各種排水や農業による水質汚染、圃場整備による乾田化、外来種の侵入、街灯の増加などが脅威となっている。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化、外来種の侵入防止と早期の駆除が保全上重要である。(A, B, C)

参考文献

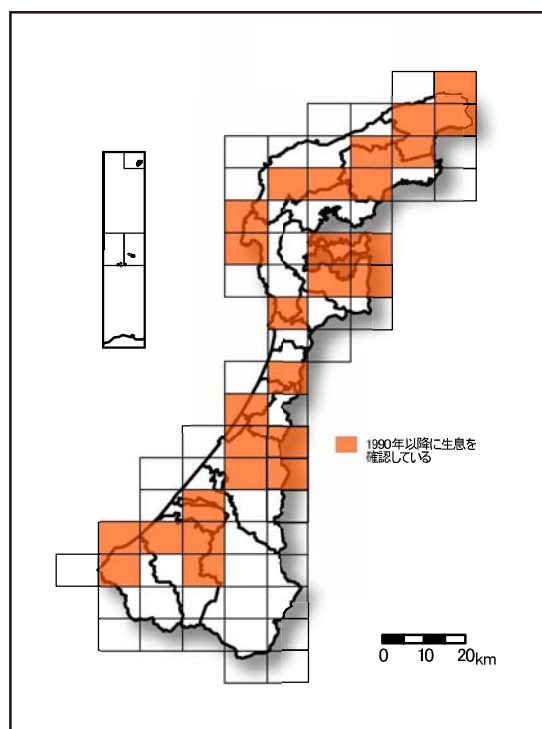
細井 操 1939. ガムシの幼虫及び蛹に就て. 昆虫界, (67) : 509-513.

細井 操 1947. ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky の生活史. 植物及動物, 7 (11) : 43-50.

西城 洋 2001. 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動. 日本生態学会誌, 51 (1) : 1-11.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ツヤハマベエンムシ

Eopachylopus ripae (Lewis)

コウチュウ目エンムシ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

海浜性エンムシ類の中では個体数が少ないため、護岸工事などの開発行為による影響を受けやすく、個体数の減少が危惧される。

形態

体長2.0～3.0mm。体全体が黒色のものと、上翅に赤紋をもつものがある。脛節が長くて頑丈な棘に覆われていて、他の海浜性エンムシ類との区別は容易である。

国内分布

北海道から南西諸島まで広く分布している。

県内分布

文献上は白山市（旧美川町）、小松市、能美市（旧根上町）、金沢市、内灘町および志賀町からの記録がある。その他、加賀市片野海岸と羽咋市一の宮海岸で採集確認している。

生態

成虫は4月から9月頃まで見られる。海岸に打ち上げられた魚の死がいなど、動物性の腐敗物に集まる。

生息地の条件

良好な砂浜のある海岸であることが重要で、砂利の多い海岸には生息しない。

生存の危機

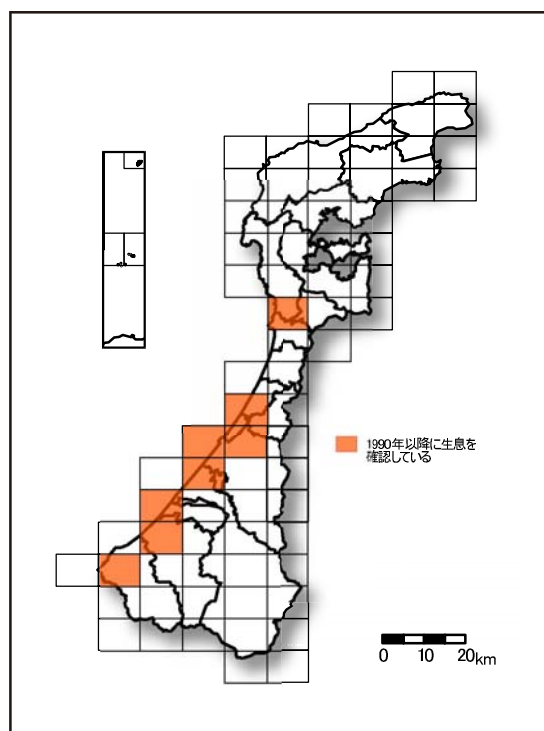
護岸工事などの開発による砂浜の改変は、本種の生存に大きな影響を与える。（A）

参考文献

大原昌宏 1998. 日本産エンムシ上科概説区. 甲虫ニュース, (122) : 1-3.
大原昌宏 2004. 海浜性エンムシ. 昆虫と自然, 39 (12) : 12-15.



標本提供者: 古道俊一



県内の分布

ヒメハマベエンムシ

コウチュウ目エンムシ科

Hypocacculus (Nessus) asticus (Lewis)

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

本種はハマヒルガオの分布する海浜植物帯に生息するが、もともと個体数が少ないうえに、さまざまな開発行為による海浜植物帯の減少が、本種の生存に大きな影響を与えている。

形態

体長2.1~2.4mm。前頭一面に細かい皺を持つことで他の海浜性エンムシ類と区別できる。

国内分布

本州、四国、九州に分布するが全国的に記録は少なく、その分布は局所的である。

県内分布

文献記録は、1964年5月にかほく市（旧宇ノ気町）で採集された1例のみである。近年は2007年6月に羽咋市ノ宮海岸で確認されたに過ぎない。このように分布は局所的で、個体数もかなり少ない。

生態

県内では成虫は初夏に確認されている。ハマヒルガオなどの海浜植物の根際深くに生息し、他の海浜性エンムシ類のように砂浜帯に打ち上げられた動物性腐敗物の下から見いだされることはほとんどない。

生息地の条件

ハマヒルガオなどの海浜植物帯があること。

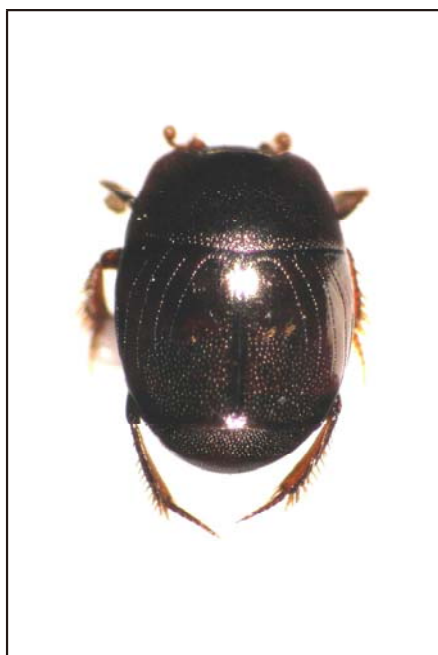
生存の危機

さまざまな開発行為、護岸工事により海浜植物帯が減少することは、本種の生息場所が減少することを意味しており、本種の生存にとって大きな脅威となる。（A）

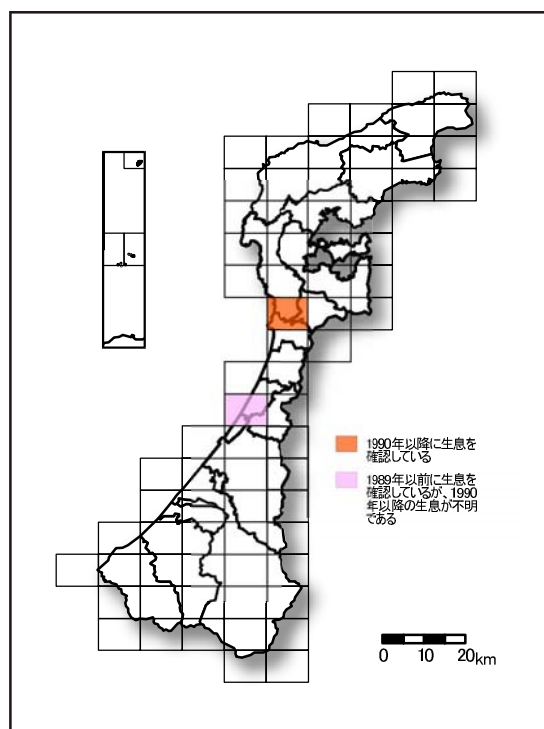
参考文献

大原昌宏 1998. 日本産エンムシ上科概説Ⅷ. 甲虫ニュース, (121) : 1-6.

大原昌宏 2004. 海浜性エンムシ. 昆虫と自然, 39 (12) : 12-15.



標本提供者: 古道俊一



県内の分布

ミヤマツヤハダクワガタ (ツヤハダクワガタ中部亜種)

Ceruchus lignarius monticola Lewis

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

生息箇所、個体数ともきわめて少ない。

形態

体長は大顎を含め13～21mmの中型のクワガタムシ。体色は黒色で艶があり、前胸背板は方形状で、頭部の複眼後方には横皺がある。上翅には明瞭な10条の縦の隆線を持つ。オスの頭部は大きく、大顎は短大で内歯が1本ある。その内歯は原亜種より前方にあり区別点となる。メスは頭部、大顎とも小さい。

国内分布

本州（本県産は本州中部亜種で、中部地方に分布する）。

県内分布

白山市（旧白峰村）の白山山系山地帯に分布。

生態

標高1,000m以上のブナ帯に生息し、成虫は6月下旬～8月に現れ、カツラやミズナラの幹を這う。幼虫は、広葉樹や針葉樹の赤枯れ菌に侵された腐朽部を食する。本県では、カツラとミズナラが食樹として記録されている。成虫は晩夏に羽化した後、そのまま蛹室にとどまり越冬する。冬期の材内には、成虫、終齢幼虫、中齢幼虫が同時に見られることから、幼虫期間は2年以上かかるものと思われる。成虫は灯火にも飛来すると聞かすが、樹液には集まらない。

生息地の条件

標高1,000m以上のブナを中心とする原生林が残されていること、および幼虫の食樹となる赤枯れ菌に侵された枯死木が存在することが重要である。

生存の危機

生息地が白山国立公園内なので生息環境は保たれている。しかし、採集圧がかかる可能性が大きい。

特記事項

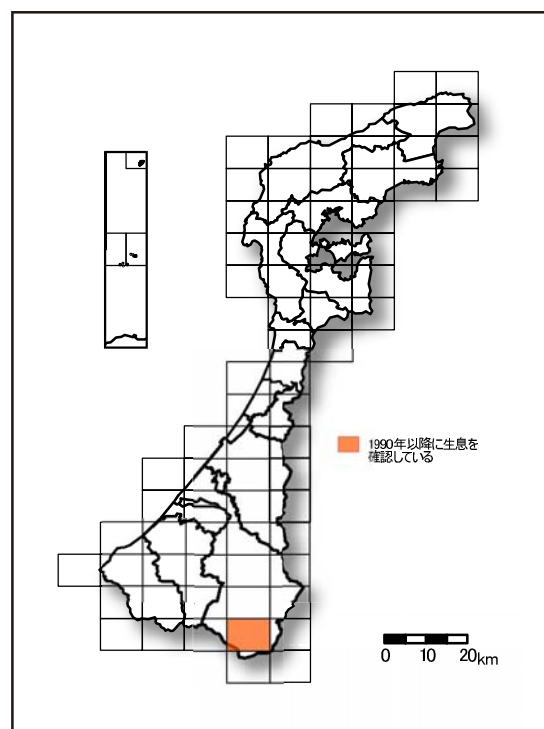
中部地方を除く、本州、北海道、四国と九州に各別亜種を産する。（A）

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目クワガタムシ科. 石川県の昆虫：146. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

コブナシコブスジコガネ

Trox nohirai Nakane

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

最近になり、本種の発生場所として、フクロウ類営巣後の樹洞が大きな役割を果たしていることが報告されたが、樹洞ができるような大木は各種開発による伐採で減少傾向にあり、それに伴って本種の減少が懸念される。

形態

体長5.5～7.2mm。本属に特徴的な体表面のコブや毛塊を欠く。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。

県内分布

最近、白山麓での観察事例が報告されたほか、釈迦林道における記録が1例知られている。いずれも白山麓周辺でのみ確認されている。

生態

成虫は5月頃から9月頃まで見られる。従来より樹洞内のフレーク状になった腐植堆積物に発生することが知られていたが、その後の調査で樹洞内に残されたフクロウのペリットや動物死体を食餌のひとつとしていることが確認された。また、フクロウの営巣後間もない樹洞よりも、営巣から数年が経過した樹洞を好むようで、条件がよければ100個体を超える個体が見いだされることもある。

生息地の条件

フクロウ類が営巣できるような大木と、フクロウ類の繁殖が可能となる自然の豊かな森林があること。

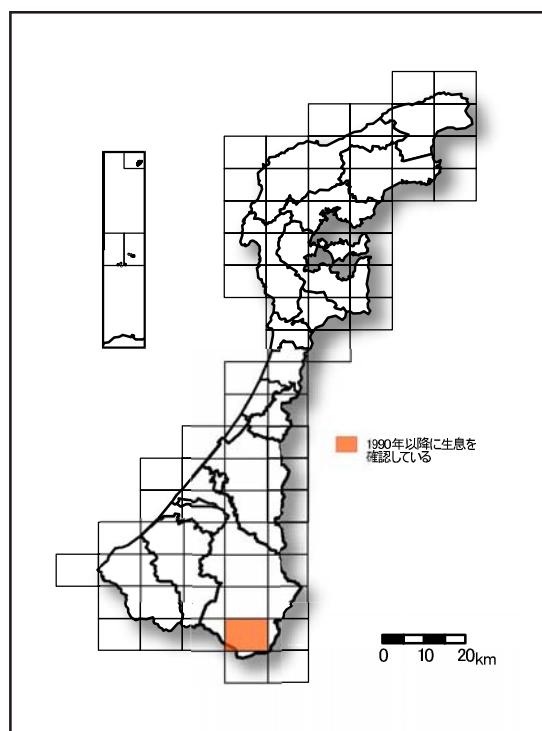
生存の危機

開発によりフクロウ類の営巣できるような大木や自然が消失することは、それに依存している本種の生息にも大きな影響を与える。

参考文献

稲垣政志・稲垣信吾 2007. コブナシコブスジコガネ *Trox nohirai* Nakane の生態について. 鯉角通信, (15) : 7-10.

写真（図）はありません。



県内の分布

オオセンチコガネ

コウチュウ目コガネムシ科

Ceotrupes auratus auratus Motschulsky

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

県内では分布地が一地域に限定され、個体数も少ない。採集圧によると思われる個体数の減少が認められる。

形態

体長は16～22mm。体形はタマゴ型でガッチリし、強い金属光沢を持つ。本種は分布域による色彩変異が顕著で、瑠璃、緑、青、赤とさまざまな色彩変異が認められている。本県産は赤色系で、金赤色～濃赤色の美しい金属光沢を持つのが特徴である。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。

県内分布

津幡町、宝達志水町、羽咋市、中能登町（旧鹿島町）。三国山～宝達山～碁石ヶ峰にいたる山塊に分布する。

生態

成、幼虫とも食糞性である。成虫は4月下旬から11月中旬まで見られ、獣糞や人糞に集まる。本種はニホンジカの分布と重なることが多いが、県内の生息地にシカは生息していない。

生息地の条件

エサとなる動物の糞の確保が重要であり、動物が住めるような自然環境を保つことが重要である。

生存の危機

エサとなる糞が多いとは思えない地域に分布しているためか、他県と比べて個体数は少なく、今後の個体数の維持が危惧される。本種の生息地は平坦な開けた尾根沿いに多いので、土地造成が進行している所がある。また、放牧場の縮小や廃止も気がかりであり、採集圧も問題である。（A）

特記事項

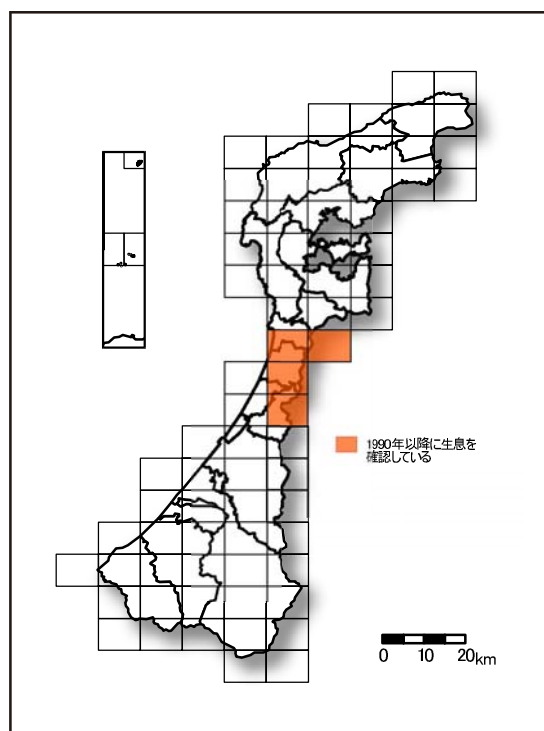
屋久島には、別亜種のヤクシマルリセンチコガネが分布する。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目コガネムシ科. 石川県の昆虫：147-152. 石川県自然保護課
富沢 章 2001. オオセンチコガネの採集記録. 翔, (151)：2.



写真提供者：富沢章



県内の分布

オオチャイロハナムグリ コウチュウ目コガネムシ科

Osmoderma opicum Lewis

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由 幼虫の発生場所が樹洞という特殊な環境であるため、局所的に生息し個体数も少ない。

形態 体長は23～32mmの大型のハナムグリ。体色は黒褐色でつやがある。オスはメスと比べ、前胸背板は広く、中央の2縦隆条は強く稜状となる。メスの腹端は突出する。

国内分布 本州、四国、九州、屋久島。

県内分布 白山市。白山山系の標高450～2,000mの地域に生息する。

生態 ブナ帯からダケカンバ帯に生息する。成虫は7～8月頃に現れ、樹洞内やその周辺に止まったり、飛翔している。また、成虫の周囲には、強いジャコウの独特の臭気が漂っている。幼虫は樹洞の腐朽部を食し、成虫になるまで2年を要す。本県において本種が確認されている樹種は、トチノキ、ブナ、カツラ、ミズナラ、キリ、ヤマナシ、サウグルミ、コメツガと多種にわたっている。

生息地の条件 幼虫の発生場所となる大木の樹洞が多く存在する広大な原生林。

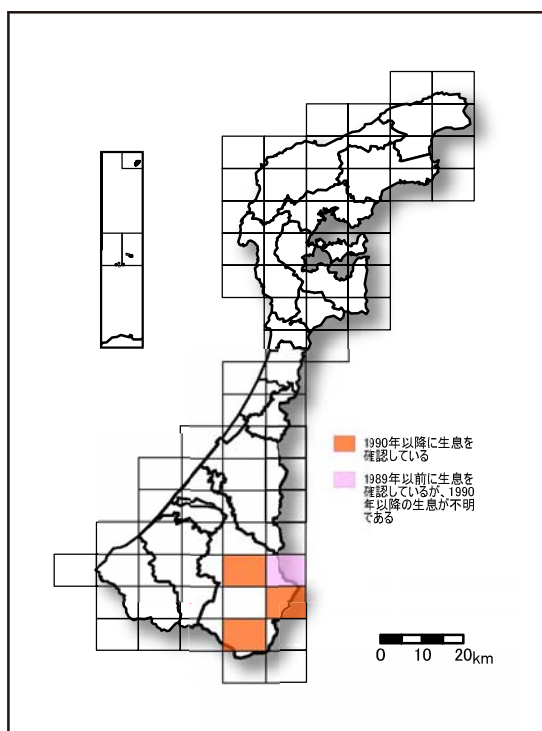
生存の危機 ブナ帯下部の450mから900mの生息地では、本種の繁殖可能な樹洞のある大木は減少していて、個体数は激減している。広大な原生林の保全が重要である。(A)

特記事項 生息地の大部分は白山国立公園内に位置する。

参考文献 高羽正治 1998. コウチュウ目コガネムシ科. 石川県の昆虫: 147-152. 石川県自然保護課



写真提供者: 富沢章



県内の分布

アオマダラタマムシ

コウチュウ目タマムシ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

Nipponobuprestis amabilis (Snellen van Vollenhoven)

選定理由

日本海側の分布北限に近い種で、個体数が少ない。また、本種の生息地域での開発が急速に進んでいる。

形態

体長は16～29mm。タマムシとしては大型で美麗種。体色は、緑の地に黄、橙、赤などの金属光沢の斑模様がある。上翅には明瞭な縦隆脈が認められ、2対の丸い陥凹紋がある。メスの腹端は丸く、オスは三角形にえぐられる。

国内分布

本州、四国、九州、対馬。

県内分布

加賀市から能美市にいたる平地～丘陵地。白山市以北にも、食樹のソヨゴが多く分布しているが、まだ、生息が確認されていない。

生態

成虫は6～8月頃に現れ、ソヨゴの葉を後食する。また、ソヨゴの衰弱部や新しい枯れ木に集まる。幼虫はソヨゴの枯死部や立枯木を食し、成虫になるまで2年以上を要する。晩夏に羽化した後、そのまま蛹室で越冬する。

生息地の条件

平地から丘陵地において、ソヨゴが自生する広い林の存在が重要である。

生存の危機

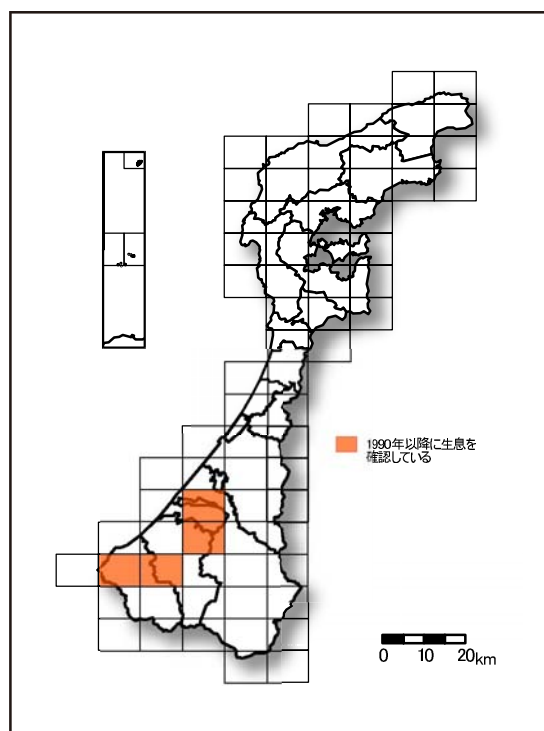
本種の生息地およびその周辺において、開発が急速に進んでいる。(A)

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目タマムシ科. 石川県の昆虫：155-157. 石川県自然保護課.



写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

エサキンヘリタマムシ

Scintillatrix kamibochiana (Obenberger)

コウチュウ目タマムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

個体数が少なく、日本海側の分布西限に近いと思われる。

形態

体長9～16mmの中型のタマムシで、美麗種。体色は黄色味がかった緑色で、細かい黒点を散らし、上翅外縁は金橙色をおびる。オスの腹端は半月形にえぐられ、メスは丸く先端に小さい切れ込みがある。

国内分布

北海道、本州。

県内分布

白山市。旧鶴来町より旧白峰村までの手取川流域に分布する。

生態

成虫は5月下旬～8月に見られ、ヤナギ類やハンノキ類の葉を後食する。幼虫はヤナギ類の生木やその衰弱部を食し、成虫になるまで2年以上を要する。発生地では、林道沿いのカワヤナギや河川敷のネコヤナギに食害が見られる。

生息地の条件

河川流域にヤナギ類の群落があること。

生存の危機

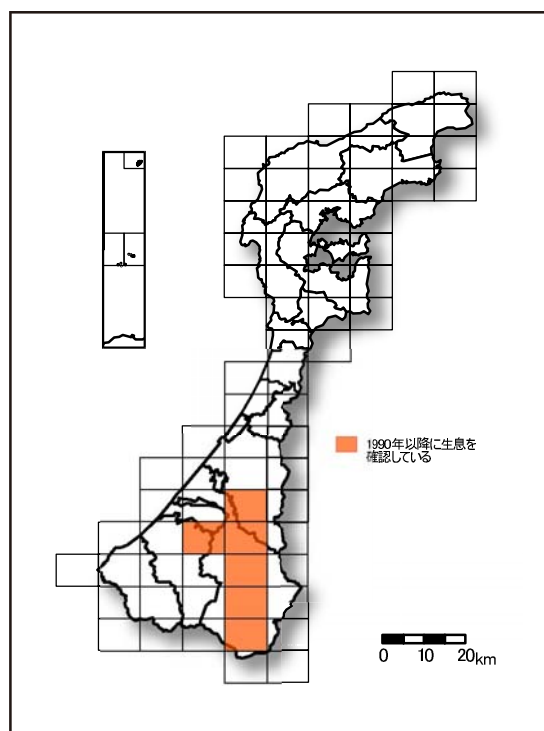
現在は生息範囲が広いが、今後、河川の改修工事等による食樹の減少が懸念される。(A)

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目タマムシ科. 石川県の昆虫：155-157. 石川県自然保護課.



写真提供者：富沢章



県内の分布

ヒメボタル

Hotaria parvula Kiesenwetter

コウチュウ目ホタル科

石川県カテゴリ 準絶滅危惧

国カテゴリ なし

選定理由

石川県における生息地が加賀南部に限られていて、今後、森林開発による環境変化が生ずる可能性がある。

形態

体長6mm前後で、ヘイケボタルに似ているが、前胸背は淡赤色である。

国内分布

本州、四国、九州に分布する。

県内分布

加賀市、小松市、白山市の低山地から山地に生息するが、発生地は限られる。

生態

成虫は、6月下旬から7月上旬にかけて出現する。オスはフラッシュ光を放ちながら飛翔するが、メスは後翅が退化し飛べない。幼虫は陸生で、オカチョウジガイ等の陸生貝類を食するといわれているが、本県では確認されていない。

生息地の条件

溪流に比較的近く、湿気が多い杉林の林床で草や灌木が生育している所に生息する。エサとなる陸生の貝類が生息することも重要である。

生存の危機

現在のところ生息地における本種の個体数は比較的安定しているが、本種がエサとしている陸生貝類は分布が局地的で、環境の変化に敏感なため、森林の開発や荒廃による影響を受けやすい。一部の生息地では、開通した道路の街灯照明が本種の生態に影響を与えている。(A)

特記事項

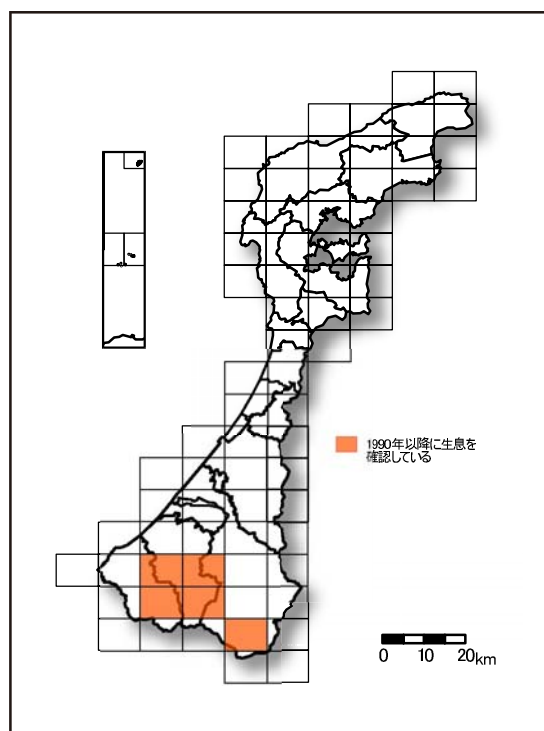
石川県のヒメボタルはいわゆる「小型ヒメボタル」で、現在のところ杉林以外の林床からは見つからない。

参考文献

大場信義 2004. ホタル点滅の不思議. 199pp. 横須賀市自然・人文博物館発行, 特別展示解説書.
加藤明宏 2007. ヒメボタルの調査. とっくりばち, (75) : 22-24.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ババジョウカイ

Athemus babai (Ishida)

コウチュウ目ジョウカイボン科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

局地的分布を示し、開発されやすい湿地に生息する。

形態

体長7～8mmである。前胸背は黄色で中央に黒紋を有する。上翅には黒地に黄褐色の縦すじがある。

国内分布

関東以西の本州、四国、九州に分布する。

県内分布

加賀市、小松市、金沢市、志賀町の低山地の湿地から生息が知られている。

生態

成虫の出現期は4月から5月である。湿地帯の草地に生息し、他の小昆虫を捕食する。幼虫は林床に生息し、肉食性である。

生息地の条件

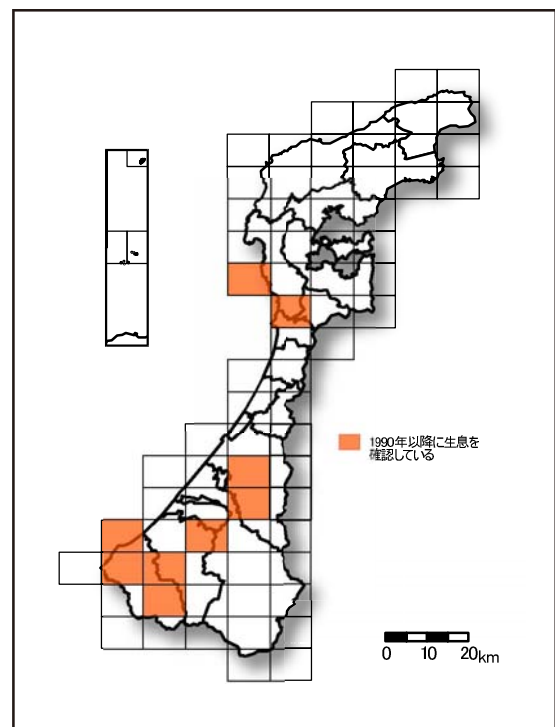
低山地において、湿地とそれに続く草地が存在することが重要である。

生存の危機

本種の生息する湿地帯は開発等により、埋め立てられる可能性が高い。また、植生の遷移や乾燥化による湿地の消滅も大きな脅威となる。(A, B)



標本提供者: 高羽正治



県内の分布

ヤマトヒメメダカカッコウムシ コウチュウ目カッコウムシ科

Neohydnius hozumii Nakane

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由

護岸工事や宅地開発等にもなうヨシ原の減少や消失により、ヨシ原に固有に生息する本種もまた減少傾向にある。

形態

体長5.0～6.0mmで、前胸の色彩には褐色型と黒色型があるが、県内で見られる個体は大部分が黒色型である。上翅には1対の黒色斑紋があるが、その大きさや形には変異がある。

国内分布

本州、四国および九州に局所的に分布する。2003年には青森県から記録されており、同県が分布の北限となっている。日本固有種。

県内分布

加賀市、小松市、金沢市および七尾市で局所的に確認されている。

生態

成虫は6月頃に出現し、飛翔と歩行を交えて俊敏に動き回る。他の小さな昆虫類を捕食すると考えられている。ヨシ原に固有に生息するが、幼虫期についての詳細な生態はわかっていない。

生息地の条件

ヨシ原があること。

生存の危機

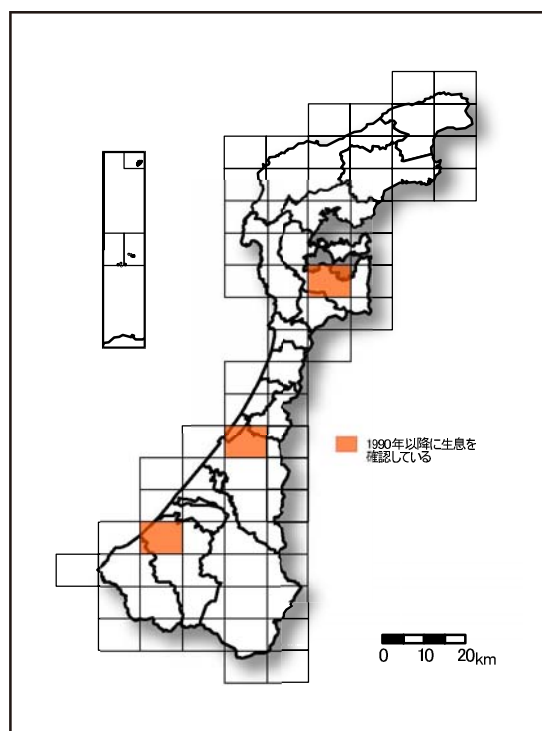
護岸工事、干拓事業や宅地開発等によるヨシ原の減少や消失が、本種の生息に大きな打撃を与えている。ヨシ原の開発は全国的に行われており、本種の個体数もまた全国的に減少傾向にある。(A)

参考文献

吉道俊一 2006. 石川県におけるヤマトヒメメダカカッコウムシ（ホヅミカッコウムシ）事情. とつくりばち, (73) : 1-5. 石川むしの会.



標本提供者: 吉道俊一



県内の分布

クロズハマベゴミムシダマシ コウチュウ目ゴミムシダマシ科

Epiphaleria atriceps Lewis

石川県カテゴリ 準絶滅危惧

国カテゴリ なし

選定理由 近年の県内の砂浜環境における詳細な調査にもかかわらず、内灘町宮坂以外からは本種を見いだすことができず、分布が極めて局所的であり、個体数も多くない。

形態 体長約 5.0mm。体色は黄褐色で、頭部、前胸背板の中央後部と上翅の中央前部が黒色を呈する。

国内分布 本州、四国、九州に分布する。

県内分布 内灘町宮坂の権現森海水浴場周辺から得られているのみである。

生態 海浜性のゴミムシダマシで、初夏から秋季にかけて、砂浜に漂着した魚の死体、海藻や流木の下などに見られる。やや湿った砂から見つかることが多い。

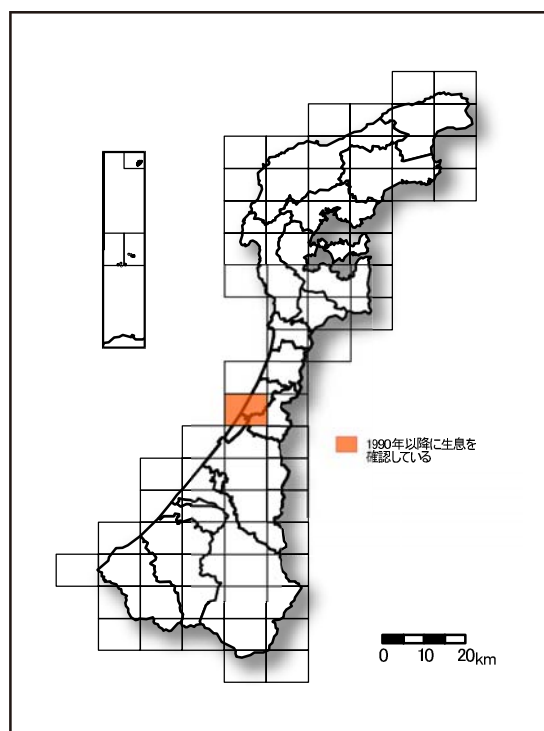
生息地の条件 海藻や流木などの隠れ場所となるものが漂着し、その下に湿った状態の砂が維持されていること。乾燥した砂は本種の生息には適さないようである。

生存の危機 護岸工事のほか、海水浴客の投棄する様々なゴミ類、化学薬品等の入った容器の漂着、砂浜への車両の進入などによる砂浜環境の汚染や破壊は、局所的に分布する本種にとって脅威となる。(A)

参考文献 高羽正治 1995. 石川県の砂丘地にいる甲虫. アカハネムシ, (15) : 5.



標本提供者: 吉道俊一



県内の分布

フタスジカタビロハナカミキリ コウチュウ目カミキリムシ科

Brachyta bifasciata japonica (Matsushita)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由

本来、個体数が少ない種である。ヤマシャクヤクと密接な関係を持つ本種は、ヤマシャクヤクの減少とともに、生息地、個体数が激減している。

形態

体長は16～18mm。中型のハナカミキリで、体形は太く短い。頭部および前胸は黒色、上翅は白黄色地に3対の黒い斑紋を持つ。脚は黒と黄白色の2色に分かれる。触角は太く、第2～5節が白黄色で他は黒色。その長さはオスで上翅の3/4に達する。

国内分布

本州、四国。

県内分布

白山市（左礫、木滑、一里野、中宮温泉、新岩間）。

生態

成虫は5～6月上旬にブナ帯下部のヤマシャクヤクの花に飛来し、花粉を食す。幼虫はその塊根部分や地中の朽ち木を食するといわれているが、その生態は、不明な点が多い。

生息地の条件

自然林の残る山地において、ヤマシャクヤクが自生していることが重要である。

生存の危機

山野草としてヤマシャクヤクが採取されることが多くなり、そのことが本種の減少を招く一因となっている。他に、林道建設や土木工事も脅威となっている。（A）

特記事項

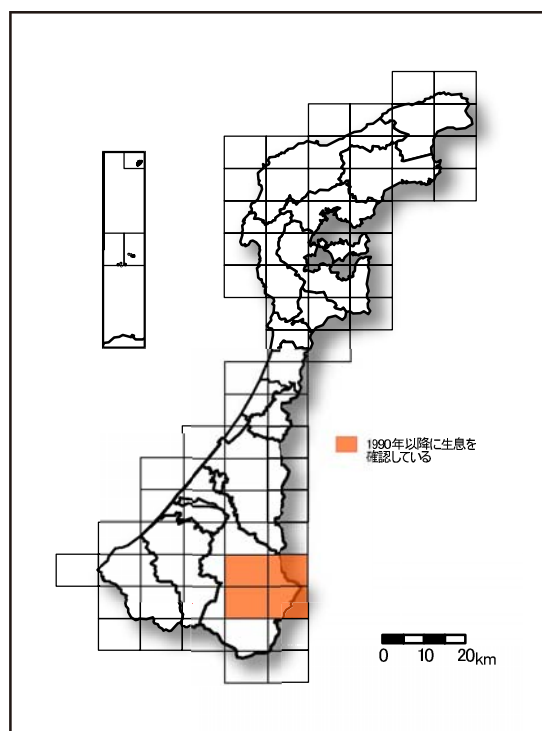
北海道には別亜種がいる。

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



写真提供者：野中勝



県内の分布

トラフカミキリ

Xylotrechus chinensis (Chevrolat)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

丘陵地や低山地におけるクワの古木の減少により、個体数が激減した。

形態

体長は17～26mm。大型のトラカミキリで、がっしりした体形である。頭部は黄色で、前胸背板は前方より黄、黒、赤褐色、黒の順に横帯をもつ。上翅は黄色の地に黒の横斑紋を持ち、スズメバチ類に擬態している。触角は太くて短く、オスでも体長の半分程度である。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、琉球列島。

県内分布

白山市、金沢市、津幡町。

生態

成虫は7～8月に出現し、クワの生木に集まる。幼虫は生木の衰弱した太い部分の樹皮下を食する。

生息地の条件

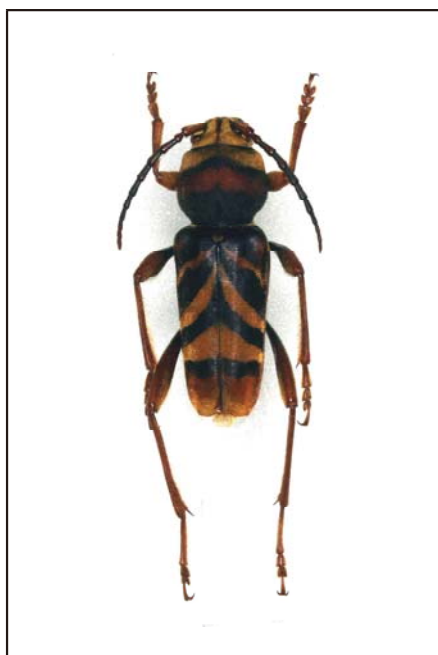
幼虫はクワの古木の衰弱部を食するため、古木が多く残されていることが重要である。

生存の危機

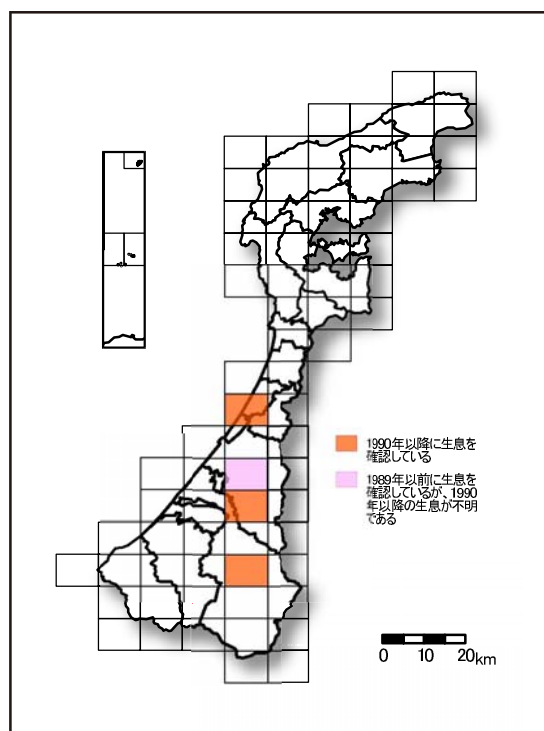
かつては、クワの害虫として養蚕家に嫌われたほどであり、低山地のクワの古木によく見られた。しかし、養蚕が行われなくなったこと、里山の開発が進んだことなどにより、クワの木が減少し、本種の個体数が激減した。(A, B)

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫 : 197-217. 石川県自然保護課.



標本提供者：入場登



県内の分布

ニセリングカミキリ

Oberea mixta Bates

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

本県は、本種と近縁のシラハタリングカミキリとの分布境界線に近い。本県での記録は1例のみであり、きわめて稀である。

形態

体長は12～18mm。体形は筒状で細長い。前胸背板は橙黄色で、上翅は黒色、上翅基部は橙黄色部がある。脚は橙黄色、頭部と触角は黒く、触角の長さはオスで翅端にとどく程度である。

国内分布

本州（愛知県以西）、四国、九州。

県内分布

輪島市（旧門前町白禿）。

生態

成虫は5～8月に見られ、スイカズラの葉脈を後食し、幼虫はその茎を食する。成虫の後食痕は、特徴的であり、本種の生息の指標となる。

生息地の条件

スイカズラの群生地があること以外は不明である。

生存の危機

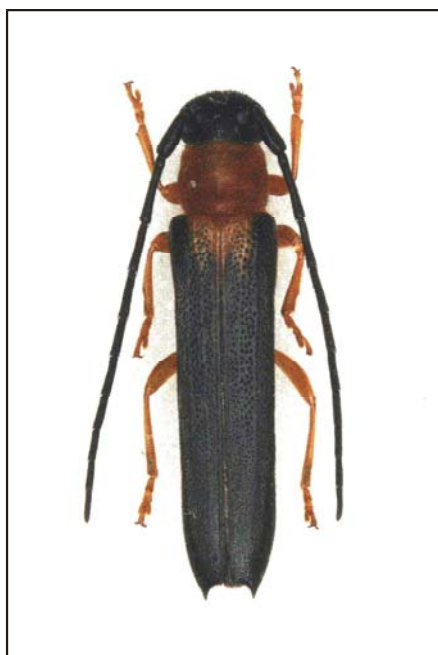
生息地における当面の環境変化はないが、生息地は廃田が広がる林縁環境であり、開発の恐れのあることは否定できない。（A）

特記事項

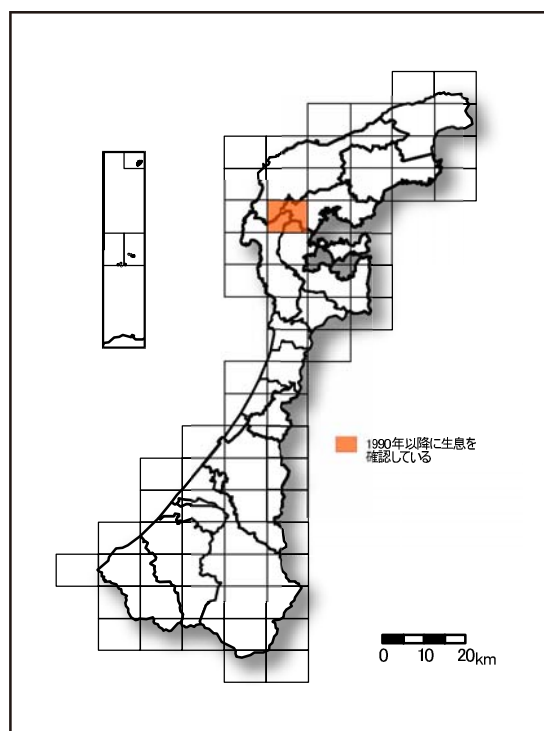
リングカミキリ属は本県から6種記録されているが、ホソツツリングカミキリ以外はよく似ているので、同定には注意を要する。

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課。
井村正行 2005. 石川県におけるニセリングカミキリの初記録報告. とっくりばち, (73)：31.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヌタッカゾウムシ

Trichalophus nutakkanus (Kono)

コウチュウ目ゾウムシ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

本県では白山の高山帯のみに生息し、国内分布の西限にあたるうえ、個体数が少ない。

形態

体長は13mm程度である。体形は細長い流線型である。体色は黒いが、白い粉のような模様を有している。

国内分布

北海道と本州の高山帯に分布する。

県内分布

白山の頂上付近（標高2,500～2,700m）からのみ得られている。

生態

頂上付近の石の下から採集されている。行動は緩慢であるが、生態の詳細はわかっていない。

生息地の条件

高山帯で岩石が多く、草度がまばらな所に生息する。

生存の危機

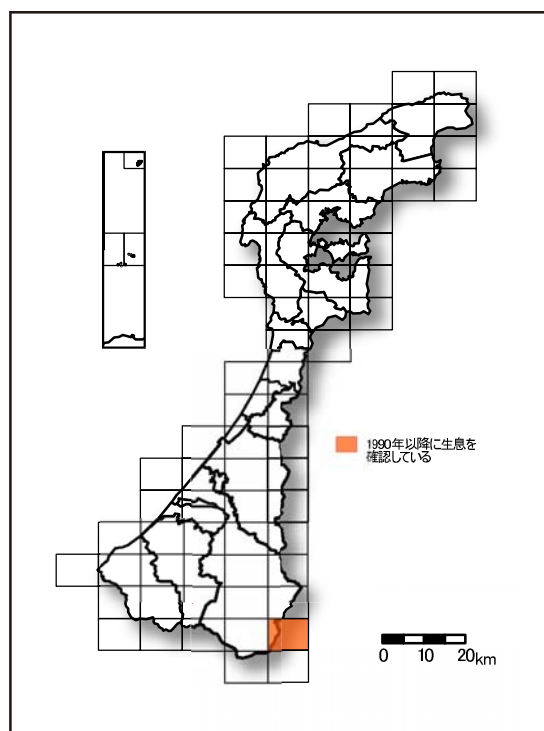
登山道整備等の工事や登山者の増加による露岩地への踏み込みは生息環境の悪化につながる。高山帯のみに分布するため、白山における生息域が狭く生息基盤が脆弱である。（A）

特記事項

生息地は白山国立公園特別保護地区内にある。



標本提供者：高羽正治



県内の分布

ウマノオバチ

Euurobracon yokahamae (Dalla Torre)

ハチ目コマユバチ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由 日本全土に広く分布するが、県内の個体数は少なく、希少種といえる。

形態 体長は15～24mmで、体全体は黄赤褐色をしており、腹部は暗褐色を呈することがある。長く伸びた産卵管は、体長の6.5～9倍に達する。

国内分布 北海道、本州、四国、九州に広く分布する。

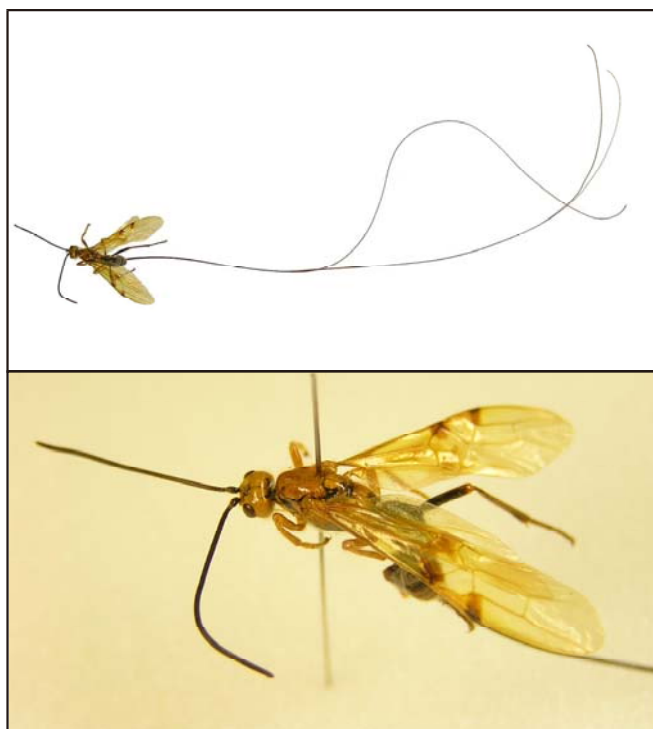
県内分布 白山市、金沢市、旧高松町（未発表）、穴水町での記録がある。

生態 シロスジカミキリ幼虫の穿孔を見つけ、長く伸びた産卵管を挿入して幼虫体表面に産卵する。

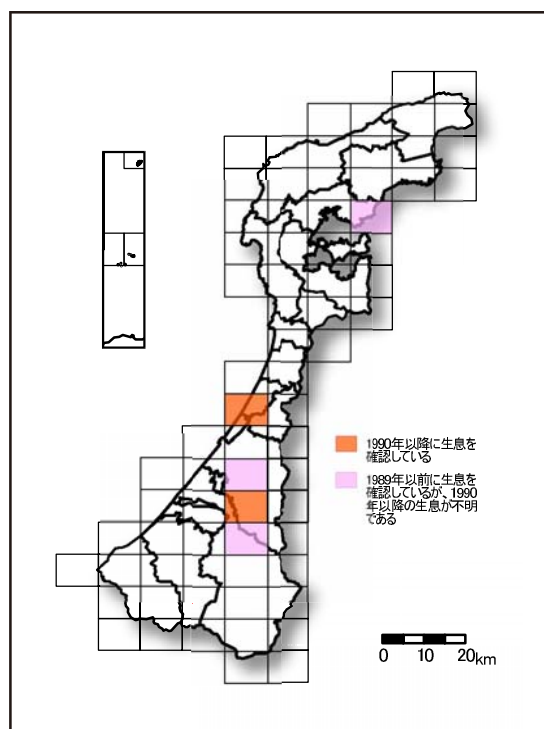
生息地の条件 シロスジカミキリのすむ雑木林に生息する。穴水町の記録はクリ園内である。

生存の危機 宿主のシロスジカミキリが里山の雑木林に生息するため、開発等により里山の広葉樹林が破壊されれば、本種の生息が危ぶまれる。（A）

参考文献 平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻：515. 北隆館. 東京.



標本提供者：富樫一次



県内の分布

キアシクロハラボソコマユバチ ハチ目コマユバチ科

Meteorus flavicoxa Maeto

石川県カテゴリ 準絶滅危惧

国カテゴリ なし

選定理由 国内では3道県でしか採集されておらず、本県が分布の西限となっている。また、採集例も少ないことから、比較的珍しい種といえる。

形態 体長は10mm内外で、メスの産卵管が長いのが特徴である。体は黒色、脚は黄色を呈している。

国内分布 北海道（豊平峡、野幌）、山形県長者原、石川県白山でしか採集されていない。

県内分布 県内では、白山の標高1,500～1,700mの区間で採集されているのみである。

生態 鱗翅類の幼虫に寄生するものと思われるが、種類については不明である。

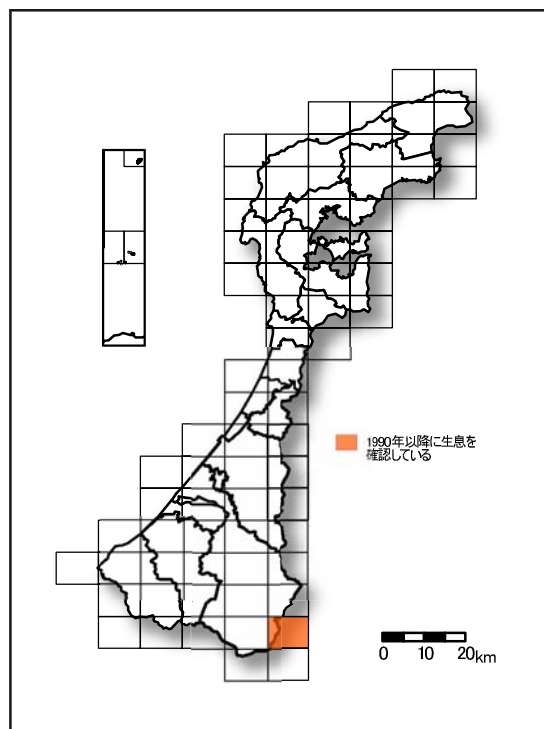
生息地の条件 亜高山帯に生息する。

生存の危機 白山の特別保護地区に生息しているため、現在のところ生存を脅かす要因はないと思われる。

特記事項 白山の特別保護区地内に生息する。

参考文献 Maeto, K. 1986. Systematic Studies on the Tribe Meteorini from Japan (Hymenoptera, Braconidae) II. The *corax* Group of the Genus *Meteorus* HALIDAY. Kontyu, Tokyo, 54(3): 405-413.
富樫一 2002. 加賀白山初記録の昆虫類（第4報）. 石川県白山自然保護センター研究報告 第29集: 7-16.

写真（図）はありません。



県内の分布

クロモンアメバチ

Dicamptus nigropictus (Matsumura)

ハチ目ヒメバチ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

日本全土に広く分布しているようであるが、個体数は少なく、稀である。

形態

体長は約20mmで、体色は茶褐色（鉛色）をしており、第3腹節に黒い紋があるのが特徴である。翅は透明であるが、縁紋部は後縁を除いて黄色をしている。

国内分布

栃木県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、愛媛県、福岡県、鹿児島県（奄美大島）、沖縄県にて採集されている。

県内分布

白山市の舟岡山、宝達志水町にて採集記録がある。

生態

マツカレハに寄生することが知られており、灯火で採集されている。

生息地の条件

マツなどの針葉樹林の発達した地域に生息する。

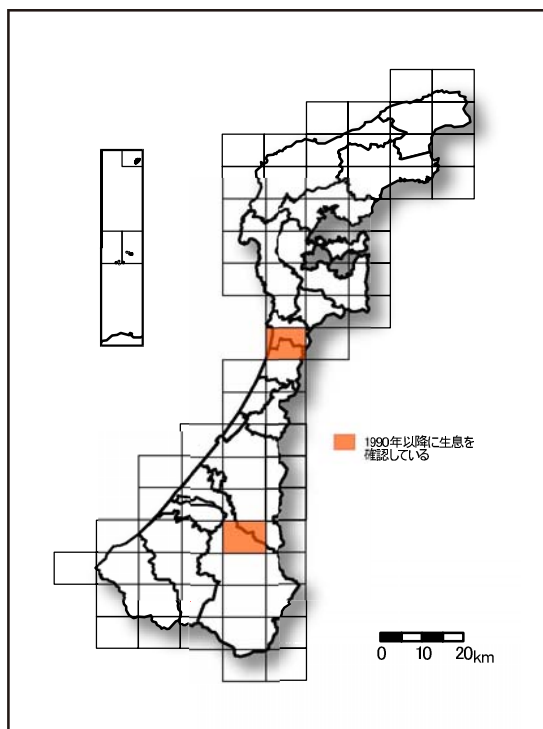
生存の危機

マツの害虫駆除のための薬剤散布によって、本種の生存が危ぶまれる。（A）

参考文献

富樫一次 1998. ハチ目. 石川県の昆虫 : 276. 石川県自然保護課
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第三巻 : 512. 北隆館. 東京.

写真（図）はありません。



県内の分布

エサキムカシハナバチ

Colletes esakii Hirashima

ハチ目ムカシハナバチ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

本県は国内分布上の東北限となっている。

形態

体長12mmほどで、腹部背面に黄褐色短毛を密生する。腹部第1背板の基半部には、淡黄灰色の短毛を密生する。

国内分布

石川県、福井県、鳥取県、島根県、鹿児島県に分布する。

県内分布

小松市、白山市、金沢市、津幡町、志賀町にて採集記録がある。

生態

崖の斜面や粘土質土壌の平坦地に生息し、ツクシハギに訪花しているのが観察されている。

生息地の条件

粘土質土壌の所に営巣する。

生存の危機

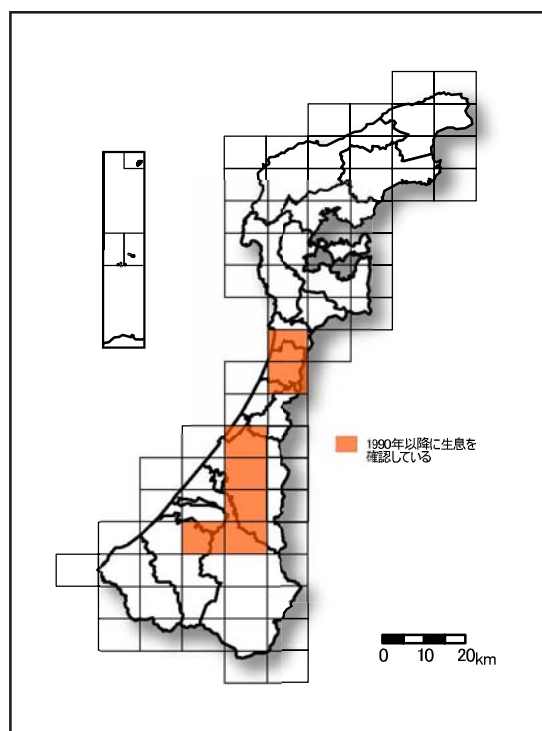
崖の場合、道路に面した斜面に営巣するので、刺害を防ぐため薬殺駆除されてしまうことがある。また、宅地造成、道路建設などで、営巣地がなくなることもある。(A)

参考文献

Ikudome, S. 1989. A revision of the Family Colletidae of Japan (Hymenoptera: Apoidea). Bull. Inst. Minami-Kyusyu Reg. Sci., 5:43-314.
富樫一次 1991. 石川県産ムカシハナバチ類の分布資料. 福井虫報, (8): 21-25.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻: 573. 北隆館. 東京.



標本提供者: 富樫一次



県内の分布

カニギンモンアミカ

Neohapalothrix kanii Kitakami

ハエ目アミカ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

国内および県内における分布が局限されている。

形態

オスの体長は6mm内外で、翅長は6～6.5mm。メスの体長は4.5～5mm、翅長は6～6.5mmである。幼虫の腹背が扁平である。改称前の種名はカニアミカ。

国内分布

石川県、長野県、岐阜県、和歌山県に分布する。

県内分布

白山市渡津～若原までの大日川と杖川で生息が確認されている。

生態

年1化性で、成虫は6～7月に出現する。幼虫はやや流速のある溪流の水底の礫面上で固着生活をする。

生息地の条件

水質の良い流域に生息する。

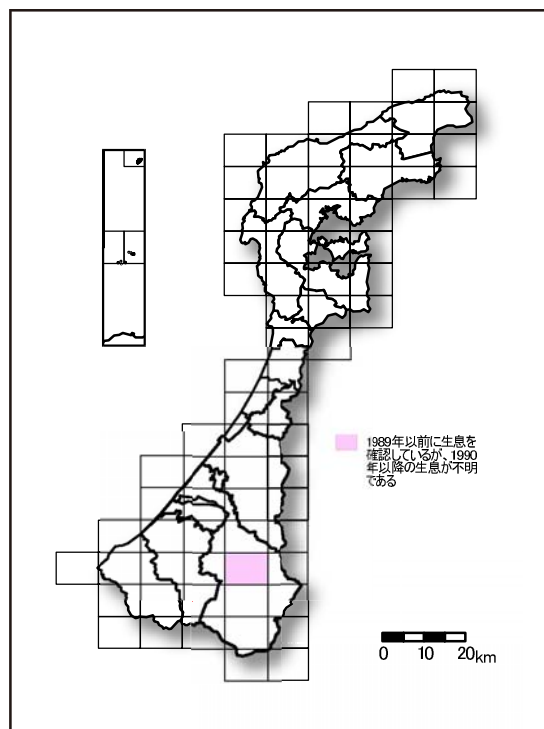
生存の危機

河川改修や土砂の流入、水質汚染が進めば、生存が脅かされる。(A)

参考文献

富樫一次 1960. 手取川水系に産するアミカ類. 生物研究(福井), 4(1): 1-2.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第三巻: 384. 北隆館. 東京.

写真(図)はありません。



県内の分布

ニホンアミカモドキ

Deuterophlebia nipponica Kitakami

ハエ目アミカモドキ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

本州、九州でわずかの分布地が知られているだけで、著しく減少しているとみられている。また世界的にもごくわずかの種しか存在しない特異なハエ目昆虫で、学術的にも貴重である。

形態

体長1.8~4.0mmで細長く、体色は暗褐色。単眼を欠く。翅は非常に幅広く、また薄くて網目状のシワが走っており、翅脈が退化している。口も退化していて、成虫になってからは餌をとらない。脚は細長く、ほとんど歩くことはできない。オスの触角は非常に長く、体長の3倍に達する。

国内分布

本州と九州に分布する。

県内分布

1971年10月に白山市小嵐谷（手取ダム右岸）で幼虫1個体が採集された記録がある。

生態

幼虫は山地溪流の急流部の石上に生息する。成虫は数時間の寿命しかなく、野外では容易に発見できない。オスの出現はまれで、単為生殖の可能性も示唆されている。

生息地の条件

水のきれいな山地溪流の存在が必要である。夏の水温が18℃以下、秋の水温が4℃以上の川に生息するという調査例がある。

生存の危機

溪流の土石流や林道建設で溪流環境が悪化すると絶滅する恐れがある。かつては京都周辺の溪流でも多産していた所があったが、溪流環境の悪化で、現在は全国的にも少数の幼虫が採集されているのみといわれる。（A）

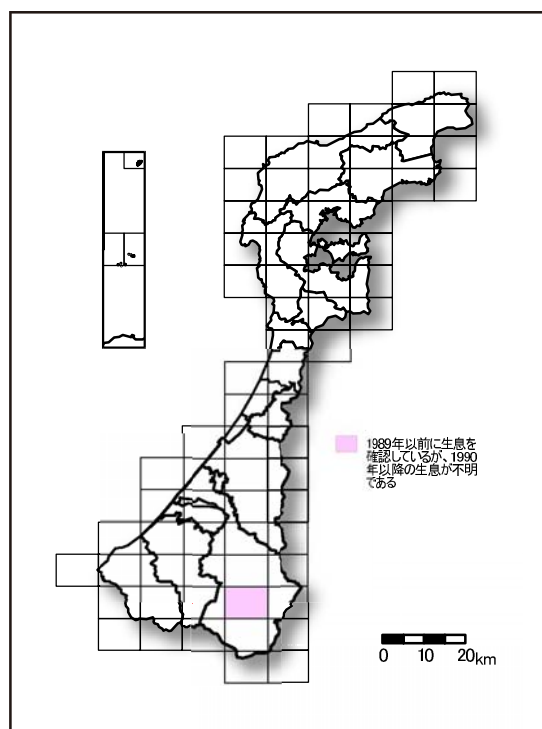
参考文献

谷田一三 1975. 白山周辺の河川における水生昆虫目録(1). 白山自然保護センター研究報告, 第2集: 65-75.

西尾規孝 2001. ニッポンアミカモドキの生活史. まつむし, (91): 83-89. まつもと虫の会誌.

林 利彦 2006. ニホンアミカモドキ. 改訂・日本の絶滅のおそれある野生生物 昆虫類 (環境省編), 139pp. 自然環境センター. 東京.

写真(図)はありません。



県内の分布

タシマツルギアブ

Acrosathe tashimai Nagatomi et Lyneborg

ハエ目ツルギアブ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

土木工事の影響を受けやすい海浜にすむうえ、生息地が局所的である。

形態

体長10mm内外、胸部及び腹部は暗褐色をしており、白色の軟毛で覆われている。

国内分布

北海道（斜里町、サロマ湖）、新潟県、石川県、福岡県、佐賀県、鹿児島県。

県内分布

1996年に能美市山口の海浜で採集された記録が唯一であるが、現在も生息しているか不明である。

生態

海浜性のアブで、小昆虫を捕らえ体液を吸う。

生息地の条件

海浜植物群落の広がる砂丘地に生息する。

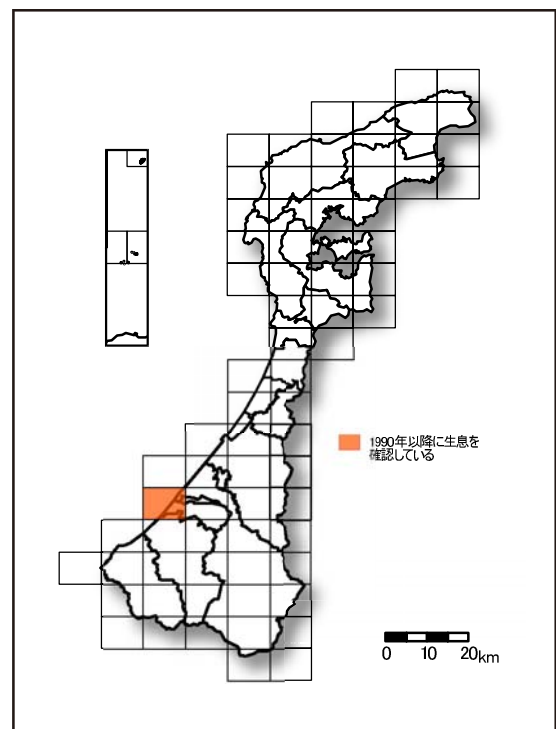
生存の危機

海浜の浸食や護岸工事により、海浜植物が消滅すると絶滅する恐れがある。（A）

参考文献

Nagatomi, A. and Lyneborg, L. 1988. The Japanese *Acrosathe* (Diptera, thenanidae). *Kontyu*, 56: 600-617.

写真（図）はありません。



県内の分布

ギフチョウ

Luehdorfia japonica Leech

チョウ目 アゲハチョウ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

日本特産種で、本州本島にのみ生息している。本県での生息地は少なくはないが、いずれの地域においても土地開発などにより、生息地は狭められている。

形態

開張50mm程度の中型種で、モンシロチョウほどの大きさである。黄色と黒のだんだら模様で、後翅外縁には橙色と青色の斑紋が並び、左右に一对の赤斑とやや長い尾状突起がある。

国内分布

北限は秋田県の鳥海山麓、西限は山口県萩市付近で、東京・神奈川地区、山梨・静岡地区（富士川流域）に孤立分布域がある。

県内分布

能登地方には分布せず、金沢市を通過する北陸自動車道以南の山地に広く分布している。しかし、金沢市戸室山・キゴ山周辺とその北西部一帯、手取川ダム以奥右岸、吉野谷村中宮集落以奥、標高1,000mを越える地域での生息は確認されていない。

生態

主に落葉広葉樹林に生息し、ヒメカンアオイ、ナタデラカンアオイを食草としている。年1回3月下旬から発生し、5月中旬まで見られる。成虫は、明るい林内を飛び、山頂部や尾根筋、伐採跡地などに集まる。卵は、カンアオイ類の新葉裏面に10個程度が並んで産み付けられ、2週間程で孵化する。幼虫期は40日程、地表近くで蛹化し、そのまま越夏越冬する。

生息地の条件

林床にカンアオイ類が豊富に生え、春は明るく夏は薄暗い落葉広葉樹林をおもな生息地としている。金沢市周辺では、管理が行き届いたモウソウチク林も重要な生息地となっている。

生存の危機

おもな生息場所となっている里山の落葉広葉樹林は、土地開発が最も行われ易い場所である。また、柴刈りや下刈りなどの人手が入らなくなったことによって森林が荒廃し、生息場所は狭められつつある。（A、B）

特記事項

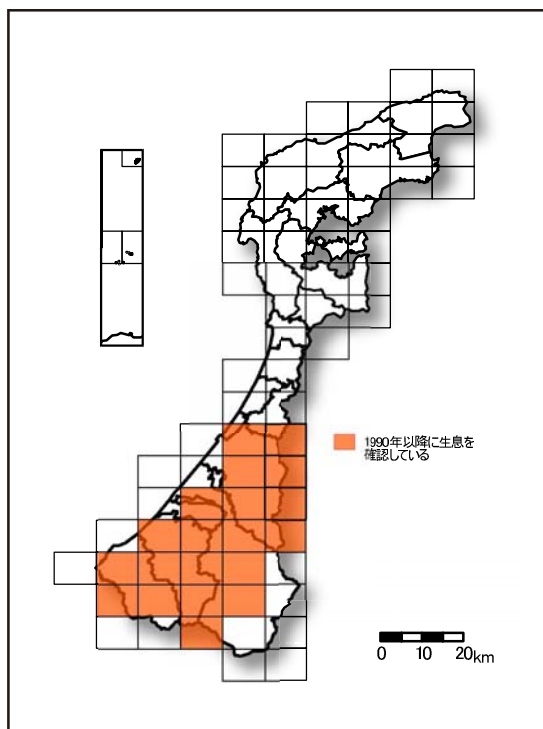
Luehdorfia（ギフチョウ）属は極東の特産種で、ギフチョウは日本の本州本島にのみ生息する。

参考文献

福田晴夫ほか 1982 ギフチョウ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）：76-80. 保育社. 大阪.



写真提供者：松井正人



県内の分布

ホシチャバネセセリ

チョウ目セセリチョウ科

Aeromachus inachus inachus (Menetries)

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

絶滅危惧 I 類

選定理由

丘陵、低山地の生息地は、近年急速に失われている。

形態

開張25mm内外の小型種。翅表は茶褐色で前翅には白色の点列がある。裏面は後翅が黄褐色で前後翅ともに白色の点列がある。

国内分布

本州と対馬に分布している。福井・石川県境付近の生息地は飛び離れた場所で、周辺は分布の空白地帯になっている。

県内分布

食草は県内に広く見られるにもかかわらず、現在は手取川以南の丘陵、低山地で分布が確認され、特に小松市、能美市に生息地が多い。

生態

年2回発生し6月中旬から9月上旬まで見られるが、小型であり飛翔が敏速なので、その存在にはなかなか気付かない。林間の小さな草地や道路沿い、林の周辺で見られ、各種の花に集まる。幼虫は木陰に生える貧弱なミヤマアブラススキを食べ、幼虫で越冬する。県内での食草は、ミヤマアブラススキしか知られていない。

生息地の条件

丘陵、低山地の明るい雑木林やその林縁部が生息場所となっているが、人手が加わった明るい林であれば、スギ林やアカマツ林でも発生する。

生存の危機

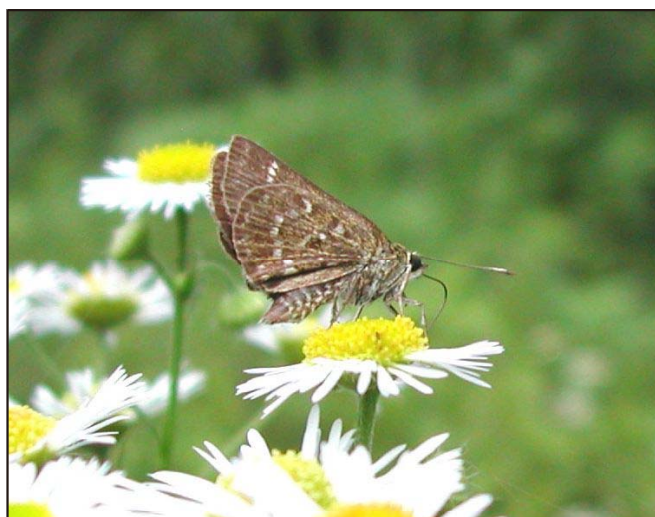
主な生息場所となっている里山の落葉広葉樹林は、土地開発が最も行われやすい場所である。また、柴刈りや下刈りなどの人手が入らなくなったことによって森林が荒廃し、生息場所となる明るい林が少なくなっている。(A, B)

特記事項

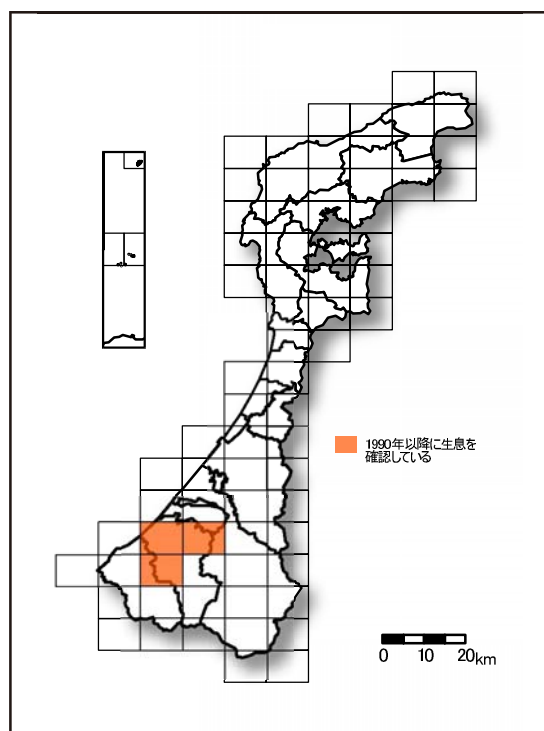
良好な里山環境の標徴種として重要。

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ホシチャバネセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑 (IV) : 220-223. 保育社. 大阪



写真提供者: 大脇淳



県内の分布

オオチャバネセセリ

Polytremis pellucida pellucida (Murray)

チョウ目セセリチョウ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

かつては、普通に見られる種でいたるところで観察されたが、1990年代から観察数が減少している。

形態

開張35mm程の小型種。翅表は黒褐色で後翅裏面の白斑がジグザグに並ぶ点で近似種と区別できる。

国内分布

北海道から九州まで広く分布するが、全国的に減少している。

県内分布

加賀から能登にかけて平地から山地まで広く分布し普通に観察されたが、観察数が減っている。

生態

年2回発生し、6月上旬から10月上旬まで観察されている。敏速に飛翔し各種の花を訪れ、特にアザミ類、ヒメジョオン、オカトラノオ、ウツボグサに集まる。幼虫は、主としてメダケやササなどタケの仲間を食べる。

生息地の条件

適度に人手が加わった、明るい疎林的环境と思われる。

生存の危機

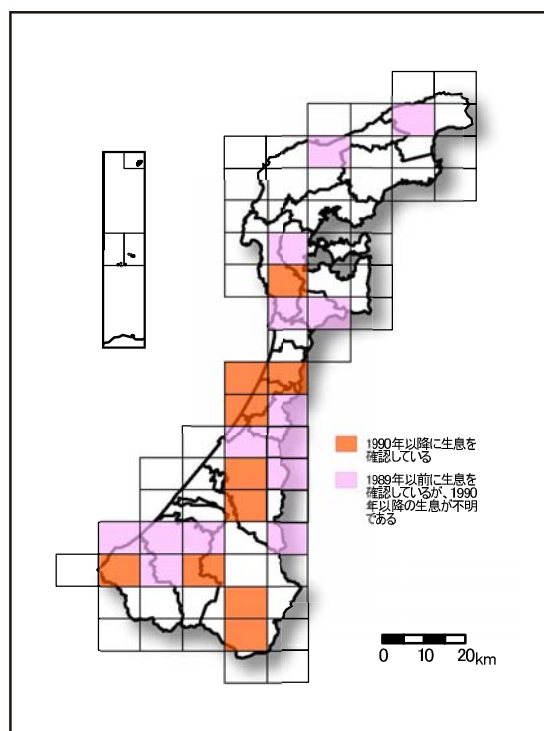
森林に人手が加わらなくなったことが影響していると思われる。(A、B)

参考文献

福田晴夫ほか 1984. オオチャバネセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ): 266-269. 保育社. 大阪.



写真提供者: 大脇淳



県内の分布

ヘリグロチャバネセセリ チョウ目セセリチョウ科

Thymelicus sylvaticus sylvaticus (Bremer)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 分布は局地的で生息地が限定されている。

形態 開張30mm程の小型種。翅の地色は、表裏ともに赤橙色で、近似種のスジグロチャバネセセリは、石川県では観察されていない。

国内分布 北海道から九州にかけて離散的に分布し、関東地方、中部地方、中国地方に生息地が多いが、全国で減少している。

県内分布 白山市の旧吉野谷村、旧尾口村、旧白峰村の手取川右岸で観察されている。

生態 7月下旬から8月にかけて年1回発生し溪流沿いの草地を敏速に飛翔し、オカトラノオなどの花を訪れる。幼虫は露岩地に生えるヒゲノガリヤスから観察され、5月から6月には葉を筒状に丸めた巣が観察できる。

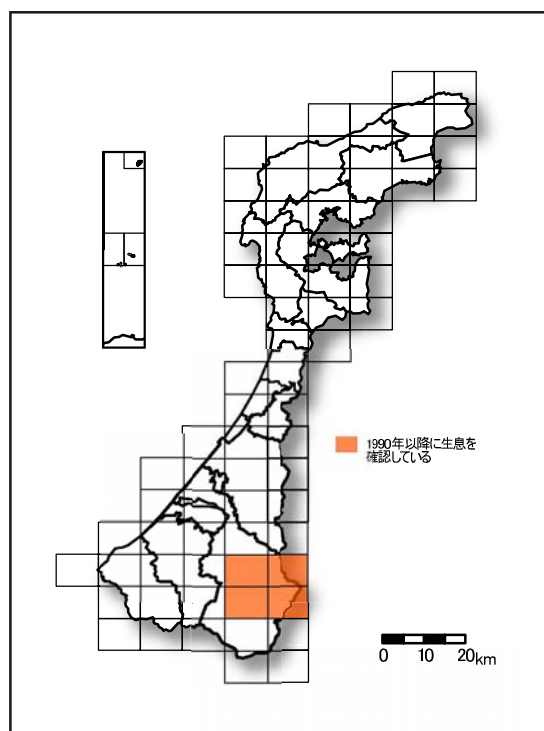
生息地の条件 ヒゲノガリヤスが生える露岩地が生息場所になっている。

生存の危機 道路改良などによって露岩地がコンクリート化されると発生地が消失する。(A)

参考文献 福田晴夫ほか 1984. ヘリグロチャバネセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ): 234-236. 保育社. 大阪.



写真提供者: 竹谷宏二



県内の分布

ウラギンスジヒョウモン チョウ目タテハチョウ科

Argyronome laodice japonica (Menetries)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由 近年、全国的に減少し、加賀南部では激減している。

形態 開張50～60mm程の中型種。翅表の地色は赤褐色で黒い豹柄がある。オオウラギンスジヒョウモンによく似ているが、後翅表基部よりの豹柄は、本種では帯状に連続せず点状に分離する。

国内分布 北海道から九州まで広く分布するが、全国的に減少している。

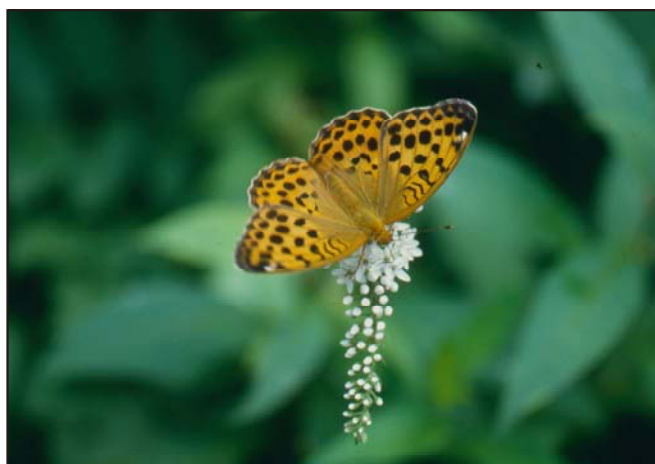
県内分布 加賀から能登にかけて広く分布し、普通に観察されるが、加賀南部では近年、稀にしか観察されなくなった。

生態 年1回の発生で、6月中頃から森林周辺の明るい草地で観察され、アザミ類やオカトラノオなどの花で吸蜜する。低標高地では盛夏には夏眠し秋に再び活動するが、奥山では盛夏にも活動する。卵は、地表の落葉、枯枝、小石などに産まれ、幼虫はスミレの仲間を食べる。

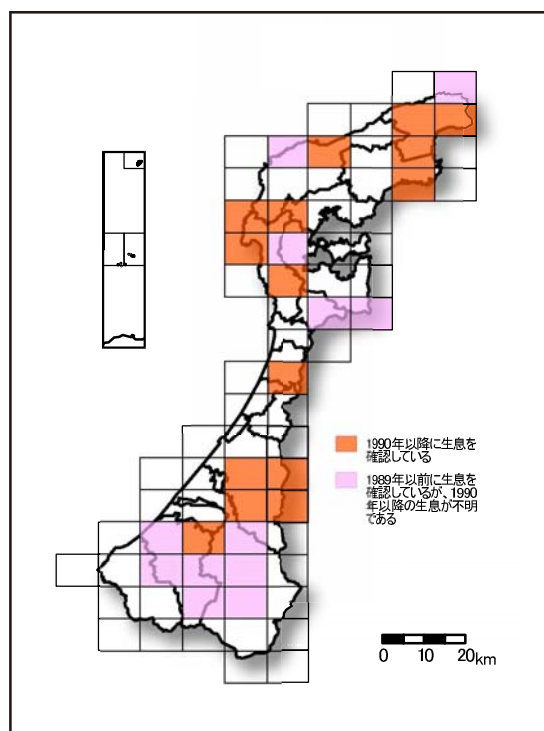
生息地の条件 草地環境が人手によって維持され、樹林と草原が入り混じった環境と思われる。

生存の危機 里山に人手が入らなくなったことによる環境変化と思われる。(A, B)

参考文献 福田晴夫ほか 1983. ウラギンスジヒョウモン. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ): 82-86. 保育社. 大阪.



写真提供者: 竹谷宏二



県内の分布

オオミスジ

Neptis alwina (Bremer et Grey)

チョウ目タテハチョウ科

石川県カテゴリ

準絶滅危惧

国カテゴリ

なし

選定理由

観察数が減少している。

形態

開張70mm程の中型種。翅表は黒色の地に数本の白い帯が入り、裏面は地色が褐色に置き換わる。類似種の中では最も大きい。

国内分布

北海道と本州に分布し、伊吹山脈が西南限になっている。

県内分布

小松市、白山市、金沢市において山間地の集落周辺で観察されている。

生態

山間地の集落周辺で栽培されているウメの木の周辺を飛び回る個体が、6月中旬から8月にかけて観察されている。食樹はウメ、アンズ、スモモなどである。幼虫越冬で、食樹の樹幹や小枝の分岐で行われる。

生息地の条件

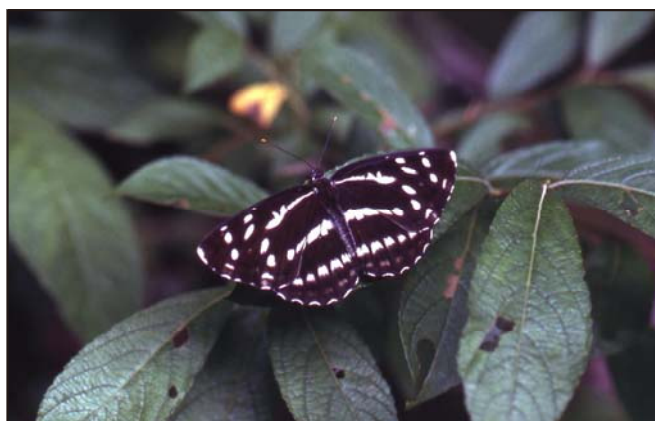
農薬を使わず適度に管理されたウメなどの食樹の存在が必要と思われる。

生存の危機

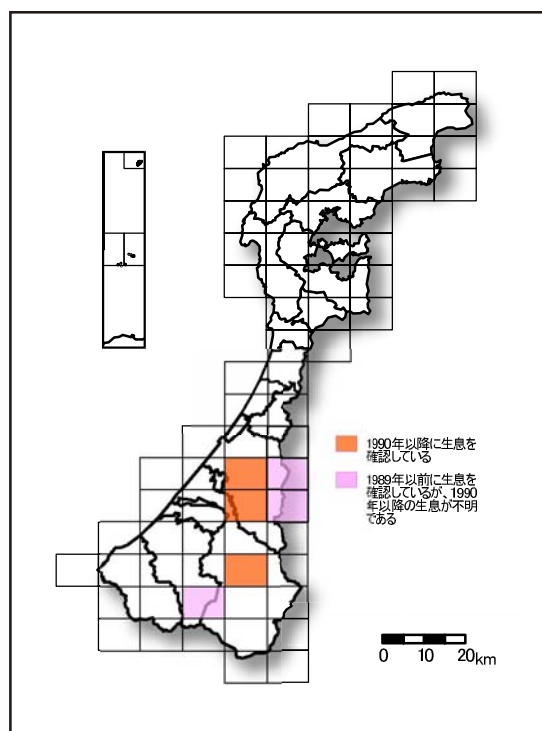
過疎や荒廃によって、山間地集落周辺のウメ、アンズ、スモモなどが、食樹として利用できなくなったことが原因と思われる。(A, B)

参考文献

福田晴夫ほか 1983. オオミスジ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ): 159-163. 保育社. 大阪.



写真提供者: 竹谷宏二



県内の分布

オオムラサキ

Sasakia charonda charonda (Hewitson)

チョウ目タテハチョウ科

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー 準絶滅危惧

選定理由 全国に分布するが、石川県の個体数は少ない。

形態 開張100mm前後の大型種。オスの翅表は黒褐色で白色と黄色の斑紋があり、翅の前半分程が紫色に輝く。メスはオスより一回り大きく、紫色の輝きが無い。

国内分布 北海道から九州まで分布し、本州では山麓から山地帯にいたる落葉広葉樹林に広く生息している。

県内分布 加賀地方の山麓や丘陵地に広く生息しているが、能登地方では稀となる。邑知湯より北では、輪島市と珠洲市の生息地が知られているが、1990年の観察以降は発見されていない。

生態 年1回の発生で、6月下旬～8月下旬に見られる。人家や耕作地に近いクヌギ、コナラ、エノキなどから構成される雑木林に生息することが多く、雌雄ともに好んで樹液に集まり、クワガタやカナブンなどと一緒に吸っている。幼虫は、エノキ、エゾエノキを食し、越冬は食樹を下り根際の枯葉の中で行われ、翌春になると再び食樹に上る。

生息地の条件 クヌギ、コナラ、エノキなどから構成される広い雑木林が必要で、山間地では、人家の庭や社寺の境内、公園などでも発生している。

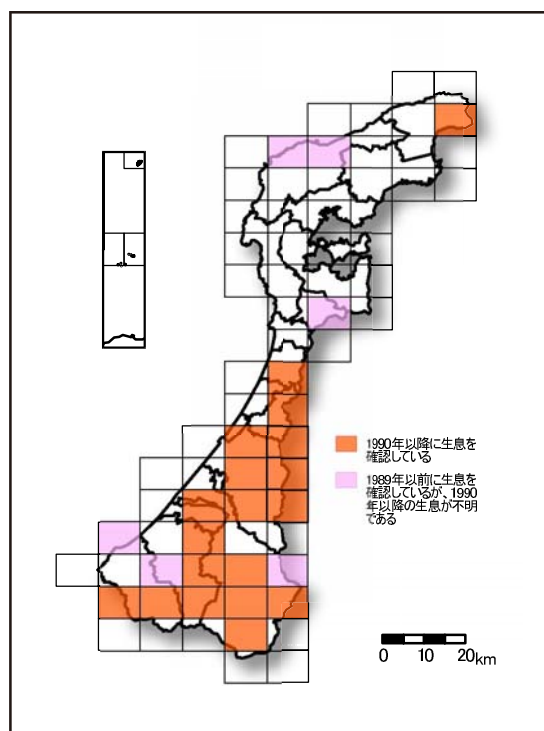
生存の危機 里山の落葉広葉樹林は、土地開発が最も行われやすい場所である。近年は、柴刈りや伐採更新などの人手が入らなくなり放置され、生息環境は悪化している。(A B)

特記事項 全国に広く分布し、大型で力強く飛翔し色鮮やかなことから国蝶に選ばれている。

参考文献 福田晴夫ほか 1983. オオムラサキ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ): 269-276. 保育社. 大阪.
松井正人 2007. 石川県能登地方に於けるオオムラサキの近況. 翔, (185): 8.



写真提供者: 竹谷宏二



県内の分布

クモマベニヒカゲ

Erebia ligea takanonis Matsumura

チョウ目ジャノメチョウ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

生息地域は標高1,900m以上に限定され、白山は国内分布の西限である。

形態

開張45mm前後の小型種。前後翅表裏とも黒褐色で、前後翅表裏とも外縁に橙色の太い帯があり、その中に黒点がある。さらに後翅裏面の橙色の帯の内側は白帯で縁取られている。

国内分布

北海道と本州の高山帯に分布し、本州では八ヶ岳山塊、北アルプス、中央アルプス、南アルプス、白山の標高1,600～2,800mに分布し、白山は分布の西限になっている。

県内分布

白山の清浄ヶ原～北龍ヶ馬場、甚之助小屋～弥陀ヶ原、観光新道馬背～黒ボコ岩、釈迦岳周辺、別山周辺など、多くは標高1,900m前後から上に生息している。

生態

年1回発生し7月中旬から8月下旬にかけて発生する。草原が切れて断崖になる所や、山稜近くの急斜面の草付き、樹木が隣接する小さな草原などに生息する。通常は1,900m以上で観察されるが、時として谷筋に沿って下ってきたと思われる個体が、やや低い地点で観察されている。1年目は卵、2年目は幼虫で越冬し、3年目に蛹化し羽化する。食草は、イネ科、カヤツリグサ科が知られている。

生息地の条件

標高1,900m以上で、断崖際の草原、山稜近くの急斜面の草付き、樹木が隣接する小さな草原。

生存の危機

生息地は、全て白山国立公園の特別保護地区に包含されているので、生息環境は保護されている。しかし、発生地のすべてが特別保護地区内にあることなどから、十分な調査は行われていないために、現在の生息状況は不明である。(A)

特記事項

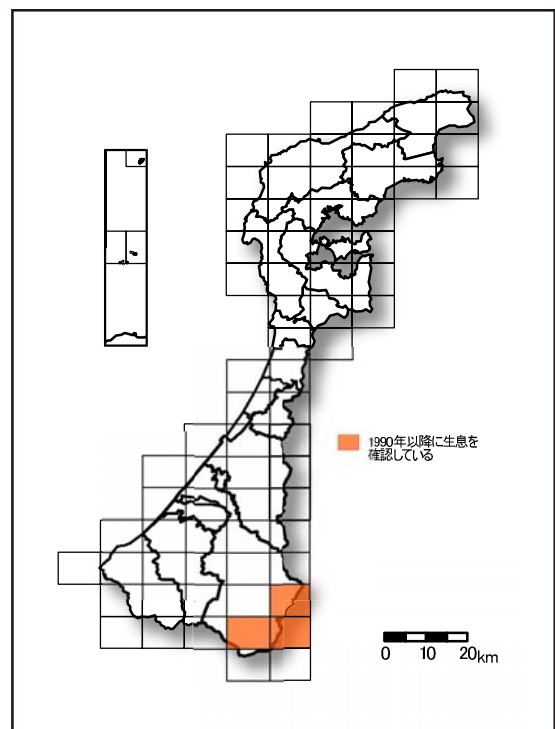
国内のいずれの生息地も隔離され個体群も小さいので、地理的変異が進み、分布西限の白山個体群の存在は重要となる。

参考文献

福田晴夫ほか 1984. クモマベニヒカゲ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ): 88-91. 保育社. 大阪.



写真提供者: 松井正人



県内の分布

モンクロキイロナミシャク チョウ目シャクガ科

Stamnodes danilovi sugitanii Prout

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 国内における分布が限定され個体数も少ない。本県が分布の西限にあたる。

形態 開張28mm内外である。前後翅とも地色は橙色で黒く縁取られ、翅中央部に黒斑を有し、鮮やかな色彩をしている。

国内分布 北海道中部の山地、本州の関東北部から中部地方の亜高山帯や高山帯に分布する。

県内分布 白山の観光新道上部の亜高山帯および釈迦岳山頂付近で確認されている。

生態 成虫は7月下旬から8月上旬にかけて発生する。昼飛性の蛾で、富山県の立山では高山植物の花で吸蜜しているのを見かけたことがある。幼虫の食餌植物としてミソガワソウが記録されている。

生息地の条件 高山植物の豊富な亜高山帯の草原が分布中心域と思われる。

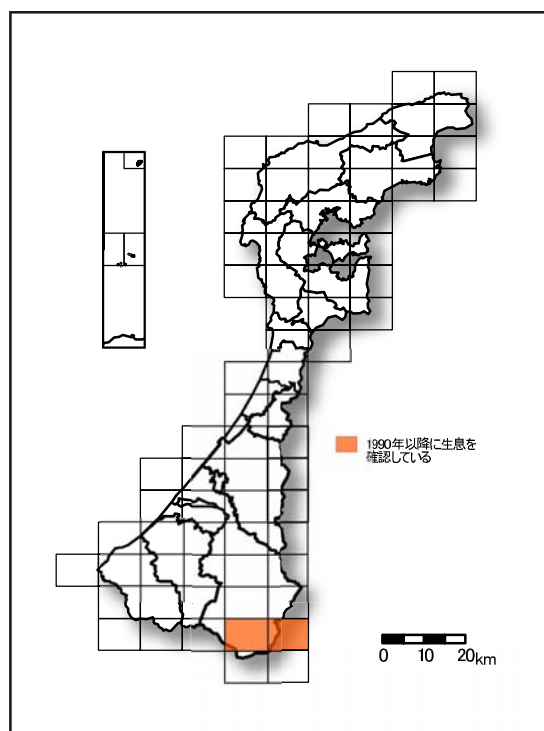
生存の危機 目立つ色彩の蛾であるが、目撃例が少なく、個体数は多くないものと思われる。亜高山帯から高山帯下部の高茎草原の環境改変は避けるべきである。(A)

特記事項 本種の生息地は白山国立公園の特別保護地区内にある。

参考文献 西尾規孝 1986. 木曾山脈将基頭山付近に生息する蛾類の生態. 誘蛾燈, (105) : 75-90.



標本提供者：富沢章



県内の分布

オオシモフリスズメ

チョウ目スズメガ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

Langia zenzerides nawai Rothchild & Jordan

選定理由

日本における分布の東限および北限に近い。個体数が少ないうえ、生息地が開発されやすい里山である。

形態

開張13～15cmの大型種である。前翅は翅頂が鋭くとがり、樹皮状の模様がある。口吻は退化して短い。

国内分布

富山県、長野県、愛知県以西に分布するが、紀伊半島、四国南部、九州南部が分布空白域となっている。したがって、九州北部、中国地方、瀬戸内周辺から愛知、岐阜が分布中心域である。

県内分布

小松市、白山市、金沢市に分布するが、個体数はきわめて少ない。市街地周辺や低山地に生息し、樹木の少ない水田地帯でも得られている。近年の採集記録は金沢市の低山地に多く、能美市以南からは得られていない。

生態

成虫は年1回、4月から5月にかけて発生する。サクラ、ウメ、モモ等のバラ科樹木を寄主とする里山の蛾として知られている。幼虫は5月から6月に見られ、その後、地表の落葉などの下で蛹化し、越冬する。

生息地の条件

管理された明るい開放的な里山が維持されていること、食草であるウメ、モモ等のバラ科樹木が植栽されていることが重要である。

生存の危機

小松市、加賀市の平野部の既知産地は、公園化、宅地化等の開発により、現在は生息できる環境ではない。生息地である里山の開発および管理放棄による里山のブッシュ化が生息地の減少、分断を招いている。また、食草であるウメやアンズの木や林の減少も影響しているものと思われる。また、走光性が強いため、人工照明の増加が個体数の減少をもたらしている可能性が高い。(A, B)

特記事項

良好な里山環境の標徴種である。

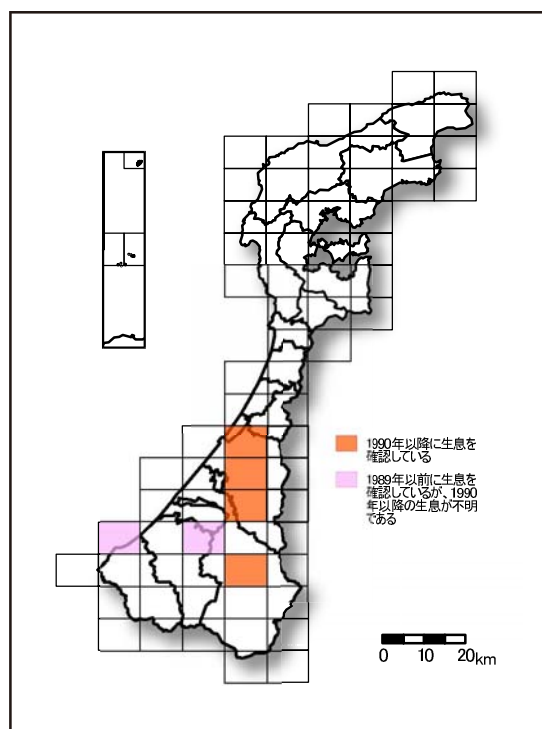
参考文献

杉 繁郎 1979. オオシモフリスズメ. 昆虫と自然, 14 (4) : 27-33.

富沢 章 2006. 金沢市におけるオオシモフリスズメの追加記録. とつくりばち, (74) : 81.



写真提供者: 富沢章



県内の分布

ハネナガモクメキリガ チョウ目ヤガ科

Xylena nihonica (Hone)

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 暖地性の種で石川県が国内分布の北限にあたり、個体数がきわめて少ない。

形態 開張50mm前後である。前翅は幅が狭く細長いのが特徴である。前翅の斑紋や色彩は個体変異が大きい。

国内分布 日本特産種。本州、四国、九州の暖温帯林に分布し、北限は日本海側が石川県、太平洋側が関東南部である。西南暖地では個体数が多い。

県内分布 加賀市の錦城山と片野鴨池および金沢市の金沢城跡の3箇所で記録があり、いずれも照葉樹林の多い所である。

生態 成虫は年1回、10月から11月に出現し、そのまま越冬、翌春の3～4月に再び活動する。幼虫はサクラやカシで育つので、食性は広いようである。平地の照葉樹林または照葉樹林を含む二次林に生息する。

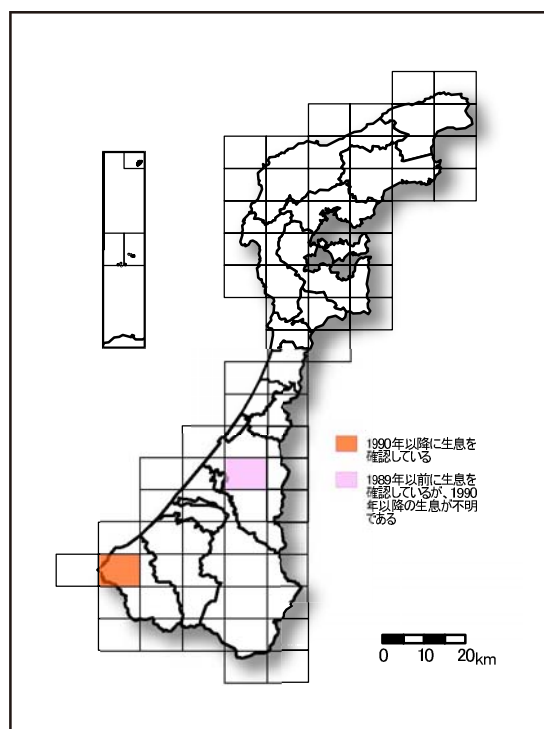
生息地の条件 常緑カシを含む照葉樹林ないし平地林が存在することが重要である。

生存の危機 加賀海岸丘陵地の照葉樹林を含む平地林は農耕地や宅地に変貌しつつあり、生息地が狭小化している。本種の生息する社叢林や城跡は、現状のままの環境を維持するべきであるが、金沢城跡は樹木の伐採が進行し、本種のすめる環境ではなくなった。(A)

参考文献 井上 寛ほか 1982 日本産蛾類大図鑑, 966pp. 講談社. 東京.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ガマヨトウ

Archanara aerata (Butler)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

低湿地に固有の種で産地が局限される。

形態

開張は37mm前後である。前翅は黄褐色ないし橙褐色で、中央部に翅基部から外縁に向かってはっきりした黒色条が認められる。後翅は一樣に黄褐色である。

国内分布

中部地方以北から北海道まで広く分布する北方系の種である。生息地は平地の低湿地帯に限られるため、産地は点在している。日本の特産種である。

県内分布

現在、知られている産地は加賀市の柴山潟と片野鴨池、七尾市福浦の3箇所である。

生態

成虫は年1回、7月から8月に発生する。食草としてガマが知られ、幼虫は茎内にすんでいる。

生息地の条件

ガマをはじめとする抽水植物の多い平野部の広大な低湿地に生息する。

生存の危機

平野部の低湿地は埋め立てや護岸工事が進んでいる。生息地のひとつである柴山潟周囲のガマ群落は、埋め立てにより減少しつつある。(A)

特記事項

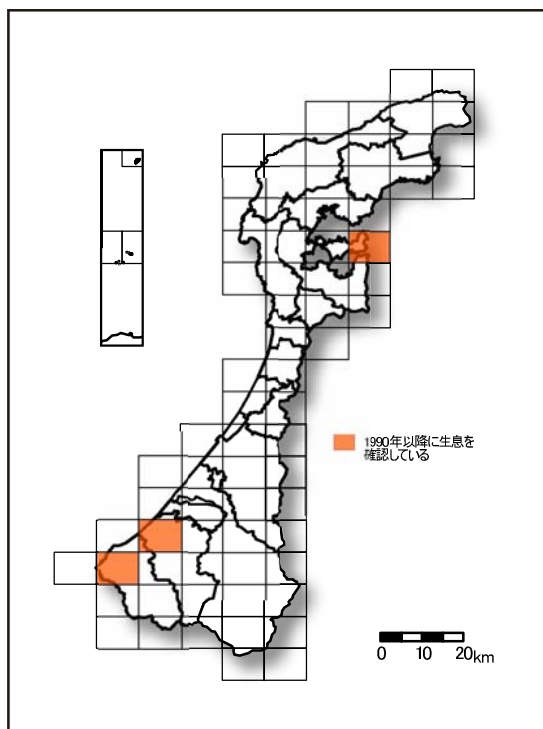
低湿地の環境指標種として位置づけられる。

参考文献

富沢 章 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈, (109) : 87-97.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

オオチャバネヨトウ

Nonagria puengeleri (Schawerda)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

低湿地に固有の種で産地が局限されるうえ、生息地周辺の抽水植物群落は狭小化している。

形態

開張は40～50mmである。前翅は一律に黒褐色であるが、中央部に黒色条と小白点がある。後翅は黄白色である。

国内分布

北海道から九州まで広く分布するが、生息するのは平地の低湿地に限られるため、産地は点在している。

県内分布

現在、知られている産地は加賀市柴山潟のみである。

生態

成虫は年1回、7月から8月に発生する。食草としてガマが知られ、幼虫は茎内にすんでいる。

生息地の条件

ガマをはじめとする抽水植物の多い平野部の広大な低湿地に生息する。

生存の危機

平野部の低湿地は埋め立てや護岸工事が進んでいる。生息地である柴山潟周囲のガマ群落は、埋め立てにより減少しつつある。(A)

特記事項

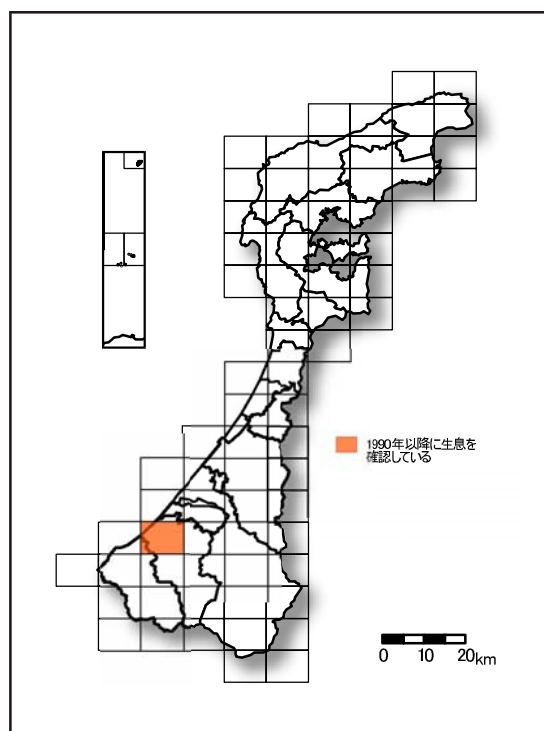
低湿地の環境指標種として位置づけられる。

参考文献

富沢 章 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈, 109 : 87-97.



標本提供者：富沢章



県内の分布

チャバネキボシアツバ

Paragabara ochreipennis Sugi

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

準絶滅危惧

国カテゴリー

なし

選定理由

開発されやすい低地に生息し、全国的にも分布が限定される。

形態

開張22mm前後である。前後翅は黄褐色をおび、前翅頂が鋭くとがる。

国内分布

北海道から九州まで分布するが、中国、四国地方からは未知である。産地は局地的で主に低地から得られ、個体数は少ない。

県内分布

加賀市の柴山潟と小松市の木場潟周辺の低地で記録がある。

生態

年2回発生するものと思われるが、詳しい生態はわかっていない。

生息地の条件

平野部の低湿地およびそれに続く草地が本種の生息域と思われる。

生存の危機

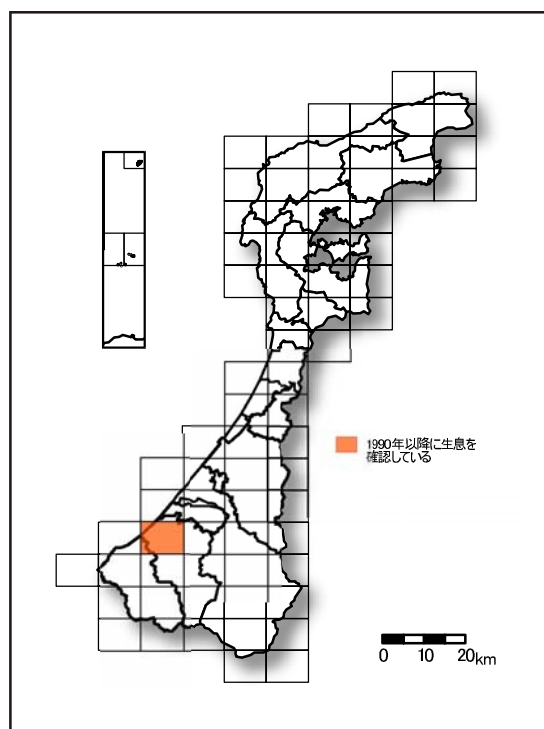
平野部の草地は宅地化や公園化等のため開発され、本種の生息域が狭められている。(A)

参考文献

富沢 章 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈, (109) : 87-97.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ヤクシマコブヒゲアツバ チョウ目ヤガ科

Zanclognatha yakushimalis Sugi

石川県カテゴリー 準絶滅危惧

国カテゴリー なし

選定理由 本県が国内分布の北限であり、孤立した生息地となっている。

形態 開張22～30mmである。前後翅全体が黒褐色を呈していて、斑紋は不明瞭だが鋸歯状の内、外横線ははっきりしている。

国内分布 暖地性の種で沖縄、屋久島、九州、四国には少なくない。しかし、本州では山口県、和歌山県、静岡県、石川県で採集されているにすぎない。

県内分布 平野部の原植生の照葉樹林が残っている加賀市鹿島の森が唯一の産地であり、本来の分布地からかけ離れている。

生態 幼虫は枯葉を食べることが知られている。本州では年2回発生するものと思われる。

生息地の条件 低地に照葉樹林が残存されていることが重要と思われる。

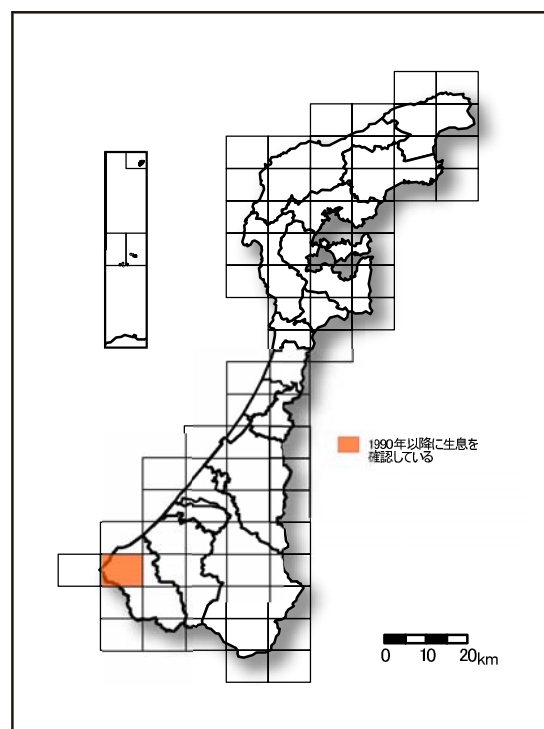
生存の危機 現在の生息地は3haときわめて狭い。県内のまとまりのある照葉樹林を有する社叢林は本種が生息している可能性が高いので、現状のまま環境を維持すべきである。(A)

特記事項 生息地の鹿島の森は、国指定の天然記念物に指定されている。

参考文献 富樫一次 1988. 鹿島の森の昆虫相. 金沢大学日本海域研究所報告, 20: 49-80.



標本提供者: 富樫一次



県内の分布

ムスジイトンボ

Cercion sexlineatum (Selys)

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

最近、県内の沿岸地方で発見されたが、能登島を除けば観察例数が少なく定着性も明らかでない。

形態

腹長21～25mm、後翅長14～17mm。セスジイトンボに似るが、眼後紋が細長い。メスの肩に黒条が3対＝6本ある。

国内分布

主に本州中部以西、四国、九州、沖縄。

県内分布

小松市日末町、志賀町（上野、大津）、七尾市能登島町（通、二穴、佐波）。

生態

暖地性種で、気候温暖化に伴って沿岸地帯を北上中である。浮葉植物などのある平地の池沼で育つ。

生息地の条件

温暖地であること以外はセスジイトンボやクロイトンボなどの普通種と共通。

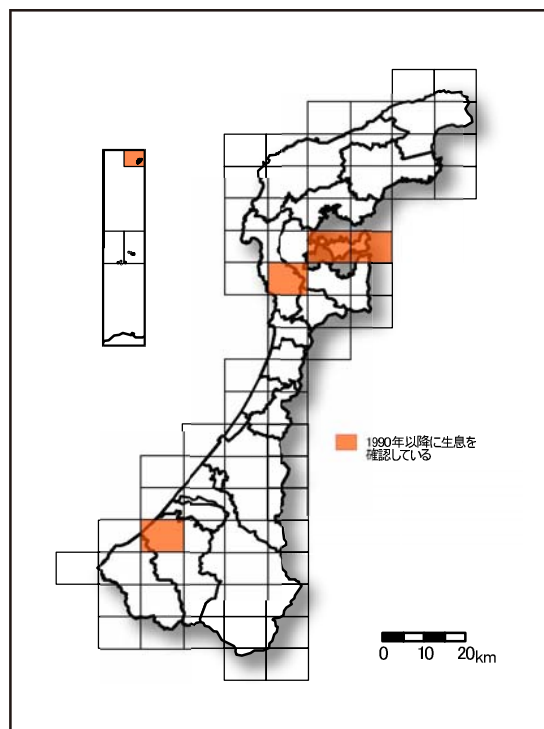
生存の危機

沼沢の埋め立てや汚染などが影響し得る。

参考文献

二橋 亮・二橋弘之 2006. 能登半島のトンボ相（2）. Tombo, 48: 18-20.

写真（図）はありません。



県内の分布

クマコオロギ

Mitius minor (Shiraki)

バッタ目コオロギ科

石川県カテゴリ 情報不足

国カテゴリ なし

選定理由

水田のほ場整備に伴い激減した可能性が高く、現在、県内では1箇所では確認されていない。生息状況が不明である。

形態

体長が約13mmの小型のコオロギである。体色が一様に暗褐色、脚は赤褐色であることが特徴である。翅は短翅で飛ぶことはできない。

国内分布

本州、四国、九州、対馬、種子島に分布する。日本海側では新潟県が北限である。

県内分布

2005年に、輪島市（旧門前町）で記録があり、手取川下流部においても採集されている。

生態

卵で越冬。年1回発生で、成虫は8月から10月に出現する。湿った草地に浅く穴を掘ってすみ、オスはリッ、リッと短く切って鳴く。

生息地の条件

本種は平野部から丘陵地にかけて分布し、一年中、乾燥することのない湿った草地を生息環境としている。輪島市の生息地も山際にある湿った休耕田で、イネ科を主体とした丈の短い草本類が密生している。

生存の危機

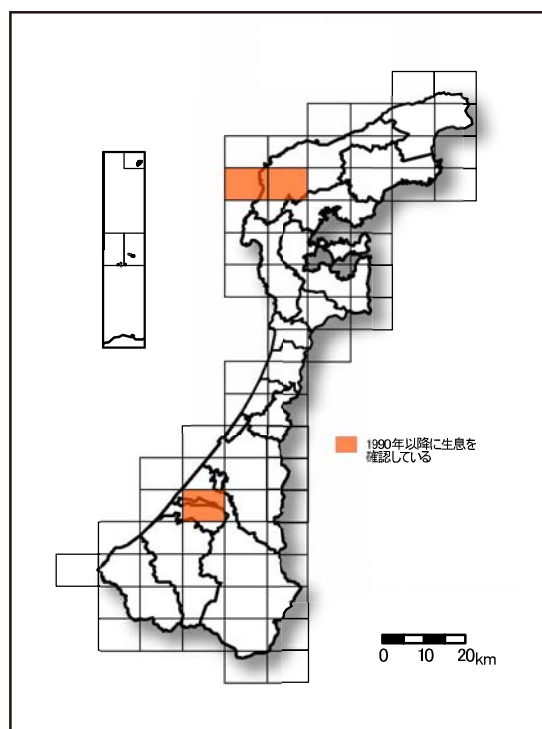
平野部の湿田周辺において、かつては広く分布していたものと思われるが、ほ場整備による乾田化で生息地が激減したものと思われる。また、廃田も乾燥化が進みつつある。谷津田の廃田や湿った河川敷、潟周辺の湿性草地に生息している可能性が高く、今後の調査が必要である。

参考文献

市川顕彦ほか 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp. 日本直翅学会編. 北海道大学出版会. 札幌.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ハマベツチカメムシ

Byrsinus varians (Fabricius)

カメムシ目ツチカメムシ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

準絶滅危惧

選定理由

本種の生息場所である海浜植物帯は、各種開発により縮小傾向にある。さらに近年は、海浜植物帯へのRV車やモトクロスバイクの直接的な乗り入れが頻繁に行われるようになっており、これらの複合的な要因が生息場所の縮小や消失、本種の生息数の減少に繋がることが懸念されている。

形態

体長4mm内外。体表には光沢があり、体色は赤褐色。頭部前縁には10数本の刺毛と長毛が混生し、体側に沿って長毛が列生している。触角は短く、第2節が最も短い。第3～5節は長卵形である。同所的にマルツチカメムシが分布するため、同定には注意が必要である。

国内分布

本州、四国、九州に分布する。

県内分布

2008年5月に羽咋市一の宮海岸で1個体が採集されたのみである。

生態

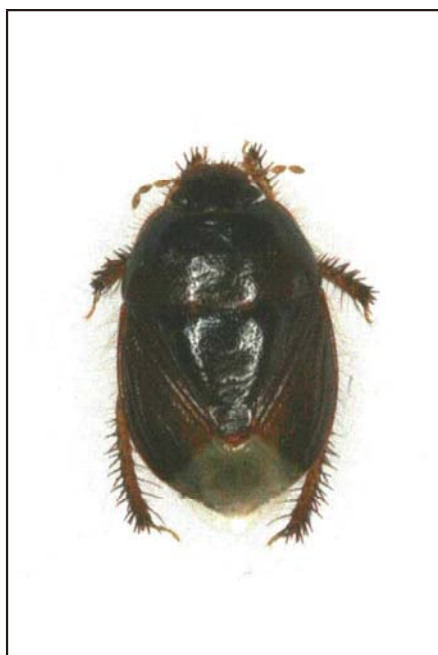
海浜植物の根際の土中で生活している。

生息地の条件

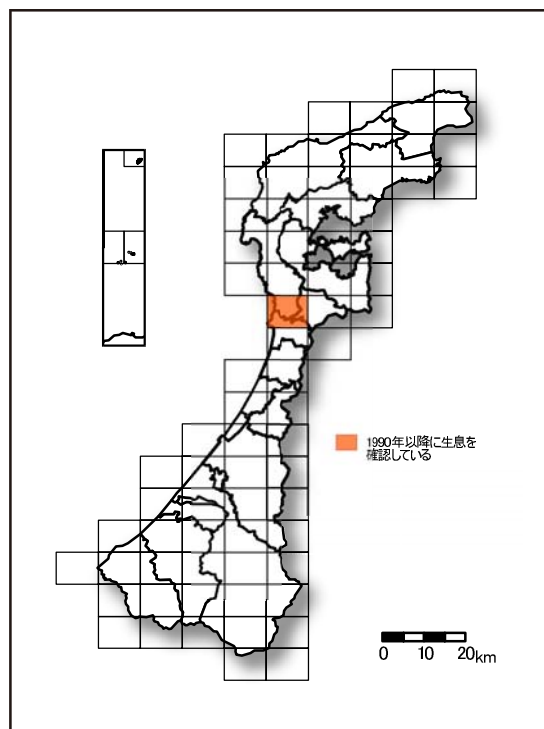
比較的大きな海浜植物帯があること。

生存の危機

開発行為や各種レジャーによって生息場所である海浜植物帯が縮小、消失することは、本種を含めた様々な生物にとって生存の危機である。本種を確認した羽咋市一の宮海岸では、2007年にRV車の運転技術を競う大会が開催されたが、海浜植物帯をコースに含んでいたため、コース上の海浜植物はRV車に踏みつぶされて完全に消滅していた。このような大会を開催する場合、開催場所やコースの選定には慎重の上にも慎重を期すべきである。



標本提供者：吉道俊一



県内の分布

エゾコセアカアメンボ

カメムシ目アメンボ科

Gerris (Macrogerris) yezoensis (Miyamoto)

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

北方系の種で、県内では白山山系の1箇所で確認されているのみである。本県は国内分布の西限である。

形態

体長10～15mm。胸背部および前翅は暗褐色～暗赤褐色。体形、色彩はコセアカアメンボによく似ており、外見での区別は困難である。腹部第7結合板後縁の突出は鈍い。オス生殖器の末端片の形状は特異的で、長い嘴状となる。長翅型のみ。

国内分布

北海道、礼文島、本州。

県内分布

白山山系の1箇所の池（殿池）の1950年代の記録のみである。

生態

水面に落下した小昆虫などを捕食する。

生息地の条件

寒冷地の池沼に生息する。

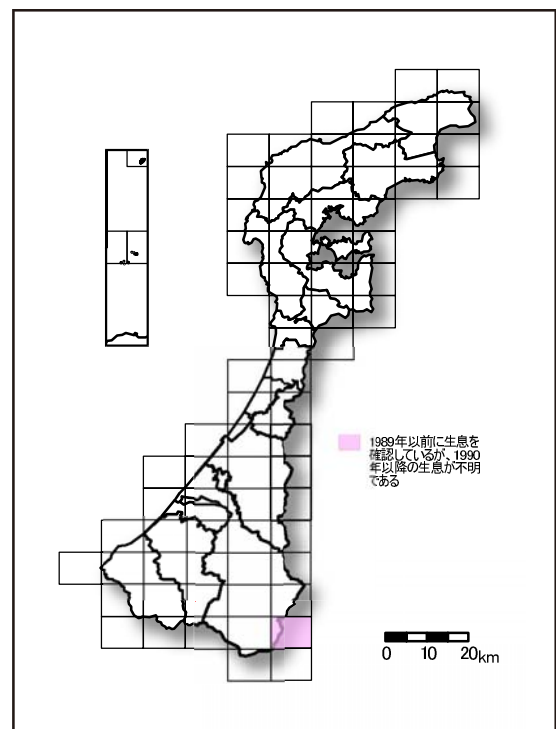
生存の危機

生息地は高山帯であり、人為的な環境の変化が生じにくいいため、現在も生息していると思われるが、調査する必要がある。

参考文献

宮本正一 1961. 日本昆虫分類図説アメンボ科. 1(3) 1-39. 北隆館. 東京.
根来 尚 1988. 富山県産アメンボの分布と生息環境について. 日本生態学会誌, 38(1): 9-18.
村路雅彦 2003. 日本産 *Gerris* 属 *Macrogerris* 亜属の mtDNA 塩基配列, 外部形態および交尾行動の解析: 系統開の進化的関係について. 昆虫ニューシリーズ, 6(3): 141-156.

写真（図）はありません。



県内の分布

オオクロツヤミズギワカメムシ カメムシ目ミズギワカメムシ科

Macrosaldula koreana (Kiritshenko)

石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー なし

選定理由

日本では石川県の1箇所でのみ記録があるが、その生息地は河川改修により消滅した。

形態

体長は5.4~7.3mmで、近似種のクロツヤミズギワカメムシよりさらに大きい。体全体は黒色で背面の藍色の光沢は弱い。

国内分布

石川県でのみ記録がある。国外では北朝鮮、モンゴル、東シベリア、極東に分布している。

県内分布

1985年6月に、白山市（旧鶴来町）で得られているに過ぎない。生息地は手取川の河川敷である。

生態

成虫は6月下旬に得られていること以外、生態は不明である。

生息地の条件

採集された個体は、手取川河川敷にある岩盤付近に生育していたネコヤナギの下で得られた。近くには小さな流れがあったことから、流水性の種の可能性がある。

生存の危機

本種が採集された地点は、すでに河川改修、土地造成により公園化されてしまったので現在は生息していない。しかし、類似の環境は周辺に残されているので、河川改修等の大がかりな土木工事は避けるべきである。

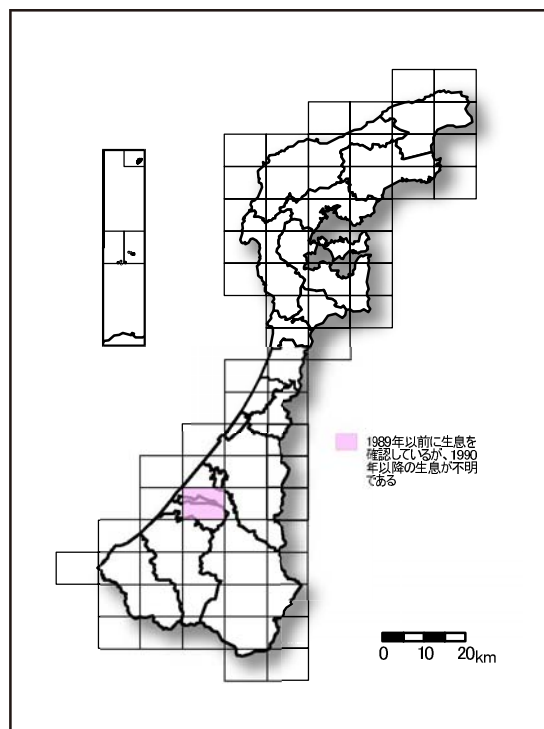
特記事項

本種を採集したのは富樫一次博士であるが、標本は現在、ロシアの研究者の手にある。富樫（1995）の31ページの *Saldula* sp. は本種を指している。

参考文献

富樫一次 1995. 鶴来町の昆虫相：21-33. 鶴来町教育委員会報告調書，第10冊. 102pp.
Miyamoto, S & M, Hayashi 1998. New records of aquatic Heteroptera from Japan.
Japanese Journal of Systematic Entomology, 4 : 321-323.
川合禎次・谷田一三 2005. 日本産水生昆虫：370. 東海大学出版会. 1341pp.

写真（図）はありません。



県内の分布

コオナガミズスマシ

Orectochilus punctipennis Sharp

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリ

情報不足

国カテゴリ

なし

選定理由

全国的に生息地が減少している。県内でも1箇所で確認されているに過ぎない。

形態

体長5.5～6.2mm。体型は長楕円形で舟形。体色は黒褐色でやや金属光沢を帯びる。肢などの付属物は赤褐色。上翅の点刻は密で、オスの会合部先端はほぼ直角で先が丸まり、メスではやや斜めで会合端が少し後方に張り出す。頭楯前縁に突起が無く、平坦かあるいは中央部が単に前方へ張り出すに過ぎない。頭部前半のしわ状部は細かく、小点刻をやや密に装う。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

小松市丘陵部にある河川上流域のツルヨシがまばらに生える水面上で、2004年6月に確認された。

生態

成虫は昼間、石の影に隠れていて、夜間に活動する。水面上を遊泳し、水面に落ちた小昆虫を捕食するとされる。幼虫は水中で捕食生活をし、岸辺で蛹化するとされる。

生息地の条件

丘陵部の比較的大きい河川の上流域下部～中流部で、川幅5～10mほどの、岸辺が水草で覆われているような環境に生息する。川岸の流れのよどみや、ときには河川敷の水溜まりにも見られるという。

生存の危機

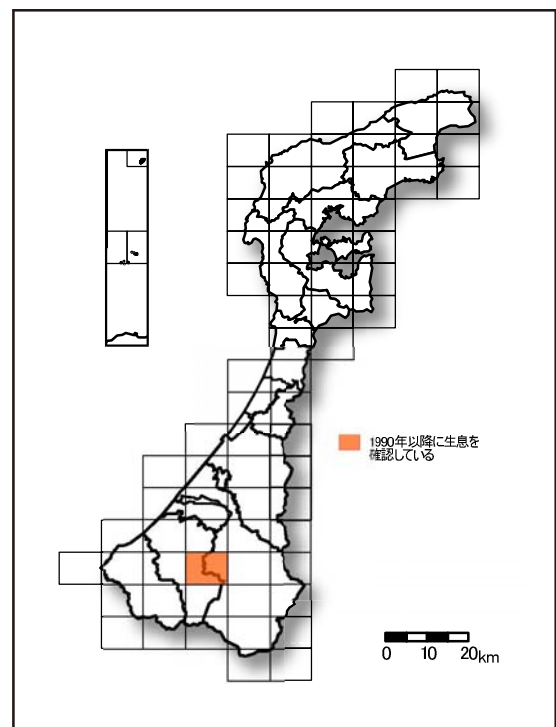
河川中流域の自然の岸辺が、堰堤工事、護岸工事などによって環境改変や消滅することが脅威である。また、生活排水などによる水質汚染にも注意が必要である。

参考文献

佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説 1-3. 甲虫ニュース, (37): 1-5, (38): 1-2, (39): 1-4.
石原一彦 2005. コオナガミズスマシの採集記録. とっくりばち, (73): 30.
佐藤正孝・吉富博之 2005. 鞘翅目. 川合禎次・谷田一三(編). 日本産水生昆虫—科・属・種への検索. 東海大学出版会. 秦野.



標本提供者: 石原一彦



県内の分布

クロアリヅカエンマムシ コウチュウ目エンマムシ科

Hetaerius optatus Lewis

石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー なし

選定理由 全国的に記録の少ない種で、石川県でもわずか1例が知られるに過ぎない。

形態 体長2.1~2.5mm。全体黒色で体表には長毛を持つが、一部には欠くものもある。各脚の脛節が強く平圧されていて幅広く、特徴的な外観を呈している。

国内分布 北海道、本州、四国、九州に分布するが、その分布は極めて局所的である。

県内分布 能美市鍋谷の蟹淵付近で2004年6月に採集された1例が知られるのみである。

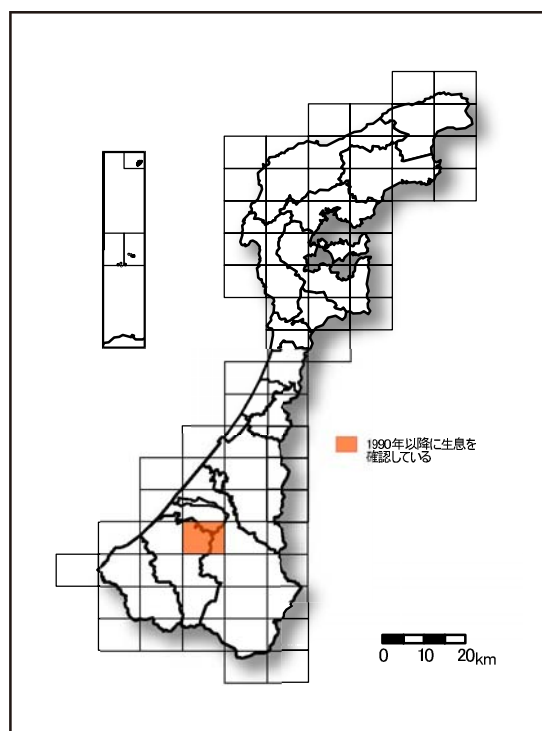
生態 アシナガアリ *Aphaenogaster famelica* Smith と共生関係にあることが報告されているが、詳細な生態はまったくわかっていない。

生息地の条件 詳細は不明である。

参考文献 Maruyama, M (2004) Symbiotic host of the myrmecophilous histerid beetle, *Hetaerius optatus* (Coleoptera, Histeridae, Hetaeriniinae). *Elytra*, (32) : 326.
吉道俊一 2005. 石川県におけるクロアリヅカエンマムシの採集事例. 甲虫ニュース, (149) : 22.



標本提供者: 吉道俊一



県内の分布

チビクワガタ

Figulus binodulus Waterhouse

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

県内の2箇所でわずかな個体が採集確認されているものの、詳細な調査はこれまで行われていない。

形態

クワガタムシ類の中では小型の種で筒型の体型をしている。体色は全体黒色で光沢が強く、上翅の条溝は浅いが完全である。大顎に雌雄二型が現れないため、慣れないと雌雄の区別が難しい。前胸背板には深くよく目立つ縦溝を持つ。

国内分布

暖地性の種で、本州（静岡県以西）、四国、九州、伊豆諸島（御蔵島、八丈島）に分布する。

県内分布

加賀市と金沢市の2箇所で生息が確認されている。より南方から海流に乗って石川県にまで分布を拡げてきたものと思われ、県内では海岸に沿って分布している可能性が高い。海岸付近に残された雑木林を調査することで、新たな産地が見つかるものと思われる。

生態

一生の大部分を朽ち木の中で過ごすクワガタムシで、1年を通して成虫を見ることができる。成虫は肉食性が強く、ゴミムシダマシの幼虫などを捕食する。しかし、幼虫は肉食性ではなく、他のクワガタムシ類と同様に朽ち木を食べて成長する。幼虫が朽ち木を食べやすいように成虫が朽ち木を噛み砕くという習性があることから、亜社会性昆虫と考えられている。産卵時期は初夏頃で、数ヶ月程度で羽化してそのまま朽ち木の中で越冬する。成虫の寿命は1年ほどで、同じ朽ち木の中に親世代の成虫と新成虫とが入り交じった状態で見られることがある。

生息地の条件

水分がある程度保たれている、生息に適した広葉樹の朽ち木があること。

生存の危機

海岸付近の雑木林は常に開発の危機にさらされているが、開発に伴う伐採は雑木林の乾燥化を促進する。そのため、本種の生息に適する水分を保った朽ち木の乾燥化も進み、本種の生息できる環境がなくなってしまう。

昆虫類



標本提供者：森幸彦

分布図はありません。

県内の分布

セスジカクマグソコガネ コウチュウ目コガネムシ科

Rhyparus azumai azumai Nakane

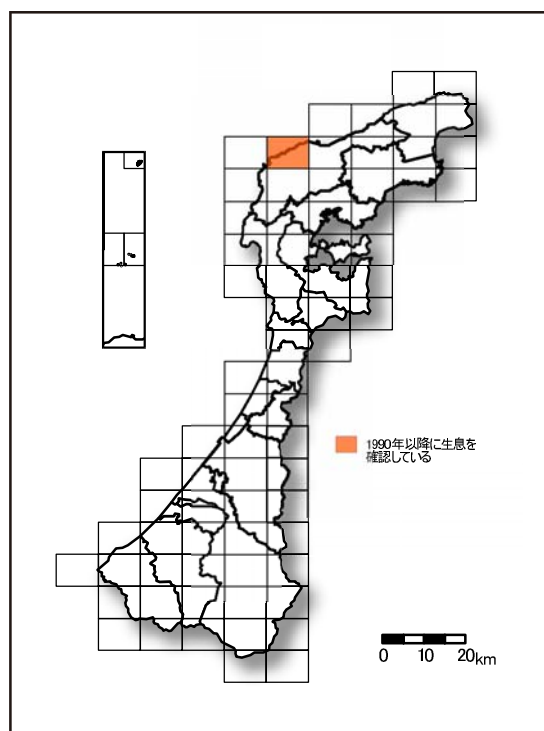
石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー なし

- 選定理由** 本種は南方系の種であり、石川県は国内分布の北限にあたるが、採集記録が1例しかない。
- 形態** 夏体長5.0～6.5mm程度。体は光沢のない黒色である。前胸背板には粗大な点刻が粗布され、前角は横方向に突出している。上翅の間室は2列の点刻列を持つ。一見して独特な体型をしている。
- 国内分布** 西本州（関東）から八重山諸島まで分布する、広域分布種である。
- 県内分布** 輪島市で灯火採集により2006年7月に得られた1個体が唯一の記録である。
- 生態** 生態や生息環境の詳細はわかっていないが、土や朽ち木などに潜入しているようである。
- 参考文献** 吉道俊一・富沢 章 2007. 石川県におけるセスジカクマグソコガネの採集記録. 鯉角通信, (14) : 61.



標本提供者：富沢章



県内の分布

イソジョウカイモドキ

Laius asahinai Nakane

コウチュウ目ジョウカイモドキ科

石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー 情報不足

選定理由

全国的に記録が少なく局所的な分布をしていて、環境省のレッドリスト（2007年）で情報不足とされた。県内では志賀町の海岸岩礁でこれまでに3個体が採集されているが、その他の地域における詳細な分布状況が不明である。

形態

体長約4.0mm。体色は全体が青藍色だが、触角の第1節と第2節のみ橙色。また、オスの触角第2節は腎臓型で大きく、中央部が深くくぼむ。

国内分布

本州、四国、九州に局所的に分布している。日本海側からの記録は少なく、新潟県と島根県から記録されているに過ぎない。

県内分布

志賀町の小さな海岸岩礁で2007年6月に1個体、2008年5月に2個体が採集されているが、その他の地域では未発見である。

生態

海岸岩礁に生息する潮間帯性の甲虫で、打ち上げられた海藻類の下や岩のわずかな隙間に潜んでいる。他の微小な小動物を捕食していると思われる。

生息地の条件

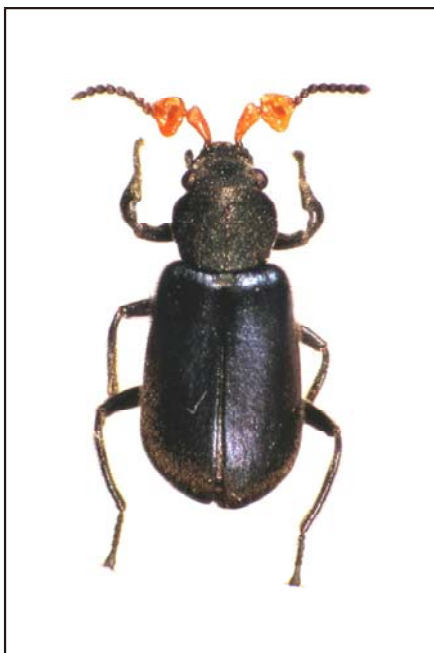
岩礁地帯であること。ただし、志賀町では非常に規模の小さな岩礁で採集されており、生息に必要な岩礁の規模や条件は不明である。

生存の危機

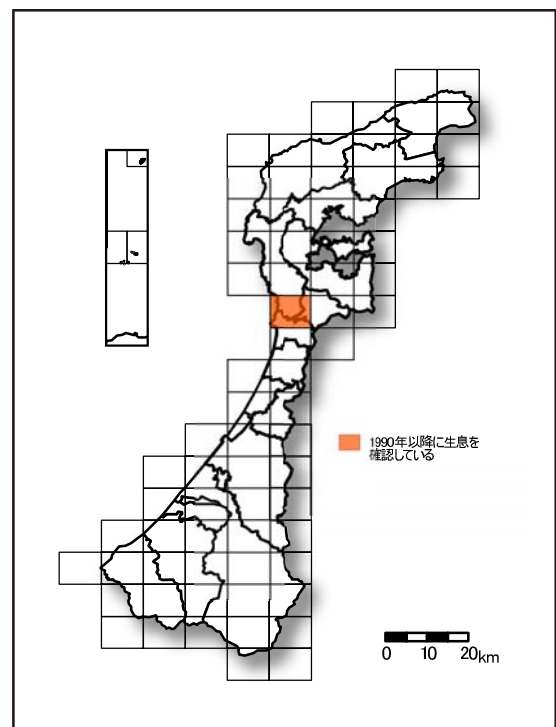
港湾整備や護岸事業などの各種開発に伴う岩礁地帯の縮小や消失は、本種の生存にとって大きな問題となる。

参考文献

河上康子・林 成多 2007. 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究(2) 島根半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 37-76.



標本提供者: 吉道俊一



県内の分布

ガガブタネクイハムシ

Donacia lenzi Schönfeldt

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー なし

選定理由

生息環境に限られるうえ、開発等により、生息環境が悪化しつつある。県内の分布は局所的で、生息地は4箇所である。

形態

体長は6.1～7.3mm。上翅は金属光沢が強く、濃い紫色。触角は暗褐色で、第3節は第2節とほぼ同長。

国内分布

北海道、本州、佐渡島、四国、九州。

県内分布

加賀市、小松市、珠洲市。

生態

成虫は5～11月に出現し、ジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロなどの浮葉植物上に見られる。

生息地の条件

丘陵部のジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロなどの生育する池沼、湿地。

生存の危機

池沼、湿地の各種開発による消失、アメリカザリガニなどの外来種の侵入や水質汚染による浮葉植物の消失。

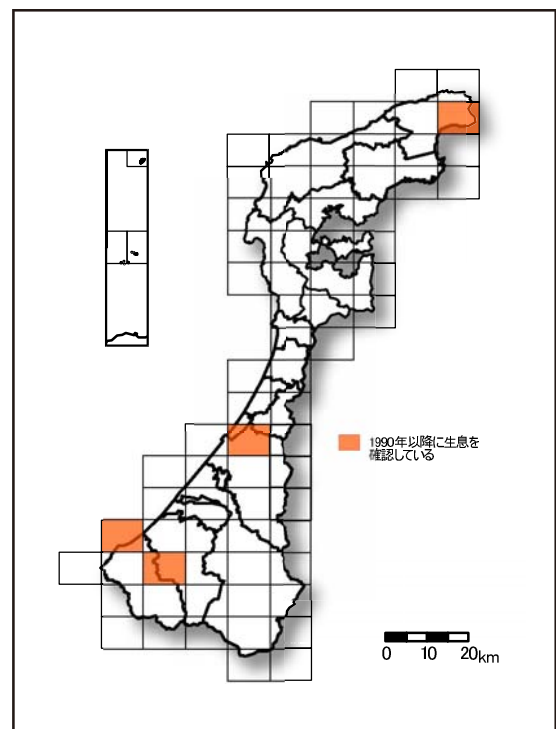
参考文献

入場 登 1993. 石川県産甲虫の記録 アカハネムシ, (5): 3-5.

林 成多 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

林 成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録 (2) ネクイハムシ属・キヒロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (9): 151-192.

写真（図）はありません。



県内の分布

ツヤネクイハムシ

Donacia nitidior (Nakane)

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的に分布が限られ、開発されやすい環境に生息するため、絶滅するおそれがある。これまでの知見では、県内での分布も限定される。

形態

体長5.0～6.5mm。上翅は金属光沢を帯びた銅色である。脚、特に後腿節が短く、腿節基部は赤褐色。前胸背板は荒い点刻を装い、一部は皺状である。

国内分布

本州（宮城県以西）、佐渡島。

県内分布

小松市から能美市の丘陵部の約7箇所の湿地で確認されている。

生態

水生植物に依存した生活史をおくる。成虫は5～6月に出現し、スゲ科植物の花粉などを食する。幼虫は水中（土中）でスゲ類の根を食べると考えられている。

生息地の条件

平野部から丘陵部にある放棄水田やため池上部の湿地で、スゲ類などの水生植物が生育する日当たりのよい所。

生存の危機

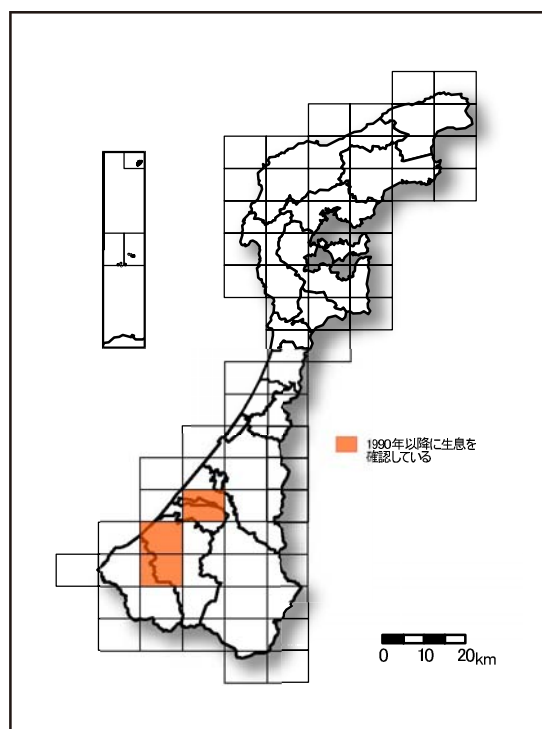
湿地などの環境改変、植生遷移が脅威となる。生息地の開発防止、掘削などによる植生遷移の進行防止が保全上重要である。

参考文献

川瀬英夫 2002. ツヤネクイハムシの採集記録ほか. とっくりばち, (69) : 12-13.
林 成多 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7) : 29-126.
林 成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録(2) ネクイハムシ属・キヒロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (9) : 151-192.



写真提供者：富沢章



県内の分布

イネネクイハムシ

Donacia provostii Fairmaire

コウチュウ目ハムシ科

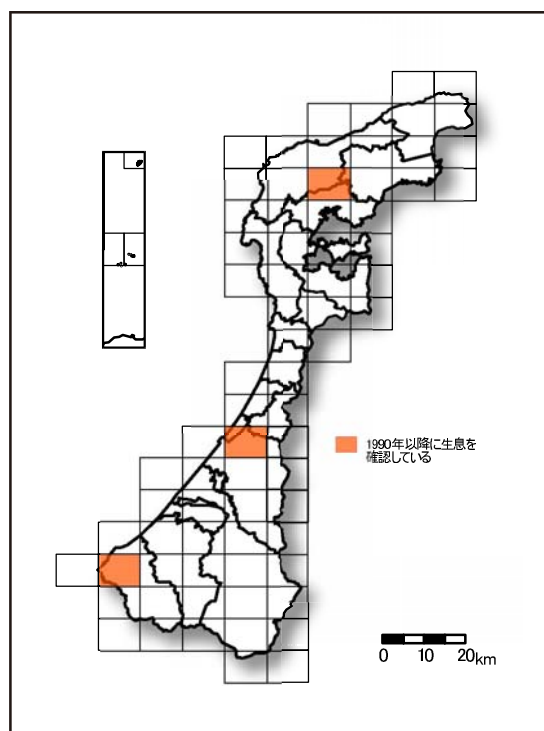
石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー なし

- 選定理由** 幼虫はイネやハスの根を食害することから、害虫として比較的良好に知られた種である。しかし、近年、各地で減少が著しい。県内でも分布は局所的で、2箇所で確認されているのみである。
- 形態** 体長6.0～7.0mm。上翅の金属光沢は弱く、赤、緑、紫、青色を帯びる。上翅末端は幅広い。上翅合部は末端近くで反転せず、腹部第1節は中央に1対の小突起を装う。触角第3節は第2節より長い。
- 国内分布** 北海道、本州、佐渡島、隠岐島、四国、九州、口永良部島、種子島、与那国島。
- 県内分布** 加賀市、穴水町。
- 生態** 成虫は5～11月に出現し、ハス、ジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロ、ヒシなどの浮葉植物を摂食する。夏期に灯火に飛来する。
- 生息地の条件** 平野部～丘陵部の浮葉植物の生育する池沼、湿地。
- 生存の危機** 池沼、湿地の様々な開発による消失、各種排水や農薬使用による水質汚染が脅威となっている。
- 参考文献** 林 成多 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7) : 29-126.
林 成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録(2) ネクイハムシ属・キヒロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (9) : 151-192.
小池賢治 2005. ハスを加害するイネネクイハムシの発生活動と産卵能力. 北陸病害虫研究会報, (54) : 59-63.



標本提供者: 富沢章



県内の分布

ハクサンハバチ

Neocolochelyna hakusana Togashi

ハチ目ハバチ科

石川県カテゴリー 情報不足

国カテゴリー なし

選定理由

本県が国内分布上の北限となる。幼虫の食草のサルナシが、登山道の整備により減少しているため、個体数の減少が懸念される。

形態

体長15mm内外で、ハバチ科としては大型種である。体は赤褐色をしており、腹部には黒色斑がある。類似種としてイトウハバチがいるが、産卵管鞘の鋸状の歯形が本種と異なる。

国内分布

石川県、福井県大野市。

県内分布

白山の別当出合付近で採集されている。

生態

幼虫はサルナシの葉を食べる。若齢期は集団で葉を食するが、老齢期になると単独で活動する。

生息地の条件

食草であるサルナシの生育していることが重要である。

生存の危機

サルナシの減少による個体数減少が懸念される。

特記事項

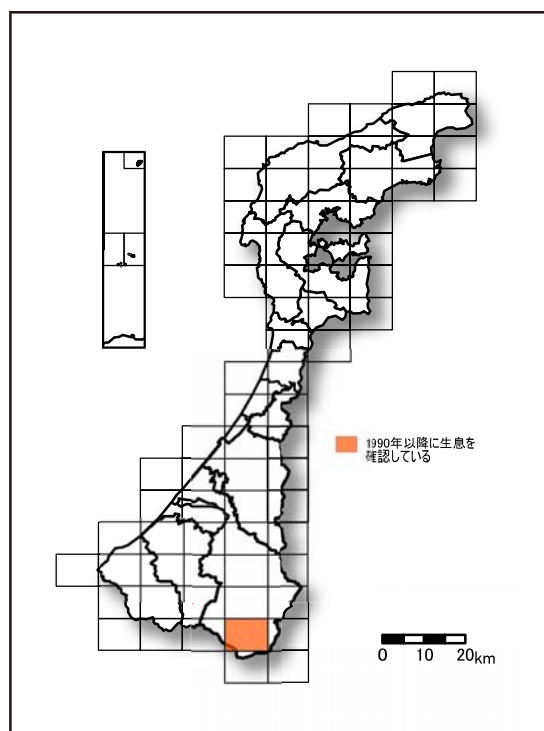
白山の特別保護地区内に生息する。

参考文献

Togashi, I. 1995. Description of *Neocolochelyna hakusana* sp. nov., and its larva (Hymenoptera: Tenthredinidae) from Japan. Proc. Ent. Soc. Wash., 97:866-871.



写真提供者：石川卓弥



県内の分布

コマユバチの一種

Yelicones nipponicus Togashi

ハチ目コマユバチ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由 本属の種の多くは、北米や南米大陸の太平洋岸に生息しており、分布上注目すべき種といえる。

形態 体長10mm内外で、体は黄色をしている。触角は長く、脚は頑丈である。

国内分布 現在のところ、石川県のみから知られる。

県内分布 穴水町二子山で記録されたのが、唯一である。

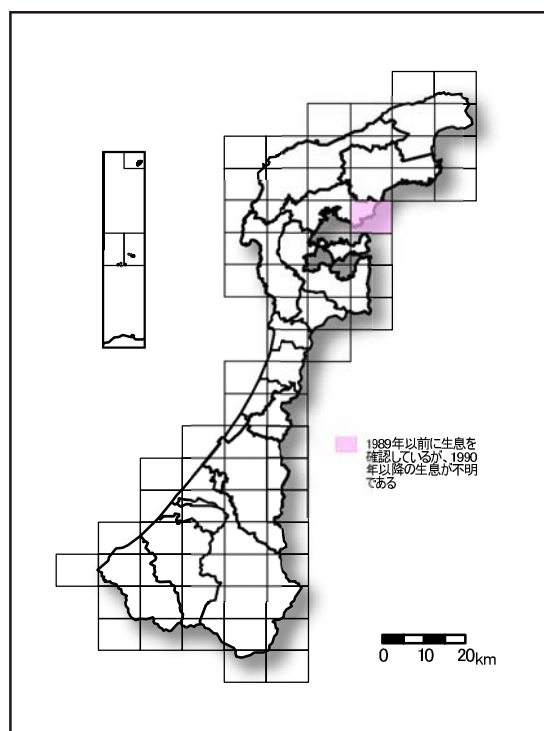
生態 クリ園内で採集されたこと以外、生態については不明である。

生息地の条件 現在のところ不明である。

生存の危機 二子山のクリ園は放任園が多くなっているため、現在も生息しているかどうか不明である。

参考文献 Togashi, I. 1980. Discovery of the genus *Yelicones* Cameron (Hymenoptera, Braconidae) from Japan. Kontyu, 48(4): 517-520.

写真（図）はありません。



県内の分布

アオスジクモバチ

Paracyphononyx alienus (Smith)

ハチ目クモバチ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由 海岸砂丘地に生息するが、その生息地は限定されている。

形態 体長は13mm内外である。体色は黒、体には灰青色の微毛からなる明瞭な線斑がある。

国内分布 本州、四国、九州。

県内分布 金沢市金石海岸、志賀町大島海岸。

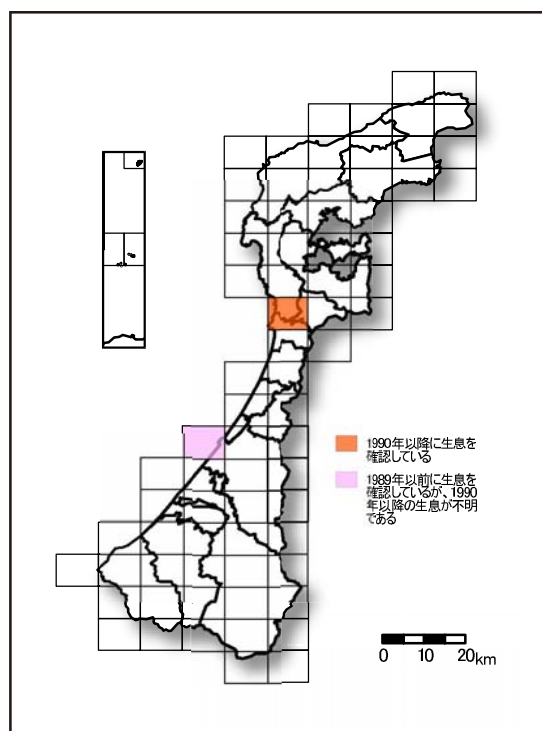
生態 海浜に生息しているが、海浜近くの林縁部などでも活動しているようである。徘徊性のクモを狩る狩バチで、海浜性のイソコモリグモを攻撃するところが観察されているが、他にどのような種類のクモを狩るのかは不明である。

生息地の条件 本種のエサとなるクモやクモのエサとなる小昆虫類が生息できる海浜植物群落の多い砂丘地の存在が重要である。

生存の危機 砂丘地が浸食により狭くなることに加え、護岸工事により、海浜植物群落が失われると生存できなくなる。護岸工事においては、海浜植物帯の保全を考慮した工法が必要である。

参考文献 富樫一次 1994. 石川県産ベッコウバチ類について 福井虫報, (15) : 73-76.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第三巻 : 570. 北隆館.

写真（図）ありません。



県内の分布

ハクサンホシシリアゲ

Panorpa kagamontana Miyamoto

シリアゲムシ目シリアゲムシ科

石川県カテゴリ

情報不足

国カテゴリ

なし

選定理由 分布が限定されており、個体数も少なく希少種といえる。

形態 体は黄色を呈しており、翅に斑紋がある。

国内分布 現在のところ、長野県の谷川岳、石川県の白山の2箇所でのみ記録がある。

県内分布 白山の標高1,500～1,700mで採集されたのが、唯一である。

生態 本種は、白山において標高1,500m以上の高所に生息しており、1,500m以下に生息する近似種のホシシリアゲとは、棲み分けをしているように思われる。生態の詳細は不明である。

生息地の条件 不明である。

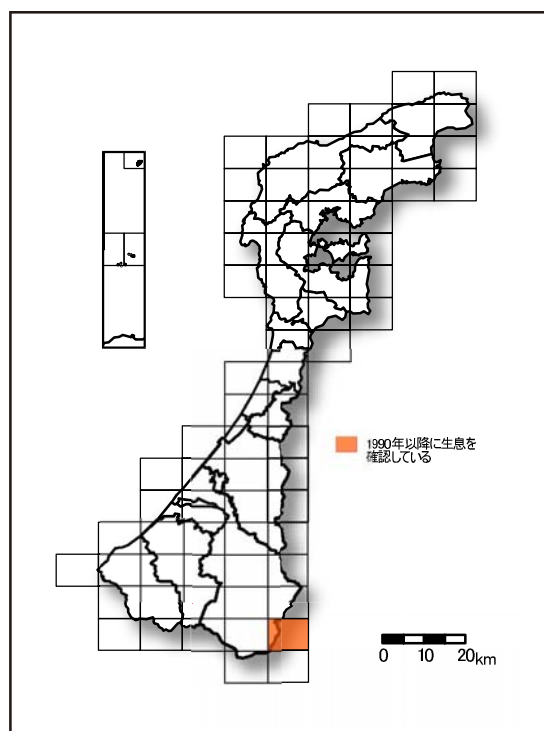
生存の危機 特別保護地区内に生息しているので、開発などで生存が脅かされる可能性は低い。

特記事項 本種は白山の特別保護地区内に生息する。

参考文献 Miyamoto, S. 1978. Geographical forms in the *Leucoptera* - Group of the genus *Panorps* Linnaeus (2) (Insecta, Mecoptera). Jour. Chikushi Jogakuen Junior College, (13) : 33-44.



標本提供者：富樫一次



県内の分布

タケウチケブカミバエ

Paratephritis takeuchii Ito

ハエ目ミバエ科

石川県カテゴリ

情報不足

国カテゴリ

なし

選定理由

個体数が少なく、希少種である。

形態

体長は約5mmと微少種である。頭部は褐色をしており、黄色い毛で覆われている。胸部は黒色、翅には斑紋がある。腹部は黒褐色で、黄色の紋がある。

国内分布

石川県白山、奈良県大台ヶ原山、福岡県英彦山。

県内分布

白山の釈迦岳、大嵐山で採集されている。

生態

釈迦岳と大嵐山においては、ミズバショウの葉に寄生している。大台ヶ原山ではオタカラコウの葉柄に虫瘤を形成する。

生息地の条件

県内では、ミズバショウに寄生することが確認されているので、ミズバショウの生育する環境が重要と思われる。

生存の危機

ミズバショウは植生破壊されることが少ないので、生存が脅かされる可能性は低い。

特記事項

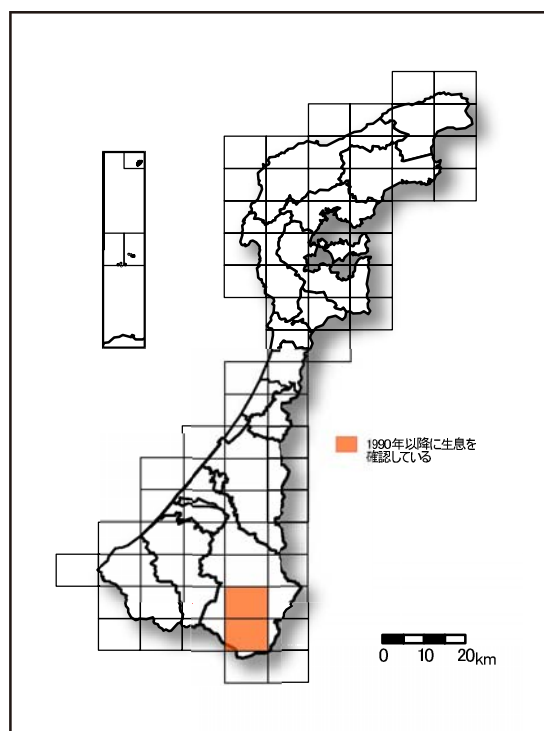
本種は白山の特別保護地区および、その周辺に分布する。

参考文献

Ito, S. 1983-1985. Die Japanischen Bohrfliegen. 233-234.

徳本 洋・佐伯芳造 1998. ハエ目. 石川県の昆虫 : 323. 石川県自然保護課.

写真（図）はありません。



県内の分布

キイロミヤマイエバエ

Thricops diaphanus (Wiedemann)

ハエ目イエバエ科

石川県カテゴリ

情報不足

国カテゴリ

なし

選定理由

個体数が少なく、希少種と思われる。

形態

体長は8.0～8.5mmで、胸部及び腹部は黄色もしくはオレンジ色を呈している。腹部は部分的に黒色となっている。

国内分布

北海道、本州に分布している。

県内分布

白山（標高1,500～1,700m）にて採集されている。

生態

詳しい生態は不明であるが、ヨーロッパでは、幼虫が菌類から見つかった。

生息地の条件

菌類が本種の幼虫の成育に関わっているようであるが、詳細については不明である。

生存の危機

特別保護地区に生息しているので、生存が脅かされる可能性は低いと思われる。

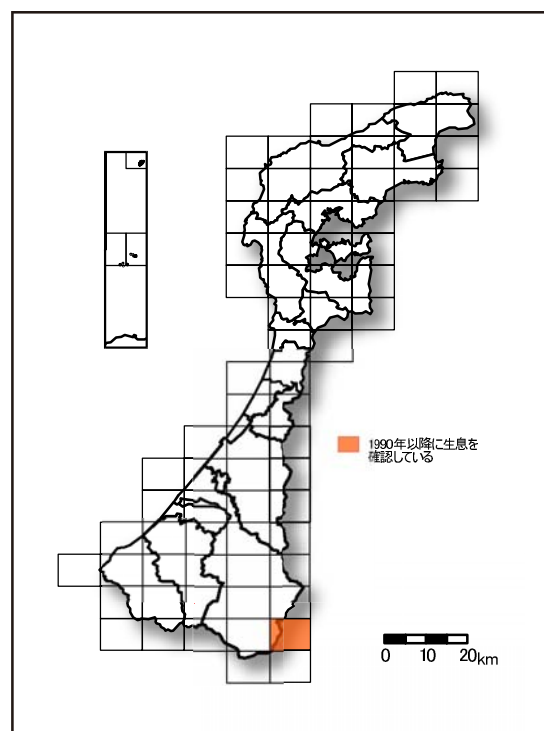
特記事項

本種は白山の特別保護地区内に生息する。

参考文献

篠永 哲 2003. A Monograph of the Muscidae of Japan. 日本のイエバエ科. 東海大学出版会.

写真（図）はありません。



県内の分布

キバネクロバエ

Mesembrina resplendens cillimaculata Fan & Zhang

ハエ目イエバエ科

石川県カテゴリ

情報不足

国カテゴリ

なし

選定理由

北海道および本州の山地で採集されているが、個体数は少ない。

形態

体長は約12mmで、日本産のイエバエ科の中では最大の大きさである。前翅の基部は、黄褐色に色づいている。体は光沢をおびた黒色であるが、胸背前部中央と左右の肩瘤には白粉がついている。

国内分布

北海道、本州。

県内分布

白山市の尾添地区、白峰地区で採集されている。

生態

成虫は8～9月に溪流付近に多く見られ、クマの糞に特異的に産卵するようである。幼虫はクマの糞を食して成長するが、国外では牛糞などクマ以外の獣糞から発生している記録がある。

生息地の条件

生息地は、クマの生息域に準じるものと思われる。

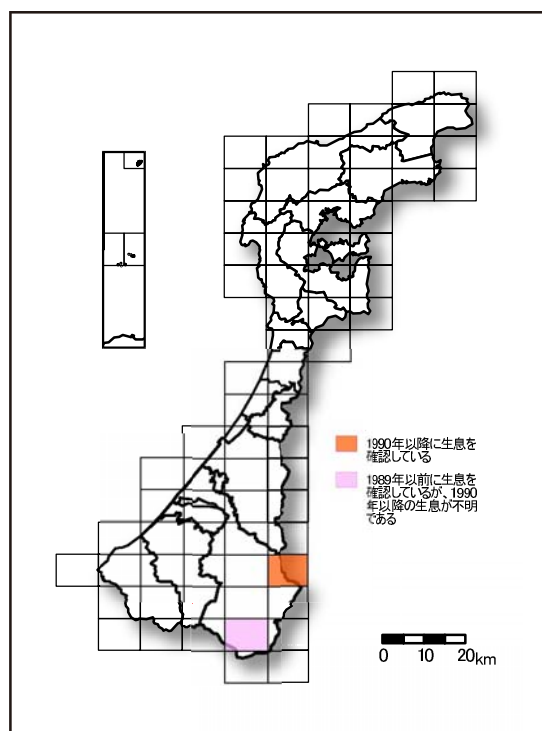
生存の危機

クマの生存が脅かされている状況ではないので、本種の生存に関しては問題ないと思われる。

参考文献

篠永 哲 2003. A Monograph of the Muscidae of Japan. 日本のイエバエ科. 東海大学出版会.

写真（図）はありません。



県内の分布

ギンイチモンジセセリ

チョウ目セセリチョウ科

Leptalina unicolor (Bremer et Grey)

石川県カテゴリ

情報不足

国カテゴリ

準絶滅危惧

選定理由

1992年から1994年にかけての3例の記録しかない。

形態

開張30mm程度の小型種。翅表は一律に黒いが、後翅裏面には、雌雄ともに鮮やかな銀色の線が1本入る。

国内分布

北海道から九州まで広く分布するが、全国的に減少している。

県内分布

中能登町石動山の宿坊跡地周辺で、1992年から1994年にかけて、毎年1個体が観察されているに過ぎず、その他の地域では全く観察されていない。

生態

ススキなどイネ科植物がある明るい草地に生息し、草上を弱々しく飛翔し、よく止まる。寒冷地では5月下旬から7月中旬に見られ、温暖地では、春型は5月上旬～6月中旬、夏型は7月下旬～8月下旬頃に見られる。幼虫は、ススキやチガヤ、エノコログサなどのイネの仲間を食べる。

生息地の条件

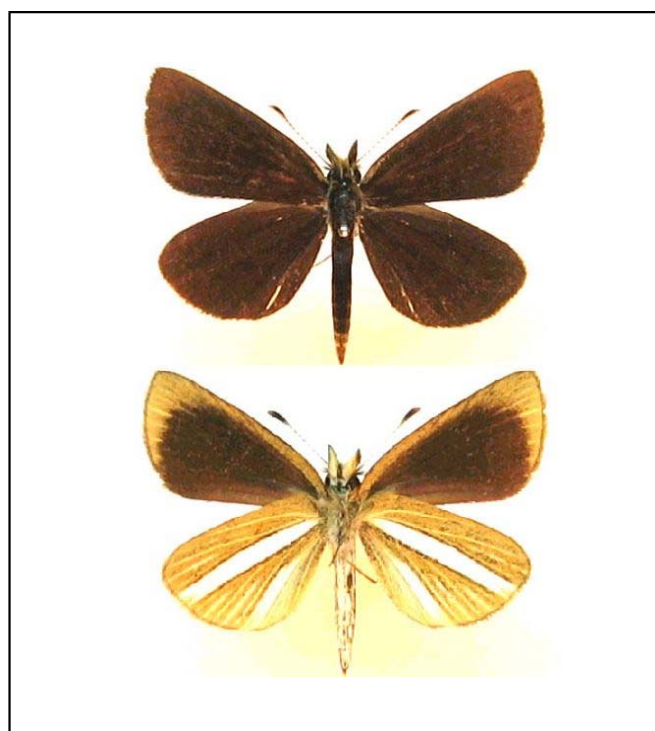
人為的に維持されている道路脇や耕作地周辺の小規模な草地。

生存の危機

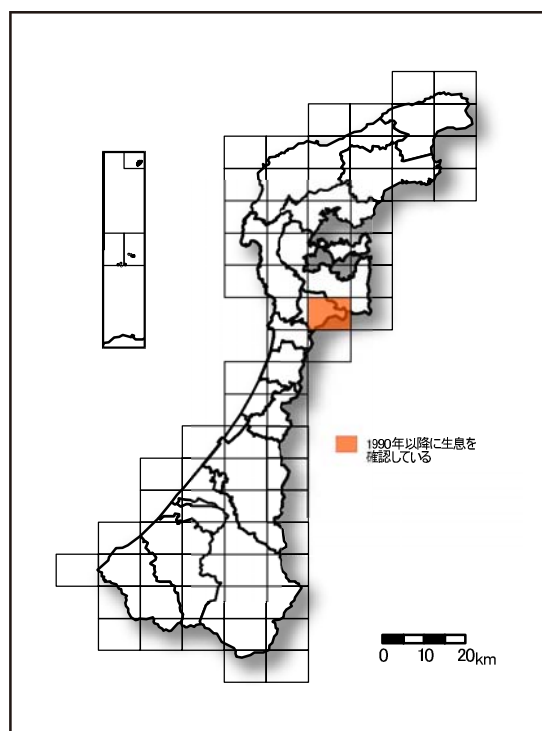
耕作地は放棄され、人為的に維持されてきた草地環境はほとんど消失している。

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ギンイチモンジセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ): 216-220. 保育社. 大阪.
松井正人 1994. 石動山のギンイチモンジセセリについて. 翔, (107): 1-2.



標本提供者: 松井正人



県内の分布

ルリイロスカシクロバ

Illiberis consimilis Leech

チョウ目マダラガ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

産地が局地的で、得られる個体数が少なく、石川県が国内分布の北限である。

形態

開張は28mm前後である。翅全体が白っぽく、前翅の翅脈がはっきりしている。後翅は前翅より淡色である。腹部が青色に輝いて見えるのが特徴である。

国内分布

神奈川県、石川県、京都府、愛知県、三重県、大阪府、広島県、大分県、熊本県。

県内分布

1992年3月に加賀市深田で得られているにすぎない。採集地はコナラ、アカマツを主体とした平地の二次林である。

生態

詳しい生態は不明である。幼虫の食草はツタで、成虫は年1回、3月から4月にかけて発生し、昼間活動する。

生息地の条件

平野部の二次林に生息する以外、詳細は不明である。

生存の危機

本種が生息している加賀市海岸丘陵地の平地林は畑地化、宅地化等で減少している。

特記事項

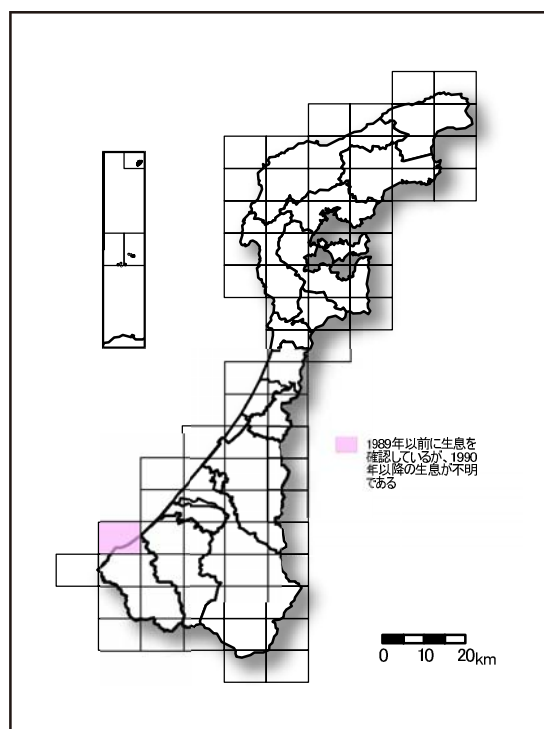
県内における分布状況が不明なため、生息調査が必要である。

参考文献

井上 寛ほか 1982. 日本産蛾類大図鑑, 966pp. 講談社. 東京.



標本提供者: 江口元章



県内の分布

ネズミホソバ

Pelosia angusta (Staudinger)

チョウ目ヒトリガ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的な希少種で、既知の生息地、個体数はともにきわめて少ない。

形態

開張16mm前後の小型のガである。ハネは褐色で、前翅の中央に弱い横線が走っている。

国内分布

北海道、栃木県、石川県、島根県、隠岐島、対馬、長崎県から記録されているに過ぎない。

県内分布

1987年8月に小松市金平で得られた1♂が本県唯一の記録である。

生態

成虫が5月（栃木県）、7～8月（島根県、石川県）に得られていること以外、生態はわかっていない。幼虫は地衣類を食しているものと思われる。

生息地の条件

これまでに本種が得られた環境は、低湿地、草地、林地などさまざまであり、生息制約要因は不明である。

生存の危機

本県の生息地は里山であり、現在もその環境は採集当時とほとんど変わっていない。今後も生息地の環境保全が重要である。

特記事項

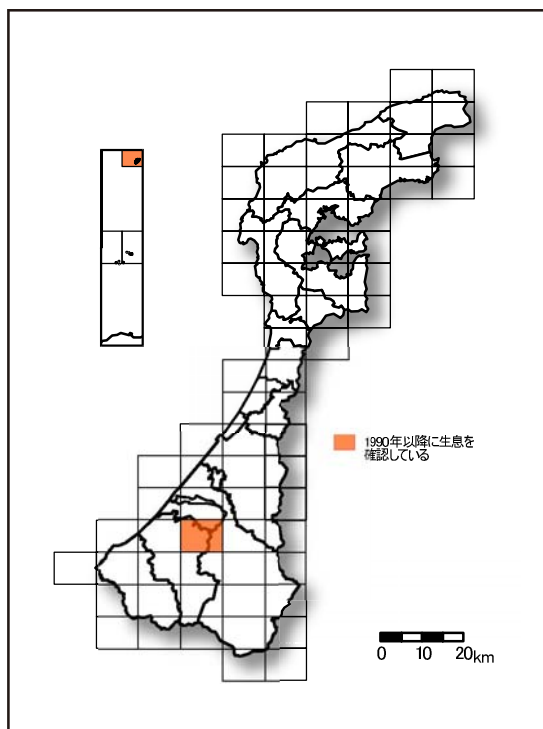
採集地区周辺の再調査が必要である。

参考文献

富沢 章 1998. 蛾類. 石川県の昆虫 : 366-486. 石川県自然保護課.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヒメシロシタバ

Catocala nagioides Wileman

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

情報不足

国カテゴリー

なし

選定理由

全国的に分布地が限定される種である。本県においては1例の採集記録があるのみである。

形態

開張50mm前後の大型種である。前翅は灰褐色の樹皮模様であるが、後翅は黒色で白色の鮮やかな紋がある。

国内分布

北海道、本州、九州に分布するが、食樹のカシワが局地的な混合林でしか見られないので、本種の産地も限定される。四国には産しない。

県内分布

2005年8月に、輪島市（旧門前町）で得られているに過ぎず、県内の詳細な生息状況は不明である。県内のカシワ林は能登地方の二次林に局在しているので、他にも生息している可能性はある。

生態

成虫は、年に1回発生し、7月から8月にかけて出現する。カシワの固有種で、幼虫は5月から7月にかけて育つ。卵越冬する。

生息地の条件

幼虫の食樹であるカシワ林の存在が重要である。

生存の危機

本種の生息可能性のあるカシワ林は、宝達志水町、輪島市、珠洲市の海岸近くに局在しているので、これらの地域ではカシワ林の保護を優先すべきである。

特記事項

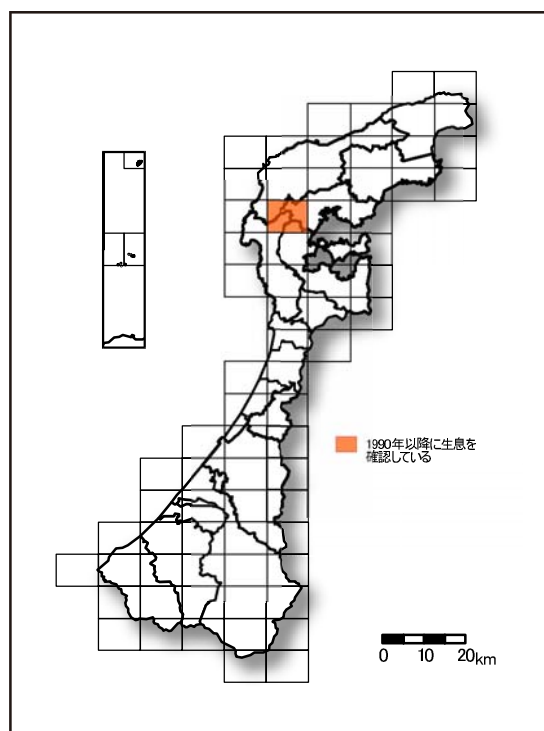
本種の調査は不十分で、今後の課題である。

参考文献

富沢 章 2007. 石川県産蛾類の追加記録. 誘蛾燈, (188) : 55-60.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヤマトオサムシ

Carabus yanato (Nakane)

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー

地域個体群

国カテゴリー

なし

選定理由

局地的な分布を示し、県内における生息地は一地域に限られ、開発の恐れがある。

形態

マヤサンオサムシと似ているが、体長19～22mmで小型である。背面は金銅色をしており、光沢がある。外部形態は安定していて変異はない。

国内分布

中部地方から近畿地方にかけて局地的な分布を示す。

県内分布

白山市（旧河内村）の一区域においてのみ生息し、個体数は比較的多い。

生態

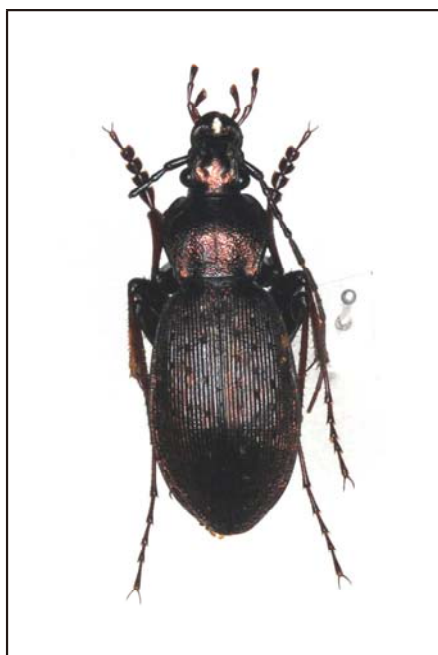
成虫は5月から10月まで見られ8月下旬に新成虫が現れる。昼間は石の下などに潜み、夜間活動し、小動物の死体を食しているものと思われる。

生息地の条件

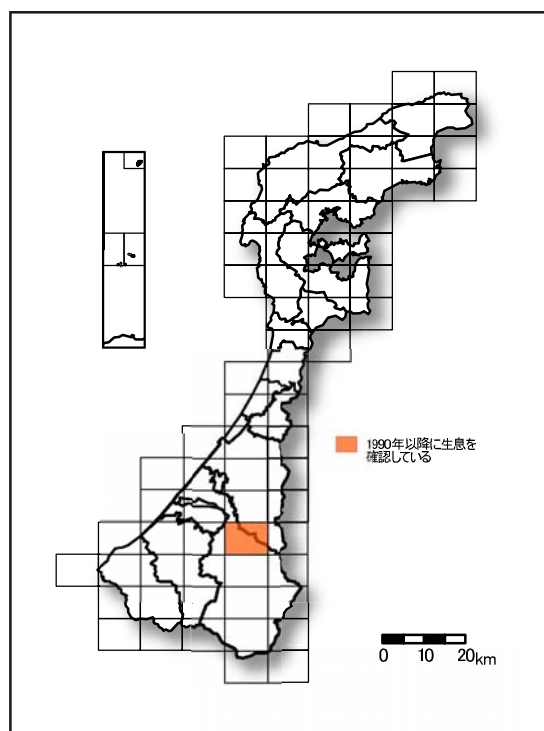
生息地では、杉林に多いように思われるが不明である。

生存の危機

現在のところ、個体数は安定しているが、生息している所が狭い区域なので、大規模な開発が行われれば、絶滅の恐れがあるので、事前に保全策を講ずる必要がある。



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヘグラシモフリコメツキ コウチュウ目コメツキムシ科

Actenicerus suzukii hegrensis (Kishii)

石川県カテゴリー

地域個体群

国カテゴリー

なし

選定理由

舩倉島で採集された個体をタイプ標本として記載された舩倉島特産亜種であるが、記載以降の記録がなく、絶滅が危惧されている。

形態

体長12.5mm、幅3.8mm。Kishii (1964) は、原亜種 *A. suzukii suzukii* (Miwa) と比較して、体が少し幅広くわずかに盛り上がること、触角がより細長いこと、前胸背板中央部にある縦長の平圧部が幅広く、より明瞭であること、上翅の間室にある点刻がやや大きいことなどの相違点を根拠として、亜種として記載している。

国内分布

石川県舩倉島にのみ分布するが、現在も生息しているかは不明である。

生態

詳細は不明である。

生息地の条件

詳細は不明である。

生存の危機

本亜種記載当時の舩倉島には樹木が生育していたようであるが、現在ではそれらの大部分が枯れてしまい、生息していない可能性も高い。小さな島に特化した亜種であることから、環境改変は本種の生存に致命的な打撃を与えることになる。本種の保全には、島全体の植生を記載当時の状況に復元することが重要と思われる。

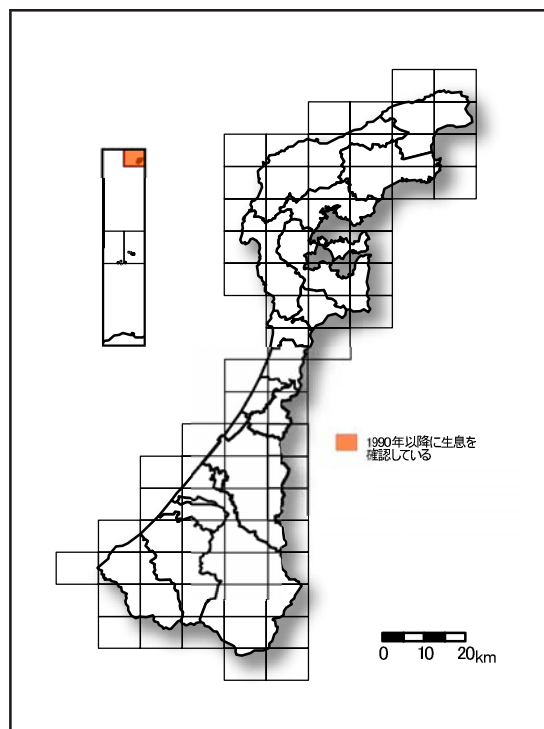
特記事項

舩倉島が本亜種の基産地である。現在の生息状況を調査する必要がある。

参考文献

Kishii, T. 1964. Elateridae of Island Awa-shima, Hegura-jima and Nanatsu-jima "The Snappers of Islands (IV)". Bull. Heian High School, (8): 1-39.

写真（図）はありません。



県内の分布

ヘグラカバイロコメツキ コウチュウ目コメツキムシ科

Agriotes subvittatus hegurensis Kishii

石川県カテゴリー 地域個体群

国カテゴリー なし

選定理由

舩倉島で採集された個体をタイプ標本として記載された亜種であるが、ヘグラシモフリコメツキと同様に記載以降の記録がなく、絶滅が危惧されている。

形態

体長8.0～9.5mm。体は細長く艶消し状で、体色は黄褐色。本土に分布する亜種チャイロムナボソコメツキ *A. s. ogurae* Lewis と比較して、触角第2節がわずかに長いこと、前胸背板の点刻がより粗く濃いこと、前胸背板側縁がより平行であることなどの差異により、別亜種として記載された。

国内分布

本亜種はこれまでのところ、舩倉島、佐渡島と隠岐島の日本海離島でのみ確認されている。ただし、舩倉島では現在も生息しているかは不明である。

生態

県内本土側に分布する *A. s. ogurae* Lewis は河川敷の堆積物の下で年間を通して見られ、灯火にも飛来するという。そのため、本亜種も類似の生態を有しているものと考えられる。

生息地の条件

草本植物の繁茂する環境を好んで生息すると思われる。

生存の危機

記載当時と現在とでは島の植生が大きく変化している。本種は環境変化には弱いと思われるため、島全体の植生を記載当時の状況に復元することが必要と思われる。

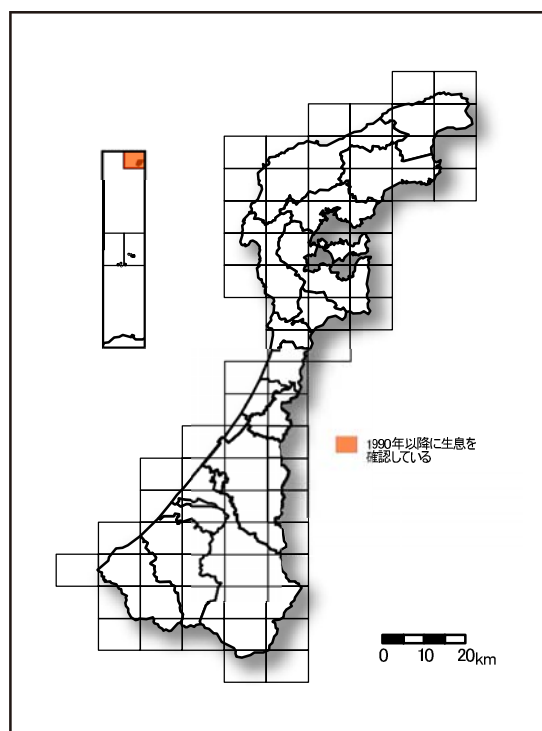
特記事項

舩倉島が本亜種の基産地である。現状における生息状況を確認する必要がある。

参考文献

Kishii, T. 1964. Elateridae of Island Awa-shima, Hegura-jima and Nanatsu-jima "The Snappers of Islands (IV)". Bull. Heian High School, (8): 1-39.

写真（図）はありません。



県内の分布

コムラサキ（黒色型）

Apatura metis substituta Butler

チョウ目タテハチョウ科

石川県カテゴリー

地域個体群

国カテゴリー

なし

選定理由

褐色型と黒色型の2遺伝型があり、遺伝的に劣性な黒色型の分布は限られる。ほとんど黒色型しか見られない奥能登は、褐色型遺伝子がほとんど存在しない全国的にも特殊な地域である。

形態

開張60～70mmの中型種。オスの翅表は黒褐色に白帯があり、見る角度によって黒褐色部分が紫色に輝く。メスはオスと同じ斑紋を有し一回り大きい。紫色に輝かない。

国内分布

黒色型は、静岡、愛知、岐阜、長野、富山、石川、九州の熊本県以南などに分布が集中し、褐色型に混じって見られる。

県内分布

黒色型は、加賀地方では褐色型に混じって稀に観察される程度であるが、口能登から黒色型の割合が増え、奥能登では逆転して褐色型が稀となる。個体数が多いのは河川沿いで、河原のヤナギ類で発生している。人為的環境にもよく適応し、公園のシダレヤナギや民家のウンリュウヤナギなどでも発生している。

生態

年3回発生し、5月下旬から10月上旬まで、河川に沿ったヤナギ類の木の周辺で良く見られる。朝方はヤナギ類の樹液を吸っているが、陽が高くなるとヤナギ類の樹冠をなめるように、枝から枝へせわしげに飛び回る。幼虫は、主に河原のヤナギ類、川沿いの大きくならないヤナギからカワヤナギのように大きくなるヤナギを食し、越冬は樹皮の割れ目や、小枝の分岐点で行われる。

生息地の条件

河川周辺にヤナギ類が生えている所。

生存の危機

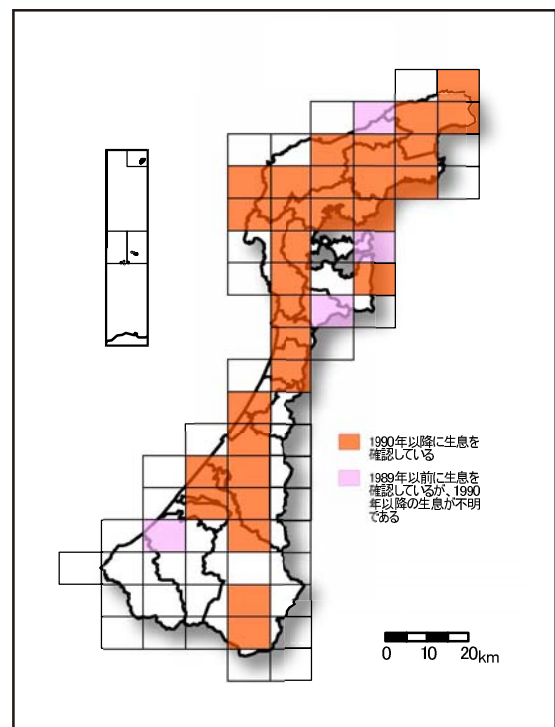
近年、コンクリート護岸工事などの河川改修でヤナギ類が伐採され、奥能登のヤナギ林はほとんど姿を消し、本種は減少している。また、街路樹や公園の樹木に他地域のヤナギ類が植栽されることにより、それに寄生していた褐色型が侵入することが十分考えられる。黒色型遺伝子が減少している現在、わずかな褐色型遺伝子が持ち込まれても、劣性な黒色型は大きな打撃を受けることになる。ヤナギ林の保全はいうまでもなく、褐色型遺伝子を持ち込む恐れのある他地域のヤナギ類は、搬入を控えるべきである。

参考文献

福田晴夫ほか 1983. コムラサキ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）：255-259. 保育社. 大阪.



写真提供者：左合直



県内の分布

アルプスヤガ

Xestia speciosa (Hubner)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー

地域個体群

国カテゴリー

なし

選定理由

中部山岳では高山帯にのみ分布し、白山がその西限にあたる。また、白山産の個体群は他産地と比べ、外部形態が特異的である。

形態

大きさは開張40mm前後である。後翅は一律に灰白色である。前翅は通常、黒褐色の鱗片を密布し、黒っぽく見えるが、白山の個体は赤褐色の鱗片で被われているため、赤褐色味の強い個体が90%以上を占め、特異的である。

国内分布

北海道および本州の中部山岳地帯を中心として2,000m以上の稜線部に分布し、南限は荒川岳、西限は白山である。

県内分布

白山の標高2,400m以上の室堂平と千蛇ヶ池付近で記録があるが、2,000m付近では得られておらず、亜高山帯には生息しないようである。

生態

成虫は年一回、7月から8月に発生する。野外における食草としてコケモモが知られているが、詳しい生態は不明である。

生息地の条件

標高2,400m以上の高山帯で、ハイマツ群落内に多様なわい性低木の群落が形成されていることが重要である。

生存の危機

全国的にみると白山における本種の生息域はきわめて狭く、孤立している。温暖化や踏みつけによる自然植生の破壊は、生息環境の悪化を招く。

特記事項

白山の個体は赤褐色味の強い個体がほとんどで、飛騨山脈等の個体群とは異なり、地理的に隔離されたものと考えられ、貴重である。本種の生息地は白山国立公園の特別保護地区内にある。

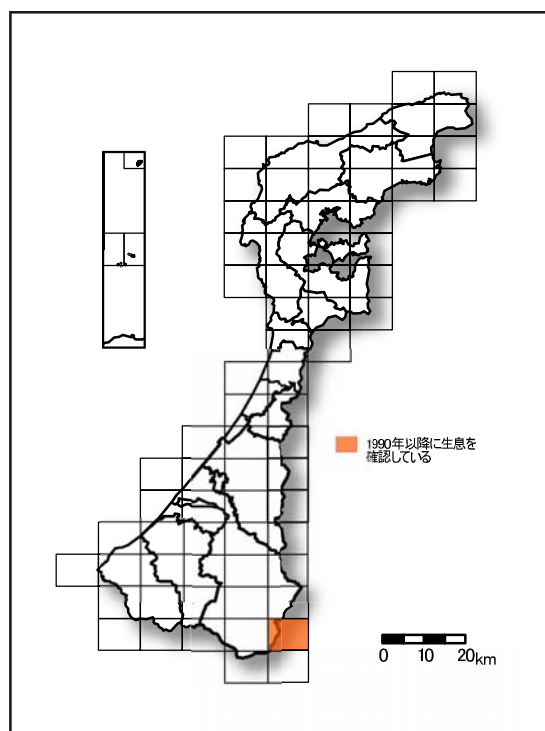
参考文献

神保一義 1984. 高山蛾. 191pp. 築地書館. 東京

大和田 守・富沢 章 1985. 白山高山帯の蛾相. 国立科学博物館専報. 18 : 199-208.



写真提供者: 富沢章



県内の分布